

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—24—

朝倉郡朝倉町所在大迫遺跡の調査

1992

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告

— 24 —

朝倉郡朝倉町所在大迫遺跡の調査



大迫遺跡全景



大追遺跡出土骨藏器

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、九州横断自動車道建設敷地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度以降実施してまいりました。発掘調査は、平成2年9月に行った外之隈遺跡の二次調査をもって完了しております。今後は、調査報告書を順次刊行してゆく予定であります。

本報告書は、昭和63年度に発掘調査を実施した朝倉郡朝倉町所在の大迫遺跡についての調査成果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第24集としてとりまとめたものであります。大迫遺跡は、奈良時代末から平安時代前半にかけての一大火葬墓群で、火葬墓群の下層からは、7世紀後半代の大規模な建物跡・竪穴住居跡などの重要な遺構が発見されました。

本報告書が、文化財愛護思想の普及ならびに学術研究の一助となれば幸いに存じます。なお、発掘調査及び整理作業にあたり、多大なるご協力を頂いた地元の方々をはじめとして、関係各位に深く感謝いたします。

平成4年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　　御手洗　康

例　　言

1. 本書は、昭和63年度に福岡県教育委員会が、日本道路公団から委嘱されて発掘調査を実施した大迫遺跡の報告であり、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第24冊目にあたる。
2. 遺構の実測は、調査担当者の他に武田光正・佐土原逸男・松尾宏・限部敏明・牛田洋子・渡辺輝子・後藤カミヨ・矢野静子・高瀬セッ子諸氏の助力を得た。
3. 大迫遺跡の遺物整理・復原作業は、岩瀬正信整理指導員のもとに福岡県教育庁指導第二部文化課甘木発掘調査事務所において行った。鉄器の保存処理は、九州歴史資料館参事補佐横田義章氏の協力を得た。
4. 火葬骨の鑑定は、九州大学医学部第二解剖学教室中橋孝博先生にお願いした。炭化材の樹種同定は、琉球大学農学部林弘也先生にお願いした。
5. 炭化材の年代測定は、社団法人日本アイソトープ協会に依頼した。
6. 遺物の実測・拓影は、小田による。
7. 図面作成・製図作業は、豊福弥生・塩足里美・関久江さん、小田による。
8. 本書掲載の写真は、遺構を小田が、遺物は岡紀久夫氏撮影による。
9. 挿図で使用する方位は、すべて座標北である。
10. 遺跡分布図は、昭和62年国土地理院発行の「甘木」5万分の1及び昭和63年同院発行の「吉井」5万分の1を縮小して使用した。
11. 図版1の空中写真は、国土地理院撮影による。
12. 本書の執筆・編集は、小田がおこなった。

本文目次

I 調査組織と調査経過.....	1
II 遺跡の位置と環境.....	7
III 火葬墓群の調査.....	13
1. 遺構の概要	13
2. 火葬墓の分類	13
3. 火葬墓・火葬土壤	15
IV 火葬墓群下層遺構の調査.....	89
1. 遺構の概要	89
2. 据立柱建物跡	89
3. 穴式住居跡	104
4. 穴	125
5. 土 壤	132
6. 焼土壤	142
7. 石蓋土壤墓	144
8. 清状遺構	144
9. その他の遺構と遺物	146
V 大迫遺跡二次調査.....	167
1. 遺構の概要	167
2. 火葬墓・火葬土壤	167
3. 穴式住居跡	168
VI 自然科学的分析.....	172
1. 福岡県朝倉郡大迫遺跡出土の古代火葬骨	172
2. 大迫遺跡出土炭化材の樹種同定	179
3. 炭化材の年代測定	181
VII 各 論.....	182

1. 火葬墓群について	182
2. 建物群の立地とその意義	189
VII 総 括.....	200

図 版 目 次

- 卷頭図版 1 大迫遺跡全景
 2 大迫遺跡出土骨蔵器

本文対照頁

図 版 1	大迫遺跡周辺航空写真	7
図 版 2	(1) 木丸殿址より筑後川を望む	7
	(2) 大迫遺跡・外之隈遺跡及び志波台地遠景	7
図 版 3	大迫遺跡全景 (木丸殿址より望む)	7
図 版 4	(1) 1号火葬墓 (南から)	15
	(2) 2号火葬墓 (南西から)	50
図 版 5	(1) 3号火葬墓 (南から)	50
	(2) 3号火葬墓土層 (西から)	50
	(3) 4号火葬墓 (南から)	50
図 版 6	(1) 5~7号火葬墓 (南から)	69
	(2) 坑・鉄釘出土状況 (北から)	70
図 版 7	(1) 8号火葬墓 (南から)	50
	(2) 9号火葬墓 (東から)	50
	(3) 10号火葬墓 (西から)	17
図 版 8	(1) 11号火葬墓 (南から)	50
	(2) 13号火葬墓 (南から)	52
	(3) 12号火葬墓 (西から)	17
図 版 9	(1) 14号火葬墓 (東から)	55
	(2) 15号火葬墓 (南から)	55
	(3) 16号火葬墓 (北西から)	71

図 版 10	(1) 17号火葬墓 (東から)	71
	(2) 18号火葬墓 (南から)	55
図 版 11	(1) 火葬墓群全景 (東上空から)	13
	(2) C群火葬墓 (南から)	17
図 版 12	(1) 19号火葬墓, 1号住居跡 (南西から)	17
	(2) 21号火葬墓 (南から)	19
図 版 13	(1) 21号火葬墓火葬骨出土状況	19
	(2) 骨蔵器出土状況 (東から)	19
	(3) 22・25号火葬墓 (南から)	21
図 版 14	(1) 23号火葬墓 (南から)	74
	(2) 遺物出土状況 (北から)	74
図 版 15	(1) 24号火葬墓 (南から)	23
	(2) 骨蔵器出土状況 (西から)	23
	(3) 骨蔵器外容器	23
図 版 16	(1) E～H群火葬墓 (上空から)	13
	(2) 中央部テラス火葬墓築造状況 (東から)	13
図 版 17	(1) 26号火葬墓 (南西から)	26
	(2) 周溝内遺物出土状況 (南から)	26
図 版 18	(1) 27・28号火葬墓 (南西から)	26
	(2) 27号火葬墓 (南西から)	26
	(3) 27号火葬墓周溝土層 (南東から)	26
図 版 19	(1) 29号火葬墓 (南西から)	28
	(2) 30号火葬墓 (南西から)	29
図 版 20	(1) 31号火葬墓 (南西から)	29
	(2) 33号火葬墓 (南から)	31
図 版 21	(1) 34号火葬墓 (南から)	31
	(2) 火葬骨出土状況 (南から)	31
	(3) 周溝内遺物出土状況 (東から)	31
図 版 22	(1) 35号火葬墓 (東から)	34
	(2) 36号火葬墓 (東から)	34
図 版 23	(1) 37号火葬墓 (北西から)	55
	(2) 38号火葬墓火葬骨 (南から)	58
	(3) 39号火葬墓 (西から)	60

図 版 24	(1) 40号火葬墓（西から）.....	37
	(2) 41号火葬墓（西から）.....	37
図 版 25	(1) 42号火葬墓（西から）.....	37
	(2) 43号火葬墓（西から）.....	38
図 版 26	(1) 44号火葬墓（北から）.....	40
	(2) 周溝内土壙墓（北東から）.....	40
	(3) 45号火葬墓骨蔵器（南東から）.....	60
	(4) 上蓋除去後（南東から）.....	60
図 版 27	(1) 46号火葬墓（南から）.....	61
	(2) 47号火葬墓（南西から）.....	61
	(3) 48号火葬墓（東から）.....	75
図 版 28	(1) 49号火葬墓（南西から）.....	41
	(2) 50号火葬墓（東から）.....	41
図 版 29	(1) 51号火葬墓（南西から）.....	43
	(2) 骨蔵器出土状況（東から）.....	43
	(3) 遺物出土状況（南西から）.....	43
図 版 30	(1) 52号火葬墓（南西から）.....	61
	(2) 火葬骨出土状況（南西から）.....	61
	(3) 53号火葬墓（南から）.....	62
図 版 31	(1) 54号火葬墓（南西から）.....	62
	(2) 55号火葬墓（西から）.....	62
	(3) 56号火葬墓（南から）.....	62
図 版 32	(1) 57号火葬墓（南西から）.....	45
	(2) 主体部石組状況（南西から）.....	45
図 版 33	(1) 58号火葬墓（西から）.....	45
	(2) 骨蔵器出土状況（西から）.....	45
図 版 34	(1) 59号火葬墓（西から）.....	45
	(2) 60号火葬墓（南西から）.....	64
図 版 35	(1) 61号火葬墓（南西から）.....	47
	(2) 主体部鉄釘出土状況（西から）.....	48
図 版 36	(1) 62号火葬墓（東から）.....	64
	(2) 63号火葬墓（南西から）.....	64
	(3) 65号火葬墓（南から）.....	64

図 版 37	(1) 66号火葬墓（南から）.....	75
	(2) 67号火葬墓（南から）.....	75
図 版 38	(1) 68号火葬墓（南西から）.....	64
	(2) 69号火葬墓（南から）.....	75
図 版 39	(1) 70号火葬墓（南西から）.....	64
	(2) 71号火葬墓検出状況（南西から）.....	67
	(3) 掘り下げ状況（南西から）.....	67
	(4) 遺物出土状況（南西から）.....	67
図 版 40	(1) 72号火葬墓（南西から）.....	67
	(2) 73号火葬墓（西から）.....	75
	(3) 74号火葬墓（南西から）.....	67
図 版 41	(1) 75号火葬墓（南西から）.....	75
	(2) 76号火葬墓（南西から）.....	78
図 版 42	(1) 77号火葬墓（南東から）.....	78
	(2) 78号火葬墓（西から）.....	78
図 版 43	(1) 79号火葬墓（南西から）.....	78
	(2) 80号火葬墓（南東から）.....	78
図 版 44	(1) 81号火葬墓（南東から）.....	78
	(2) 82号火葬墓（南西から）.....	68
	(3) 83号火葬墓（南西から）.....	81
図 版 45	(1) 84号火葬墓（南から）.....	81
	(2) 85号火葬墓（南から）.....	69
	(3) 86号火葬墓（南から）.....	69
図 版 46	(1) 87号火葬墓（西から）.....	81
	(2) 88号火葬墓（北西から）.....	82
図 版 47	(1) 89号火葬墓（北から）.....	69
	(2) 90号火葬墓（東から）.....	69
	(3) 91号火葬墓（南西から）.....	69
図 版 48	(1) 調査区中央部空中写真（南上空から）.....	13
	(2) 西側建物群（南上空から）.....	89
図 版 49	(1) 火葬墓群下層遺構（北から）.....	89
	(2) 火葬墓群下層遺構（東から）.....	89
図 版 50	(1) 1号建物跡（南から）.....	89

図 版 50	(2) 1号建物跡 (西から).....	89
図 版 51	(1) 1・2号建物跡 (東から).....	89
	(2) 2号建物跡 (東から).....	89
図 版 52	(1) 3号建物跡 (南東から).....	93
	(2) 4号建物跡 (北西から).....	93
図 版 53	(1) 4~8号建物跡 (南から).....	93
	(2) 4~8号建物跡 (北から).....	93
図 版 54	(1) 5号建物跡検出状況 (南から).....	93
	(2) 6号建物跡検出状況 (南から).....	98
図 版 55	(1) 8号建物跡 (南から).....	96
	(2) 中段テラス柱穴群 (北から).....	103
図 版 56	(1) 1号住居跡 (南西から).....	104
	(2) 遺物出土状況 (南から).....	104
図 版 57	(1) 2号住居跡全景 (南西から).....	105
	(2) 2号住居跡全景 (南東から).....	105
図 版 58	(1) 2号住居跡 (南西から).....	105
	(2) 2号住居跡カマド (南西から).....	105
	(3) 外周溝土層 (東から).....	106
図 版 59	(1) 3号住居跡 (南西から).....	109
	(2) 遺物出土状況 (南から).....	109
	(3) 焼土壙土層断面 (南東から).....	144
図 版 60	(1) 4号住居跡 (南東から).....	113
	(2) 4号住居跡カマド (南東から).....	113
図 版 61	(1) 調査区西端住居跡群 (西から).....	123
	(2) 5号住居跡 (南東から).....	115
図 版 62	(1) 5号住居跡カマド (南東から).....	116
	(2) 紡錘車出土状況 (北から).....	116
	(3) 6号住居跡全景 (南西から).....	119
図 版 63	(1) 6号住居跡 (南東から).....	119
	(2) 6号住居跡カマド (南東から).....	119
図 版 64	(1) 7号住居跡全景 (南西から).....	120
	(2) 7号住居跡 (南東から).....	120
図 版 65	(1) 7号住居跡カマド (南東から).....	120

図 版 65	(2) 外周溝土層 (南東から)	120
図 版 66	(1) 1号竪穴 (南東から)	125
	(2) 7号竪穴 (南西から)	130
図 版 67	(1) 2号土壙 (東から)	132
	(2) 3号土壙 (南から)	132
	(3) 4号土壙 (北から)	132
図 版 68	(1) 5号土壙 (北西から)	132
	(2) 6号土壙 (北から)	135
図 版 69	(1) 7号土壙, 1号溝 (東から)	135
	(2) 7号土壙遺物出土状況 (北から)	132
図 版 70	(1) 9号土壙 (南から)	135
	(2) 10号土壙 (南から)	137
	(3) 13号土壙 (南東から)	139
図 版 71	(1) 1号焼土壙 (東から)	142
	(2) 土製カマド出土状況 (南東から)	142
	(3) 中段東側テラス弥生土器出土状況 (西から)	137
図 版 72	(1) 1号石蓋土壙墓 (北東から)	144
	(2) 蓋石除去後 (南東から)	144
図 版 73	(1) A群トレンチ北壁土層断面 (南から)	165
	(2) A群トレンチ東壁土層断面 (西から)	165
図 版 74	(1) 2次Iトレンチ1号住居跡 (南東から)	167
	(2) 1号住居跡 (北西から)	168
図 版 75	(1) 2次IIトレンチ (南東から)	167
	(2) 2次IIIトレンチ (東から)	167
図 版 76	(1) 1号火葬墓・1号火葬土壙 (南東から)	168
	(2) 1号火葬墓 (南東から)	168
図 版 77	(1) 1号火葬土壙 (南東から)	168
	(2) 2号火葬土壙 (北東から)	168
図 版 78	(1) 5号火葬墓テラス出土土器	70
	(2) 21号火葬墓骨蔵器	21
	(3) 24号火葬墓骨蔵器	23
	(4) 33号火葬墓出土土器	31
	(5) 34号火葬墓出土土器	34

図 版 78 (6) 52号火葬墓骨蔵器	61
図 版 79 (1) 23号火葬墓出土土器	74
(2) 26号火葬墓出土土器	26
図 版 80 (1) 37号火葬墓出土土器	58
(2) 38号火葬墓骨蔵器	58
(3) 40号火葬墓出土土器	37
図 版 81 (1) 45号火葬墓骨蔵器	60
(2) 51号火葬墓骨蔵器	43
(3) 56号火葬墓骨蔵器	62
(4) 58号火葬墓骨蔵器	45
図 版 82 (1) 28号火葬墓周溝出土土器	82
(2) 2号建物跡出土土器	92
(3) 8号建物跡出土土器	99
(4) 8号建物跡東側段落ち出土土器	99
図 版 83 (1) 1号住居跡出土土器	104
(2) 2号住居跡出土土器	106
(3) 2号住居跡整地層出土土器	109
図 版 84 (1) 3号住居跡出土土器①	109
(2) 3号住居跡出土土器②	111
図 版 85 (1) 4号住居跡出土土器	113
(2) 5号住居跡出土土器	116
図 版 86 (1) 6号住居跡出土土器	119
(2) 7号住居跡出土土器	120
図 版 87 (1) 8号住居跡出土土器	123
(2) 2号整穴出土土器	127
(3) 3号整穴出土土器	127
(4) 5号整穴出土土器	130
図 版 88 (1) 5号土壙出土土器	132
(2) 7号土壙出土土器	135
(3) 11号土壙出土土器	139
(4) ピット出土土器	146
図 版 89 E・F群火葬墓整地層出土土器①	148
図 版 90 E・F群火葬墓整地層出土土器②	150

図 版 91	(1) E・F群火葬墓整地層出土土器③	150
	(2) 2号竪穴西側整地層出土土器	153
図 版 92	G・H群火葬墓整地層出土土器	157
図 版 93	(1) I群火葬墓整地層出土土器	161
	(2) J群火葬墓整地層出土土器	162
	(3) 2次1号火葬墓骨蔵器	168
	(4) 2次1号住居跡出土土器、採集土器	171
図 版 94	(1) 5・7・37・43号火葬墓出土鐵釘	38
	(2) 61号火葬墓出土鐵釘・鐵鎌	48
図 版 95	(1) 火葬墓出土鐵釘	49
	(2) 71号火葬墓出土遺物	67
	(3) 整地層出土鐵滓	148
	(4) 住居跡出土鐵器・石製品・土製品	121
	(5) 整地層出土鐵釘	155
図 版 96	(1) 竪穴・土壠出土石器・土製品	131
	(2) 整地層出土土製品	155
	(3) 6号竪穴出土鐵器・土製品	130
	(4) 整地層出土鐵斧	153
	(5) 整地層出土石斧	164
図 版 97	(1) 整地層出土石器	164
	(2) 整地層出土砥石①	160
	(3) 整地層出土砥石②	160
	(4) 中町裏遺跡出土墨書き土器・転用碗	194
図 版 98	炭化材顕微鏡写真①	179
図 版 99	炭化材顕微鏡写真②	179
図 版 100	炭化材顕微鏡写真③	179
図 版 101	炭化材顕微鏡写真④	179
図 版 102	57号火葬墓切取り状況	45

挿 図 目 次

第 1 図	九州横断自動車道路線図	
第 2 図	大迫遺跡地形図 (1/2,000).....	2
第 3 図	大迫遺跡周辺地形図 (1/10,000).....	6
第 4 図	大迫遺跡周辺遺跡分布図	折込み
第 5 図	火葬墓配置図 (1/800).....	14
第 6 図	I 類火葬墓 (1号) 実測図① (1/40).....	15
第 7 図	1号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	15
第 8 図	I 類火葬墓 (10・12号) 実測図② (1/40).....	16
第 9 図	10号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	17
第 10 図	19号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	17
第 11 図	I 類火葬墓 (19・20号) 実測図③ (1/40).....	18
第 12 図	21号火葬墓骨蔵器出土状況実測図 (1/15).....	19
第 13 図	I 類火葬墓 (21・22号) 実測図④ (1/40).....	20
第 14 図	21号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3).....	21
第 15 図	22号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	21
第 16 図	I 類火葬墓 (24号) 実測図⑤ (1/40).....	22
第 17 図	24号火葬墓骨蔵器出土状況実測図 (1/10).....	23
第 18 図	24号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3).....	24
第 19 図	I 類火葬墓 (26号) 実測図⑥ (1/40).....	25
第 20 図	26号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	26
第 21 図	I 類火葬墓 (27・28号) 実測図⑦ (1/40).....	27
第 22 図	28号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	27
第 23 図	I 類火葬墓 (29号) 実測図⑧ (1/40).....	28
第 24 図	29・31号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	29
第 25 図	I 類火葬墓 (30・31号) 実測図⑨ (1/40).....	30
第 26 図	32・33号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	31
第 27 図	I 類火葬墓 (32・33号) 実測図⑩ (1/40).....	32
第 28 図	I 類火葬墓 (34・35号) 実測図⑪ (1/40).....	33
第 29 図	34~36号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	34
第 30 図	I 類火葬墓 (36号) 実測図⑫ (1/40).....	35

第 31 図	I類火葬墓 (40・42号) 実測図⑬ (1/40).....	36
第 32 図	40号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	37
第 33 図	I類火葬墓 (41・43号) 実測図⑭ (1/40).....	38
第 34 図	I類火葬墓 (44・49・50号) 実測図⑮ (1/40).....	39
第 35 図	44号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	40
第 36 図	44号火葬墓周溝内土壤墓実測図 (1/20).....	40
第 37 図	49号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	41
第 38 図	51号火葬墓骨蔵器出土状況実測図 (1/15).....	41
第 39 図	I類火葬墓 (51・59号) 実測図⑯ (1/40).....	42
第 40 図	51号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3).....	43
第 41 図	I類火葬墓 (57号) 実測図⑰ (1/20・1/40).....	44
第 42 図	58号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3).....	45
第 43 図	59号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	45
第 44 図	I類火葬墓 (58・61号) 実測図⑱ (1/10・1/40).....	46
第 45 図	61号火葬墓主体部実測図 (1/20).....	47
第 46 図	61号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	48
第 47 図	火葬墓出土鉄器実測図 (1/2).....	49
第 48 図	II類火葬墓 (2・3・8・9・11号) 実測図① (1/20).....	51
第 49 図	II類火葬墓 (4・13・18号) 実測図② (1/10・1/20).....	52
第 50 図	II類火葬墓 (14・15・46号) 実測図③ (1/20).....	53
第 51 図	II類火葬墓 (25・39・47・53・55号) 実測図④ (1/20).....	54
第 52 図	II類火葬墓 (37号) 実測図⑤ (1/20).....	56
第 53 図	37号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	57
第 54 図	38号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3).....	58
第 55 図	II類火葬墓 (38・45・56号) 実測図⑥ (1/10).....	59
第 56 図	45号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3).....	60
第 57 図	II類火葬墓 (52号) 実測図⑦ (1/15).....	61
第 58 図	52号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3).....	61
第 59 図	54号火葬墓出土土器実測図 (1/3).....	62
第 60 図	56号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3).....	62
第 61 図	II類火葬墓 (54・60・62・63号) 実測図⑧ (1/20).....	63
第 62 図	II類火葬墓 (64・65・68・70・82号) 実測図⑨ (1/20).....	65
第 63 図	II類火葬墓 (71・72・85・86号) 実測図⑩ (1/20).....	66

第 64 図	71号火葬墓出土土器実測図 (1/3)	67
第 65 図	71号火葬墓出土土製品・銅鏡実測図 (1/2)	67
第 66 図	II類火葬墓 (74・89・91号) 実測図① (1/20)	68
第 67 図	III類火葬墓 (5~7号) 実測図 (1/30)	70
第 68 図	5号火葬墓出土土器実測図 (1/3)	70
第 69 図	16号火葬土壙出土土器実測図 (1/3)	71
第 70 図	火葬土壙 (16・17・48号) 実測図① (1/30)	72
第 71 図	火葬土壙 (23号) 実測図② (1/30)	73
第 72 図	23号火葬土壙出土土器実測図 (1/3)	74
第 73 図	火葬土壙 (66・67・73・75・76号) 実測図③ (1/30)	76
第 74 図	火葬土壙 (69・81号) 実測図④ (1/30)	77
第 75 図	火葬土壙 (77・79・80号) 実測図⑤ (1/30)	79
第 76 図	火葬土壙 (78・83・84号) 実測図⑥ (1/60)	80
第 77 図	火葬土壙 (87・88号) 実測図⑦ (1/30)	81
第 78 図	火葬墓出土土器実測図 (1/3)	83
第 79 図	建物跡・住居跡配置図 (1/400)	88
第 80 図	1号建物跡実測図 (1/60)	90
第 81 図	2号建物跡実測図 (1/80)	91
第 82 図	2号建物跡出土土器実測図 (1/3)	92
第 83 図	3号建物跡実測図 (1/80)	折込み
第 84 図	3号建物跡出土土器実測図 (1/3)	93
第 85 図	4号建物跡実測図 (1/60)	94
第 86 図	5号建物跡実測図 (1/60)	95
第 87 図	5号建物跡出土土器実測図 (1/3)	96
第 88 図	6号建物跡実測図 (1/60)	97
第 89 図	7号建物跡実測図 (1/60)	98
第 90 図	8号建物跡実測図 (1/80)	折込み
第 91 図	8号建物跡出土土器実測図 (1/3)	99
第 92 図	8号建物跡東側段落ち出土土器実測図① (1/3)	100
第 93 図	8号建物跡東側段落ち出土土器実測図② (1/3)	101
第 94 図	中段テラス柱穴群実測図 (1/80)	102
第 95 図	1号住居跡実測図 (1/60)	104
第 96 図	1号住居跡出土土器実測図 (1/4)	104

第 97 図	2号住居跡実測図 (1/80).....	折込み
第 98 図	2号住居跡カマド実測図 (1/30).....	105
第 99 図	2号住居跡出土土器実測図 (1/3).....	107
第 100 図	2号住居跡整地層出土土器実測図 (1/3).....	108
第 101 図	3号住居跡実測図 (1/60).....	110
第 102 図	3号住居跡出土土器実測図① (1/3).....	111
第 103 図	3号住居跡出土土器実測図② (1/3).....	112
第 104 図	4号住居跡, 7号竪穴実測図 (1/60).....	折込み
第 105 図	4号住居跡出土土器実測図 (1/3).....	114
第 106 図	5号住居跡実測図 (1/60).....	115
第 107 図	5号住居跡カマド実測図 (1/30).....	116
第 108 図	5号住居跡出土土器実測図 (1/3).....	117
第 109 図	6号住居跡実測図 (1/60).....	118
第 110 図	6号住居跡カマド実測図 (1/30).....	119
第 111 図	7号住居跡カマド実測図 (1/30).....	120
第 112 図	6・7号住居跡出土土器実測図① (1/3).....	120
第 113 図	7号住居跡実測図 (1/60).....	折込み
第 114 図	6・7号住居跡出土土器実測図② (1/4).....	121
第 115 図	8号住居跡実測図 (1/60).....	122
第 116 図	8号住居跡出土土器実測図 (1/3).....	124
第 117 図	9号住居跡実測図 (1/60).....	125
第 118 図	1・4~6号竪穴実測図 (1/60).....	126
第 119 図	2・3・8号竪穴, 3号溝実測図 (1/60).....	128
第 120 図	1~3・5~7号竪穴出土土器実測図 (1/3).....	129
第 121 図	住居跡・竪穴・土壤出土遺物実測図 (1/2).....	131
第 122 図	5号土壤出土土器実測図 (1/4).....	132
第 123 図	1~4・12号土壤実測図 (1/40).....	133
第 124 図	5・6号土壤実測図 (1/40).....	134
第 125 図	7・8・11号土壤, 1号溝実測図 (1/40).....	136
第 126 図	7号土壤出土土器実測図 (1/4).....	折込み
第 127 図	9号土壤出土土器実測図 (1/4).....	137
第 128 図	9・10・13号土壤実測図 (1/20).....	138
第 129 図	11号土壤出土土器実測図 (1/3).....	139

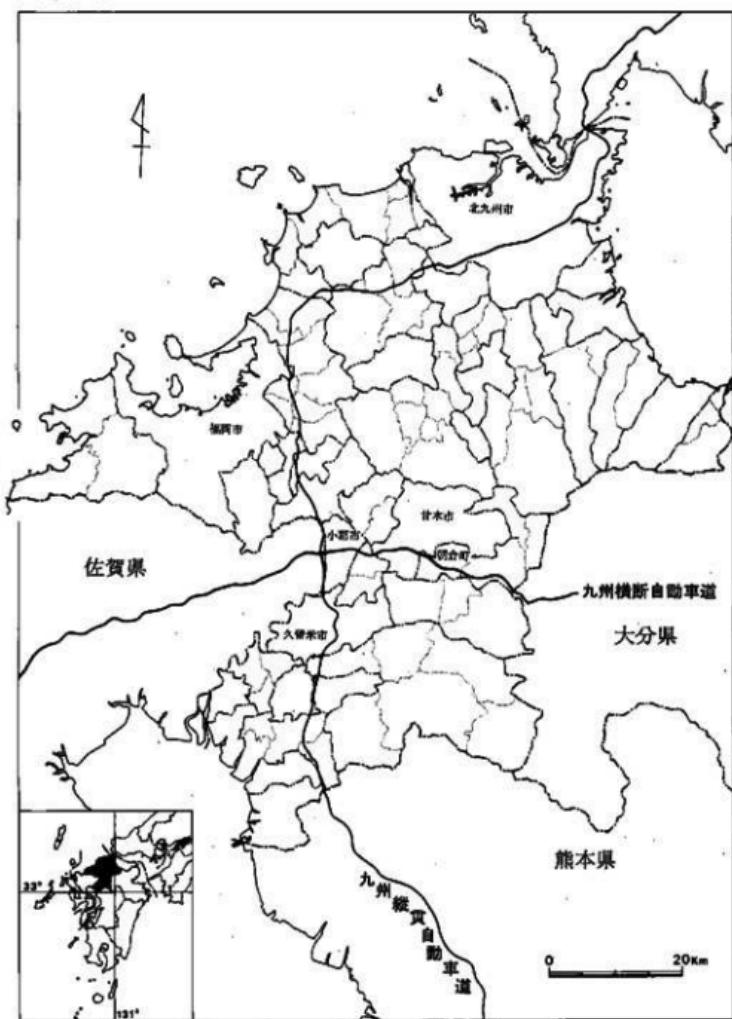
第 130 図	14・16・18号土壤実測図 (1/40).....	140
第 131 図	17・19・20号土壤実測図 (1/40).....	141
第 132 図	17号出土土器実測図 (1/3).....	142
第 133 図	1・2号焼土壤出土土器実測図 (1/20).....	143
第 134 図	1・2号焼土壤出土土器実測図 (1/3).....	144
第 135 図	1号石蓋土壤墓実測図 (1/20).....	145
第 136 図	4号溝出土土器実測図 (1/3).....	146
第 137 図	ピット出土土器実測図 (1/3).....	147
第 138 図	E・F群火葬墓整地層出土土器実測図① (1/3).....	149
第 139 図	E・F群火葬墓整地層出土土器実測図② (1/3).....	151
第 140 図	E・F群火葬墓整地層出土土器実測図③ (1/3).....	152
第 141 図	E・F群火葬墓整地層出土土器・土製品実測図④ (1/4).....	154
第 142 図	整地層出土遺物実測図 (1/2).....	155
第 143 図	2号整穴整地層出土土器実測図 (1/3).....	156
第 144 図	G・H群火葬墓整地層出土土器実測図① (1/3).....	158
第 145 図	G・H群火葬墓整地層出土土器実測図② (1/4).....	159
第 146 図	整地層出土石器実測図 (1/4).....	160
第 147 図	I群火葬墓整地層出土土器実測図 (1/3).....	161
第 148 図	J群火葬墓整地層他出土土器実測図 (1/3).....	163
第 149 図	整地層他出土石器実測図 (1/3).....	164
第 150 図	A群トレンチ土層断面実測図 (1/80).....	165
第 151 図	中央トレンチ土層断面実測図 (1/80).....	166
第 152 図	1号火葬墓実測図 (1/15).....	167
第 153 図	1号火葬墓出土土器・骨蔵器実測図 (1/3).....	167
第 154 図	1・2号火葬土壤実測図 (1/20).....	169
第 155 図	1号住居跡実測図 (1/80).....	170
第 156 図	1号住居跡出土土器実測図 (1/4).....	171
第 157 図	トレンチ出土土器実測図① (1/4).....	171
第 158 図	トレンチ出土土器実測図② (1/3).....	171
第 159 図	火葬墓規格尺 (1マスは36cm, 1/80).....	183
第 160 図	骨蔵器・短頭壺実測図 (1/4).....	186
第 161 図	志波台地建物跡群位置図 (1/25,000, 建物跡配置図1/2,500).....	191
第 162 図	大迫遺跡(1)・杷木宮原遺跡(2)・志波岡本遺跡(3)建物跡実測図 (1/160)	193

第 163 図 中町裏遺跡出土軒用磯・墨書き器実測図(1/3) 194

付 図 大迫遺跡遺構配置図

表 目 次

表 1	大迫遺跡火葬墓・火葬土壙一覧表①	84
表 2	大迫遺跡火葬墓・火葬土壙一覧表②	85
表 3	大迫遺跡火葬墓・火葬土壙一覧表③	86
表 4	大迫遺跡火葬墓・火葬土壙一覧表④	87
表 5	大迫遺跡出土火葬骨	178
表 6	大迫遺跡出土炭化材	180
表 7	炭化材の年代測定結果	181
表 8	火葬墓分類表	182



第1図 九州横断自動車道路線図

I 調査組織と調査経過

一次調査の経過

九州横断自動車道建設工事のSTA225+20~227+90(長さ約270m)の区間は、麻底良山から筑後川に向かって派生した丘陵の南急傾斜面にあたり、STA225とSTA228付近には谷が入る。当初、現地が急傾斜面ということから遺跡の存在が否定的であったが、現地踏査の結果、用地内の最高所から棺材に使用したと思われる石材を採集しており、発掘調査の必要性が認められた。

試掘調査は、昭和62年5月11日~19日に実施した。丘陵部の中央及びSTA225+20~50間の平坦部に試掘トレンチを設定した。試掘の結果、平坦部は柿畠として既に開墾されており、遺構は存在しなかった。丘陵部では、溝・ピットが確認されたため、調査範囲はSTA225+90~227+90の丘陵部のみとした。なお、調査以前は、柿畠・雜木林であった。

大追遺跡の本調査(一次調査)は、昭和63年2月24日より開始し、同年7月9日までの約4ヶ月間行った。調査面積は、約9,900m²であるが、下層造構の調査分を含めると11,500m²に及ぶ。

調査当初は、造構密度が薄いように思われたが、重機による表土剥ぎが進展するに従い、コ字形の周溝を有する火葬墓が次々に姿を現し、最終的には90基を越す大火葬墓群であることが判明した。また、丘陵中央部の試掘トレンチの埋土を除去し、土層を精査したところ、火葬墓群の下層には住居跡等の造構が存在することが観察されたので、火葬墓群の調査が終了した時点で、下層造構の調査を行うこととした。

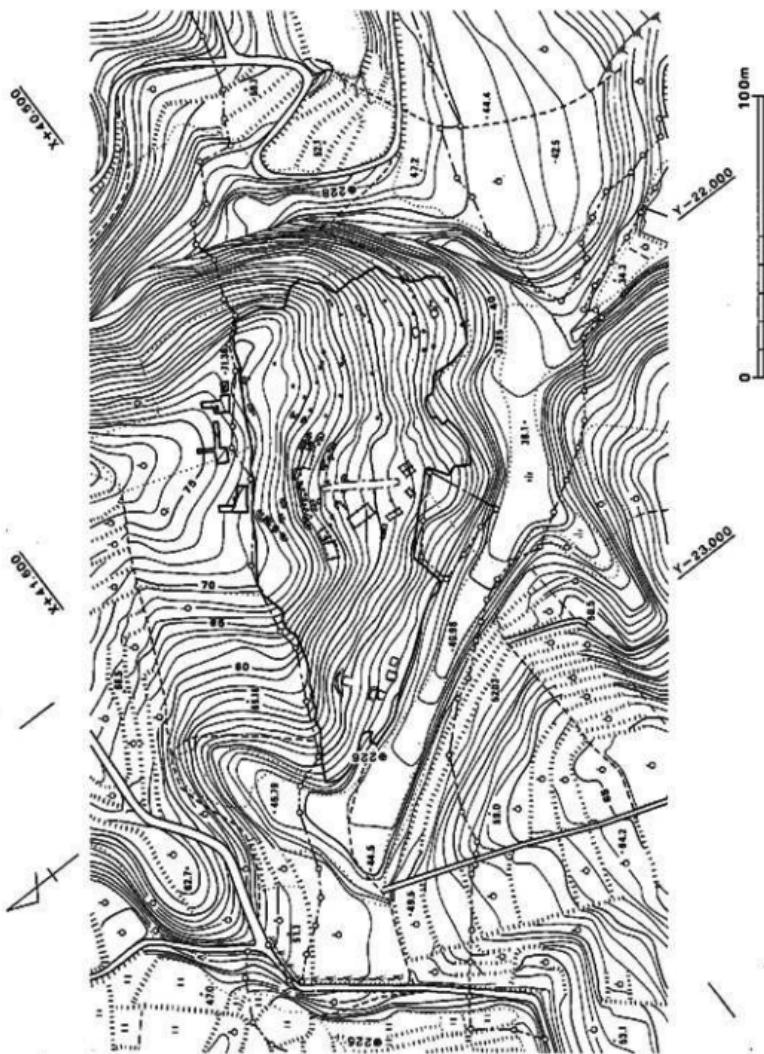
発掘作業は、現場が急斜面であるため、一輪車の土捨てに苦慮した。普段でさえ滑り易いのが、3月は雨の日が多く閉口した。また、一旦雨が降らうものなら滑り台を滑るように泥水が下の畑や人家の池に流れ込み、そのつど復旧に手間取った。

火葬墓群は、丘陵を3~4段階状にカットして平坦部を造り、その平坦部に火葬骨を埋葬しており、まさに“大追豪園”といった有様を呈した。5月21日に地元を主体とした現地説明会を開き、100名程の参加者を得た。

5月27日に気球による写真撮影を行い、6月6日には、九州歴史資料館参事補佐横田義章氏・甘木歴史資料館副館長川述昭人氏の指導により、45・57号火葬墓の切り取り調査を行い、火葬墓群の調査を終了した。

火葬墓群の下層からは、建物跡群・竪穴式住居跡・竪穴・土壤等を検出した。とりわけ、8号建物跡は、梁行2間(4.16m)×桁行6間(8.8m)の柱間寸法で、柱穴の掘方は1mを優に越す大規模な建物跡である。また、1・2号建物跡は、地山の岩盤を掘削した平坦面に築造されており、建物群の築造は大土木工事であった想像される。標高60m程の丘陵の中腹部を掘削し、建物・

第2圖 大連鐵路地形圖 (1/2,000)



住居が存在する様は極めて特異である。

一次調査は、冬の終わり頃から初夏に及んだが、その間大した事故もなく、7月9日に無事調査を終了した。

<調査日誌抄>

昭和63年

2月24日	器材搬入・テント設営、遺構検出。	5月17日	中央トレンチ東側の遺構検出。
3月 1日	24号火葬墓より骨殖器検出。	21日	現地説明会、約100名参加。
16日	22号火葬墓の調査。	24日	71号火葬墓より高寿神寶出土。
24日	土壌の写真撮影。	25日	気球写真撮影(フォトオツカ)。
26日	本年度の発掘調査終了、器材撤収。	27日	気球写真撮影(フォトオツカ)。
28・29日	火葬墓の実測。	30日	北九州市立博物館藤丸氏来。
4月 5日	西端崖面の掘り下げ、建物跡を検出。	6月 6日	45・57号火葬墓切取り。
11日	さらに西側で建物跡を検出する。	10日	下層遺構の検出。
30日	東斜面の遺構検出。	13日	下層建物群の調査。
5月 3日	植烟の復旧作業。	20日	2号住居跡掘り下げ。
10日	調査区西端住居跡の掘り下げ。	7月 6日	下層遺構の写真撮影。
14日	太宰府市教育委員会狭川・山村氏来。	9日	調査終了、器材撤収。

二次調査の経過

大迫遺跡の調査終了後まもなく横断道建設工事が始まり、丘陵そのものがカットされ、法面には菱生のコンクリートが吹き付けられた。しかし、本線北側の用地外丘陵の一部が崩落し、クラックが随所に現れるなど地滑りが進行し、法面崩壊の危険性が生じた。このため、広範囲に法面を除去する防災工事が必要となり、急速、発掘調査を実施することになった。

しかし、発掘調査を実施する上でもかなりの危険を伴うことが予想された。また、梅雨までには防災工事に入りたいとの道路公團側の意向があり、不本意ではあるが、短期間でかつ必要最低限の調査とならざるを得なかった。

二次調査は、平成元年5月16日より開始した。調査区の制約上、一次調査の火葬墓の北端を確認する意味で、A・C群火葬墓の北側とその中間に計3本のトレンチを設置した。

調査の結果、火葬墓1基・火葬土壙2基の他に弥生時代中期の住居跡1軒を検出し、同月27日に調査を終了した。

なお、大迫遺跡における昭和63年度・平成元年度の調査関係者は、次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	杉田 美昭（前任）	白井 信
次長	吉岡 康行（前任）	進 哲美
総務部長	安元 富次（前任）	進 哲美（前任）
管理課長	副島 紀昭	堀 義任
管理課長代理	三野 徳博（前任）	荒木 恒久

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所長	風間 徹
庶務課長	大河 尊光（前任）
用地課長	松尾 伸男
工務課長	豊里 英吉
朝倉工事区工事長	上野 満
杷木工事区工事長	小沢 公共

福岡県教育委員会

總 括

教育長	竹井 宏（前任）	御手洗 康
教育次長	大鶴 英雄（前任）	測上 雄幸
指導第二部長	大平 岩男（前任）	月森 清三郎
指導第二部参事	葉石 煉（兼任）	
文化課長	葉石 煉（兼任）	六本木 聖久
文化課長補佐	平 聖峰	
文化課長技術補佐	宮小路賀宏（現九州歴史資料館学芸二課長、二次調査担当）	
文化課参事補佐	栗原 和彦（現九州歴史資料館調査課長）	
同	柳田 康雄	
同	井上 裕弘	

庶 務

文化課庶務係長	池原 脩二	管理係長	池原 脩二
文化課主任主事	沢田 俊夫		

文化課調査班

總 括	柳田 康雄（兼任）
同 總括補佐	井上 裕弘（兼任、二次調査担当）
同 技術主査	木下 修（現北九州教育事務所）

同 技術主査	中間 研志（現福岡教育事務所）
同 主任技師	伊崎 俊秋（現京葉教育事務所）
同 技 師	小田 和利（一次調査担当 現主任技師）
同 技 師	水ノ江和同
同 文化財専門員	木村 幸多郎（現大分市立歴史資料館長）
同 文化財専門員	日高 正幸
調査補助員	高田 一弘
	武田 光正（現遠賀町教育委員会）

＜実測補助＞

高瀬セツ子 本石セツ子 中村光恵 牟田育子 渡辺輝子 後藤カミヨ 矢野静子

＜大迫遺跡発掘作業員＞

井上武雄	小川人己	友納 浩	青柳美雪	井手和江	井手照子	伊藤夏子
伊藤ミネヨ	小川貞子	梶原アヤ子	梶原ハヤ子	梶原マツエ	佐藤扶美子	田中サツキ
坂本トシ枝	時川千代子	野田ミエ	奈須道子	林ツユカ	日野マツ子	藤本和子
藤本公子	山下けさ江	山本フミ子	磯村スズ子			

遺構の実測には、浮羽町教育委員会佐土原逸男氏、甘木市教育委員会松尾宏・隈部敏明氏の協力があった。また、火葬墓の切取りは、九州歴史資料館参考補佐横田義章氏・甘木歴史資料館川述昭人氏の指導による。

出土遺物の復原整理作業は、福岡県教育庁文化課甘木発掘調査事務所及び九州歴史資料館において岩瀬正信整理指導員の下に中塙尾リツ子・西奇子・小島佐枝子・石井紀美子・尾花道子・藤井カオル・有馬信子・丸木美知子・樺山洋子・栗栖絹子さんが行った。出土鉄器の保存処理は、同館横田義章氏による。

遺物の写真撮影・焼付けは、岡紀久夫氏の手を煩わせた。また、製図作業には、豊福弥生・塩足里美・関久江さんの多大なる協力があった。

本報告書作成にあたり杷木町井手訓真氏、小郡市教育委員会片岡宏二氏、太宰府市教育委員会狭川真一氏、福岡県文化課高橋章氏には有益な御指導・御教示を得た。末筆ながら、記して感謝いたします。

第3図 大迫瀬跡周辺地形図 (1/10,000)



II 遺跡の位置と環境

本題に入る前に、当遺跡の所在する朝倉町について若干紹介しよう。

朝倉町は、福岡県のほぼ中央で、日本有数の穀倉地帯である筑後平野の北東部に位置する。町域の東縁は朝倉郡杷木町と接し、北縁及び西縁は甘木市と接し、町域の南端は筑後川に限られ、浮羽郡田主丸町・吉井町と対峙する。人口約12,000人、面積34.66km²の農業を主体とする町である。主な交通網は、筑紫野市と大分県日田市を結ぶ国道386号線のみであったが、横断道のインターチェンジを擁することから、今後は、企業の進出に拍車がかかるものと思われる。

遺跡の位置

大追遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字大迫493-1・2、同字441、同字442-1・2番地他に所在し、恵森宿の恵森八幡宮の裏手にあたる。

朝倉低山地に属する米山(標高590.9m)が南北方向に徐々に高さを減じ、麻底良山(標高294.9m)と高山(標高190.3m)の二つの山に分岐する。その、麻底良山から南に派生した標高44~72mの丘陵突端部に遺跡は立地する。そこからの眺望は素晴らしい、遺跡の眼下には、筑後川が滔滔と流れ、太古より広大な筑後平野に潤いを与え続けてきた。また、外之隈遺跡とは谷一つ隔てて東接し、その東の高山と麻底良山に挟まれた小台地が志波台地である。

鳥栖インターチェンジから鳥栖段丘群・城山丘陵を横断し、朝倉扇状台地群・朝倉低山地を抜けて大分県日田市に通じる横断道は、朝倉町内においては大字石成一入地にかけての朝倉扇状台地群を、大字菱野・山田にかけては朝倉低山地を通過する。

低山地の裾部においては、従来より群集墳の存在が知られていたが、台地部では朝倉高校史学部による調査が数件ある程度であった。ここでは、近年の調査成果を踏まえ、時代ごとに概述してゆこう。

歴史的環境

旧石器時代の遺跡については、これまで不明瞭であったが、朝倉町大字菱野の原の東遺跡では、4層に及ぶ旧石器時代の文化層が調査された。小型のナイフ形石器を主体とし、台形石器・スクレイバー等の好資料を提供した(註1)。

大字山田に位置する金場遺跡では、細石器の文化層が調査された(註2)。小川を挟んで金場遺跡に東接する上ノ宿遺跡では、ナイフ形石器等の出土をみており(註3)、京都フィッシュントラック跡による土壤中火山灰抽出分析の結果、両遺跡ともATの堆積が確認された。

縄文時代の遺跡には、前述した原の東遺跡があり、縄文早期の石組炉跡33基、集石造構9基、

縄文晩期の土壙等を調査しており、旧石器～縄文時代にかけての指標となる遺跡として注目される。縄文早期の石組炉跡は、金場遺跡で2基、上ノ宿遺跡で3基が調査されており、また金場遺跡では前期の土壙30基も検出された。

平野部に目を転じると、甘木市小隈松山遺跡で早期の集石遺構が検出され（註4）、柿原野田遺跡では竪穴状遺構から曾畠式土器・轟式土器が出土した（註5）。また、縄文期の所産と推測される落し穴状遺構は、甘木市立野遺跡・下原遺跡・塔ノ上遺跡・柿原遺跡、朝倉町中道遺跡・西法寺遺跡・上ノ宿遺跡、杷木町小覚原遺跡・二十谷遺跡、大刀洗町温水遺跡・向八坂遺跡等で検出されており（註6）、近年類例を増している。

杷木町畑田遺跡では、縄文晩期～弥生前期にかけての竪穴住居跡84軒、支石墓4基、石棺墓2基、土壙等が検出され（註7）、笹原遺跡でも縄文晩期の竪穴住居跡38軒が検出された（註8）。北部九州地域よりかなり奥まった当地において、稻作受容期の遺跡が調査されたことは非常に有意義である。以上の様に、朝倉町・杷木町の朝倉低山地に立地する遺跡からは、縄文時代の良好な遺構・遺物が検出され、筑後川中流域における縄文時代の様相が明らかになったのは大きな成果と言える。

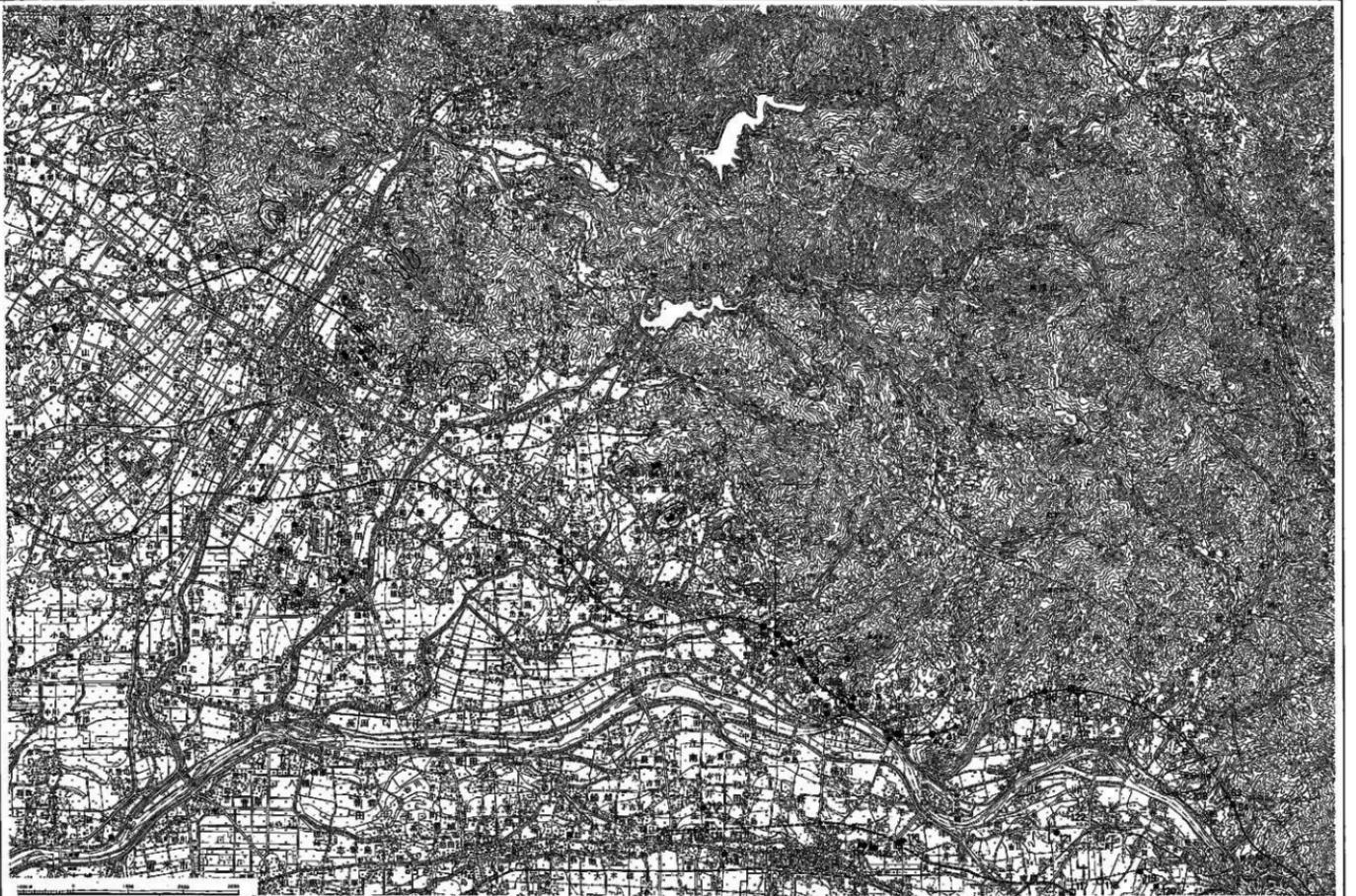
弥生～奈良時代にかけての遺跡は、扇状台地群に展開をみせる。特に、「一つ木一小田」台地と「三奈木一十文字一中島田」台地には、弥生時代の遺跡が密集し、弥生銀座の様相を呈する。「一つ木一小田」台地に位置する弥生中期の集落としては、下原遺跡・大願寺遺跡（註9）・小田集落遺跡（註10）等がある。栗山遺跡は中期の甕棺墓を主体とする墓地群であり、前漢鏡・鉄戈・鉄劍・貝釧等の出土をみた（註11）。また、台地突端部の中寒水屋敷遺跡からは、中国式銅劍が出土しており注目される（註12）。

弥生後期～終末期の集落には、小田道遺跡（註13）・小隈出口遺跡（註14）・西原C遺跡（註15）がある。大願寺遺跡では土壙墓群、宗原遺跡では石棺墓・石蓋土壙墓（註16）、西原C遺跡では、鉄鉗を副葬した木棺墓等を調査した。

「三奈木一十文字一中島田」台地には、中道遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡等の主要遺跡が存在する。中道遺跡では中期～終末期の焼失家屋や中期の甕棺墓が調査された（註17）。大庭久保遺跡では、甕棺墓・木棺墓・土壙墓・石棺墓の列埋葬を呈する大墓地群が調査され、木棺墓からは小型仿製鏡の出土をみた（註18）。上の原遺跡は弥生～奈良時代にかけての大集落跡で、弥生時代の遺構には、住居跡・方形竪穴・貯蔵穴・土壙・甕棺墓等があり（註19）、大庭久保遺跡の墓地群と対をなし、当地の拠点集落として捉えられる。

また、志波台地の先端部に位置する杷木宮原遺跡・中町裏遺跡は（註20）、弥生中期初頭～中葉の墓地群を主体とし、列埋葬を呈する甕棺墓・木棺墓・土壙墓で構成される。

小石原川右岸の微高地に立地する大刀洗町畑集地遺跡は、弥生～古墳時代の集落跡・墓地群を主体とし、弥生時代の遺構には住居跡・貯蔵穴・溝・甕棺墓・石棺墓・土壙墓等がある（註



第4図 大迫道跡周辺道路分布図

- 9 寿園遺跡
11 立野古墳
官原虎跡
14 上来古跡
15A 西原虎跡
15B 下原虎跡
16 真原虎跡
19A 塚人山遺跡
19B 大迫道跡
19C 石成久根遺跡
20 中道遺跡
21 雷庄古跡
21A 雷庄古跡
21C 大迫道跡
21D 上の迫道跡
22A 油部・人山遺跡
22C 佐原虎跡
23 座神山遺跡
24 才川古跡
25 宮方山遺跡
27 長島古跡
28 小妙見遺跡
29A 黒の山遺跡
29B 紗見山古跡群
30 錦原遺跡
31 山ノ内遺跡
33 長田遺跡
34 金場遺跡
35A 上ノ原遺跡
35B 斎原山遺跡
36 神坪遺跡
37 大迫道跡
38 外之原遺跡
39A 乾木山遺跡
39B 中町山遺跡
40 北被森・木戸遺跡
41 佐治山遺跡
42 江東遺跡
43 大谷遺跡
45 雷原遺跡
46 夕月・天原遺跡
上池原遺跡
48 植田遺跡
51 越田遺跡
52A 小佐野遺跡
52B 二十世紀跡
53 横山遺跡
54 上野原遺跡
57 植原古墳群
58 山田古墳群
杞木1C
A 篠掛遺跡
B 利用遺跡
C 西ノ丘古跡
D クリナク遺跡
60 落田遺跡
61 小林古墳
62 仙道古墳
63 河野鈴鹿古墳群
64 横江古墳群
- 65 特占山古跡
66 菅原古寺古墳群
古寺古墳群
67 地の上境古跡
68 丸の古墳
70 京原古跡
71 大岩山古墳群
72 大綿谷古墳群
73 大綿谷古墳群
74 大岩山古墳群
75 洗田古墳群
76 下原名古墳群
77 下河原の前古墳群
78 桃原中田遺跡
79 上川遺跡
80 大綿谷遺跡
81 富山遺跡
82 神龜古墳
83 小綿谷古墳群
84 小綿谷口遺跡
85 小川中口古墳群
86 小綿谷山遺跡
87 小綿谷古墳群
88 小田原遺跡群
89 小田原古墳群
90 金川中田遺跡
91 石虎古坟
92 乙五古墳
93 長塚古墳
94 鳥屋敷1号墳
95 古南古墳群
96 宮地古墳古墳
97 宮地古墳古墳
98 長安寺古墳群
99 朝日山古墳群
100 山田中田古墳群
101 保原古墳
102 錦原山古墳
(工事用地)
103 鹿原古墳
104 鹿原・植古墳群
105 鹿原山古墳群
106 本降古墳
107 安堵北原古墳
杞木王田遺跡
108 鹿原王田遺跡
109 鹿原王田遺跡
110 地町遺跡
111 大綿遺跡
112 生糸1号墳
113 高水古墳
114 月岡古墳
115 日向古墳
116 稲佐古墳
117 日永古墳
118 沖出古墳
119 沖出古墳遺跡
120 飯山吹・造跡
121 田島南古墳
122 北庭古墳

	基	高
	落	地
縄文時代	◇	
弥生時代	□	
古墳時代	○	
奈良・平安時代	●	▲

21)。同左岸に立地する甘木市平塚川派遺跡は、小石原川の氾濫源に形成された住居跡・墓地群からなる遺跡で、住居跡・要棺墓・石棺墓等が現在調査中である（註22）。

朝倉低山地に立地する墓地群には、柿原遺跡（註23）・原の東遺跡・上ノ宿遺跡があり、要棺墓・木棺墓・土塚墓・石蓋土塚墓で構成される。丘陵の突端部に位置する長島遺跡では、終末期の石棺墓群から小型仿製鏡・管玉・ガラス玉等が出土した（註24）。

筑後川以南に目を向けると、銅戈・銅矛の埋納造構が発見された日永遺跡（註25）、弥生～奈良時代の大集落跡が調査された鷹取・五反田遺跡（註26）、住居跡・貯藏穴・溝が調査された大碇遺跡（註27）、小口部に石を立てた木棺墓や要棺墓・石棺墓等で構成される墓地群が調査された浮羽町岩野遺跡（註28）等続々と弥生期の遺跡が発見されている。

杷木町西ノ迫遺跡は、標高131mの丘陵頂部に立地し、弥生後期後半の4軒の住居跡とそれを囲む環濠からなり（註29）。高地性集落として衆目を集めめた。同時期の遺跡に杷木インターの進入路として調査を行った前田遺跡があり、住居跡4軒・土塚・溝等が検出され（註30）、両者は密接に関連するものと推測される。

当地の前方後円墳には、「一つ木一小田」台地に占地する神蔵古墳（註31）、小田茶臼塚古墳（註32）、丸山公園内に位置する巨石横穴式石室の鬼の枕古墳（註33）、近年国道386号バイパス関係で調査を行った持丸1号墳（註34）、「三奈木一十文字一中島田」台地の丘陵頂部に鳥集院1号墳（註35）・宮地獄古墳（註36）、筑後川北岸丘陵に劍塚古墳（註37）が占地し、対岸の吉井町若宮には月岡古墳・塚堂古墳・日岡古墳（註38）の前方後円墳が対峙する。何れも、両筑平野東部地域に霸をなした首長層の墳墓と考えられる。

大迫遺跡に東接する外之隈遺跡I区の台状墓からは、圓文帯神獸鏡・勾玉が、II区の石棺墓を主体とする台状墓からは、重圓連弧文鏡・飛禽文鏡、鐵刀子が出土しており（註39）、古墳時代初頭の特定集団墓と位置付けられよう。志波宝満宮境内には、石棺系竪穴式石室を内部主体とする二体埋葬の古墳があり、仿製鏡・短甲及び家形埴輪が出土した（註40）。志波桑ノ本遺跡では、円墳8基が調査され、墳丘は削平されていたものの周溝から線刻を施した埴輪片が出土している（註41）。外之隈遺跡上方の本陣古墳（註42）と恵蘇八幡宮境内に所在する恵蘇八幡古墳（註43）はともに円墳であるが、円筒埴輪を有する。この、恵蘇宿から志波地区にかけての一帯には重要な古墳が存在し、今後とも注意を要する地区と言える。

立野遺跡の方形周溝墓からは、筒形鏡器・重圓文鏡が出土した（註44）。また、大願寺方形周溝墓からは、三角縁神獸鏡が出土したとされる（註45）。鬼の枕古墳の北方丘陵には、陶質土器・鐵器等を大量に副葬した古寺塙墓群・池の上塙墓群があり（註46）、当地の古墳時代墓制を考える上で大変貴重である。

後期古墳は両筑平野東縁丘陵に築造され、柿原古墳群を筆頭に大岩古墳群（註47）・持丸古墳群（註48）・山田古墳群（註49）・金場古墳群（註50）・宮地獄古墳群（註51）等の群集墳を形成す

る。また、盾持形埴輪の出土をみた三輪町仙道古墳（註52）、線刻壁画で知られる朝倉町狐塚古墳（註53）も見逃せない。

また、奈良一平安時代の集落は、段丘群及び低山地平坦部において調査され、立野宮原遺跡（註54）・小隈松山遺跡・高原遺跡（註55）・塔ノ上遺跡（註56）・中道遺跡・西法寺遺跡（註57）・大庭久保遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・鎌塚遺跡（註58）・鞍掛遺跡（註59）等があり、特に宮原遺跡・上の原遺跡・長島遺跡は大規模で、当時の母村的集落といえよう。

同時期の墓地には、立野宮原遺跡・大邊場遺跡（註60）の土壙墓群、古寺遺跡・池の上遺跡・大迫遺跡等の火葬墓群があり、特に、90基もの火葬墓が調査された大迫遺跡は、同時期の墓制を考える上で貴重な発見となった。また、大迫遺跡の火葬墓群下層からは、7世紀後半の大規模な建物群を検出した。時期は不詳であるが、杷木町志波の同一台地上に立地する杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡・志波岡木遺跡（註61）では、桁行方位を北から西に約40度振った2間×6間の規則的に配された建物群を検出している。大迫遺跡の下層建物群と柱間寸法を等しくすることから、それらの建物群は、大迫遺跡の建物群と同時期の可能性を有する。

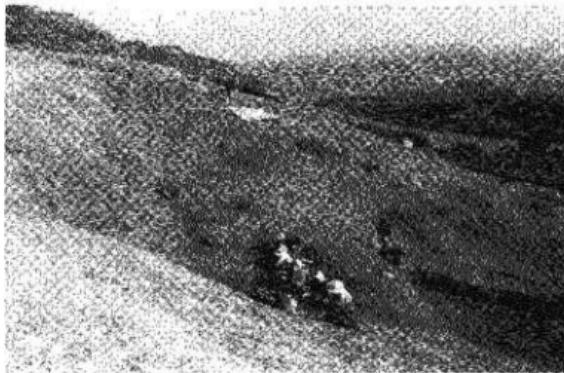
当地には、齊明天皇（661）年に齊明天皇が行宮として築造した朝倉橋広庭宮があり、朝倉町山田・同須川、杷木町志波等が官邸の候補地に挙げられており（註62）。杷木神籠石の存在と相まって古代においては要衝の地であったと言えよう。

- 註1 福岡県教育委員会が、昭和62・63年度に発掘調査を実施した。現在、整理中である。
註2 福岡県教育委員会が、昭和63年度に発掘調査を実施した。
註3 井上裕弘・木下修編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－20－（七ノ宿遺跡・恵那山遺跡・鶴畑遺跡） 1991 福岡県教育委員会
註4 小田和利編 小隈出口遺跡・小隈松山遺跡（甘本市文化財調査報告第18集） 1987 甘本市教育委員会
註5 馬田弘慈・小田雅文・川村博編 柿原野田遺跡 1976 甘本市教育委員会
註6 落し穴状遺構は、立野遺跡C地区（9基）、下原遺跡（20基）、塔ノ上遺跡（7基）、柿原遺跡（7基）、中道遺跡（10基）、西法寺遺跡（5基）、上ノ宿遺跡（2基）、小覚原遺跡（9基）、二十谷遺跡（52基—1土壤含む）、風水遺跡（6基）、向八坂遺跡（1基）等で検出されている。
註7 福岡県教育委員会が、昭和61年度に発掘調査を実施した。
註8 福岡県教育委員会が、昭和62年度に発掘調査を実施した。
註9 甘本市史編さん委員会 1982 甘本市史上巻
註10 高山明編 小田集落遺跡（甘本市文化財調査報告第2集） 1974 甘本市教育委員会
註11 註9文献所収。佐々木彦編 東山遺跡（甘本市文化財調査報告第12集） 1982 甘本市教育委員会
註12 福岡県立朝倉高校史部 1969 「埋もれていた朝倉文化」 及び註9文献所収。
註13 楠島邦弘編 小田遺跡（甘本市文化財調査報告第8集） 1981 甘本市教育委員会
註14 註4文献所収。
註15 中間研志編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－3－（西原C道路） 1984 福岡県教育委員会
註16 註12文献所収。
註17 福岡県教育委員会が、昭和60年度に発掘調査を実施した。
註18 福岡県教育委員会が、昭和60年度に発掘調査を実施した。
註19 井上裕弘編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－18－（上の原遺跡I） 1990 福岡県教育委員会

会 なお、弥生時代遺跡分については、「上の原遺跡II」として平成4年度の報告予定である。

- 註20 小田和莉・高橋翠・日高正幸編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-21- (杷木宮原遺跡・中町裏遺跡) 1991 福岡県教育委員会
- 註21 大刀洗町教育委員会が、平成2年度に発掘調査を実施した。調査担当の児玉真一氏の御教示による。
なお、平成4年度の報告予定である。
- 註22 甘木市教育委員会松尾宏氏の御教示による。
- 註23 小池史哲編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-12- (柿原遺跡III) 1987 福岡県教育委員会
- 註24 福岡県教育委員会が、昭和62年度に発掘調査を実施した。
- 註25 浮羽町 1988 浮羽町跡上巻
- 註26 福岡県教育委員会が、平成2年度に発掘調査を実施した。
- 註27 福岡県教育委員会が、平成2年度に発掘調査を実施した。
- 註28 寺崎克史編 岩野達助(浮羽町文化財調査報告書第5集) 1990 浮羽町教育委員会
- 註29 福岡県教育委員会が、昭和62年度に発掘調査を実施した。
- 福岡県教育委員会 1987 文化講演会 横国大乱-西ノ道高地性集落の謎
- 註30 福岡県教育委員会が、昭和60年度に発掘調査を実施した。
- 註31 木下修編 神職古墳(甘木市文化財調査報告書第3集) 甘木市教育委員会
- 註32 柳田康雄編 小田茶臼冢古墳(甘木市文化財調査報告書第4集) 甘木市教育委員会
- 註33 小田和利編 鬼の枕古墳(甘木市文化財調査報告書第19集) 1987 甘木市教育委員会
- 註34 福岡県教育委員会が、平成2年度に発掘調査を実施した。本年度の報告予定である。
- 註35 言9・12文献所収。
- 註36 言9・12文献所収。
- 註37 言9・12文献所収。
- 註38 児玉真一編 若宮古墳群I (吉井町文化財調査報告書第4集) 1989 吉井町教育委員会
児玉真一編 若宮古墳群II (吉井町文化財調査報告書第6集) 1990 吉井町教育委員会
馬田弘毅編 緯堂跡I 1983 福岡県教育委員会
- 註39 福岡県教育委員会が、昭和62・63年度に発掘調査を実施した。
- 註40 福岡県 1932 史蹟名勝天然紀念物調査報告書第七輯(史蹟の部)
- 註41 福岡県教育委員会が、昭和61年度に発掘調査を実施した。調査担当の小池史哲氏の御教示による。
- 註42 京築教育事務所伊崎俊秋氏・小田が採集した円筒埴輪で、外側はタテハケ目調整による。
- 註43 朝倉町大字山田字恵森八幡宮境内に所在する古墳で、町史跡として指定されている。
- 註44 児玉真一編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-5- (立野遺跡) 1984 福岡県教育委員会
- 註45 言9・12文献所収。
- 註46 橋口達也編 池の上墳墓群(甘木市文化財調査報告書第5集) 1979 甘木市教育委員会
橋口達也編 古寺墳墓群(甘木市文化財調査報告書第14集) 1982 甘木市教育委員会
橋口達也編 古寺墳墓群II(甘木市文化財調査報告書第15集) 1983 甘木市教育委員会
- 註47 言9・12文献所収。
- 註48 甘木市教育委員会編 持丸古墳群(甘木市文化財調査報告書第1集) 1974 甘木市教育委員会
- 註49 福岡県教育委員会が、昭和60年度に発掘調査を実施。本年度の報告予定である。
- 註50 言9・12文献所収。
- 註51 言9・12文献所収。
- 註52 猪熊兼勝 1979 日本の原始美術⑤ 城輪 静映社
- 註53 言9・12文献所収。
- 註54 佐々木隆彦・児玉真一編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-2- (下原遺跡・立野遺跡) 1983 福岡県教育委員会
児玉真一編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-5- (立野遺跡) 1984 福岡県教育委員会
伊崎俊秋編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-8- (立野遺跡2) 1986 福岡県教育委員会
伊崎俊秋編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-14- (宮原遺跡1) 1988 福岡県教育委員会
- 註55 福岡県教育委員会が、昭和59・60年度に発掘調査を実施した。

- 註56 伊崎俊哉編 九州横断自動車道関係歴史文化財調査報告－9－（塔ノ上遺跡） 1987 福岡県教育委員会
- 註57 福岡県教育委員会が、昭和60年度に発掘調査を実施した。
- 註58 福岡県教育委員会が、昭和62年度に発掘調査を実施した。平成3年度の報告予定である。
- 註59 福岡県教育委員会が、昭和61年度に発掘調査を実施した。
- 註60 福岡県教育委員会が、昭和60年度に発掘調査を実施した。
- 註61 福岡県教育委員会が、昭和61・62年度に発掘調査を実施した。
- 註62 「日本書紀」に「齊明天皇七年五月乙未朔癸卯、天皇、朝倉橋庄庭宮に遡りて居ます」とある。



大迫遺跡調査状況

III 火葬墓群の調査

1. 遺構の概要

大迫遺跡の一次調査は、横断道工事区STA225+90~227+90間の本線と法面部分の発掘調査を実施した。本線中央部南側に一部用地外を残すものの、調査面積は約9,900m²である。

調査区は、丘陵の南側急傾斜面にあたり、調査区中央の谷あいと東側斜面において火葬墓73基、火葬土壙（火葬場）19基を検出した。

また、火葬墓群の下層より建物跡群・住居跡・竪穴・土壙等を検出しているが、これについては次章でふれたい。

2. 火葬墓の分類

大迫遺跡の火葬墓群は、調査区中央の丘陵谷あいに群集するB~J群と調査区東側急傾斜面の全域に散在するK~R群の二群に大別できる（第5図）。

火葬墓は、その形態から3類に分類した。

I 類……山側に周溝を有し、その中央に墓壙を設けた火葬墓。

II 類……周溝を有せず、墓壙のみの火葬墓。

III 類……山側にテラスを有し、その中央に墓壙を設けた火葬墓。

また、I・II類の火葬墓は、墓壙の形態により5タイプに細分が可能である。

a—素掘りの円形墓壙に火葬骨を炭・灰とともに埋葬したもの。

b—墓壙内に火葬骨を入れた陶製容器（骨蔵器）を有するもの。

c—墓壙内に火葬骨を入れた木製容器（木櫃）を有するもの。

d—石組を有するもの。

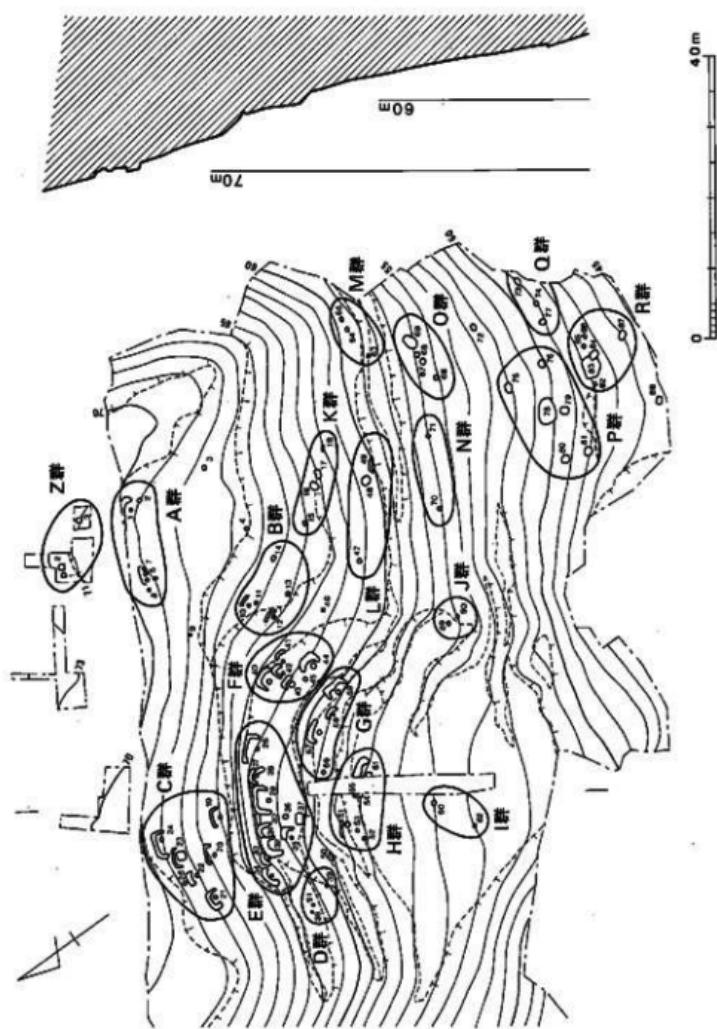
e—石組の中に火葬骨を入れた容器を有するもの。

火葬土壙は、山側に一辺3~4mのテラスを設け、そのテラスの中に方形の竪穴を掘り込み、焼場としている。何れも、壁面は加熱を強く受け赤変している。

B~J群は、下層建物群の階段状平坦面を利用して、盛土・整地を行って造墓しており、I類の火葬墓が主体を占める。

K~R群は、II類の火葬墓と火葬土壙で構成されるが、I類の火葬墓は僅かである。しかし、II類の火葬墓には、土砂流失等により溝を喪失したI類の火葬墓が含まれている可能性が高い。また、II類においては、d・eタイプは存在しない。

第5圖 火葬墓配置図 (1/800)



3. 火葬墓・火葬土壙

1) I類火葬墓

1号火葬墓（図版4-1, 第6図）

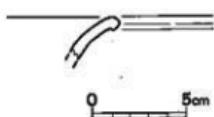
一次調査区の北東側で標高69.5mに位置し、A群に属する。I a類の火葬墓で、墓墳は径 $40 + \alpha$ cmを測る。削平が著しく、壁高は8cmを留めるにすぎない。

周溝は、現状での長さ510cm、幅80cmを測るが、東側コーナー部がL字形に深くなっていることから、周溝本来の形態はL字形を呈するか。

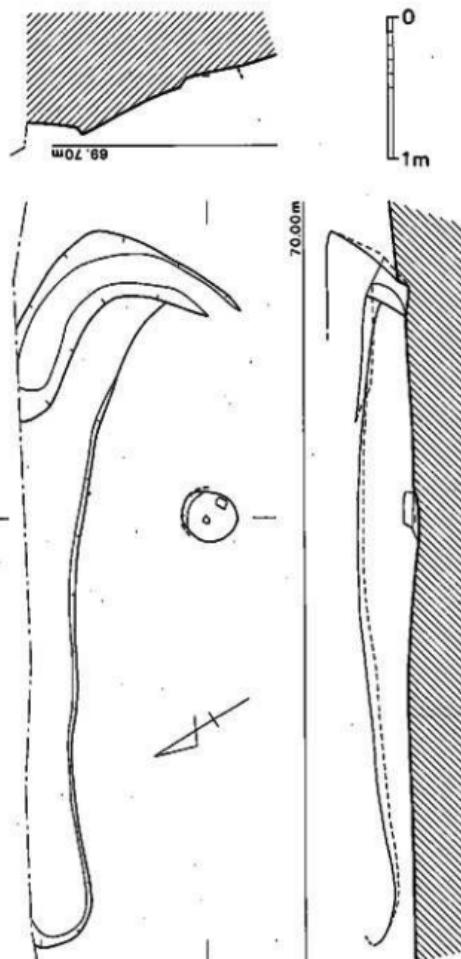
墓壙の埋土は炭・灰層で、少量の火葬骨と約20gの炭が出土した。

出土遺物（第7図）

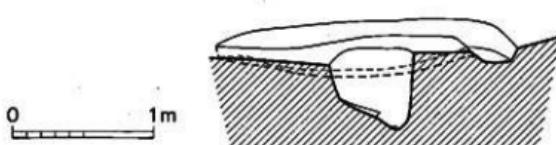
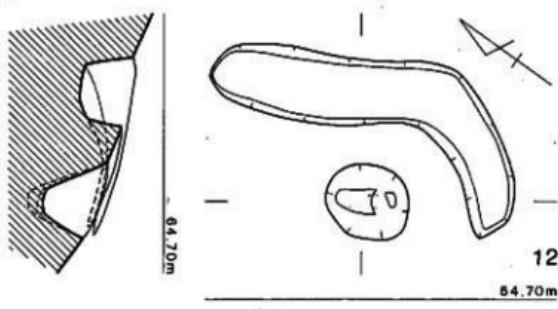
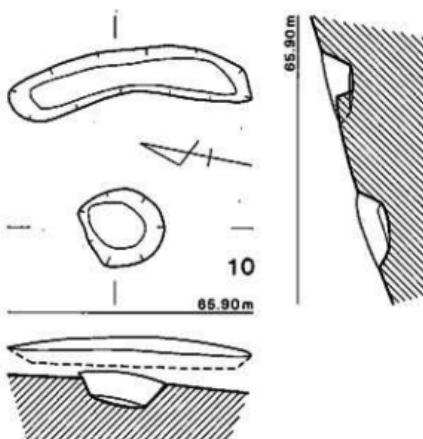
第7図は土師器甕の口縁部小片で、口唇部は丸く肥厚する。器面調整は、ヨコナデによる。墓壙内より出土した。他にも、胴部片が出土しており、或は骨蔵器であった可能性を残す。



第7図 1号火葬墓出土土器実測図(1/3)



第8図 1類火葬墓(1号)実測図①(1/40)



第8図 I類大墓墓（10・12号）実測図② (1/40)

10号火葬墓（図版7-3, 第8図）

調査区の東側で、標高65.5m付近に位置し、B群に属する。墓壇はa類で、円形を呈する。径57cm、深さ23cmを測る。墓壇内には、火葬骨（約100g）、炭（約370g）が多く詰まっていたのみで、土器の出土はなかった。

周溝は、墓壇の70cm東側を直線的に掘っただけで、長さ174cm、幅35cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色土で、須恵器環蓋小片が出土した。

出土遺物（第9図）

第9図は須恵器環蓋で、残高1.5cm、復原口径13.8cmを測る。口唇部内面には僅かな段を有し、外面には重ね焼き痕が見られる。調整は回転ナデで、焼成は堅緻である。



第9図 10号火葬墓出土土器実測図 (1/3)

12号火葬墓（図版8-3, 第8図）

10号火葬墓の3m南西側で、標高64.5m付近に位置し、B群に属する。墓壇はa類で、径58cmの円形を呈する。底面にテラスを有し、最深部までは56cmを測る。周溝までの距離は29cmで、他の1類火葬墓に比して短い。火葬骨・炭の出土は僅かであった。

周溝はL字形を呈し、一辺約152cm、中央部での幅47cm、深さ36cmを測る。埋土は黒褐色土で、土師器甕の觸部小片が出土したが、図示に耐えない。

19号火葬墓（図版12-1, 第11図）

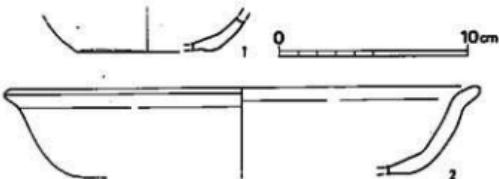
調査区中央の北側斜面の標高65.5m前後に位置し、1号住居跡を切る。墓壇はa類で、径58cm、深さ26cmで、周溝までの距離は70cmを測る。墓壇内には約860gもの炭が詰まっていたが、火葬骨は僅かであった。

周溝はコ字形を呈し、北辺長210cm、中央部での幅44cm、最深部での深さ42cmを測る。埋土は黒褐色土で、土師器が出土した。

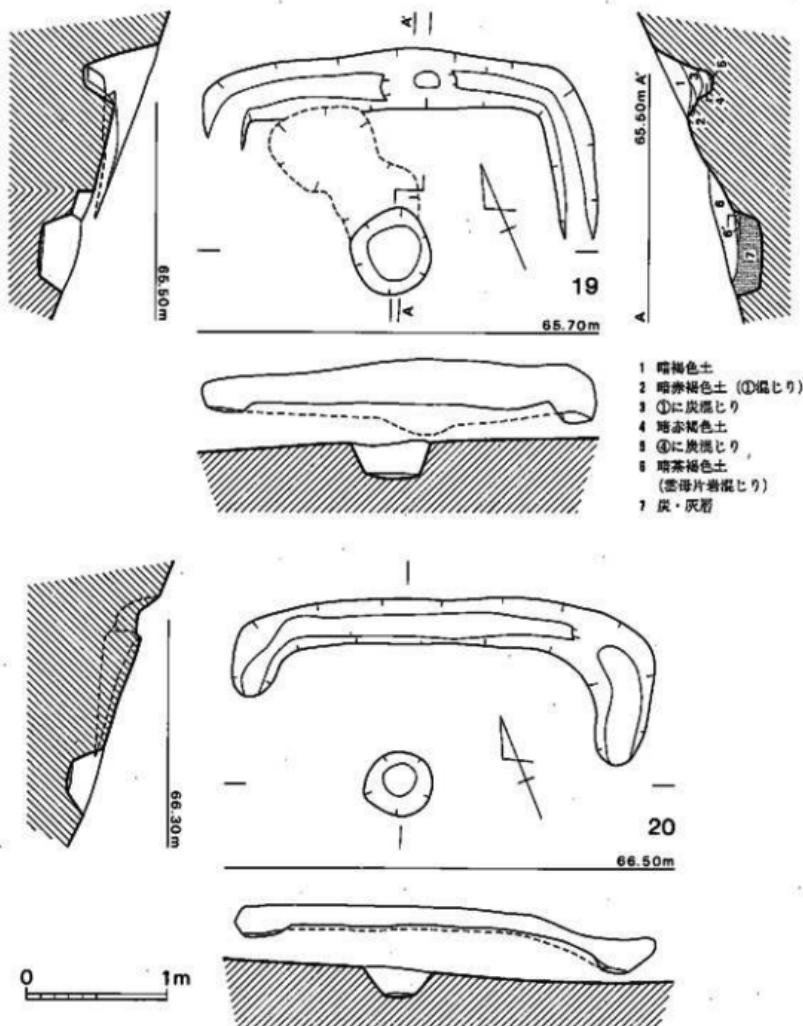
出土遺物（第10図）

1は土師器甕底部で、底径は7.4cmに復原した。周溝埋土下位より出土した。

2は器高に比し、口径が23.8cmと大きいことから盤とすべきか。口縁部は外方に小さく屈折する。



第10図 19号火葬墓出土土器実測図 (1/3)



第 11 図 I 燐火葬墓 (19・20号) 実測図③ (1/40)

20号火葬墓（図版11-2、第11図）

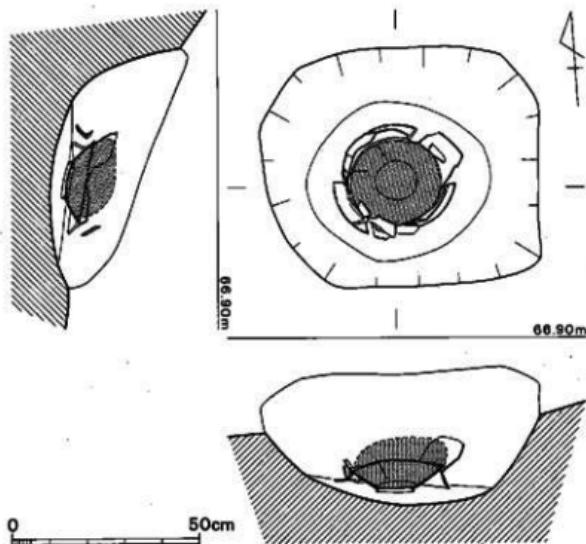
19号火葬墓の2.5m北西側で、標高66m前後に位置する。墓壇は墳丘の中央にあり、径50cm、深さ27cmの円形を呈する。墓壇の埋土上層は、砂礫混じりの赤褐色土で、それを除去したところ約405gの炭と50g程の火葬骨が出土した。

周溝は北辺長230cm、中央部での幅32cm、深さ15cmを測り、19号火葬墓より一回り大きい。墓境内より鉄器が出土しているが、鏽化が著しく実測不可能。

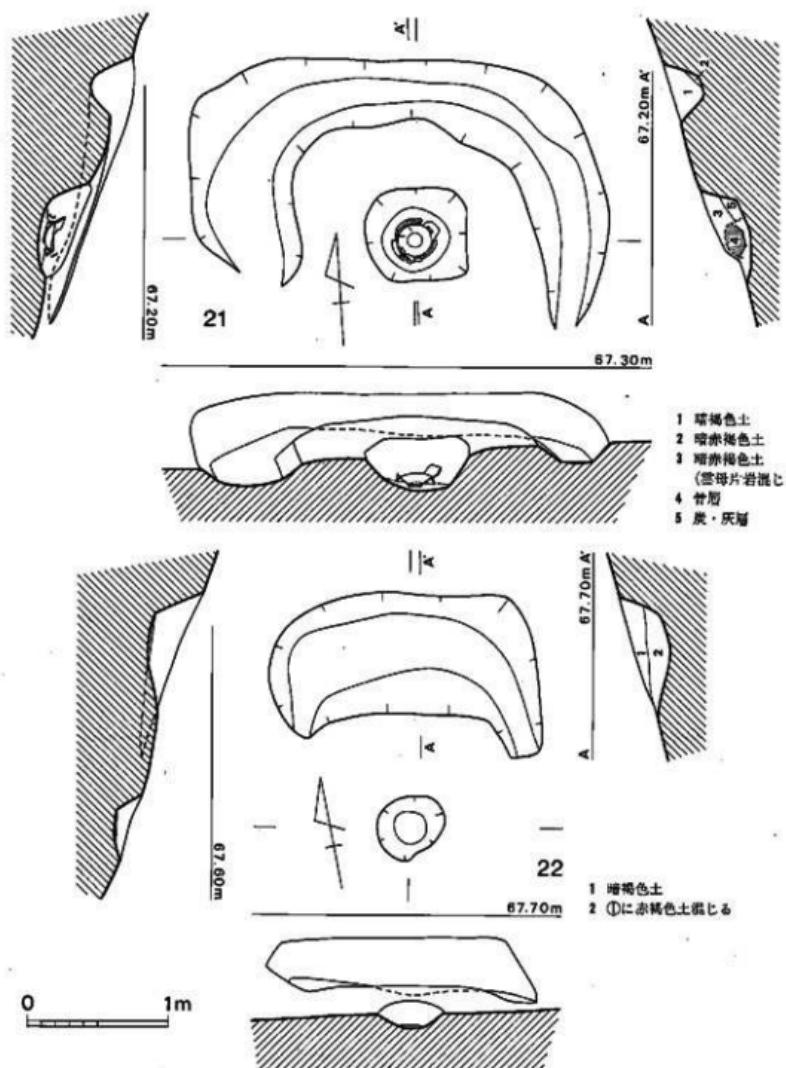
21号火葬墓（図版12-2・13-1-2、第12・13図）

20号火葬墓の3.6m北西側で、標高66.7m前後に位置する。19・20・21号火葬墓は、約6mの等間隔で並んでいる。盛土は流失していたが、墓壇は骨蔵器を有するb類で、墳丘の中央にある。長軸73cm、短軸63cmを測り、隅丸長方形を呈する。

周溝はコ字形を呈し、北辺長156cm、中央部での幅32cm、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色土であった。骨蔵器は、土師器高台付鉢を本体とし、土師器蓋を倒立させ、蓋として被せていた。



第12図 21号火葬墓骨蔵器出土状況実測図 (1/15)



第 13 図 I類火葬墓（21・22号）実測図④（1/40）

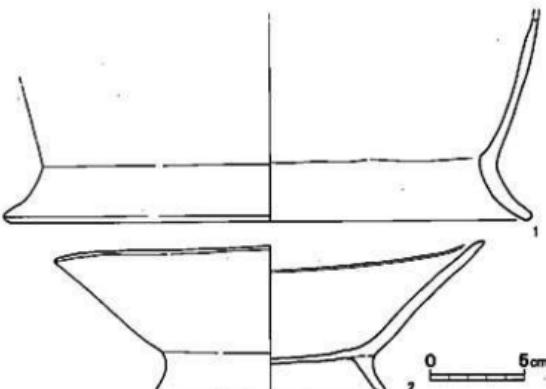
骨蔵器の周囲には、炭が詰まっていたが、本体中央には約705gもの火葬骨が入っていた。

出土遺物（図版78-2、第14図）

骨蔵器（1・2） 1は土師器で、口縁部は「く」字形に外反する。残高10.6cm、口径27.5cmを測る。器面の摩滅が著しいが、外面はハケ目調整であろう。内面はヘラケズリによる。

2は器高7.9cm、口径22.5cm、脚高2.0cm、脚径12.1cmを測る。器高に比して口径が大きいことから高台付の鉢とした。口縁部は大きく開き、やや高目の高台を付した底部に直線的に移行する。

口唇部内面には細かいヘラ沈線を巡らす。器面調整はナデで、胎土に赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、橙灰色を呈する。



第14図 21号火葬墓骨蔵器実測図（1/3）

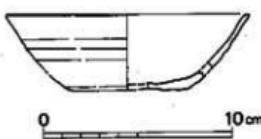
22号火葬墓（図版13-3、第13図）

20号火葬墓の2m北側に位置し、C群に属する。標高は67.5m前後である。墓壇はa類で、径47cm、深さは18cmと浅い。墓壇の埋土は炭・灰層で、火葬骨は僅かであった。また、墓壇内からの遺物の出土はない。

周溝はコ字形を呈していたと思われるが、先端は削平され短くなっている。北辺長116cm、中央での幅86cmを測り、墳丘に比して周溝幅が広い。深さは36cm遺存する。埋土上層は暗褐色土で、下層はそれに赤褐色土が混じる。

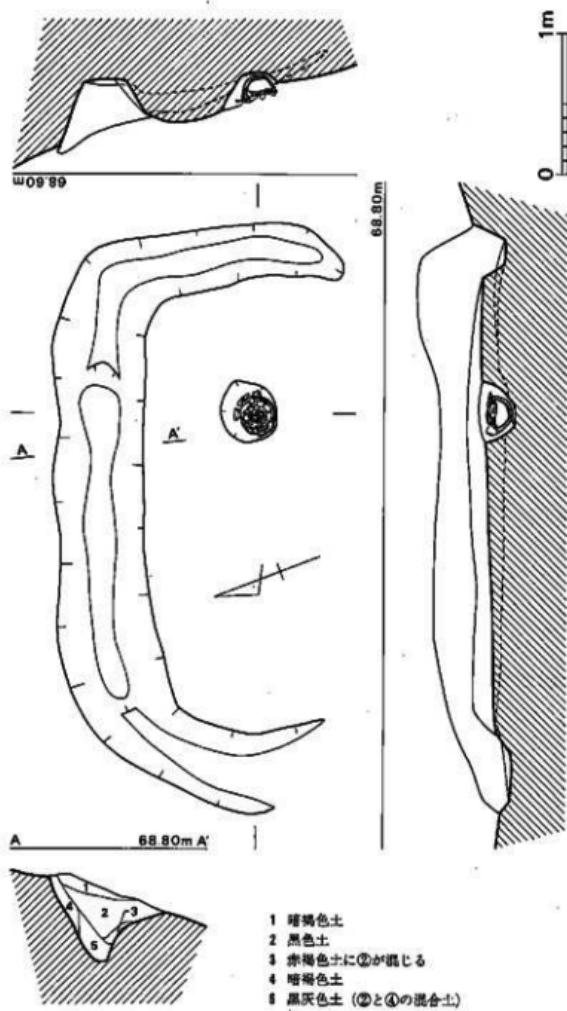
出土遺物（第15図）

第15図は周溝出土の土師器環で、口縁部と底部は接合しないが、同一個体として実測した。口径13.0cm、器高4.0cm、底径6.6cmに復原した。口縁部は削にシャープである。調整はナデで、胎土に赤褐色土を含む。



第15図 22号火葬墓出土土器実測図（1/3）

第16図 I期火葬場(24号)実測図⑤(1/40)



24号火葬墓（図版15、第16・17図）

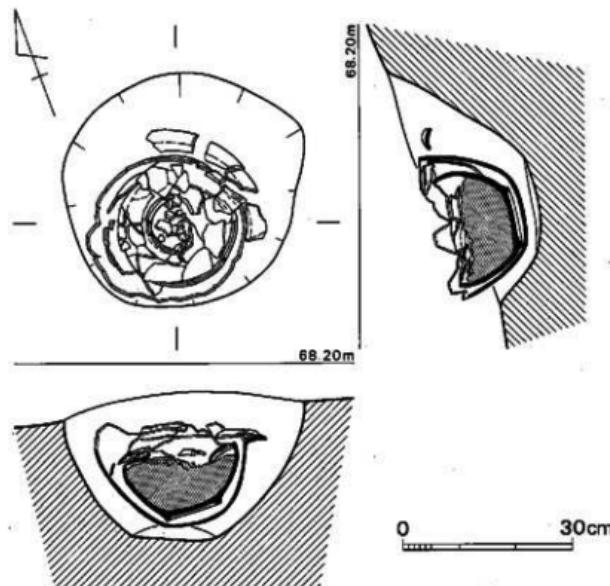
22号火葬墓の3.5m東側に位置する。標高は68m前後で、C群の最高所を占める。墓壇は骨蔵器を有するb類である。埴丘の東側に偏しているため、数基の墓壇が存在するのではと思われる周辺を掘り下げたが、他には検出していない。墓壇は径42cm、深さ27cmで、その中央に骨蔵器を埋葬する。周溝はコ字形を呈し、北辺長292cm、中央での幅64cm、深さ48cmを測る。

骨蔵器は、本体・蓋・外容器からなる。墓壇底に土師器甕を安置し、その中に火葬骨を入れた須恵器短頸壺を納め、須恵器皿を転用した蓋を被せている。壺の中には、約1,020gもの火葬骨を入れていた。また、容器と墓壇の間は、炭・灰で埋めていた。

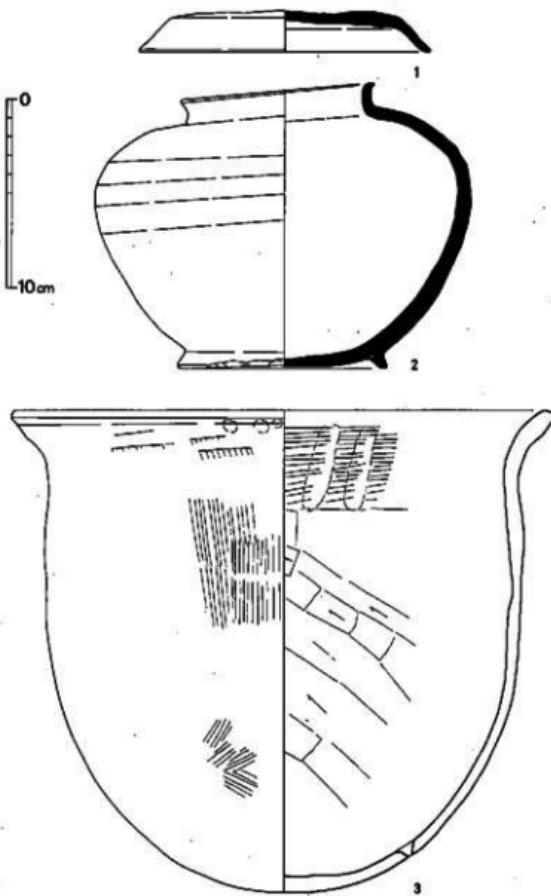
出土遺物（図版78-3、第18図）

骨蔵器（1~3） 1~3は骨蔵器で、1は蓋、2が本体、3は外容器である。

1は須恵器皿で、器高2.2cm、口径15.5cmを測る。浅目で、口唇部は小さく外反する。体部はナデ調整によるが、外底面は未調整のままである。焼成は軟質で、灰褐色を呈する。



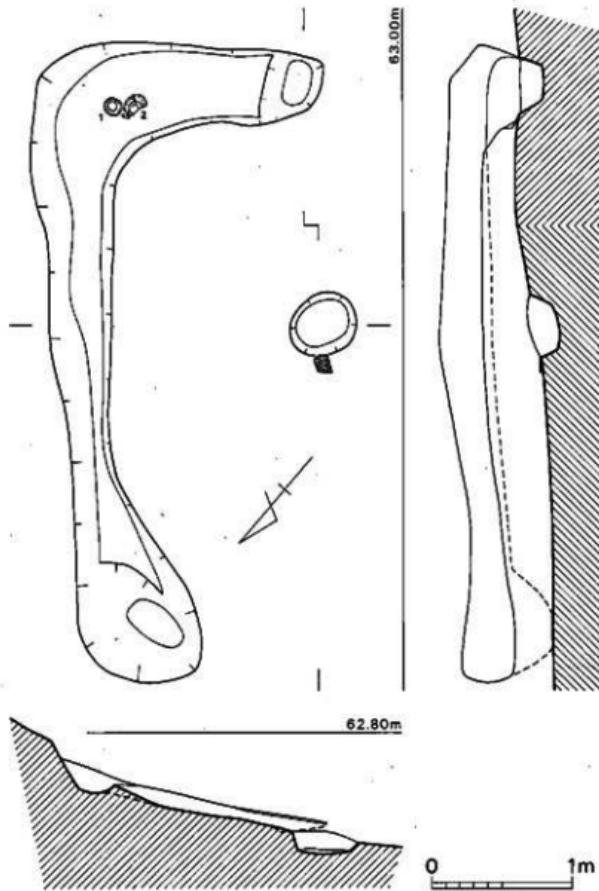
第17図 24号火葬墓骨蔵器出土状況実測図 (1/10)



第 18 図 24号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3)

2は須恵器短頸壺で、器高15.0cm、口径10.3cm、高台径11.0cmを測る。口縁部は外反気味に立上がり、口唇部上面には平坦面を有する。胴部のやや上位に最大径があり、20.0cmを測る。底部はへたばり気味で、低めの高台を貼付する。調整は口縁部ヨコナデ、外面はヘラケズリ→ナデで、内面はナデによる。焼成は堅緻で、暗灰色を呈する。

3は土師器甕で、器高25.4cm、口径28.2cmを測る。口縁部はさほど肥厚せず外反し、頸部から張りをみせずに丸底の底部へ移行する。調整は口縁部ヨコナデ、外面粗いハケ目（5条/cm）、内面ヘラケズリで、口縁部内面はハケ目・指頭圧痕による。焼成は良好で、色調は内外面とも暗褐色を呈する。また、底部には3mm程の円孔を外→内方向に穿つ。



第19図 1類火葬墓（26号）実測図⑥（1/40）

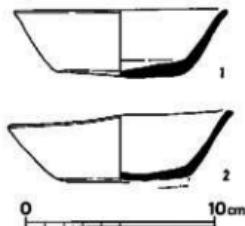
26号火葬墓（図版17、第19図）

E群の東端部に位置し、2号竪穴を切る。墓壙はa類で、長軸50cm、短軸43cmを測る。埋土は暗褐色土で、火葬骨・炭の出土は僅かであった。また、墓壙東側の須恵器片は、当火葬墓には直接伴わない。周溝はコ字形と言うよりは、L字形に近い。北東側での長さ452cm、中央部での幅45cm、深さ36cmを測る。周溝の両先端部は、ピット状に深くなる。遺物は、周溝内より須恵器片が2点出土した。

出土遺物（図版79-2、第20図）

1は須恵器環で、器高3.5cm、口径11.3cm、底径6.9cmを測る。丸く納めた口唇部を若干外反させる。調整は摩滅が著しいがナデであろう。生焼け品で、色調は灰色を呈する。

2も須恵器環で、器高3.6cm、口径12.0cm、底径7.2cmで、法量的に1と大差はない。口唇部には部分的にヘラ切りがみられる。器面調整はナデによる。1同様生焼け品で、色調は灰色を呈する。



第20図 26号火葬墓出土
土器実測図(1/3)

27号火葬墓（図版18、第21図）

26・29号火葬墓の間に割り込むように位置し、28号火葬墓の周溝を切っている。墓壙はa類で、長円形を呈する。規模は長軸50cm、短軸45cmを測るが、深さは12cmと浅く、かなりの削平を受けたものと思われる。また墓壙の埋土は、火葬骨が大半を占め（約50g）、炭はほんの僅かであった。

周溝はL字形を呈し、岩盤に掘り込んでいる。北東辺長152cm、中央部での幅72cm、深さ55cmを測る。I類の火葬墓にあっては小規模である。墓壙・周溝内からの遺物の出土はなかった。

28号火葬墓（図版18、第21図）

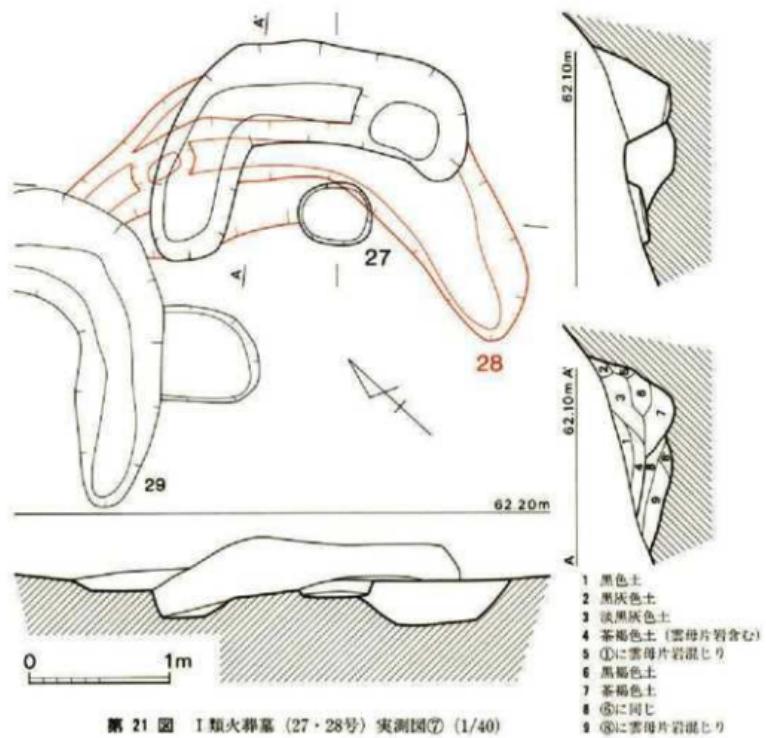
27号火葬墓に周溝の中央部を切られ、29号火葬墓に北端を切られる。当初、墓壙は29号火葬墓周溝に切られる東側のピットと考えていたが、周溝との位置関係が悪く、火葬骨も検出していないことから、墓壙は削平されたものと考えられる。

周溝は三日月形を呈し、残存長290cm、中央部幅73cm、深さ36cmを測る。周溝底は西側に傾斜している。埋土中から土器が出土した。

出土遺物（第22図）

1は須恵器環蓋の口縁部小片で、口唇部は鳥嘴状を呈し、小さく立つ。焼成は堅鐵で、色調は紫灰色を呈する。内面には环身の口唇部であろうか、融着している。

2は土器環の口縁部片で、口径は13.4cmに復原した。口唇部は丸く納めており、ナデ調整に

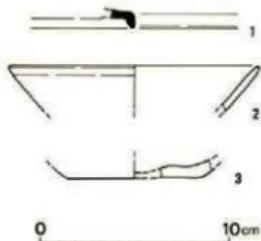


第 21 図 I類火葬墓 (27・28号) 実測図(7) (1/40)

よる。胎土に長石・石英の微砂粒を含む。焼成は良好で、内外面とも淡褐色を呈する。

3は土師器环の底部片で、7.4cmに復原した。胎土に赤褐色粒を多く含み、2とは別個体である。焼成はやや軟質で、黄橙色を呈する。

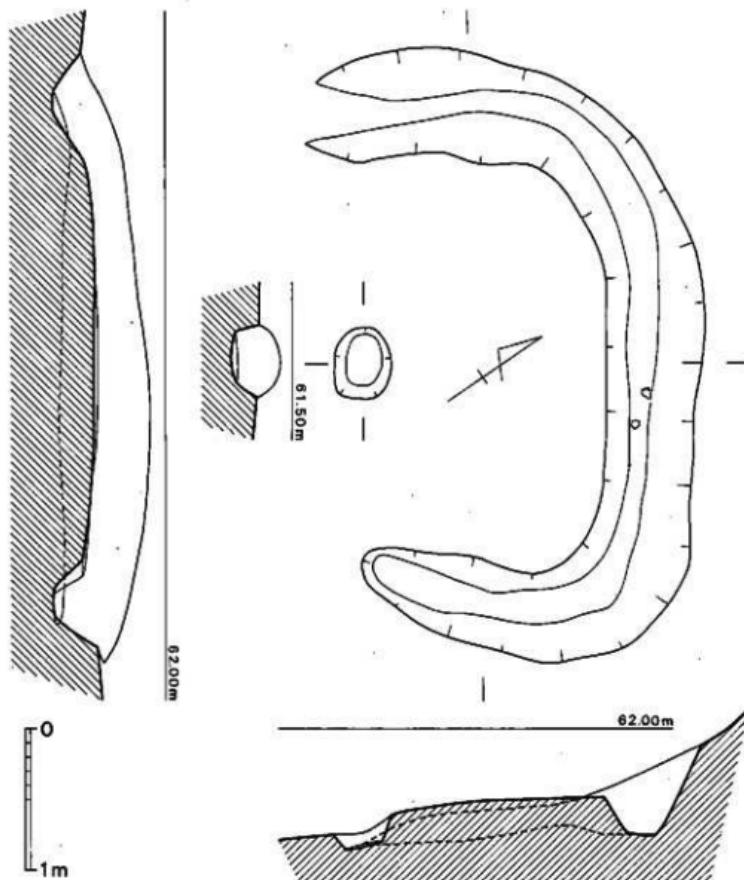
他に、7世紀後半代の口縁部内面にかえりを有する环蓋や高台が高い环身等が出土している。



第 22 図 28号火葬墓出土
土器実測図 (1/3)

29号火葬墓（図版19-1、第23図）

E群の中央で、28・30号火葬墓周溝を切って位置する。当火葬墓の中では、比較的大型の部類に属する。墓壇はa類で、長軸50cm、短軸40cm、深さ24cmを測る。墓壇埋土は黒褐色土で、



第23図 I類火葬墓（29号）実測図⑥（1/40）

火葬骨・炭の出土量は僅かであった。墓壙内より土器片が出土した。

周溝はコ字形を呈し、北辺長280cm、中央での幅70cm、深さ65cmを測る。埋土は黒色土で、土器・鉄製品が出土した。

出土遺物（図版95-1、第24・47図）

土器（1~4） 1・2は墓壙出土の須恵器、3・4は周溝出土の土師器である。

1は口縁部小片で、内傾する。鉄鉢形になるか。焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈する。2は皿で、口径19.8cmに復原したが、小破片であり自信はない。口唇部は丸く納める。焼成は良好で、内外面とも青灰色を呈する。

3・4は壺で、3は底部を欠き、4は口縁部を欠く。3は口径15.8cmに復原した。ともに調整はナデで、胎土に1~2mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。また、4は31号火葬墓周溝出土土器と接合関係にある。

鉄器（1） 1は頭部を曲げて環状にした鉄器で、先端はマイナスドライバー状を呈する。長さ5.4cm、先端部幅0.6cm、頭部径1.6cmを測る。周溝の出土である。刺金か。

30号火葬墓（図版19-2、第25図）

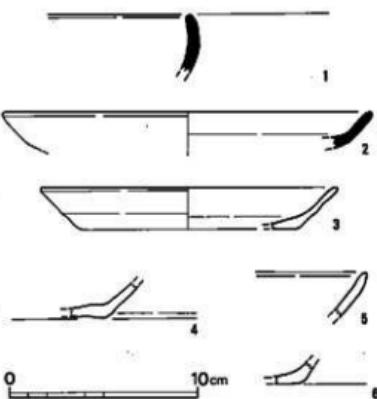
29・31号火葬墓周溝に切られて位置する。墓壙は削平され遺存せず、周溝の一部を残すのみである。周溝は残存長150cm、中央部での幅88cm、深さ14cmを測る。周溝内からの遺物の出土はなかった。

31号火葬墓（図版20-1、第25図）

32号火葬墓に西側周溝を切られ、30号火葬墓を切っている。当火葬墓も周溝を留めるのみで墓壙は遺存しない。周溝はL字形に残存するが、本来はコ字形を呈していたものと考えられる。中央部での幅53cm、深さ23cmを測る。埋土中より土器が出土した。

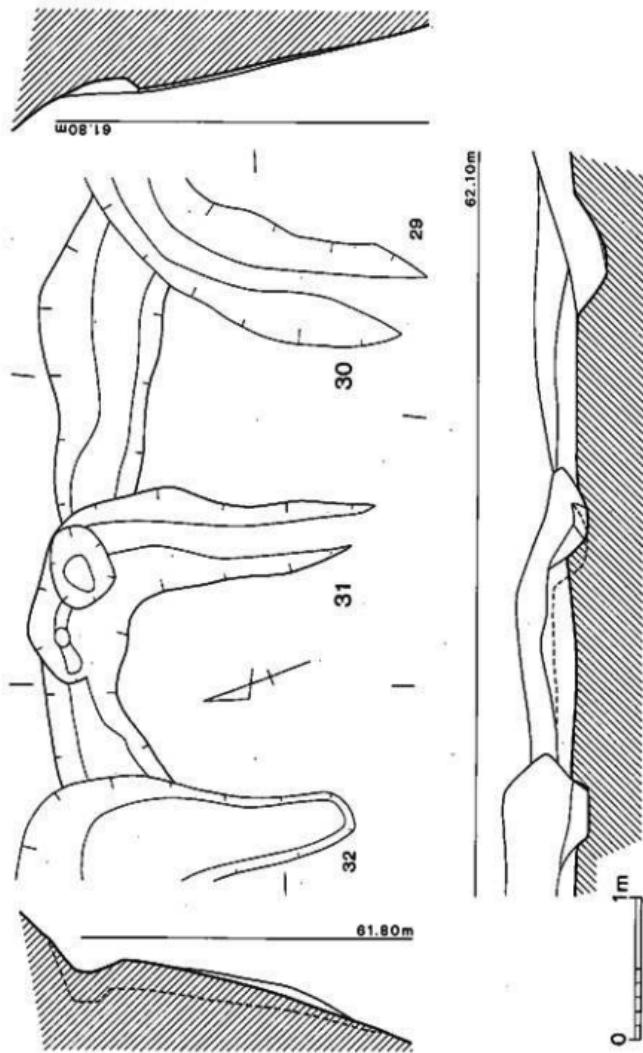
出土遺物（第24図）

5・6は周溝内出土の土師器壺小片である。5は口縁部、6は底部破片で、接合しないものの同一個体と思われる。調整はナデで、胎土に長石・石英・雲母粒を含む。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。



第24図 29・31号火葬墓出土土器実測図（1/3）

第25圖 I類火葬墓(30・31号)実測図⑤ (1/40)



32号火葬墓（第27図）

E群の西側平坦部に位置し、31号火葬墓周溝を切っている。当火葬墓も墓壙が削平され、周溝を留めるのみである。周溝はコ字形を呈し、北辺長130cm、中央部での幅85cm、深さ37cmを測る。周溝の埋土は、黒色土であった。また、西側先端部が広くなっており、土器が出土した。

出土遺物（第26図）

1は西側周溝内出土の土師器環底部片である。底径は8.4cmに復原した。器面が磨滅しているが、調整はナデであろう。胎土に石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、肌色を呈する。

33号火葬墓（図版20-2、第27図）

32号火葬墓のすぐ北側の斜面部に位置する。墓壙はa類で、径36cm、深さ21cmを測る。埋土は黒色土で、火葬骨・炭の出土量は僅かであった。他に、土師器環が出土した。

周溝はL字形を呈し、中央部にテラスを有する。規模は、北辺長146cm、北側での幅62cm、深さ43cmを測る。埋土は黒色土で、東側周溝内からは雲母片岩が2個出土したが、底面から30cm程浮いており、上方より流れ込んだものであろう。

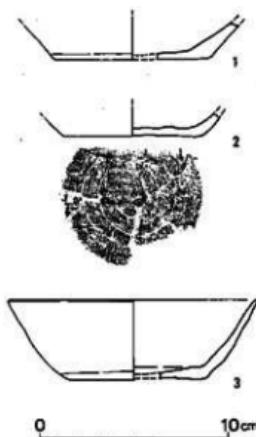
出土遺物（図版78-4、第26図）

2は周溝内出土の土師器環底部で、底径は7.2cmを測る。内面ナデ、外底面ヘラ切りによる。焼成は良好で、内外面とも橙褐色を呈する。3は墓壙内出土の土師器環で、器高4.2cm、口径1.1cm、底径7.1cmを測る。口唇部は丸く納める。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも褐色を呈する。

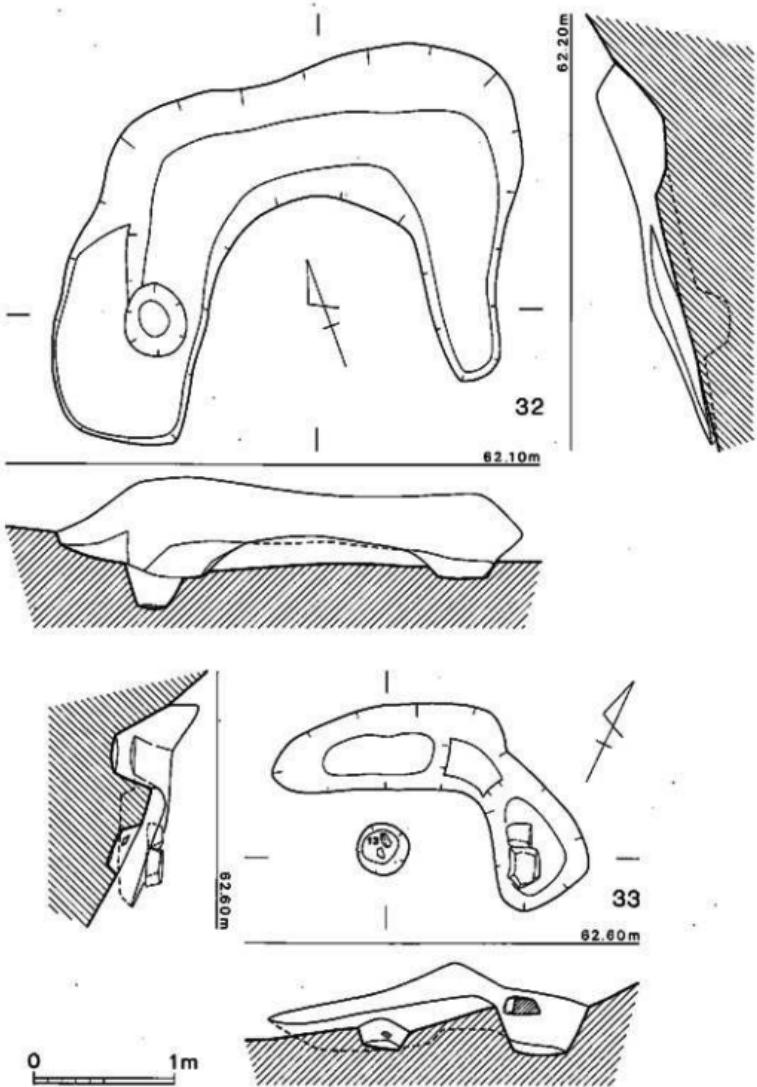
34号火葬墓（図版21、第28図）

33号火葬墓の1m西側で、E群の西端斜面部に位置する。墓壙はa類で、長軸40cm、短軸32cm、深さ32cmを測る。墓壙底に火葬骨のみを埋葬し、赤褐色土で埋めていた。炭はみられない。これは、27号・71号にも共通する葬法である。また、墓壙のすぐ西側にかえりを有する須恵器壺蓋が出土したが、当火葬墓には直接伴わない。

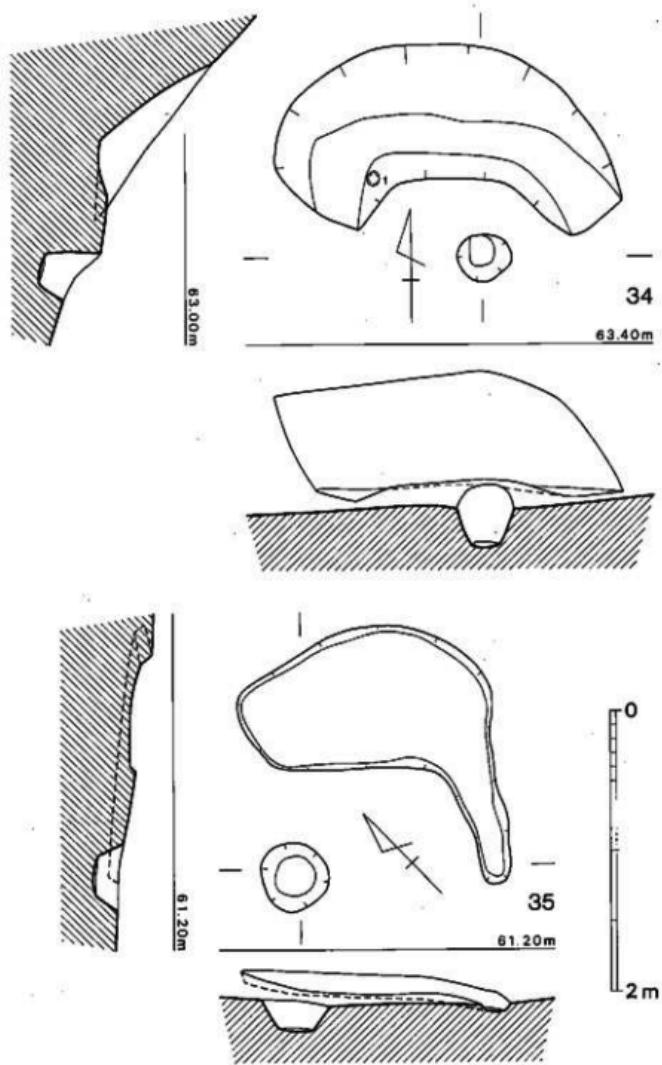
周溝はコ字形を呈するが、先端部はあまり伸びない。北辺長92cm、中央部幅95cm、深さ12cmを測る。埋土は黒色土で、周溝内西側から土師器環が出土した。



第26図 32・33号火葬墓出土
土器実測図(1/3)



第27図 I類火葬墓(32・33号)実測図⑩(1/40)



第 28 圖 I 類火葬墓 (34・35号) 實測圖① (1/40)

出土遺物（図版78-5、第29図）

1は周溝埋土下位出土の土師器坏で、器高3.5cm、口径12.4cm、底径6.6cmを測る。口唇部は丸く、底部から直線的に開く。調整はナデで、底部はヘラ切り離し。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも橙褐色を呈する。

35号火葬墓（図版22-1、第28図）

E群の平坦部で、32号火葬墓の1m南側に位置する。墓壙はa類で、径50cm、深さ26cmを測る。埋土は黒色土を主体とし、火葬骨・炭の出土は僅かであった。墓壙内からの遺物の出土はなかった。周溝はL字形を呈するが、東側は先細りである。北東幅100cm、深さは10cmと浅い。埋土は黒色土で、土師器坏が出土した。

出土遺物（第29図）

2・3は周溝内出土の土師器坏で、2は口縁部、3は底部破片である。2は1/4程造存し、口径は6.0cmに復原した。口縁部はナデ調整による。胎土に微砂粒を含むものの精良である。焼成はやや軟質で黄褐色を呈する。3は36号火葬墓周溝状造構出土品と接合関係にある。胎土に白色粒を含むものの精良で、色調は橙色を呈する。

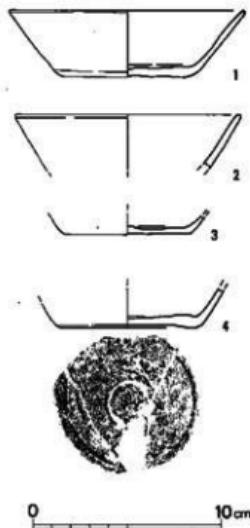
36号火葬墓（図版22-2、第30図）

E群の平坦部で、29~31号火葬墓の前面に位置する。墓壙は隅丸方形を呈し、南北軸66cm、東西軸62cm、深さ45cmを測る。埋土上位は、火葬骨・炭を含む暗褐色土であるが、下位は墓壙中央に火葬骨が集中しており(350g)、袋等に入れていたのであろうか。その周囲は大きめの炭と灰で埋めていた。墓壙内からは、土師器坏口縁部が出土しているが、小破片のため図示できない。

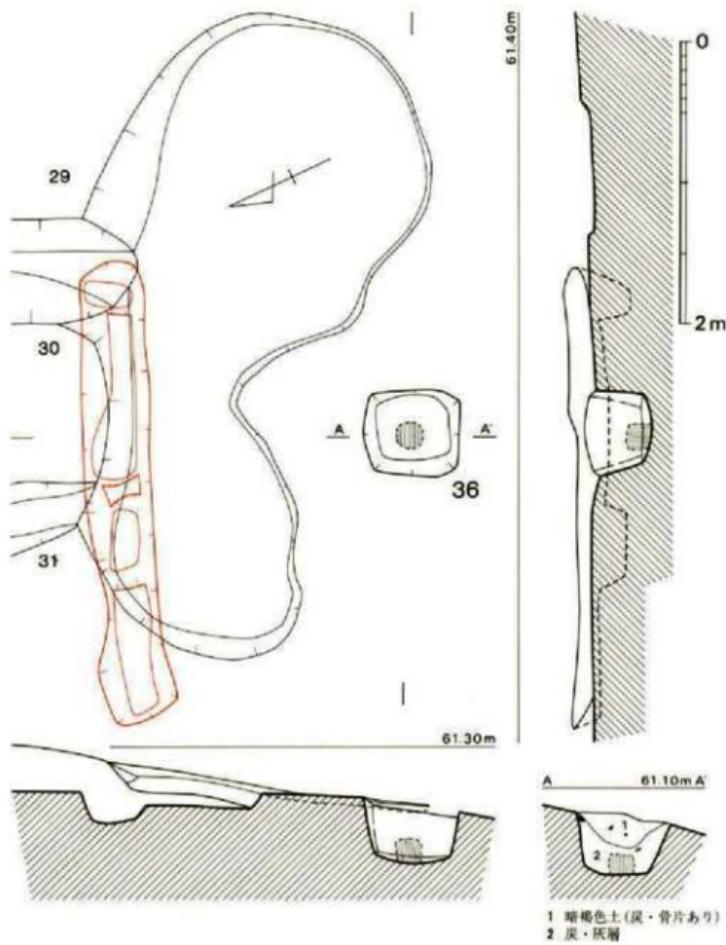
当初、29~31号火葬墓の前面に広がる黒色土を周溝としていたが、30・31号火葬墓の下層から溝を検出し、これを36号の周溝と考えたい。周溝は直線的で、長さ326cm、中央での幅46cm、深さ21cmを測る。

出土遺物（第29図）

4は上層の周溝状造構出土の土師器坏底部である。底径は7.2cmを測る。体部はナデで、外底面はヘラ切り離しによる。微砂粒を含むものの精良で、内外面とも褐色を呈する。

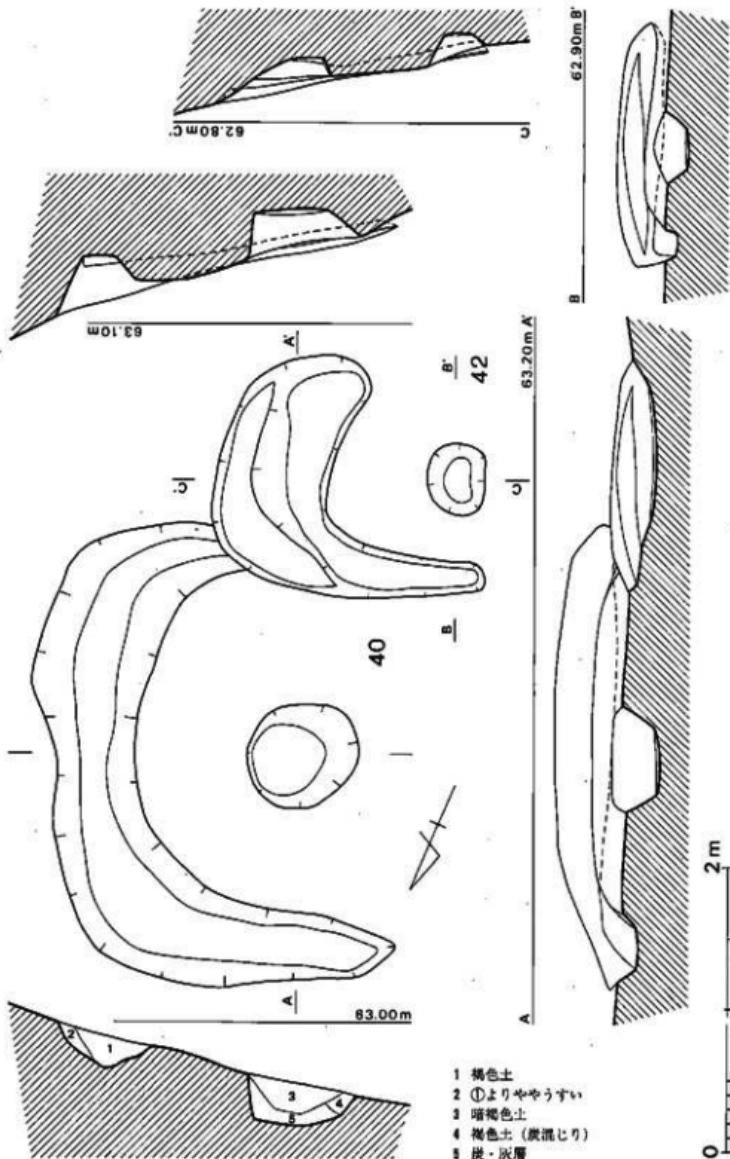


第29図 34~36号火葬墓出土
土器実測図 (1/3)



第38図 I類火葬墓(36号)実測図(1/40)

第31図 1類火葬場(40・42号)実測図③ (1/40)



40号火葬墓（図版24-1、第31図）

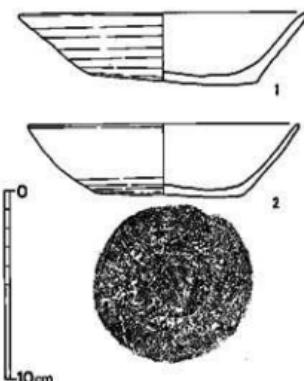
F群の北端平坦部に位置し、3号竪穴を切り、42号火葬墓に南側周溝の先端部を切られる。墓壙はa類で、墳丘の中央に位置する。径78cm、深さ36cmを測るやや大きめの墓壙である。埋土内からは少量の火葬骨と約1,140gの炭が出土した。

周溝はコ字形を呈し、東辺長220cm、幅82cm、深さ26cmを測る。埋土は黒色土で、南東コーナー一部から土師器環が2個出土した。

出土遺物（図版80-3、第32図）

1・2は周溝内出土の土師器環である。1は器高3.8cm、復原口径15.4cm、底径9.0cmを測る。底部から直線的に開き、口唇部は丸く納める。調整はナデによる。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で内外面とも肌色を呈する。

2は器高3.9cm、口径14.5cm、底径7.9cmを測る。体部は内湾気味で、口唇部は丸く納める。調整はナデで、底部はヘラ切り離しによる。胎土には長石・石英を含み、赤褐色粒もみられる。焼成は良好で、褐色を呈する。



第32図 40号火葬墓出土土器実測図(1/3)

41号火葬墓（図版24-2、第33図）

40号火葬墓の1m南側に位置する。墓壙はa類で、径42cm、深さ17cmを測る。埋土は暗褐色土で、火葬骨・炭の出土量は少なかった。周溝は斜面側を弓状に掘った程度で、コ字形とまではいかない。最大長190cm、幅43cm、深さ22cmを測る。

墓壙内より須恵器環蓋が出土しているが、当火葬墓の時期を示すものではない。

42号火葬墓（図版25-1、第31図）

40号火葬墓の周溝を切って、40・41号の間に位置する。墓壙はa類で、長軸52cm、短軸41cm、深さ20cmを測る長円形を呈する。埋土は黒褐色土で、火葬骨・炭は僅かであった。

周溝はL字形を呈し、墓壙の北側に設けている。東辺長102cm、東側幅80cm、北側幅22cm、深さ34cmを測る。また、東側にはテラスを有する。埋土は黒色土で、須恵器環蓋・土師器環が出土しているが、下層遺構に伴うものであろう。

43号火葬墓(図版25-2, 第33図)

42号火葬墓のすぐ西側に位置する。墓壙は橢円形を呈するa類で、長軸81cm、短軸66cm、深さ25cmを測る。

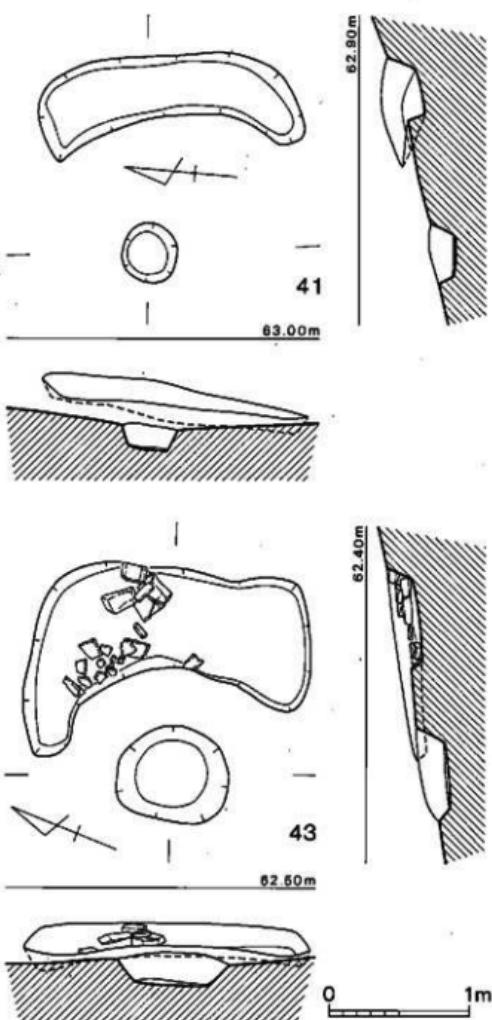
埋土上層は褐色土で、下層から約50gの火葬骨と炭約800gを検出した。また、墓壙内からは、鉄釘が1本出土している。

周溝は墓壙の北側に設けており、L字状を呈する。東辺長180cm、幅72cm、深さ22cmを測る。周溝の埋土は黒色土で、5~20cm大の雲母片岩角礫を多く含んでいた。埋土中からは須恵器・土師器が出土しているが、当火葬墓には直接伴わない。

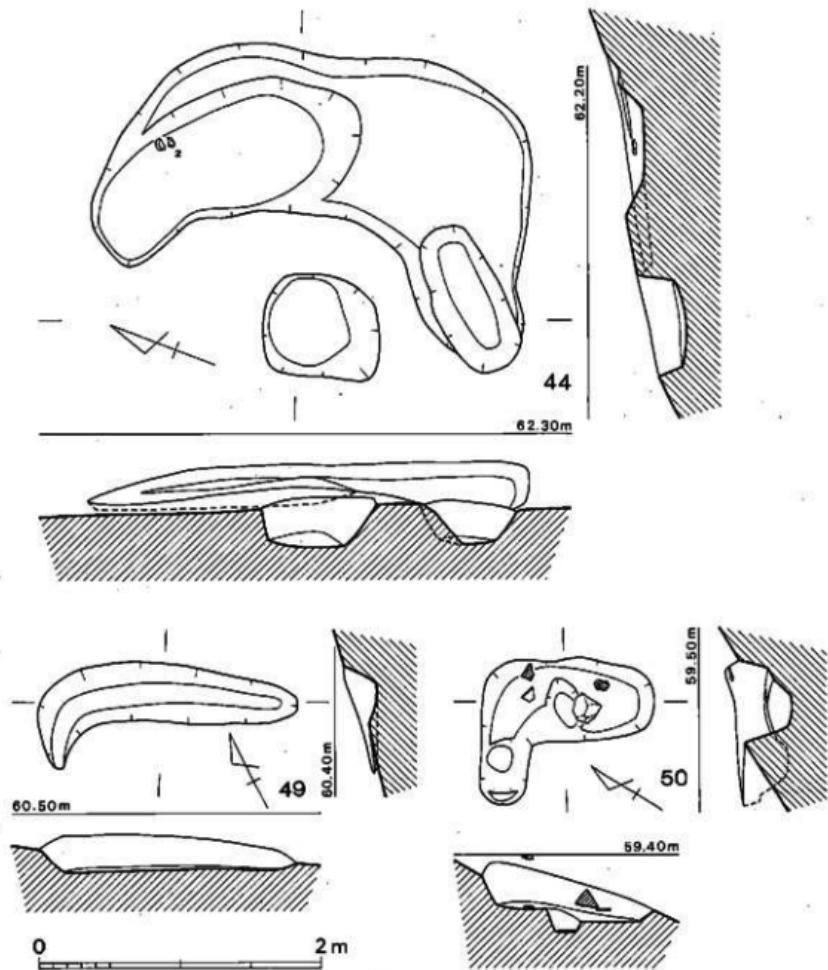
また、墓壙の大きさに反して墓壙と周溝間の距離が40cmと短いのは、何等かの規制によるものか。

出土遺物(図版94-1, 第47図)

1・2は墓壙埋土中出土の鉄釘で、1は先端部片、2は頭部片である。折損しているため同一個体か不明。2の頭部幅は0.6cmを測る。錆化が著しいが、木質がみられる。



第33図 I類火葬墓(41・43号)実測図(1/40)



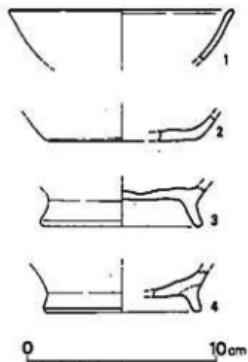
第 34 図 I 種火葬墓 (44・49・50号) 断測図⑬ (1/40)

44号火葬墓（図版26-1, 第34図）

43号火葬墓の1.5m南側に位置する。墓壇は隅丸方形状のa類で、東西軸82cm、南北軸73cm、深さ34cmを測る。墓壇埋土より炭が約420g出土したが、火葬骨は僅かであった。周溝はコ字形を呈し、南北長308cm、東西幅118cm、深さ26cmを測る。埋土は黒色土で、土師器が出土した。また、南側周溝内には、土壙墓が存在する。

出土遺物（第35図）

1・2は墓壇内出土の土師器環で、接合しないが同一個体であろう。口径12.0cmに復原した。3・4は底部破片で、3の高台径は8.6cm、4は8.4cmでともに楕になろう。3は周溝内、4は周溝西側の出土である。



第35図 44号火葬墓出土
土器実測図 (1/3)

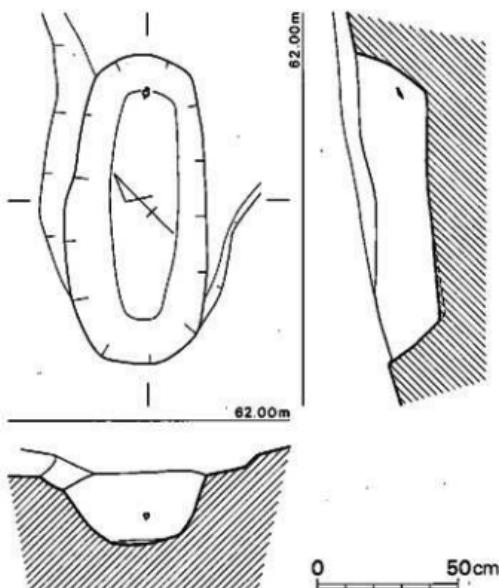
周溝内土壙墓（図版26-2, 第36図）

44号火葬墓の周溝南側の先端部で検出した。隅丸長方形を呈し、上面での長さ111cm、幅50cm、深さ26cmを測る。埋土は周溝と同じ黒色土。

周溝内にきちんと納まっていることから追葬と考えられるが、土壙墓からの土器の出土はなく、火葬墓との時間差は明確にしがたい。床面より10cm程浮いた状態で鉄器が出土した。

出土遺物（図版95-1, 第47図）

1は残存長5.1cm、幅0.9cmを測る。断面が偏平であるから刀子の茎部分になるか。木質が平行してみられる。



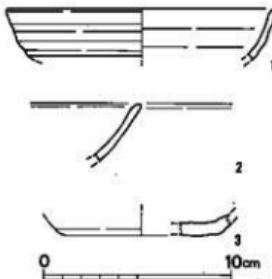
第36図 44号火葬墓周溝内土壙墓実測図 (1/20)

49号火葬墓（図版28-1、第34図）

調査区東側の標高60.3mの斜面部に位置し、L群に属する。当火葬墓は墓壙を喪失し、周溝のみ留める。周溝はJ字形を呈し、長さ183cm、幅40cm、深さ21cmを測る。埋土は他の火葬墓同様黒褐色土で、土師器が出土した。

出土遺物（第37図）

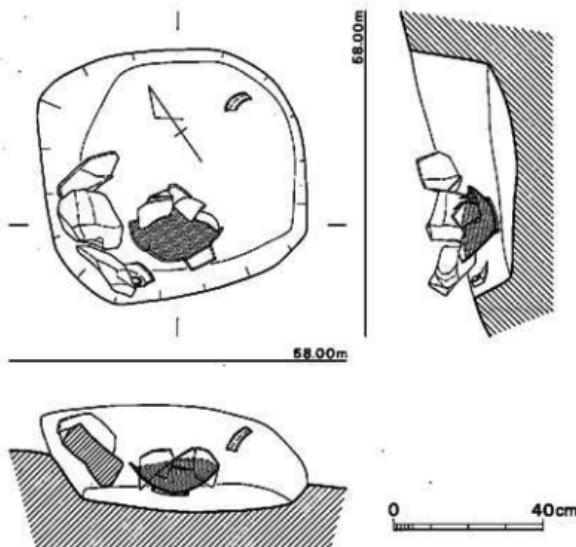
1・2は口縁部破片で、1は14.4cmに復原した。調整はともにナデによる。3は底部小片で、底径は8.2cmに復原した。何れも胎土に赤褐色粒を多く含む。



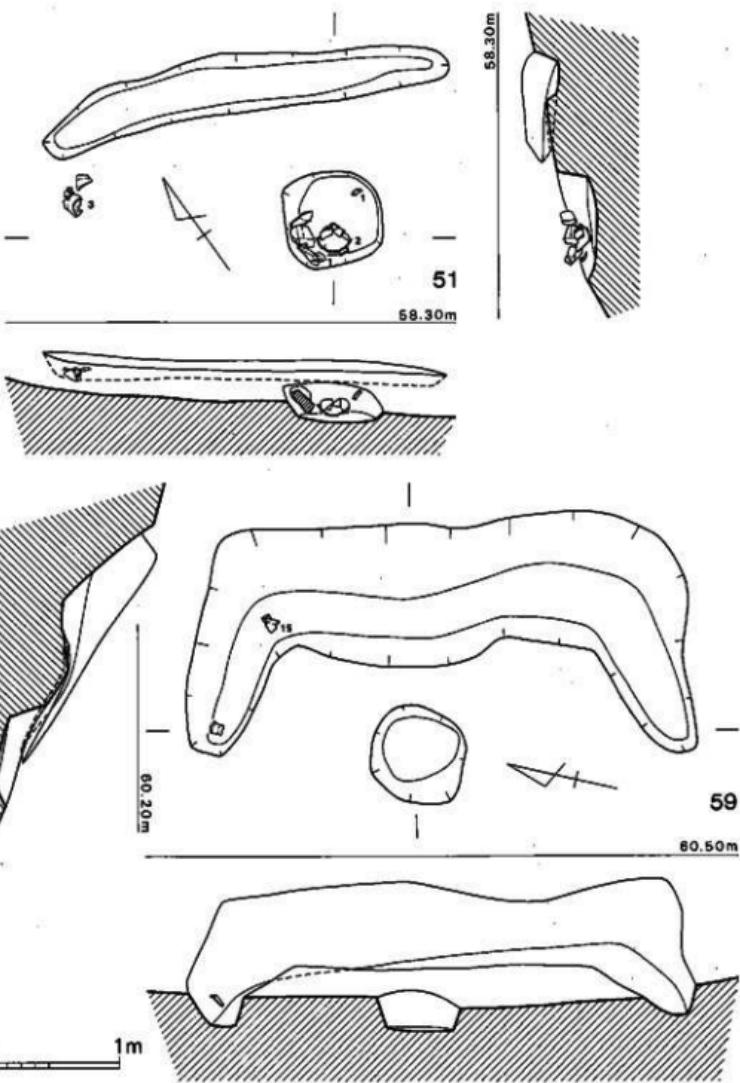
第37図 49号火葬墓出土土器実測図（1/3）

50号火葬墓（図版28-2、第34図）

E群火葬墓群の3m西側に位置する。当火葬墓も周溝のみで、墓壙を喪失する。周溝はL字形を呈し、南北長120cm、幅58cm、深さ40cmを測る。浮いた状態で、土器・角礫が出土した。



第38図 51号火葬墓骨蔵器出土状況実測図（1/15）



第38図 I類火葬墓(51・59号)実測図(1/40)

51号火葬墓（図版29、第38・39図）

50号火葬墓の2.8m南側の標高58m前後に位置し、H群に属する。墓壙は石組の中に骨蔵器を納めたe類で、隅丸方形を呈する。規模は東西軸71cm、南北軸65cm、深さ29cmを測る。重機による表土剥ぎの際に、誤って石組・骨蔵器を壊してしまい、西側に石組3個を残すのみとなった。本来、石組は骨蔵器の四周を囲んでいたものと考えられる。

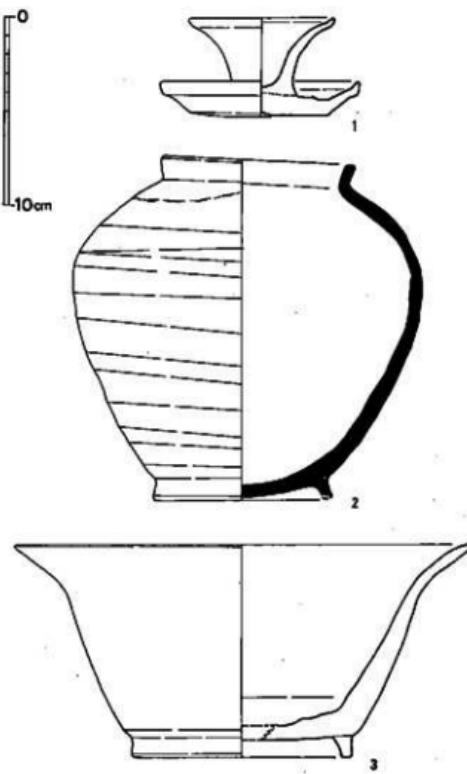
周溝は直線的で、長さ294cm、最大幅44cm、深さ16cmを測る。墓壙から1.4m離れて鉢が出土した。骨蔵器は灯明皿の蓋と須恵器壺の本体からなり、約680gの火葬骨が納めてあった。

出土遺物（図版81-2、第40図）

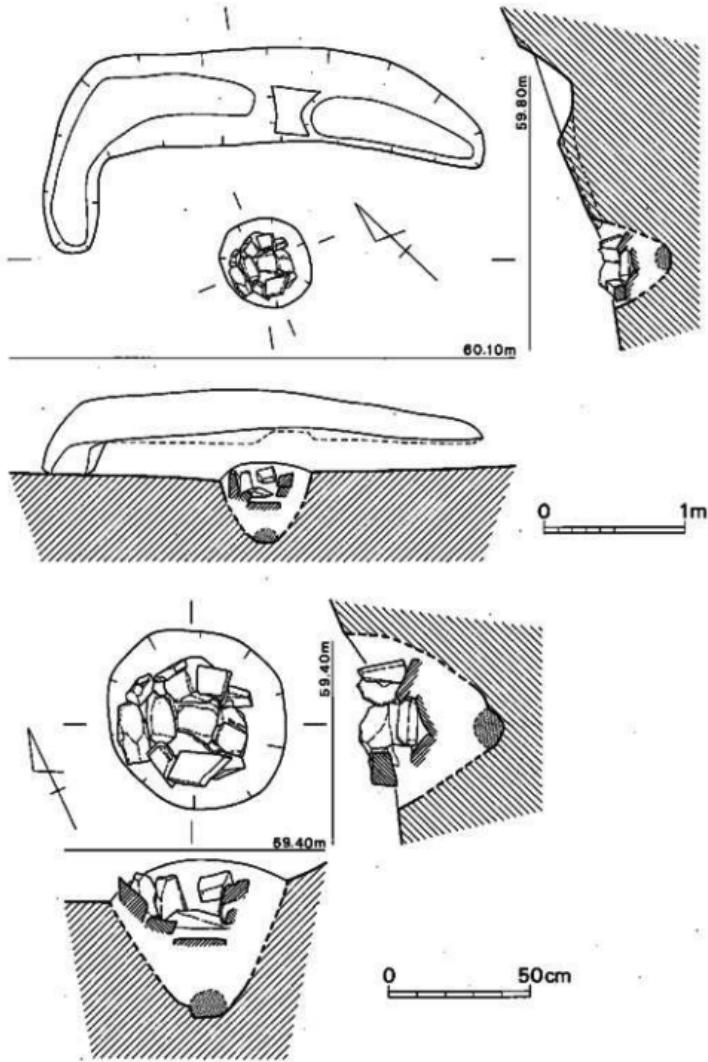
骨蔵器（1～3）1は蓋に転用した土師器灯明皿で、器高5.2cm、油皿部径7.8cm、受け皿部径10.6cmを測る。油皿部は大きく外反し、端部は小さく立つ。調整はナデで、外底面はヘラ切り離し未調整。焼成は良好で、外面とも橙褐色を呈する。使用痕はみられない。

2は須恵器短頸壺で、器高18.0cm、口径10.2cm、高台径9.5cmを測る。高台は口径より小さく低めで、底部はへたばり気味である。調整は口縁部ヨコナデ、外回転ヘラケズリ、内面ナデによる。焼成は堅緻で色調は灰青色を呈する。

3は土師器高台付き鉢で、器高11.2cm、復原口径24.2cm、復原高台径11.6cmを測る。口縁部は一旦屈曲してから開き、口唇部はシャープな感がある。高台はしっかりとしており、貼付箇所を強くナデ付ける。焼成は軟質で、暗橙色を呈する。



第40図 51号火葬墓骨蔵器実測図（1/3）



第41図 I類火薬基(57号)実測図⑦ (1/20・1/40)

57号火葬墓（図版32、第41図）

当火葬墓は、切取り調査を行ったもので、完掘していない。標高59.5m前後の平坦面に位置し、G群に属する。墓壙は石組を有するd類で、墳丘の中央に埋葬される。平面形は円形を呈し、径64cm、深さ45cmを測る。石組は石室状で、中央の石は敷石の様に横になっているが、周囲の石は立てていた。石組の中から火葬骨が検出されないので疑問に思っていたところ、切取り方が浅かったため石組の下から280gの火葬骨・炭及び玉砂利が出土し、墓壙底が判明したという次第である。

周溝はL字形を呈し、北辺長266cm、中央部幅66cm、深さ40cmを測る。埋土は黒色土で、周溝内から須恵器・土師器が出土しているが、当火葬墓に伴うものではない。

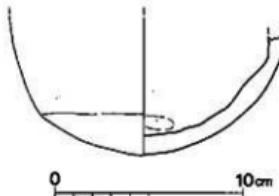
58号火葬墓（図版33、第44図）

57号火葬墓の1m南側に位置する。骨蔵器を有するb類で、墳丘のやや東側に偏している。墓壙は径27cmの円形を呈し、その中央に骨蔵器を埋葬する。周溝はL字形で、南北長193cm、中央部での幅48cm、深さは削平されて8cm程度残存する。埋土は黒色土であった。

骨蔵器は底部のみで、墓壙底から5cm程度浮いた状態で出土した。火葬骨は60g程度あったが、炭は僅かであった。

出土遺物（図版81-4、第42図）

墓壙出土の骨蔵器である。丸底の土師器底部片で、小型の壺になるのであろうか。残高7.2cmを測る。外面はナデで、内面にはエビオサエ痕がみられる。胎土に長石・石英を多く含む。焼成は良好で、内面灰褐色、外面黄褐色を呈する。



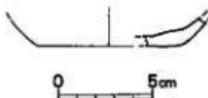
第42図 58号火葬墓骨蔵器実測図
(1/3)

59号火葬墓（図版34-1、第39図）

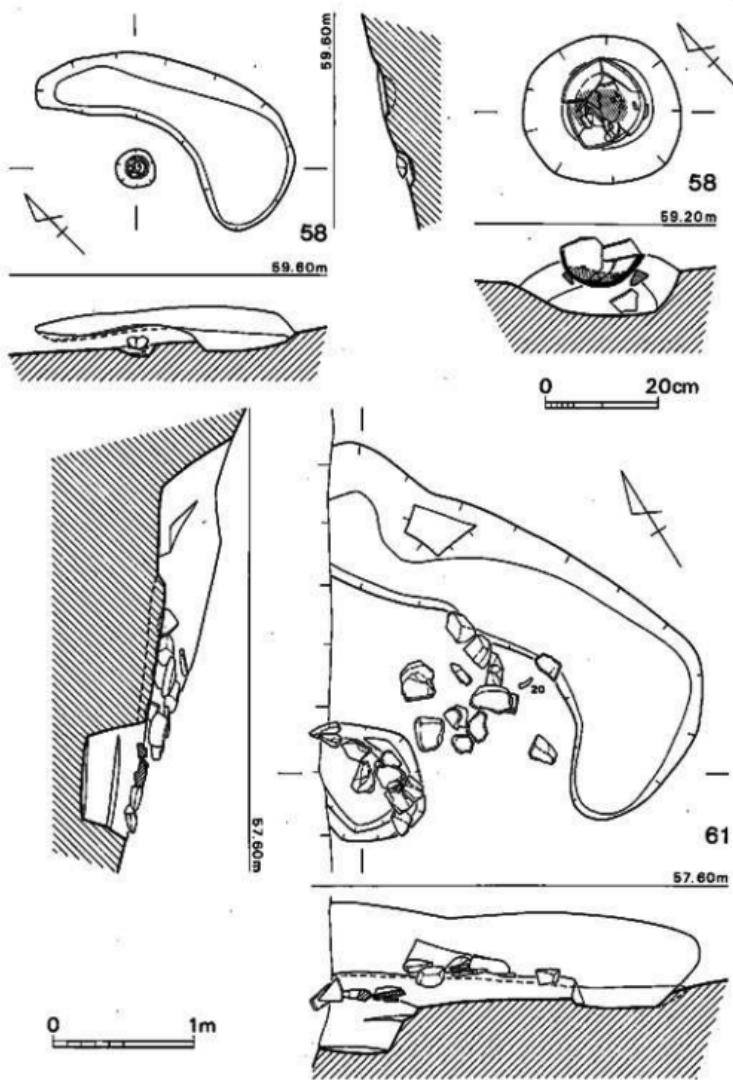
58号火葬墓の1.8m南側で、標高60.0m前後に位置する。墓壙はa類で、南北軸67cm、深さ32cmを測る隅丸方形を呈する。埋土は黒色土で、炭は750g程度出土したが、火葬骨は僅かであった。周溝はコ字形を呈し、東辺長210cm、中央部での幅103cm、深さは斜面側で66cmを測る。周溝の埋土は黒色土で、北側周溝内から土師器が出土した。

出土遺物（第43図）

土師器壺の底部破片で、底径7.5cmを測る。調整はナデで、胎土に長石・石英・赤褐色を含む。



第43図 59号火葬墓出土土器実測図 (1/3)

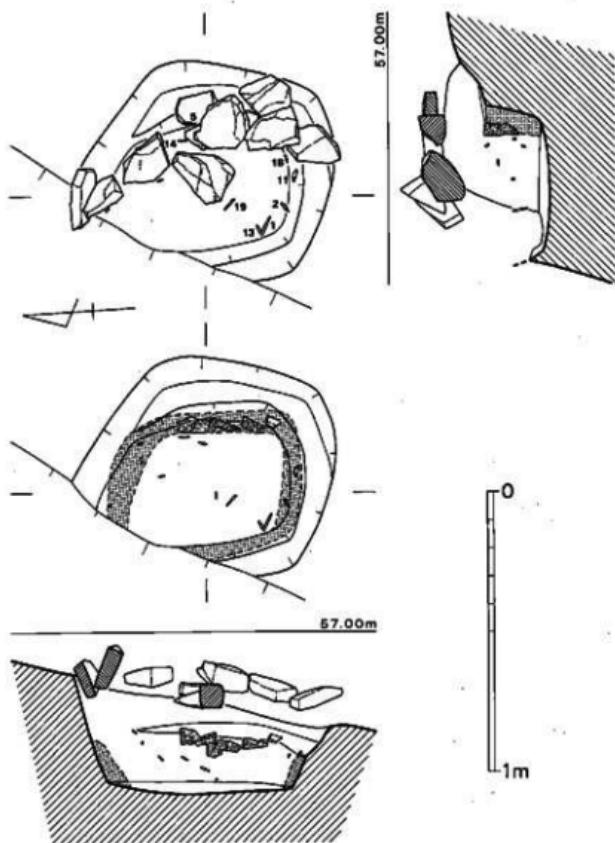


第 44 図 1 類火葬墓 (58・61号) 実測図② (1/10・1/40)

61号火葬墓（図版35、第44・45図）

調査区中央の標高57m前後の平坦面に位置し、H群に属する。周溝の北側と墓壙の一部は試掘トレンチに切られる。墓壙上面及び墓壙東側墳丘上には、15~30cm大の角礫があり、標石的役割を担ったものか。また、鐵鎌は墳丘中から出土した。

墓壙は不整方形を呈し、長軸92cm、短軸78cm、深さ42cmを測る。墓壙の東側には、幅8cmのテ



第45図 61号火葬墓主体部実測図 (1/20)

ラスが付く。墓壇内には床面より30~40cm浮いた状態で角礫が11個出土しており、その一部は墓壇内に落ち込んだ様相を呈していた。墓壇内には、木質が接着した鉄釘が20本ほど出土しており、壁周囲には大きめの炭が存在する。鉄釘の出土状況等から55×45cm程の木櫃になるものと思われる。埋土上層は赤褐色土であり、下層は炭・灰・火葬骨層で、約810gもの炭と約90gの火葬骨を埋葬していた。また、墓壇内より須恵器、土師器片が出土した。

周溝は、北端部を試掘トレンチに切られるもののコ字形を呈するものと考えられる。残存長330cm、中央部での幅76cm、深さ50cmを測る。埋土は黒褐色土で、周溝内からの遺物の出土はなかった。

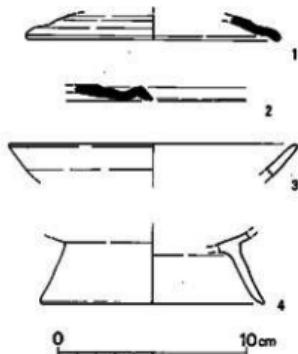
出土遺物（図版94-2、第46・47図）

土 器（1~4） 1は須恵器環蓋で、残高1.3cm、復原口径13.5cmを測る。口唇部は丸く納めている。器面調整はナデによる。砂粒を含むものの焼成は堅硬で、色調は灰青色を呈する。

2は口縁部が屈曲する環蓋で、口縁部回転ナデ、外天井部回転ヘラケズリによる。焼成はやや軟質で、灰黄褐色を呈する。

3は土師器口縁部小片で、15.4cmに復原した。口縁部はヨコナデで、口唇部は丸く納める。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は軟質で、内外面とも黄褐色を呈する。

4は高台部破片で、高台は3.2cmと高めで、径は11.8cmを測る。調整はナデによる。3の口縁部破片とは別個体である。焼成は軟質で、内外面とも明

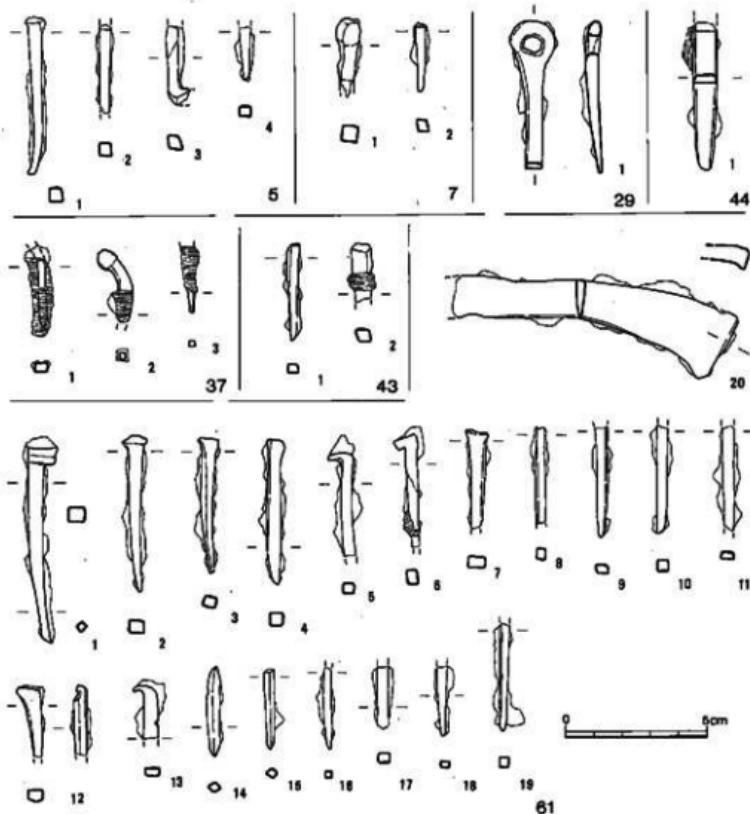


第48図 61号火葬墓出土土器実測図（1/3）

橙色を呈する。
鉄 器（1~20） 1~19は墓壇内出土の鉄釘で、1は大型で長さ7.2cm、頭部幅1.0cm、重さ6.3gを測り、断面は方形を呈する。2~4は中型で、2は長さ5.5cm・重さ3.1g、3は長さ4.7cm・重さ2.55g・頭部幅0.7cm、4は長さ5.1cm・重さ3.7gを測る。

5~19は欠損品で、5~8は先端部を欠き、9~11は頭部を欠く。12~13は頭部小破片で、14~19は先端部の破片である。

20は墳丘中の角礫付近から出土した鉄鎌で、先端部を失する。中央部幅1.4cm、基部幅2.6cmを測り、現存重量21.0gである。刃部は内湾し、かなり使い込まれている。



第47図 火葬墓出土鉄器実測図(1/2)

2) II類火葬墓

II類の火葬墓は、周溝を有しないもので、主として調査区の東側斜面部に散在する。前述したごとく、斜面が急であるため土砂流失及び削平などにより周溝を喪失したI類火葬墓も含まれる可能性を残すが、ここでは溝を持たないものはすべてII類として扱った。

2号火葬墓（図版4-2、第48図）

1号火葬墓の1m南側の標高69.0m前後に位置し、A群に属する。墓壇はa類で、長軸74cm、短軸43cmを測る梢円形状を呈する。墓壇の北半部は試掘トレンチに切られ、東側で18cmの深さを留める。埋土は暗褐色土で、約20gの炭と僅かな量の火葬骨を埋葬していた。墓壇内からの土器の出土は、皆無であった。

3号火葬墓（図版5-1・2、第48図）

2号火葬墓の10m南側に位置し、調査区北端のやや平坦になった箇所に造墓される。1・2号火葬墓とは若干距離を有するので、A群に含めていない。墓壇は隅丸方形を呈するa類で、南北長75cm、東西長63cm、深さ31cmを測る。墓壇の西側には幅12cmのテラスを設けている。埋土中位（②層）に炭を含む。炭は340g程出土したが、火葬骨は僅かであった。土器の出土はなかった。

4号火葬墓（図版5-3、第49図）

3号火葬墓の10m西側で、標高66.7mの地形変換点に位置する。墓壇は隅丸方形を呈するa類で、岩盤に掘り込んでいた。東西長79cm、深さ27cmを測る。墓壇内から約130gの炭が出土したが、火葬骨は検出していない。また、土器の出土もなかった。

8号火葬墓（図版7-1、第48図）

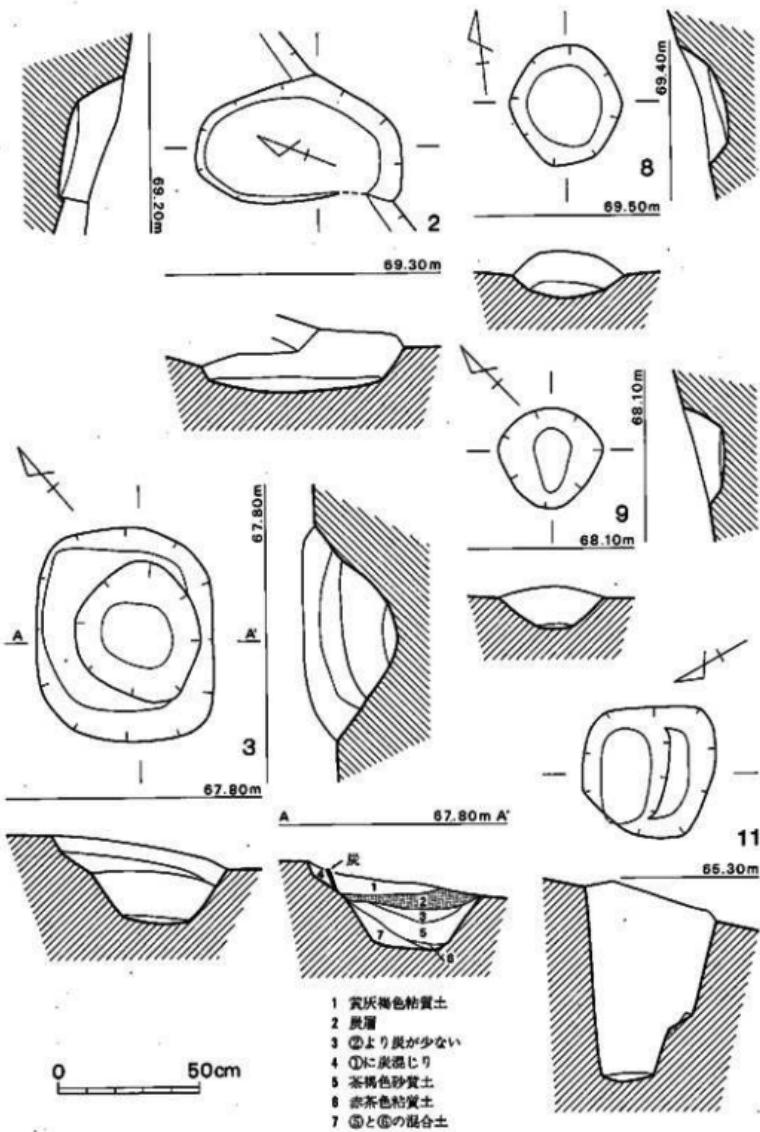
4号火葬墓の16m北側に位置し、A群に属する。墓壇は円形を呈するa類で、径40cm、深さ16cmを測る。埋土中には、炭が入っていたが、火葬骨は僅かであった。土師器が出土したが、小破片のため図示できない。

9号火葬墓（図版7-2、第48図）

8号墓の8m西側の標高68mに位置する。A群とした1・2・5~8号火葬墓とは、若干の距離を有して存在する。墓壇は円形を呈するa類で、径36cm、深さ15cmを測る。埋土中から少量の火葬骨と10gの炭を検出したのみで、土器の出土はなかった。

11号火葬墓（図版8-1、第48図）

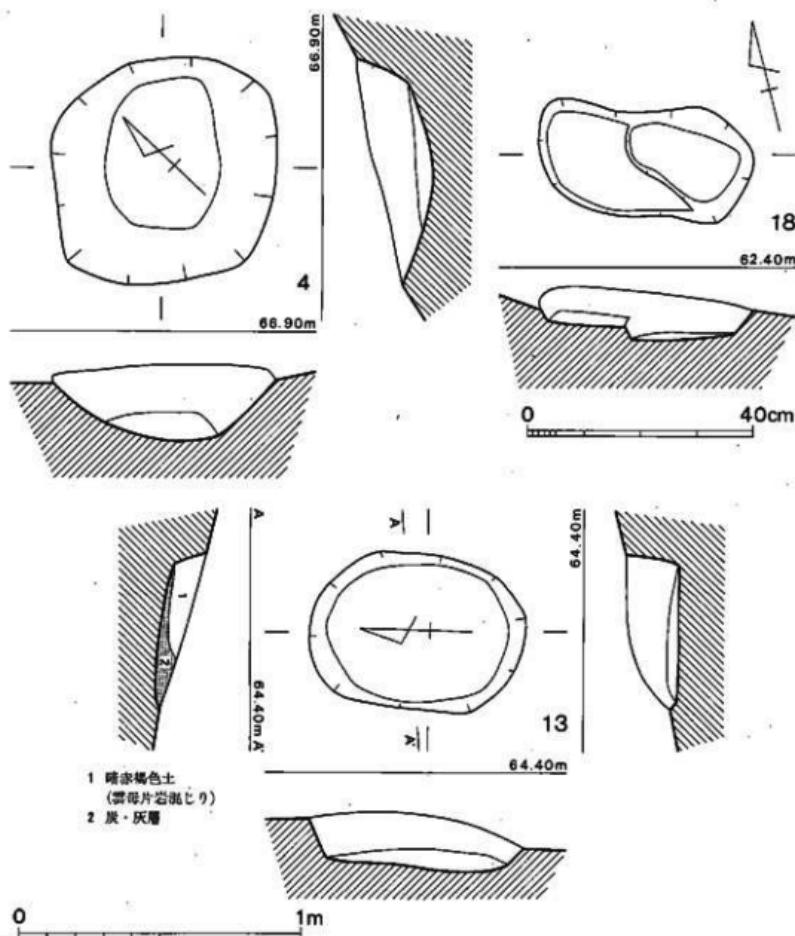
10号火葬墓の0.6m南に位置し、B群に属する。墓壇は隅丸方形を呈するa類で、南北長48cm、東西長45cmを測る。深さは72cmと他の火葬墓に比してかなり深めで、墓壇の南側には幅8cmのテラスを有する。埋土上位は暗褐色土であったが、下位は炭(210g)・灰層で、僅かな火葬骨を埋葬していた。埋土中より土師器窓の胸部小片が出土しているが、図示不可能。



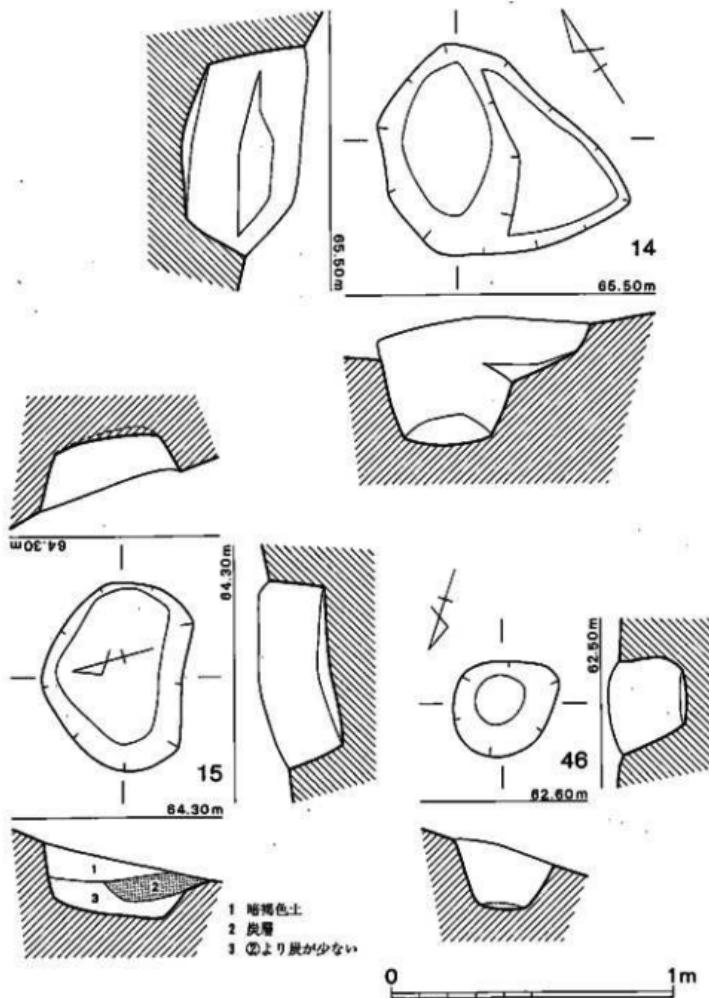
第48図 II類火葬墓(2・3・8・9・11号)実測図① (1/20)

13号火葬墓（図版8-2、第49図）

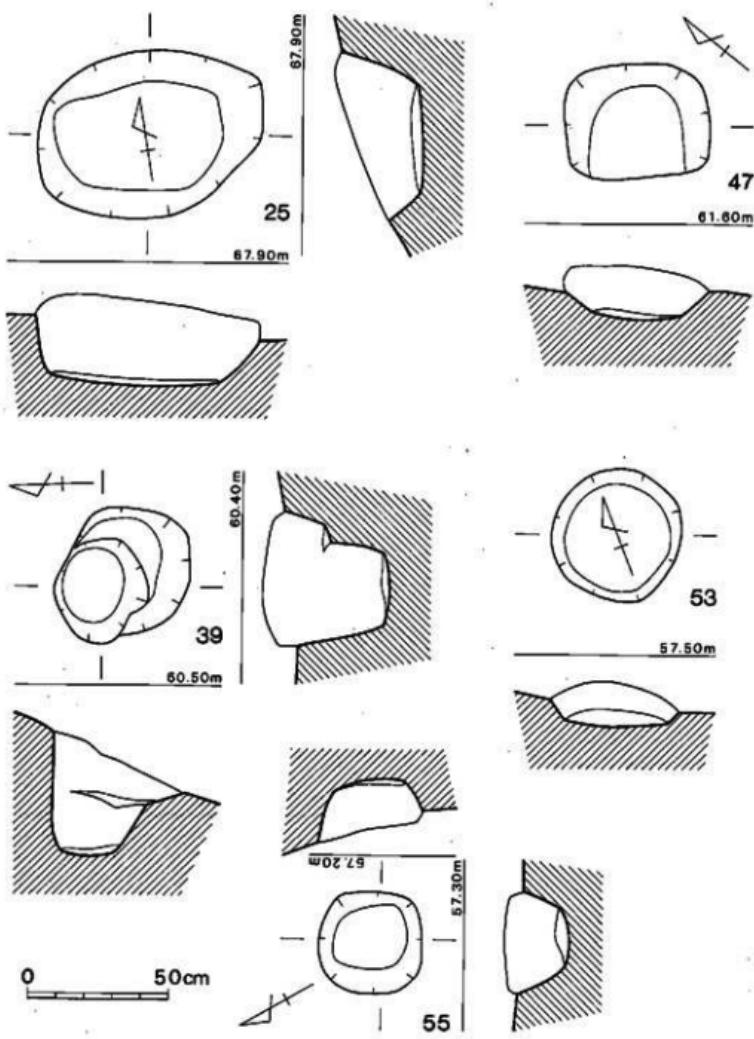
12号火葬墓の2.5m南側に位置し、B群に属する。墓様はa類で、長円形を呈する。南北長77cm、東西長54cm、深さ18cmを測る。埋土は上層が暗褐色土、下層は炭・灰混じりの黒褐色土で、



第49図 II類火葬墓（4・13・18号）実測図②（1/10・1/20）



第 58 図 II類火葬墓（14・15・46号）実測図③（1/20）



第 51 図 II類火葬墓 (25・39・47・53・55号) 実測図④ (1/20)

約40gの炭が出土したが、火葬骨はごく僅かであった。また、墓壙内からの遺物の出土はなかった。

14号火葬墓（図版9-1、第50図）

13号火葬墓の4.8m東側に位置し、B群に属する。墓壙は不整形を呈し、東側に三角形のテラスを有する。床面での規模は、南北長55cm、東西長31cmを呈し、岩盤に掘り込んでいる。埋土中から約70gの炭が出土したが、火葬骨はごく僅かであった。遺物は、土師器甕の小破片が出土したにすぎない。

15号火葬墓（図版9-2、第50図）

14号火葬墓の6.2m南側に位置し、K群に属する。墓壙はa類で、不整長円形を呈する。長軸は東西で66cm、短軸は50cm、深さは25cmを測る。埋土は上層が暗赤褐色土、中層に炭・灰層を含み、下層は炭混じりの暗褐色土であった。炭約50gと僅かな火葬骨を検出したが、土器の出土はなかった。

16号火葬墓（図版10-2、第49図）

17号火葬墓の2.8m南東側に位置し、K群に属する。標高は62.2mである。墓壙はa類で、不整長円形を呈する。東西軸38cm、南北軸20cmを測り、岩盤に掘り込んでいた。深さは9cmで、西側に浅い段を有する。埋土中から40g程の炭が出土したが、火葬骨は検出されなかった。また、土器の出土もない。

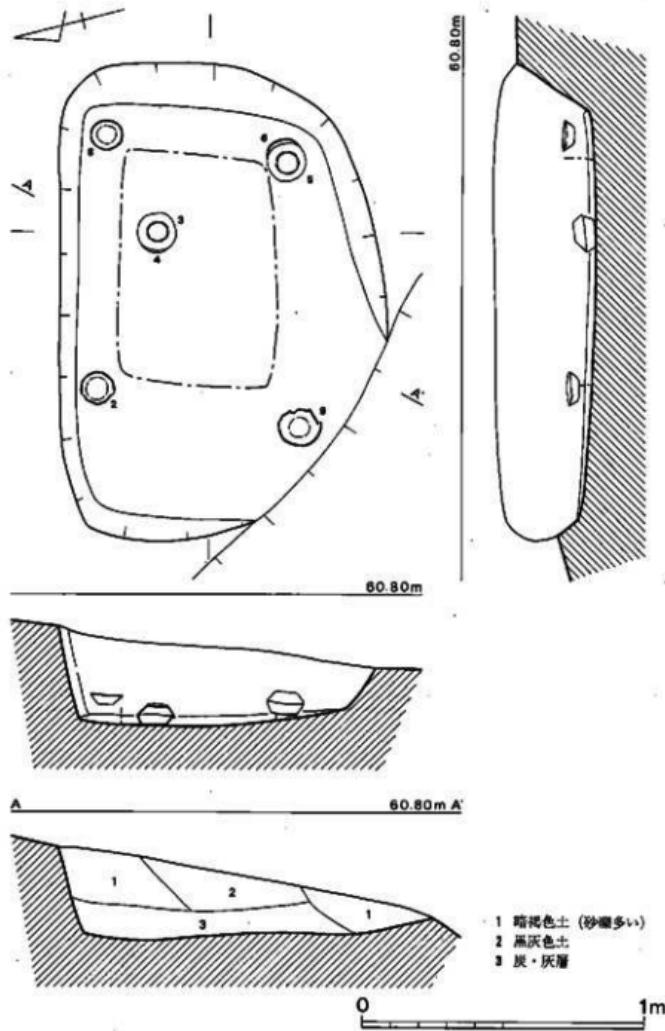
25号火葬墓（図版13-3、第51図）

22号火葬墓の0.3m北側に位置し、C群に属する。墓壙はa類で、不整長円形を呈する。東西長80cm、南北長58cm、深さ30cmを測る。埋土上層に炭の層があり、約75gの炭を検出したが、火葬骨はごく僅かであった。埋土中から土師器甕の脚部小片が出土したのみ。

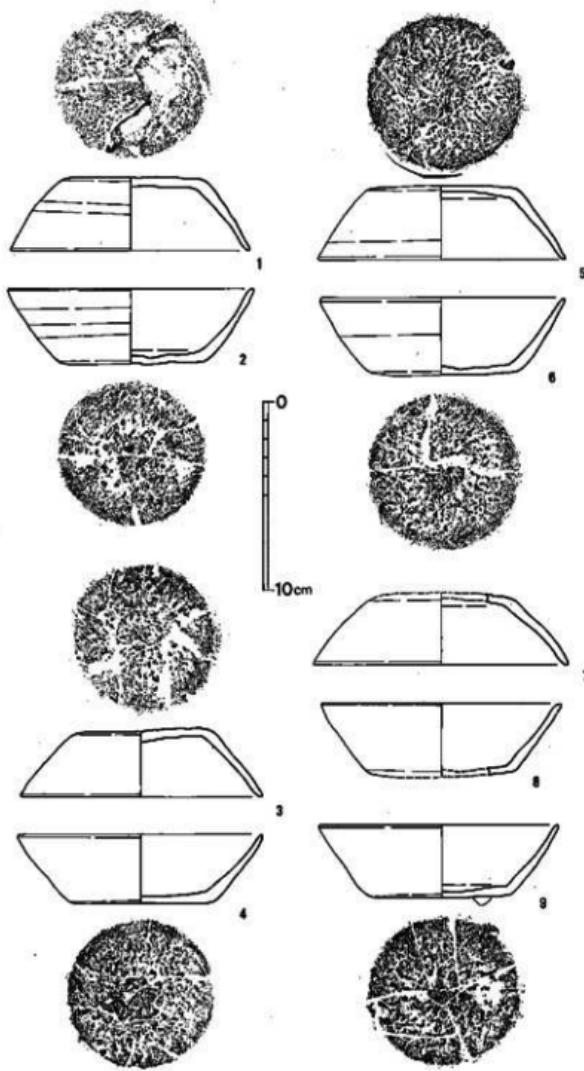
37号火葬墓（図版23-1、第52図）

E群に属し、36号火葬墓の1m南西側に位置する。墓壙は隅丸方形を呈するc類で、長軸170cm、短軸115cm、深さ36cmを測る。墓壙内には、口と口を重ね合わせた土師器壺が5箇所にある。土器の内側の一点破線で示した80×55cmの範囲に炭・灰層が多くみられ、鉄釘が6点出土していることから木櫃に火葬骨を入れて埋葬したものと考えられる。

周囲の土器は床面から若干浮いていたが、中央の土器は床面に接しており、当初から木櫃内に納めていたものか。530gの炭と僅かな火葬骨を検出した。



第 52 図 II類火葬墓（37号）実測図⑤（1/20）



第 53 図 37号火葬墓出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（図版80-1・94-1、第47・53図）

土 器(1~9) 1~9は土師器坏で、口と口とを重ね合わせた状態で出土した。器高は3.7~4.1cm、口径は12.8~13.6cm、底径は7.1~8.0cm前後を測るほぼ同規模の土器群である。器面調整はナデで、外底面はヘラ切り離しのままである。何れも、胎土に雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、褐色を呈する。

鉄 器(1~3) 墓壙内出土の鉄釘で、6本程出土したが、残存状態の良好な3点を図示した。1は頭部を欠失し、残存長3.1cmを測る。木質部が遺存し、横方向の木目が見られる。2は先端部を欠き、2.6cm残存する。3は頭部を欠失し、2.4cm残存する。断面の厚さからみて、5cm程の長さのものと推測される。

38号火葬墓（図版23-2、第55図）

34号火葬墓の6m西側に位置し、1号建物跡既絶後に埋葬される。骨蔵器の底部を残すのみで、墓蓋等詳細は不明。骨蔵器内から僅かな火葬骨が出土した。

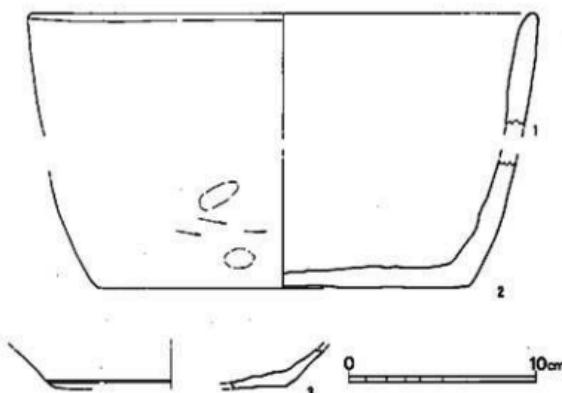
出土遺物（図版80-2、第54図）

骨蔵器(1~2) 1は骨蔵器本体内(2)から出土した口縁部片で、2とは直接接合しないものの同一個体として実測した。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸く納める。口径は底部からの復原であり、器高は15cm程の鉢状を呈するものと思われる。2は骨蔵器本体の底部で、底径19.8cm、残高6.6cmを測る。外面は横方向のケズリ、内面はナデ・ユビオサエによる。胎土は、2mm大の長石・石英・雲母を多く含み、雜なつくり。色調は褐色を呈する。

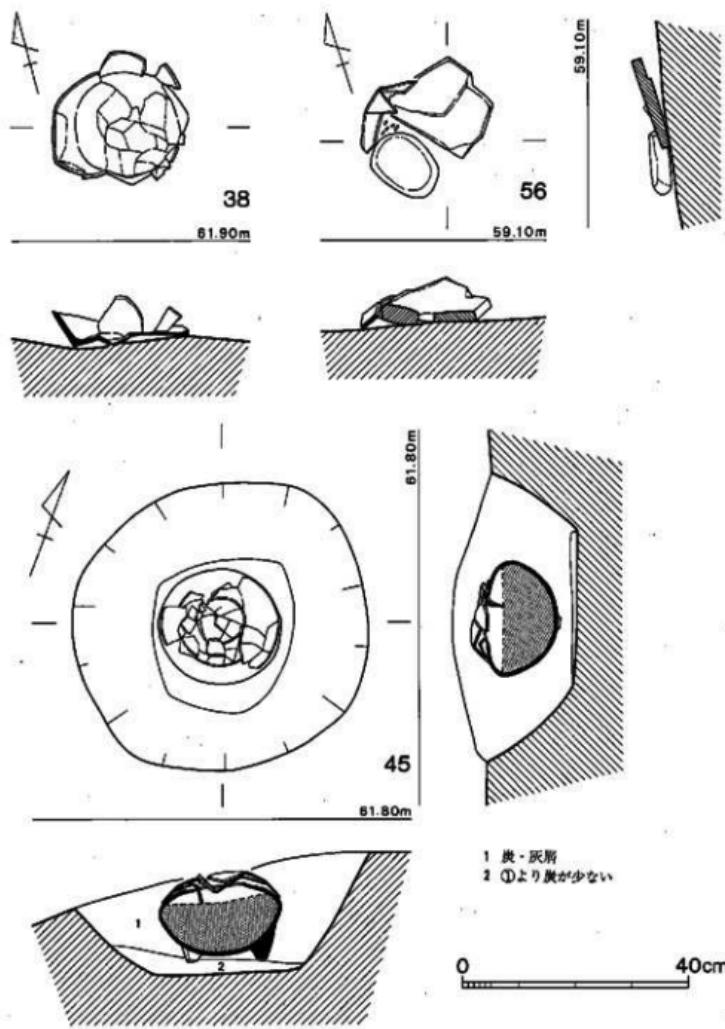
土 器(3) 3は

骨蔵器本体内から出土した土師器皿で、底径の1/4程残存する。底径が12.2cmとやや大きいことから皿とした。

器面調整はナデで、胎土に雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、褐色を呈する。



第54図 38号火葬墓骨蔵器実測図(1/3)



第 55 図 II類火葬墓（38・45・56号）実測図⑥（1/10）

38号火葬墓（図版23-3、第51図）

38号火葬墓の4.2m南東側に位置し、D群に属する。墓壙はa類で、長軸52cm、短軸43cm、深さ45cmを測る。東壁側に幅10cmのテラスを有する。約390gの火葬骨と160gの炭が出土したのみ。

45号火葬墓（図版26-3・4、第55図）

43号火葬墓の1.2m南側に位置し、F群に属する。骨蔵器を有するb類で、墓壙は円形を呈し、径52cm、深さ22cmを測る。墓壙の埋土は炭・灰層で、その中央に外蓋・内蓋・本体からなる骨蔵器を埋葬していた。骨蔵器内には、火葬骨と少量の灰が充満していたが、骨以外の出土遺物はなかった。

出土遺物（図版81-1、第56図）

骨蔵器（1～3） 1は外蓋、2は内蓋、

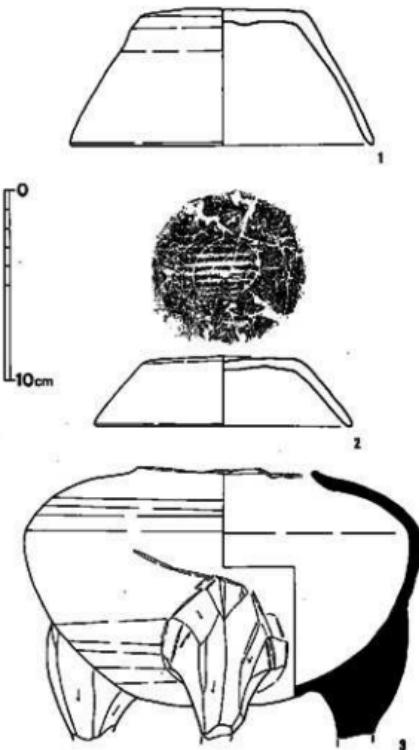
3が本体である。

1は深めの土師器壺で、器高7.1cm、口径15.6cm、底径8.6cmを測る。口唇部は丸く、平底の底部から直線的に伸びる。器面調整はナデで、胎土に赤褐色粒が多く含む。焼成は良好で、内面褐色、外面橙褐色を呈する。

2は土師器壺で、器高3.7cm、口径13.2cm、底径8.1cmを測る。器面調整はナデで、外底面には板状压痕がみられる。また、外底部の一部に黒斑がみられる。胎土に赤褐色粒を多く含み、長石・雲母粒もみられる。焼成は良好で、内外面とも橙褐色を呈する。

3は須恵器三足付き短頸壺で、口縁部及び脚部は打ち欠いている。残存器高は14.3cm（脚高8.5cm）を測る。口唇部は内傾し、肩最大径の部位で大きく屈曲する。肩部の張りは、24号墓骨蔵器本体より大きく、底部の締りも良い。

肩下部に太めの脚を3本貼付し、ダイ



第55図 45号火葬墓骨蔵器実測図（1/3）

ナミックなヘラケズリを施す。器面調整は、外面回転ヘラケズリ→ナデで、内面はナデによる。

焼成は堅緻で、色調は内面灰青色、外面灰色を呈する。全体として丁寧なつくりの土器である。

46号火葬墓（図版27-1、第50図）

44号火葬墓の6.5m南東側で、B・F群火葬墓とは若干の距離を有して位置する。墓壙は円形を呈するa類で、径35cm、深さ27cmを測る。炭・火葬骨が少量出土したのみで、他の出土遺物はなかった。

47号火葬墓（図版27-2、第51図）

46号火葬墓の8.2m南東側に位置し、便宜上L群に含めた。墓壙は隅丸方形を呈するa類で、西壁を喪失する。東西長52cm、深さ16cmを測る。埋土中より炭が約10g検出されたのみで、他に遺物の出土はなかった。

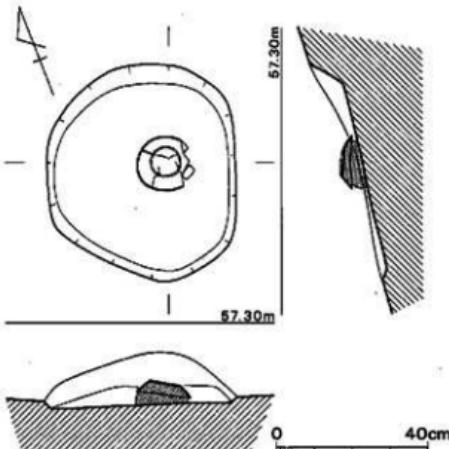
52号火葬墓（図版30-1・2、第57図）

51号火葬墓の2.6m西側に位置し、H群に属する。下層遺構の調査中、壙が逆さまの状態で検出されたので、もしやと思い壙をはぐってみたところ火葬骨が出土し、火葬墓と判明した次第である。

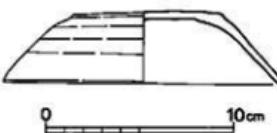
墓壙は不整円形を呈するb類で、長軸57cm、短軸51cm、深さ9cmを測る。墓壙の中央に火葬骨（約120g）を置き、土師器環で蓋をしただけの簡単なつくりの火葬墓である。また、埋土中には炭・灰は存せず、褐色土のみであった。

出土遺物（図版78-6、第58図）

土師器環で、器高3.8cm、口径14.9cm、底径8.0cmを測る。器面調整はナデで、外底面はヘラ切り離し後未調整。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、内外面とも淡褐色を呈する。



第57図 II類火葬墓（52号）実測図⑦（1/15）



第58図 52号火葬墓骨蔵器実測図（1/3）

53号火葬墓（図版30-3、第51図）

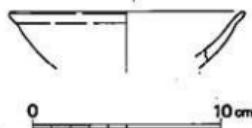
52号火葬墓の1.1m東側に位置し、H群に属する。墓壙は円形を呈するa類で、径46cm、深さ15cmを測る。埋土中から僅かな量の火葬骨と炭が出土したのみで、土器の出土はなかった。

54号火葬墓（図版31-1、第61図）

51号火葬墓の3.8m南東側に位置し、H群に属する。墓壙は隅丸方形を呈するa類で、東壁は試掘トレンチに切られる。南北長63cm、深さ41cmを測る。埋土下位は炭・灰層で、その中央に径25cm、深さ12cmの小穴を掘り、火葬骨（約20g）を入れ、茶褐色土で埋めていた。墓壙内より土器が出土している。

出土遺物（第59図）

土師器口縁部片で、残存器高2.7cm、復原口径12.6cmを測る。口縁部は小さく屈曲し、口唇部は丸く納める。口径が小さく、やや深めであることから碗とした方が妥当か。胎土に長石・石英を含み、やや雜である。焼成は良好で、内面黄褐色、外面灰褐色を呈する。



第59図 54号火葬墓出土土器
実測図（1/3）

55号火葬墓（図版31-2、第51図）

54号火葬墓の0.3m北側に位置し、H群に属する。墓壙は円形で、径37cm、深さ23cmを測る。埋土中には、約40gの炭と火葬骨が少量出土した。また、墓壙内からは土師器甕の小片が出土しているが、図示不可能。

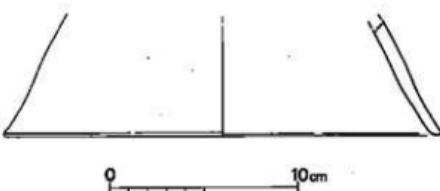
56号火葬墓（図版31-3、第55図）

55号火葬墓の5.3m東側に位置し、G群に属する。骨蔵器と火葬骨を留めるのみで墓壙等詳細は不明。埋葬方法を復原してみると、墓壙底に13cm大の河原石と16cm大の雲母片岩を敷き、その上に火葬骨を置き、土師器甕の蓋を被せて埋めたものと推測される。

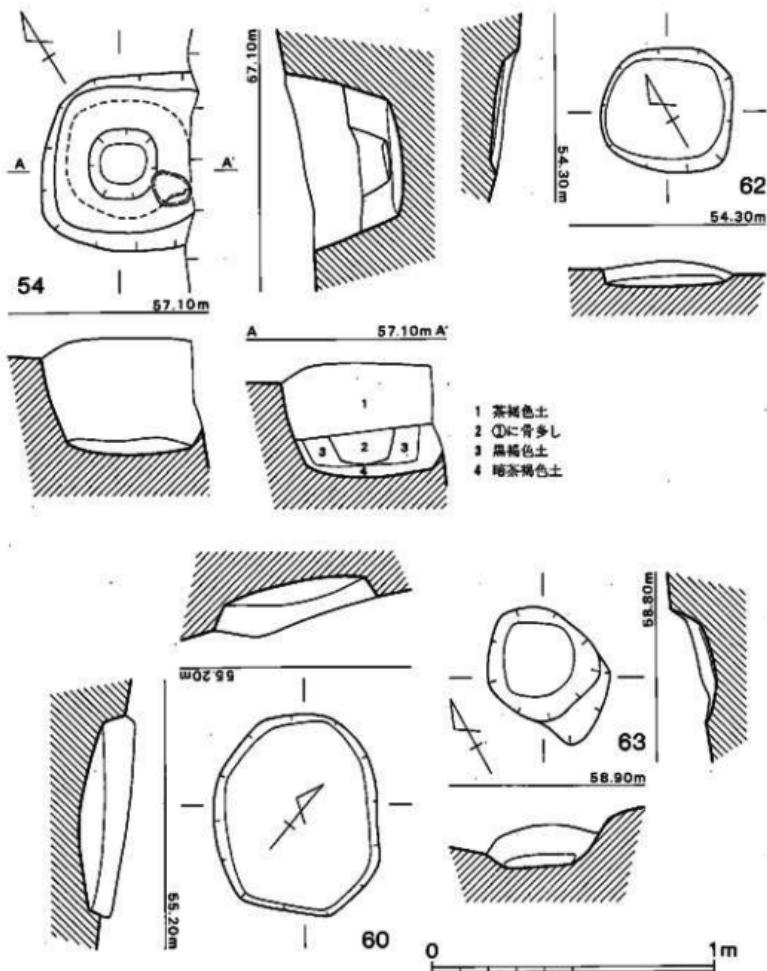
出土遺物（図版31-3、第60図）

土師器口縁部片で、口径23.0cmに復原した。口縁部は八字形に開き、口唇部には4mm程の平坦面を有することから碗になろう。外面は摩滅しているが、内面はナデによる。

胎土に長石・石英を含み、内面黒灰色、外面黄褐色を呈する。



第60図 56号火葬墓骨蔵器実測図（1/3）



第 81 図 II類火葬墓 (54・60・62・63号) 実測図③ (1/20)

60号火葬墓（図版34-2、第61図）

52号火葬墓の11m南側の調査区中央部平坦面に位置し、I群に属する。墓壙は不整円形を呈するa類で、長軸73cm、短軸58cm、深さ18cmを測る。埋土中からは、約80gの炭が出土しているが、火葬骨は検出していない。当火葬墓に伴う土器の出土はなかった。

62号火葬墓（図版36-1、第61図）

60号火葬墓の6.1m南西側に位置し、I群に属する。墓壙は円形を呈するa類で、径46cm、深さ10cmを測る。埋土中からは約180gの炭が出土したが、火葬骨は検出していない。また、土器の出土もなかった。

63号火葬墓（図版36-2、第61図）

調査区東側の標高58.8mの斜面部に位置し、M群に属する。墓壙は不整円形を呈し、周壁は焼けていた。径42cm、深さ16cmを測る。埋土中から炭が出土したのみ。

64号火葬墓（第62図）

63号火葬墓の4.5m東側に位置し、M群に属する。墓壙は長円形を呈すると思われるが、南壁を喪失する。東西長71cm、深さ17cmを測る。63号墓同様、埋土中から炭が出土したのみ。

65号火葬墓（図版36-3、第62図）

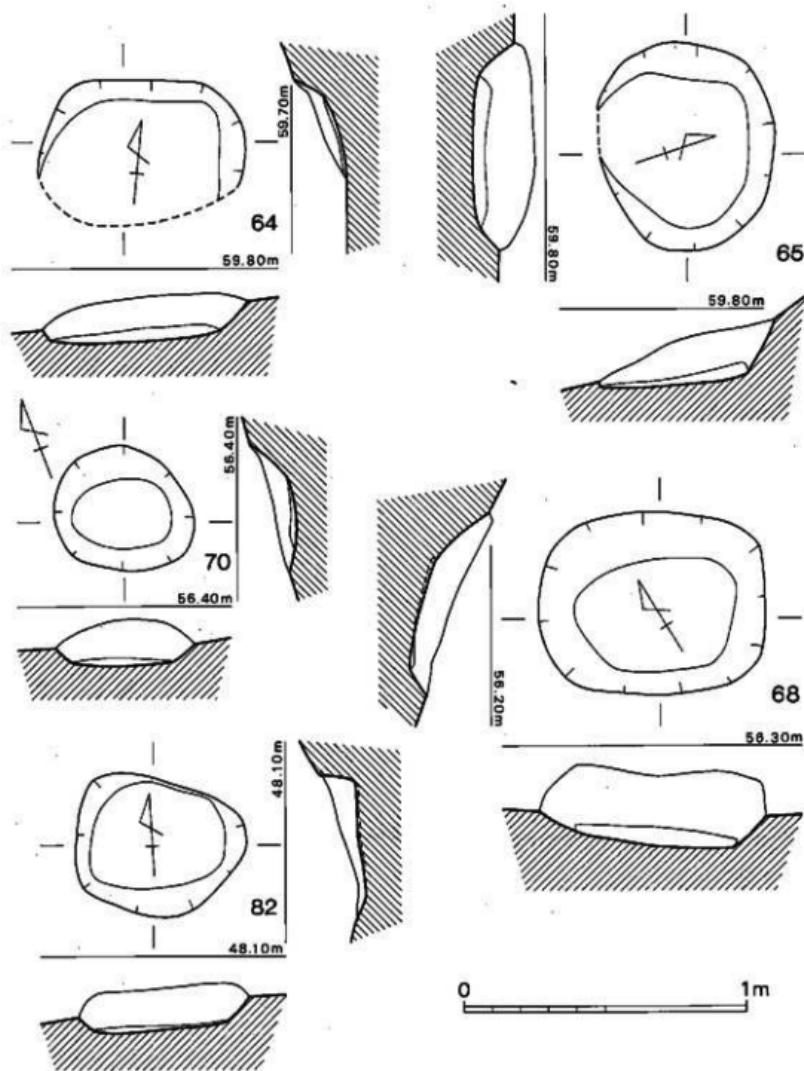
64号火葬墓の1m東側の調査区東端部に位置し、M群に属する。墓壙は長円形を呈するa類で、東西長73cm、南北長63cm、深さ22cmを測る。墓壙埋土中から約20gの炭が出土したのみ。

68号火葬墓（図版38-1、第62図）

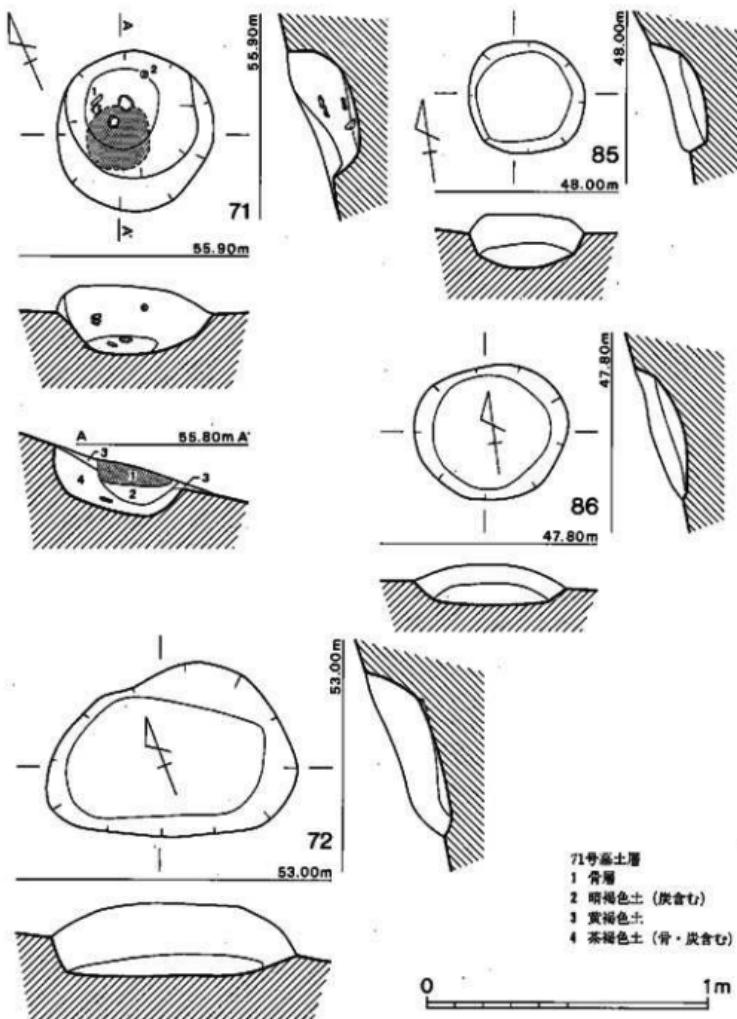
63号火葬墓の6.5m南西に位置し、O群に属する。墓壙は長円形を呈するa類で、東西長80cm、南北長66cm、深さ25cmを測る。埋土中から約40gの炭が出土したが、火葬骨は検出していない。また、土器の出土はなかった。

70号火葬墓（図版39-1、第62図）

48号火葬墓の10.7m南東側の斜面に単独で位置し、最も近接する71号火葬墓とも同距離離れているが、70・71号墓併せてN群とした。墓壙は長円形で、長軸50cm、短軸45cm、深さ17cmを測る。小規模な割には、約40gの炭が出土したが、火葬骨は検出していない。また、土器の出土はなかった。



第 62 図 II類火葬墓（64・65・68・70・82号）実測図② (1/20)



第 63 圖 II類火葬墓 (71・72・85・86号) 斜測圖⑩ (1/20)

71号火葬墓（図版39-2～4、第63図）

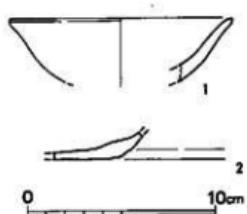
66号火葬墓の7.4m北西側に位置し、N群に属する。墓壇は円形を呈するa類で、径57cm、深さ26cmを測る。火葬骨は①層に集中しており、墓壇を掘った後一旦埋め戻してから火葬骨を埋葬したものと考えられる。④層から土錐の半欠品と富寿神賣一点が出土した。火葬骨は約300g検出したが、炭の量は10gと少なかった。

出土遺物（図版95-2、第64・65図）

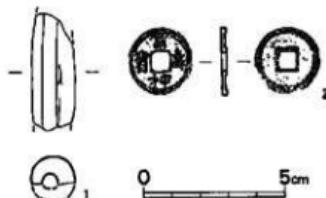
土 器 (1-2) 1は口径12.0cmに復原した土師器碗の口縁部破片で、小破片であるため口径はもう少し大きくなるか。器面調整はナデによる。胎土に赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも黄褐色を呈する。2は土師器底部片で、坏になるか。器面調整はナデによる。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で、明褐色を呈する。

土製品 (1) 1は管状土錐の半欠品で、残存長4.2cm、径1.6cmを測る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

銅 錢 (2) 2は富寿神賣で、径2.3cm、重さ2.15gを測る。側面には、削り痕がみられる。



第64図 71号火葬墓出土土器
実測図 (1/3)



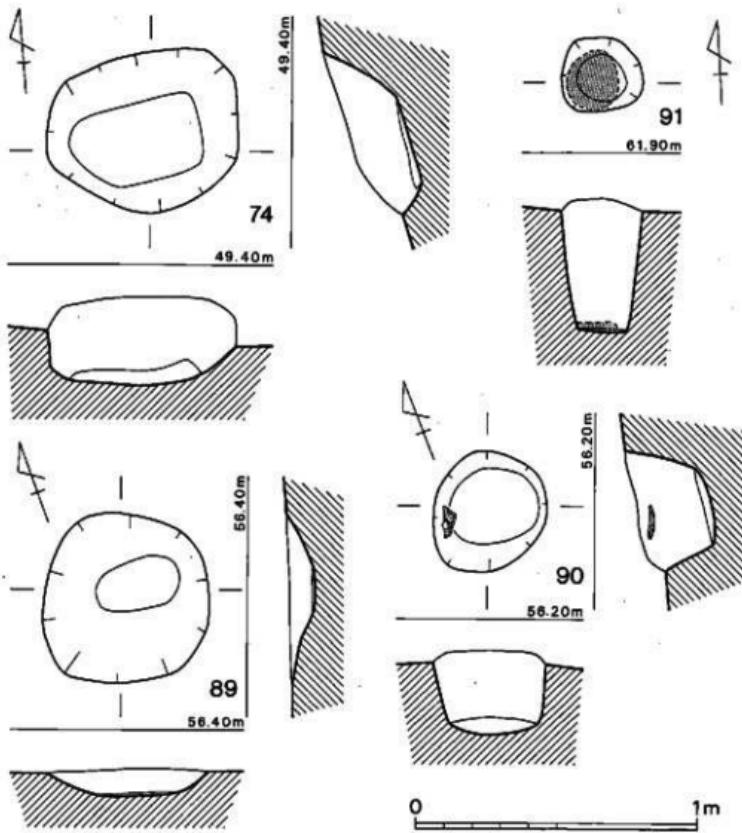
第65図 71号火葬墓出土土製品・銅錢
実測図 (1/2)

72号火葬墓（図版40-1、第63図）

67号火葬墓の8.2m南側の標高52.8mの斜面に単独で位置する。墓壇は不整長円形を呈するa類で、長軸87cm、短軸61cm、深さ25cmを測る。埋土中から約30gの炭が出土したが、火葬骨は検出していない。また、土器の出土もみない。

74号火葬墓（図版40-3、第66図）

73号火葬墓の3.2m西側に位置し、Q群に属する。墓壇は長円形を呈するa類で、東西長75cm、南北長57cmを測る。埋土中から約40gの炭と僅かな火葬骨が出土した。土器の出土はなかった。



第 66 図 II類火葬墓 (74・89~91号) 実測図① (1/20)

82号火葬墓 (図版44-2、第62図)

標高48.1mの斜面部に位置し、その西隣が83号火葬土壙である。墓壙は不整円形を呈するa類で、東西長60cm、南北長48cm、深さ14cmを測る。埋土中から約40gの炭が出土したが、火葬骨は検出していない。また、土器の出土は皆無であった。

85号火葬墓（図版45-2、第63図）

84号火葬墓の1.2m東側に位置し、R群に属する。墓壇は円形を呈するa類で、径41cm、深さ19cmを測る。埋土中からは僅かな炭が出土したのみであり、土器などの出土はなかった。

86号火葬墓（図版45-3、第63図）

85号火葬墓の0.9m南東側に位置し、R群に属する。墓壇は円形を呈するa類で、径54cm、深さ14cmを測る。小規模な墓壇であるが、約40gの炭が出土した。火葬骨・土器の出土はなかった。

89号火葬墓（図版47-1、第66図）

調査区中央テラスの南端に位置し、90号火葬墓とでJ群を形成する。墓壇は円形を呈するa類で、径60cm、深さ10cmを測る。僅かな炭が出土したのみ。

90号火葬墓（図版47-2、第66図）

89号火葬墓の1.1m南側に位置する。墓壇は円形を呈するa類で、径42cm、深さ30cmを測る。埋土中には、焼土・炭がみられた。また、浮いた状態で須恵器甕胸部片が出土した。

91号火葬墓（図版47-3、第66図）

当初、93号としていた火葬墓である。38号火葬墓の0.4m東側に位置し、1号建物跡廃絶後に埋葬される。墓壇は円形を呈するa類で、径29cm、深さ46cmを測る。埋土下位より370gもの火葬骨が出土した。

92号火葬墓

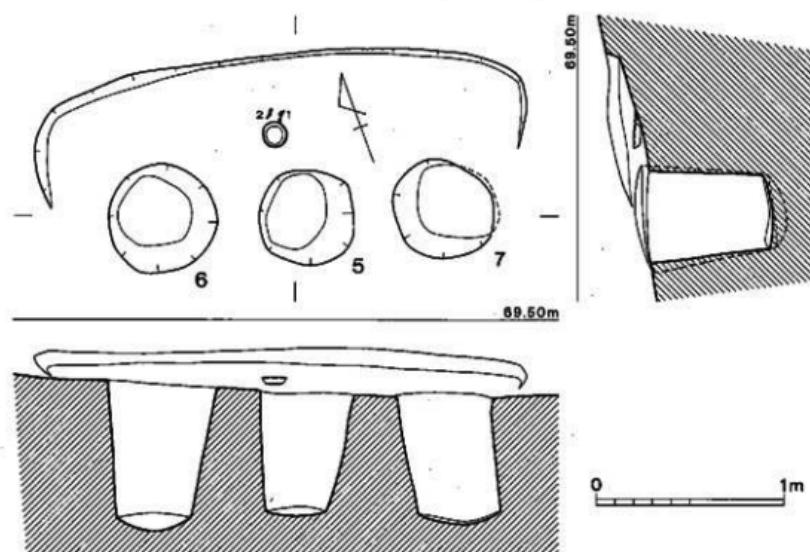
31・32号火葬墓墳丘下層より検出した火葬墓で、墓壇の平面形等詳細は不明。僅かな火葬骨が出土した。

3) III類火葬墓

斜面側にテラスを有する火葬墓で、5~7号火葬墓が該当する。

5~7号火葬墓（図版6、第67図）

8号火葬墓の0.7m西側に位置し、左から6号、5号、7号火葬墓と番号を付した。墓壇は20cmの等間隔で一直線に並び、山側斜面に長さ265cm、幅50cm、深さ12cmの浅いテラスを共有する。



第 67 図 三類火葬墓（5～7号）実測図（1/30）

墓壇は円形を呈し、5号墓は径50cm・深さ65cm、6号墓は径58cm・深さ78cm、7号墓は径53cm・深さ69cmを測る。埋土上層は赤褐色砂礫層で、下層は炭・灰混じりの黒褐色土と骨の層であり、5号墓からは約200g、6号墓からは約460g、7号墓からは約300gの火葬骨が出土した。

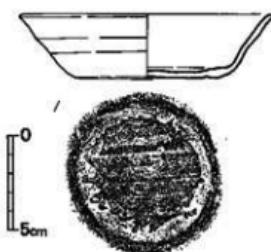
また、5号墓墓壇の13cm北側から土師器壺と鉄釘2本及び7号墓埋土中から鉄釘が出土した。

出土遺物（図版78-1・94-1、第47・68図）

土 器 完形の土師器壺で、器高3.4cm、口径13.5cm、底径7.8cmを測る。器面調整はナデにより、外底面には板状圧痕を有する。胎土に鐵母・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、橙褐色を呈する。

鉄 釘 (5-1~4・7-1・2) 5-1は長さ5.5cm、頭部幅0.6cmで、重さは2.85gを測る。断面形は方形を呈する。2~4は欠損品。

7-1・2は墓壇埋土中の出土である。1は頭部片、2は先端部片で、1の頭部幅は0.7cm。



第 68 図 5号火葬墓出土土器実測図（1/3）

4) 火葬土壙

火葬土壙（焼場）は、調査区東側の斜面部に散在し、山側斜面にテラスを有するものと有しないものがある。何れも、壁面は強い加熱を受け赤変している。また、遺構検出時においては、火葬墓と火葬土壙の区別はなしに遺構番号を通して付けた。ために、番号が遺構数を示すものではない。一次調査では、19基検出した。

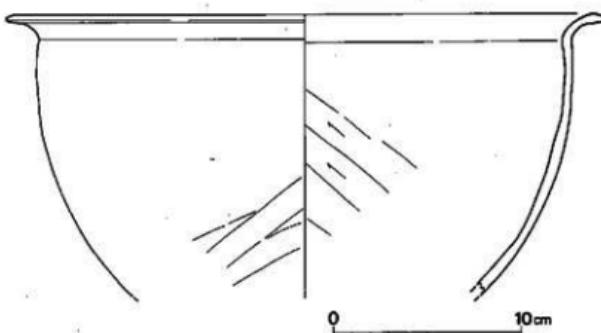
16号火葬墓（火葬土壙）（図版9-3、第70図）

15号火葬墓の4.8m南東側に位置し、K群に属する。平面形は精円形を呈し、東西長132cm、南北長96cm、深さ49cmを測る。墓壙は岩盤に掘り込まれ、北側に幅10cmのテラス、東側に幅22cmのテラスを有する。壁面は加熱を受け赤変しており、火葬土壙とした。

埋土は、炭・灰層→暗赤褐色土（雲母片岩混じる）→暗褐色土の順で堆積しており、下層の炭・灰層からは約210gの炭と僅かな火葬骨を検出した。また、墓壙の西側から土師器甕が出土している。

出土遺物（第69図）

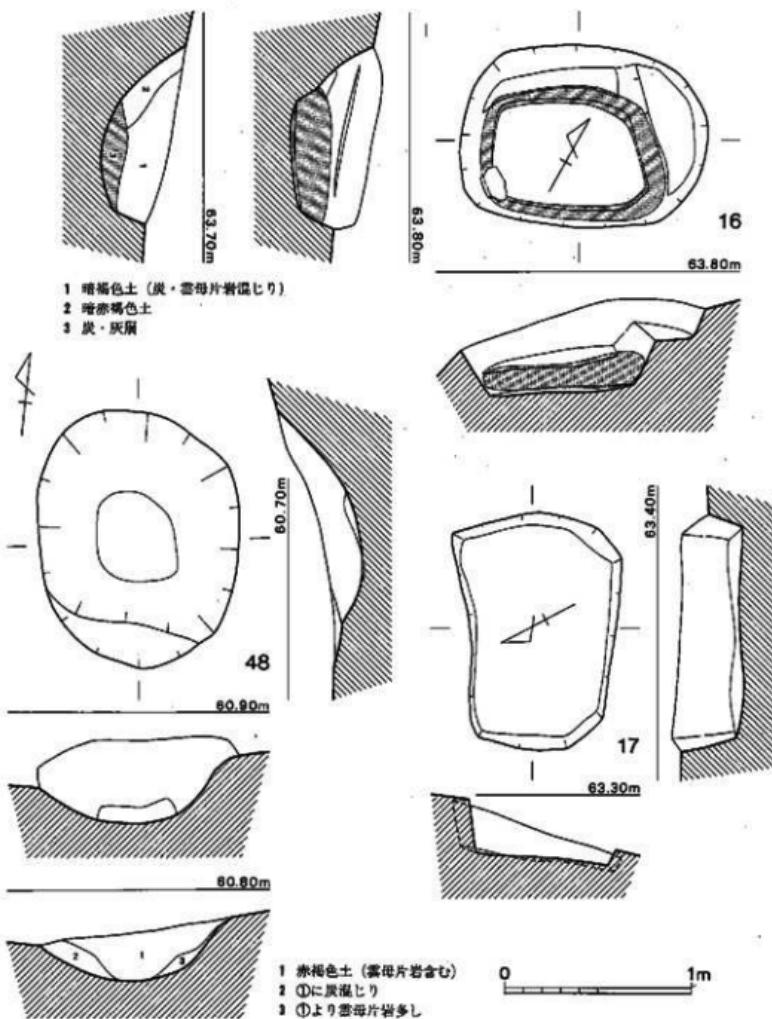
土師器甕で、残存器高14.8cm、復原口径32.0cmを測る。口縁部は大きく屈曲し、腹部は球状を呈する。調整は、口縁部ヨコナデ、内外面ヘラケズリによる。胎土に長石・石英を含むものの割に精良である。焼成は軟質で、黄橙色を呈する。



第88図 16号火葬土壙出土土器実測図 (1/3)

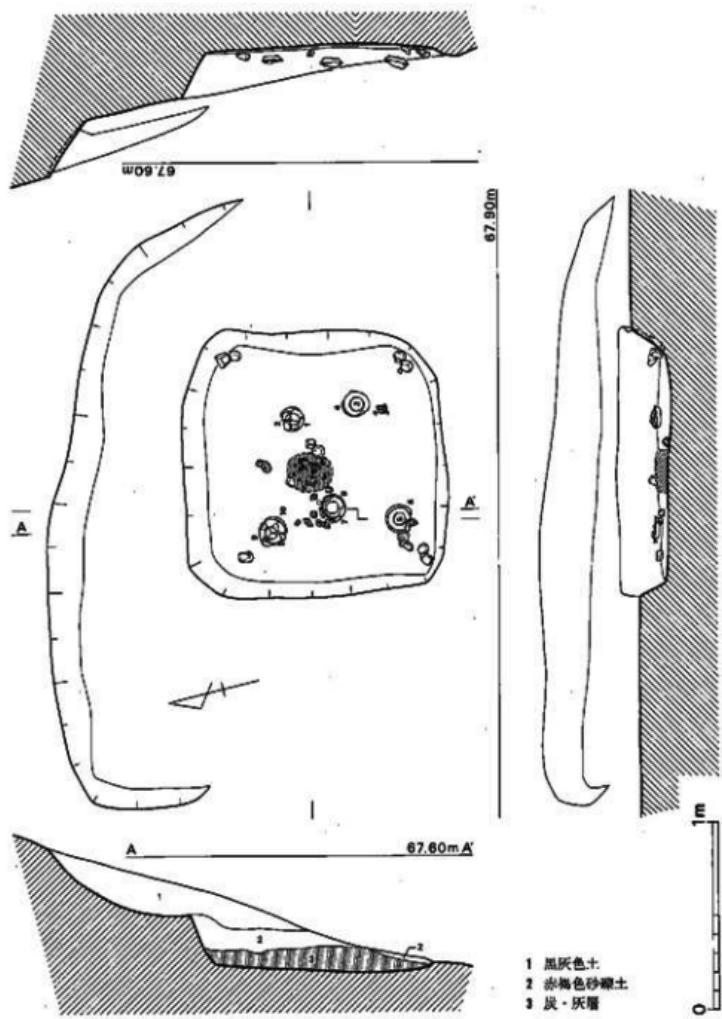
17号火葬墓（火葬土壙）（図版10-1、第70図）

16号火葬土壙の0.7m南側に位置し、8号土壙を切っている。長方形を呈し、東西長129cm、南北長80cmで、墓壙は岩盤に掘り込んでおり、深さ32cmを測る。壁面・床面は加熱を強く受け赤変しており、火葬土壙とした。埋土下位には炭・灰が多く、約170gの炭が出土した。土器の出土はなかった。



第 70 図 火界土壤 (16・17・48号) 実測図① (1/30)

图 71 火葬土堆 (23号) 断面图② (1/30)



23号火葬墓（火葬土壙）（図版14、第71図）

22・24号火葬墓の中間に位置し、C群に属する。斜面側にテラスを有するタイプで、テラスは長方形を呈し、長さ310cm、幅70cm、高さ30cmを測る。その中央に、一辺140cmの隅丸方形の豊穴を掘っている。埋土は、上層から黒灰色土、赤褐色砂礫土、炭・灰層の順で、下層の炭・灰層は②層の赤褐色砂礫土で意識的に埋めた感がある。①層の黒灰色土は、山側からの流れ込み堆積土である。

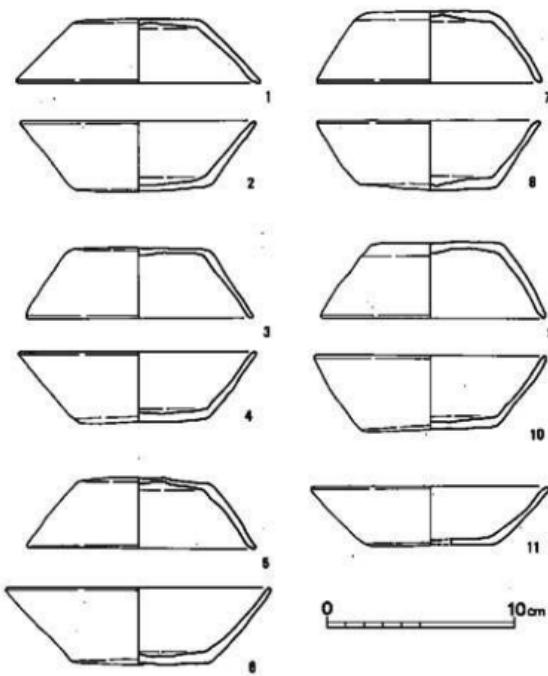
豊穴の四隅と中央には、6cm大の川原石を2個ずつ置いている。石のレベルがほぼ等しく、焼けていることから焼き台としての役割を担ったものと考えられる。埋土中からは、口と口を重ね合わせた土器器坏が5セット分出土しているが、土器は二次加熱を受けておらず、火葬後の祭祀行為に伴うものと考えられる。また、火葬骨は墓壙の中央に集中しており、その量は約230gであった。

出土遺物（図版79-1、

第72図）

1~11は土器器坏で、
1~10は豊穴内より口
と口を重ね合わせた状
態で出土した。11はテ
ラス埋土中の出土であ
る。器高は3.4~4.0cm、
口径は11.7~13.8cm、
底径は6.6~7.4cmを測
り、ほぼ同規模の土器
群である。

器面調整はナデで、
外底面はヘラ切り離し
のままである。何れも、
胎土に雲母・赤褐色粒
を多く含む。焼成は良
好で、褐色を呈する。
37号火葬墓の土器の出
土状態に類似し、坏の
中には、土が入ってい
ただけであった。



第72図 23号火葬土壙出土土器実測図（1/3）

48号火葬墓（火葬土壙）（図版27-3, 第70図）

49号火葬墓の0.6m北側に位置し, L群に属する。平面形は稍円形を呈し, 南北長138cm, 東西長106cm, 深さ44cmを測る。埋土下位に炭があり(約95g), 上層は赤褐色土であった。壁面はさほど加熱を受けてはいないが, 土壙の大きさからして火葬土壙とした。埋土中からの遺物の出土はなかった。

56号火葬墓（火葬土壙）（図版37-1, 第73図）

71号火葬墓の7.3m南東側に位置し, O群に属する。平面形は隅丸方形を呈し, 東西長67cm, 南北長56cmを測る。墓壙は岩盤に掘り込んでおり, 深さは15cm遺存する。壁面はよく焼けており, 火葬土壙とした。埋土中から約60gの炭が出土したのみで, 他の出土遺物はなかった。

67号火葬墓（火葬土壙）（図版37-2, 第73図）

66号火葬土壙の2.2m東側に位置し, O群に属する。平面形は隅丸方形を呈し, 南北長90cm, 東西長76cm, 深さ30cmを測る。壁面はあまり焼けていなかったが, 埋土下位には炭が多く, 約1kg出土した。土器などの出土はなかった。

68号火葬墓（火葬土壙）（図版38-2, 第74図）

68号火葬墓の0.6m東側に位置し, 土壙の北東側に146cm×96cmの長円形のテラスを有する。土壙は隅丸長方形を呈し, 東西長111cm, 南北長91cm, 深さ32cmを測る。壁面は床面の10cm上から強く赤変している。埋土中から僅かな量の火葬骨と約15gの炭を検出した。

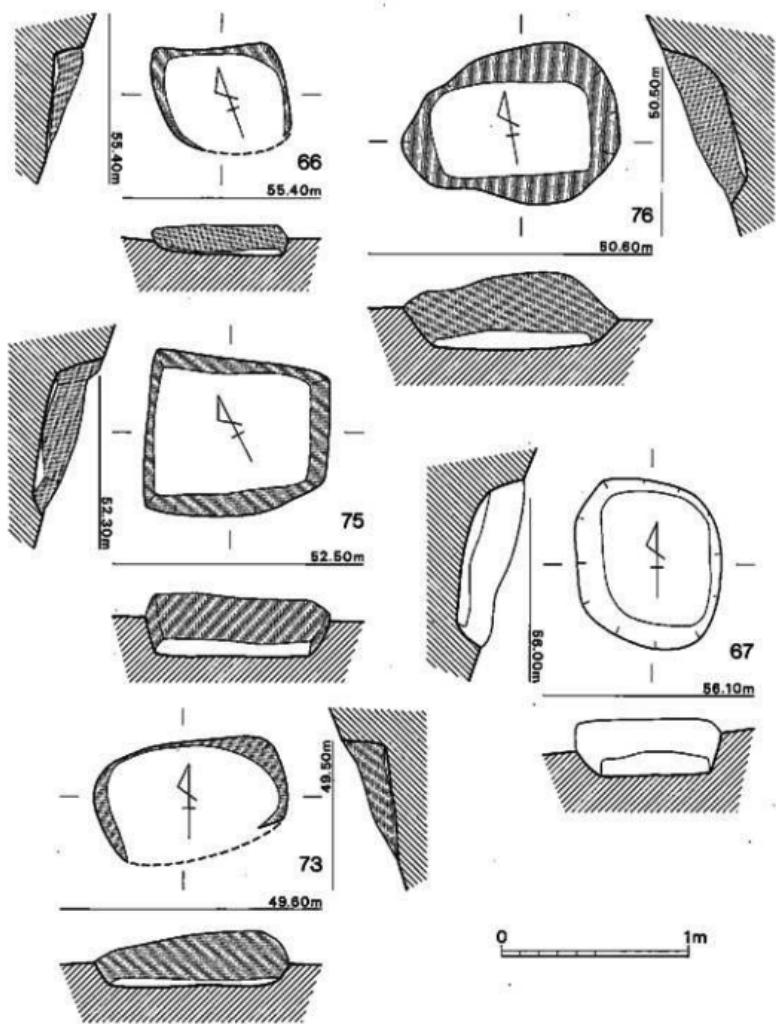
テラスの埋土は黒褐色土で, 北東隅のピットは, 当火葬土壙に伴うのか不明。埋土中から土師器甕の腹部片が出土しているが, 小破片であり図示不可。

73号火葬墓（火葬土壙）（図版40-2, 第73図）

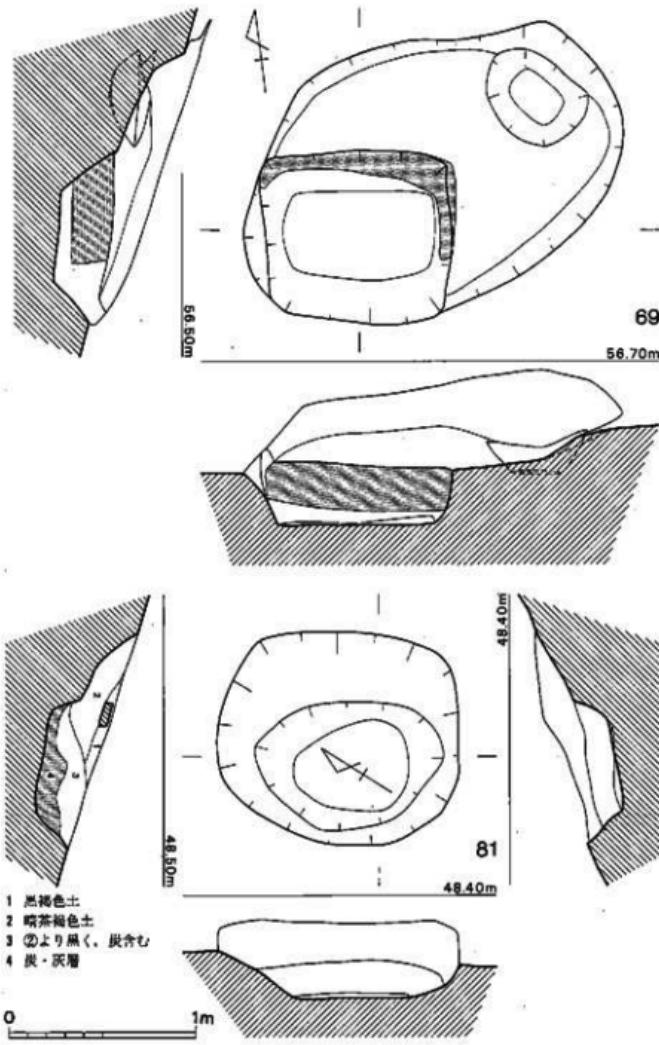
72号火葬墓の8.5m南側に位置し, Q群に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し, 東西長100cm, 南北長は南壁が喪失しているので, 正確な数値は知り得ないが, 60cm程であろう。深さは29cmを測る。壁面はかなり焼けており, 埋土中から約50g程の炭が出土した。

75号火葬墓（火葬土壙）（図版41-1, 第73図）

72号火葬墓の9.2m西側に位置し, P群に属する。平面形は長方形を呈し, 東西長97cm, 南北長84cm, 深さ31cmを測る。土壙は岩盤に掘り込んでおり, 壁面は加熱により赤変していた。埋土中から炭が約85g出土しただけで, 土器などの出土はなかった。



第 73 図 火葬土塚 (66・67・73・75・76号) 実測図③ (1/30)



第 74 図 火葬土壙 (69・81号) 断測図④ (1/30)

76号火葬墓（火葬土壙）（図版41-2、第73図）

75号火葬墓の4.9m南側に位置し、P群に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、東西長112cm、南北長70cm、深さ40cmを測る。壁面は強い加熱を受け、断面の1cm内側まで焼けていた。埋土下位には炭が多く存したが、他の出土遺物はない。

77号火葬墓（火葬土壙）（図版42-1、第75図）

74号火葬墓の2.1m西側に位置し、Q群に属する。平面形は円形を呈し、径78cm、深さ34cmを測る。壁面はあまり焼けてはいないが、火葬土壙とした。埋土は上層が茶褐色土、下層が黒灰色土で、約180gの炭が出土した。土器の出土はない。

78号火葬墓（火葬土壙）（図版42-2、第76図）

76号火葬土壙の4.4m西側に位置し、P群に属する。山側にテラスを有する火葬土壙で、山側斜面を374×252cmの範囲で岩盤まで掘り下げ、その南端に長さ90cm、幅70cm、深さ38cmの土壙を穿つ。土壙の四周は加熱を受け赤変しており、埋土下位より約110gの炭が出土した。当火葬土壙に伴う遺物の出土はない。

79号火葬墓（火葬土壙）（図版43-1、第75図）

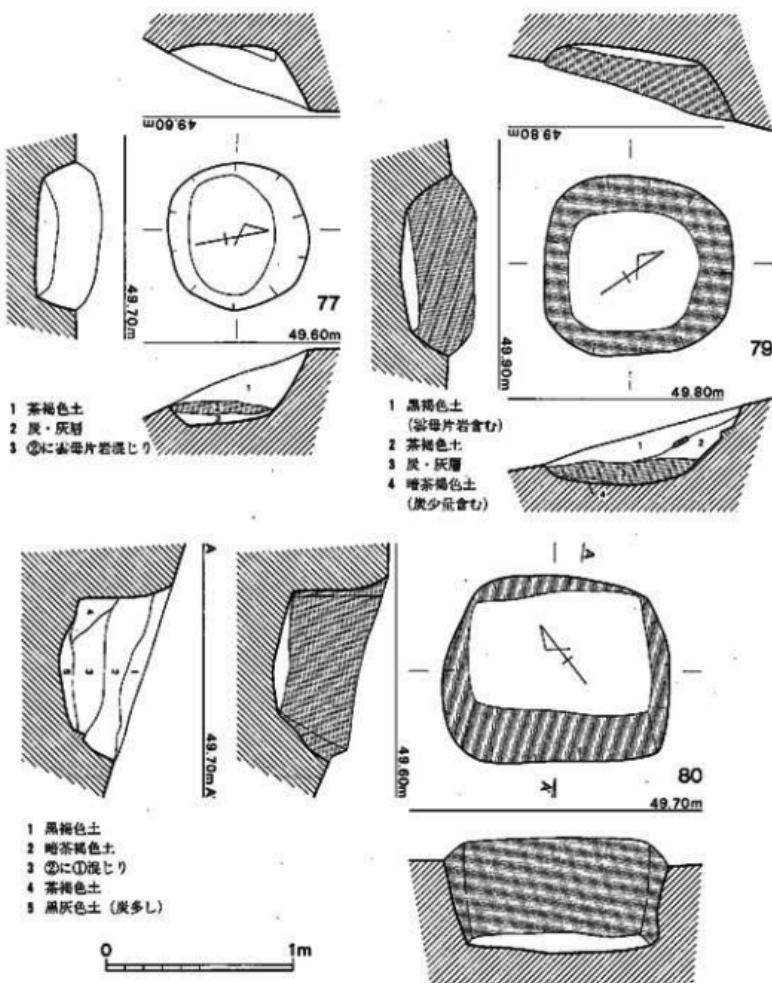
78号火葬墓の0.7m南側に位置し、P群に属する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸94cm、深さ40cmを測る。壁面はやや加熱を受けており、埋土下位には炭・灰の堆積がみられた。炭が約70g出土したが、土器の出土はなかった。

80号火葬墓（火葬土壙）（図版43-2、第75図）

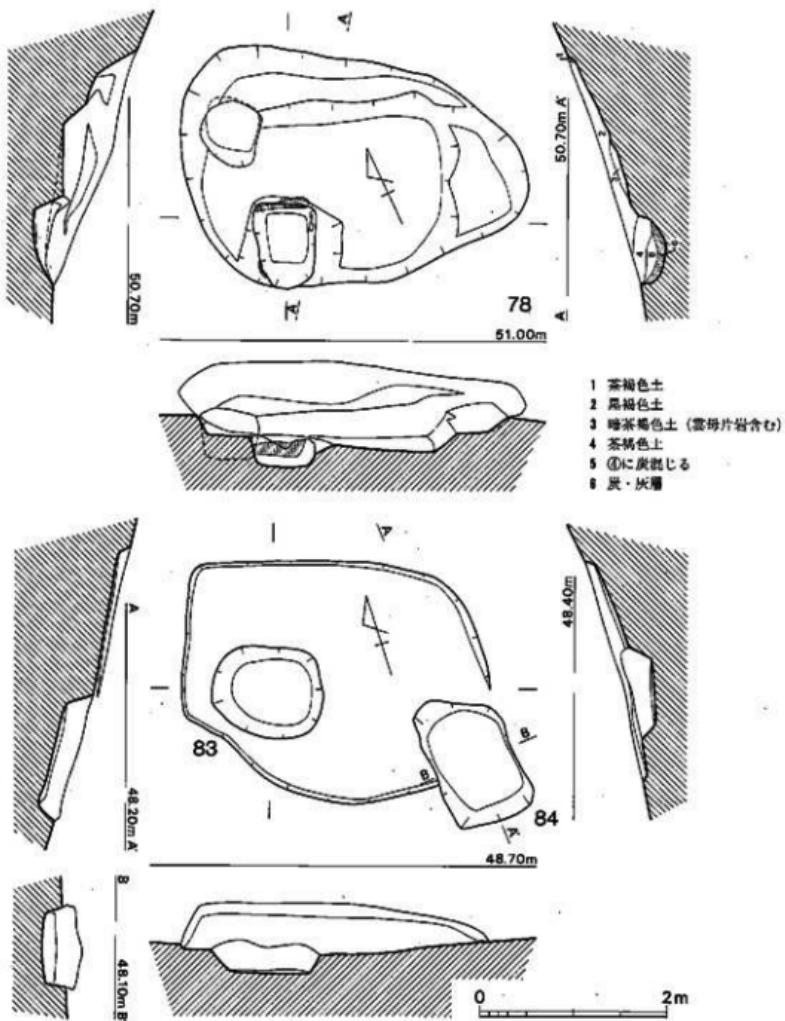
79号火葬墓の5.7m北西側に位置し、P群に属する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸122cm、短軸99cmを測る。当土壙は、岩盤まで掘り込んでおり、深さは61cmを測る。四壁は加熱を受け赤変している。埋土下位には炭・灰層がみられ、約55gの炭が出土した。土器の出土はなかった。

81号火葬墓（火葬土壙）（図版44-1、第74図）

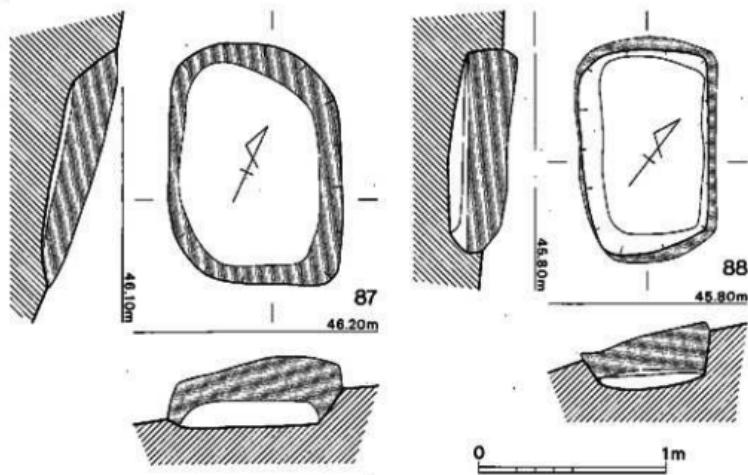
80号火葬土壙の2.3m南側に位置し、P群に属する。平面形は不整円形を呈し、長軸128cm、短軸116cm、深さ40cmを測る。東側斜面には地山の屈曲がみられ、或はテラスが存在したものか。壁面はあまり焼けていないが、規模からして火葬土壙と判断した。埋土下位より炭が約190g出土したが、土器の出土はなかった。



第75図 火葬土壤(77・79・80号)実測図⑤(1/30)



第78図 火葬土壙（78・83・84号）実測図③（1/60）



第 77 図 火葬土壙 (87・88号) 実測図⑦ (1/30)

83号火葬墓（火葬土壙）（図版44-3, 第76図）

82号火葬墓の0.6m東側に位置し、P群に位置する。丘陵斜面側に330×260cmのテラスを有し、そのやや西側に東西長120cm、南北長97cm、深さ32cmの土壙を掘り込む。土壙の壁面は加熱により赤変しており、埋土下位には炭・灰の堆積が見られた。埋土中より約100gの炭が出土したのみで、土器の出土はなかった。

84号火葬墓（火葬土壙）（図版45-1, 第76図）

83号火葬土壙のテラスを切って位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、南北長138cm、東西長86cm、深さ28cmを測る。壁面はさほど焼けてはいなかったが、埋土下位には炭・灰層がかなり堆積しており、埋土中から約1.150gもの炭が検出した。土器の出土はなかった。

87号火葬墓（火葬土壙）（図版46-1, 第77図）

84号火葬土壙の3.5m南側に位置し、R群に属する。平面形は隅丸長方形を呈し、南北長128cm、東西長92cm、深さ36cmを測る。壁面は加熱を受けて赤変していた。埋土下位に炭・灰の堆積がみられ、約155gの炭が出土した。土器の出土はなかった。

88号火葬墓（火葬土壙）（図版46-2、第77図）

調査区東側の最南端に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸107cm、短軸65cmを測る。岩盤まで掘り込まれ、深さは35cmを測る。壁面は強い加熱により赤変し、壁の内面2cmまで焼けていた。埋土上層は褐色砂質土で、下位は炭・焼土層で、約660gの炭が出土した。

5) 火葬墓出土土器（図版82-1、第78図）

ここで取り上げる土器は、下層遺構の混入品で、直接火葬墓に伴わない土器であるが、参考までに図示した。

23号火葬墓（8）

8は須恵器口縁部破片で、横瓶もしくは広口壺の口縁部になるか。

28号火葬墓（1・4～6・9・11・12）

1は須恵器坏蓋で、口縁部内面にかえりを有する。4は須恵器坏身で、やや高めの高台を貼付する。5・6は坏身の口縁部破片。9・11は高坏の脚部破片。12は土師器环で、口径18.4cm。

32号火葬墓（16・17）

16は土師器壺で、周溝の出土。口縁部は大きく開く。17は鉢で、口縁部は水平気味に開く。

33号火葬墓（13）

13は土師器坏で、墓壙内の出土。復原口径12.6cmを測る。

40号火葬墓（2）

2は須恵器坏蓋で、周溝の出土。口縁部内面にかえりを有する。復原口径は14.0cmを測る。

42号火葬墓（3）

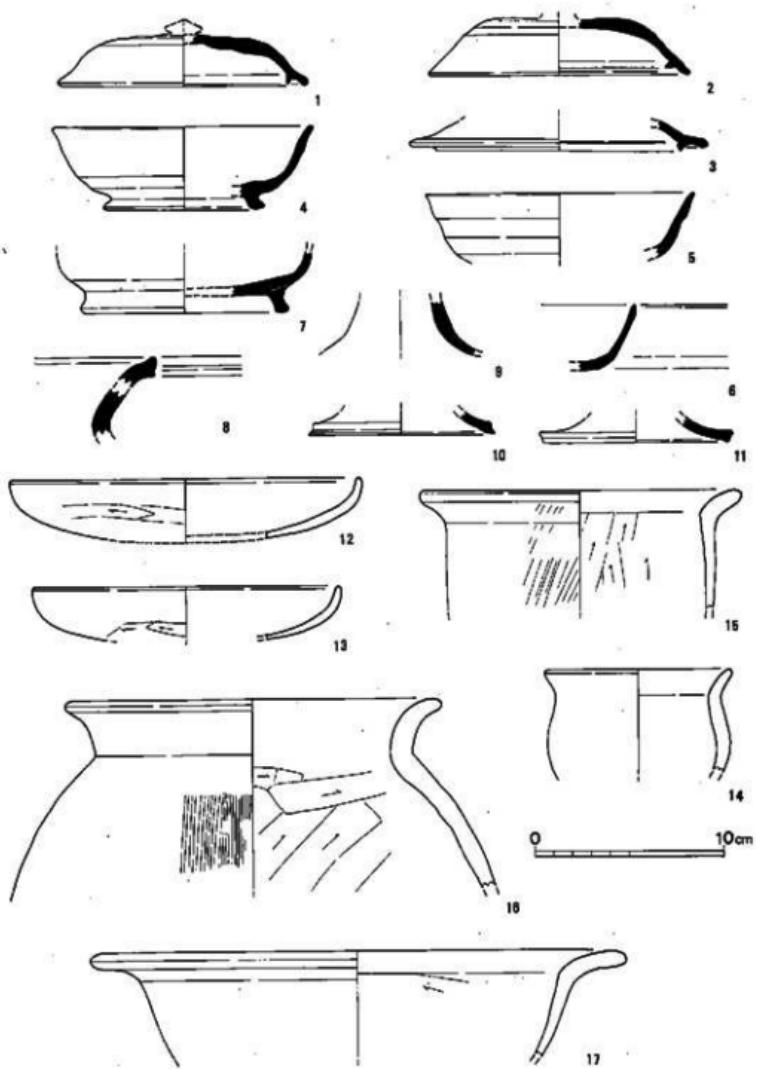
3は須恵器坏蓋で、周溝の出土。器高が高く、かえりもしっかりしている。

43号火葬墓（10・14）

10は須恵器高坏脚部の破片。14は土師器碗で、周溝の出土。口縁部はS字形を呈する。

59号火葬墓（15）

土師器小型壺で、周溝の出土。口縁部は外方に大きく開く。



第 78 図 火葬墓出土土器実測図 (1/3)

表1 大追遺跡火葬墓・火葬土塚一覧表①

(単位: cm, g)

番号	墓塚平面形	規模(墓塚)			規模(周溝)			骨 (g)	炭 (g)	類別	群	備考
		長軸	短軸	深さ	長さ	幅	深さ					
1	円形	40	α	8	510	80	14	+ α	20	I a	A	墓塚内から土師器甕出土
2	楕円形	74	43	18				+ α	20	II a	A	
3	隅丸方形	75	63	31				+ α	340	II a		
4	隅丸方形	79	78	27					130	II a		
5	円形	50	50	65	265	50	12	200	510	III	A	土師器壺・鉄釘出土
6	円形	58	57	78	265	50	12	460	660	III	A	
7	円形	53	52	69	265	50	12	300	510	III	A	鉄釘出土
8	円形	40	40	16				+ α	+ α	II a	A	
9	円形	36	35	15				+ α	10	II a		
10	円形	57	52	23	174	35	20	100	370	I a	B	周溝内から須恵器壺蓋出土
11	隅丸方形	48	45	72				+ α	210	II a	B	
12	円形	58	54	56	152	47	36	+ α	+ α	I a	B	
13	長円形	77	54	18				+ α	40	II a	B	
14	不整形	55	31	42				+ α	70	II a	B	
15	不整長円形	66	50	25				+ α	50	II a	K	
16	楕円形	132	96	49				+ α	210		K	火葬土塚
17	長方形	129	80	32					170		K	火葬土塚
18	不整長円形	38	20	9					40	II a	K	
19	円形	58	54	26	210	44	42	+ α	860	I a	C	周溝から土師器壺・盤出土
20	円形	50	47	27	230	32	15	50	405	I a	C	
21	隅丸長方形	73	63	70	156	32	28	705	80	I b	C	骨蔵器あり
22	円形	47	46	18	116	86	36	+ α	60	I a	C	周溝内から土師器壺出土
23	隅丸方形	140	140	25	310	70	30	230	2670		C	火葬土塚・土師器壺出土
24	円形	42	42	27	292	64	48	1020	250	I b	C	骨蔵器あり
25	不整長円形	80	58	30				+ α	75	II a	C	

表2 大迫遺跡火葬墓・火葬土壙一覧表②

(単位: cm, g)

番号	墓壙平面形	規模(墓壙)			規模(周溝)			骨 (g)	炭 (g)	類別	群	備 考
		長軸	短軸	深さ	長さ	幅	深さ					
26	円 形	50	43	17	452	45	36	+α	+α	I a	E	周溝内から須恵器壊出土
27	長円形	50	45	12	152	72	55	50	+α	I a	E	28号墓を切る
28	?				290	73	36			I	E	須恵器壊・土師器壊出土
29	長円形	50	40	24	280	70	65	+α	+α	I a	E	28・30号墓を切る
30	?				150	88	14			I	E	29・31号墓に切られる
31	?				208	53	23			I	E	30号墓を切る
32	?				130	85	37			I	E	31号墓を切る
33	円 形	36	35	21	146	62	43	+α	+α	I a	E	周溝内から土師器壊出土
34	円 形	40	32	32	92	95	12	+α		I a	E	周溝内より土師器壊出土
35	円 形	50	50	26	100	50	10	+α	+α	I a	E	周溝内から土師器壊出土
36	隅丸方形	66	62	45	326	46	21	350	2870	I a	E	
37	隅丸方形	170	115	36				+α	530	IIc	E	墓壙内から壊・鉄釘出土
38	?							+α		IIb	D	骨壺器あり
39	円 形	52	43	45				390	160	IIa	D	
40	円 形	78	75	36	220	82	26	+α	1140	I a	F	周溝内から土師器壊出土
41	円 形	42	39	17	190	43	22	+α	+α	I a	F	
42	長円形	52	41	20	102	80	34	+α	+α	I a	F	
43	椿円形	81	66	25	180	72	22	50	795	I a	F	墓壙内から鉄釘出土
44	隅丸方形	82	73	34	308	118	26	+α	420	I a	F	墓壙・周溝から土師器出土
45	円 形	52	51	23				680	30	IIb	F	骨壺器あり
46	円 形	35	35	27				+α	+α	IIa		
47	隅丸方形	52	40+α	16					10	IIa	L	
48	椿円形	138	106	44					95		L	火葬土壙
49	?				183	40	21			I	L	周溝内から土師器出土
50	?				120	58	40			I		

表3 大迫遺跡火葬墓・火葬土壙一覧表③

(単位: cm, g)

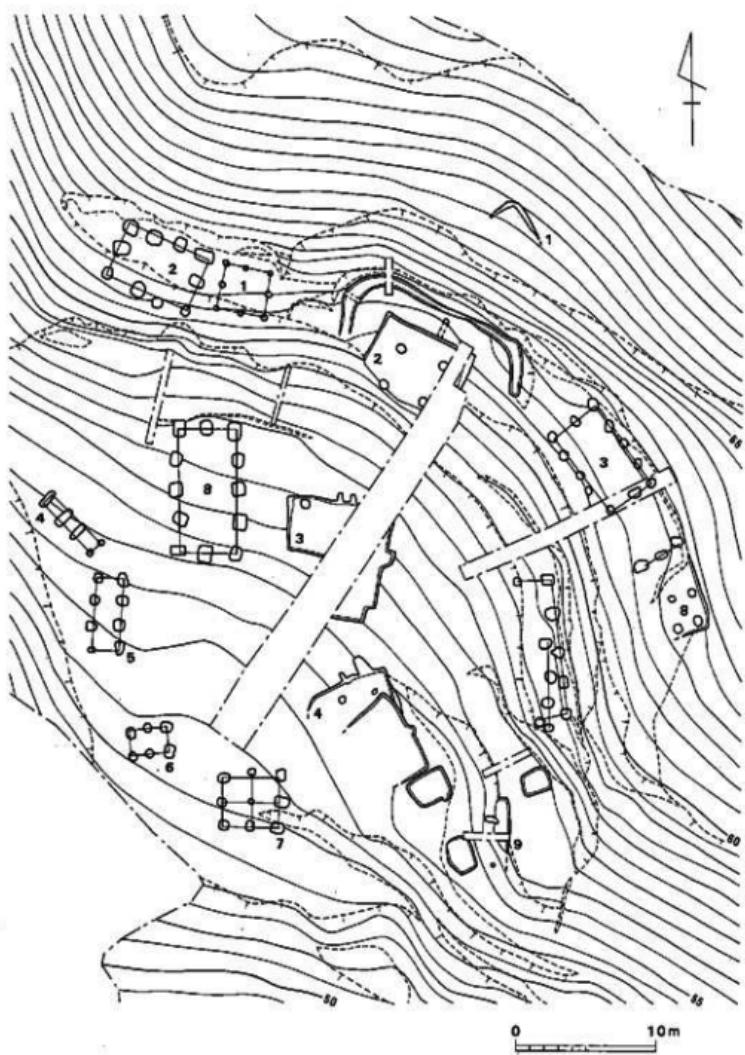
番号	墓壙平面形	規模(墓壙)			規模(周溝)			骨 (g)	炭 (g)	類別	群	備 考
		長軸	短軸	深さ	長さ	幅	深さ					
51	隅丸方形	71	65	29	294	44	16	680	20	I e	H	骨蔵器あり
52	不整円形	57	51	9				120		II b	H	骨蔵器あり
53	円 形	46	46	15				+α	10	II a	H	
54	隅丸方形	62+α	63	41				20	50	II a	H	墓壙内から土師器出土
55	円 形	37	35	23				+α	40	II a	H	
56								+α		II b?	G	骨蔵器あり
57	円 形	64	62	45	268	66	40	280	35	I d	G	
58	円 形	27	27	14	193	48	8	60	+α	I b	G	骨蔵器あり
59	隅丸方形	67	67	32	210	103	66	+α	750	I a	G	土師器坏出土
60	不整円形	73	58	18					80	II a	I	
61	不整方形	92	78	42	330	76	50	90	810	I c	H	墓壙内から鉄釘出土
62	円 形	46	45	10					180	II a	I	
63	不整円形	42	40	16				+α	II a	M		
64	長円形	71	50+α	17				+α	II a	M		
65	長円形	73	63	22					20	II a	M	
66	隅丸方形	67	56	15					60		O	火葬土壙
67	隅丸方形	90	76	30					1000		O	火葬土壙
68	長円形	80	66	25					40	II a	O	
69	隅丸長方形	111	91	32	146	96	35	+α	15		O	火葬土壙, テラスあり
70	長円形	50	45	17					40	II a	N	
71	円 形	57	55	26				300	10	II a	N	土鏡・銅鏡出土
72	不整長円形	87	61	25					30	II a		
73	隅丸長方形	100	50+α	29					50		Q	火葬土壙
74	長円形	75	57	32				+α	40	II a	Q	
75	長方形	97	84	31					85		P	火葬土壙

表4 大追遺跡火葬墓・火葬土壙一覧表④

(単位: cm, g)

番号	墓壙平面形	規模(墓壙)			規模(周溝)			骨 (g)	炭 (g)	類別	群	備 考
		長軸	短軸	深さ	長さ	幅	深さ					
76	隅丸長方形	112	70	40				+α		P	火葬土壙	
77	円 形	78	74	34					180	Q	火葬土壙	
78	長方形	90	70	38	374	252	81		110	P	火葬土壙, テラスあり	
79	隅丸方形	100	94	40					70	P	火葬土壙	
80	隅丸長方形	122	99	61					55	P	火葬土壙	
81	不整円形	128	116	40					190	P	火葬土壙	
82	不整円形	60	48	14					40	IIa	R	
83	長円形	120	97	32	330	260	42		100	R	火葬土壙, テラスあり	
84	隅丸長方形	138	86	28					1150	R	火葬土壙	
85	円 形	41	39	19					10	IIa	R	
86	円 形	54	47	14					40	IIa	R	
87	隅丸長方形	128	92	36					155	R	火葬土壙	
88	隅丸長方形	107	65	35					660		火葬土壙	
89	円 形	60	59	10				+α	IIa	J		
90	円 形	42	41	30				+α	IIa	J		
91	円 形	29	25	46				370	+α	IIa	D	
92	?							+α		E	31・32号墓下層で検出	
2-1	円 形	69	63	15				10		IIb	Z	土師器出土
2-2	隅丸方形	93	79	42							Z	火葬土壙
2-3	長方形?	62+α	72	30							Z	火葬土壙

※火葬骨・炭は、土をふるいにかけて乾燥させた重量。



第 79 図 建物跡・住居跡配置図 (1/400)

IV 火葬墓群下層遺構の調査

1. 遺構の概要

大追遺跡では、調査区中央の丘陵谷あいに群集するD～J群火葬墓の下層から竪穴式住居跡4軒・掘立柱建物跡8棟・竪穴4基・土壙3基等を検出した。何れも、火葬墓群より先行することは明白であるが、火葬墓群は住居跡・建物群築造時の階段状平坦面を利用した造墓であることが判明した。また、調査区西端部で検出した3軒の住居跡は、下層住居跡より古い時期の住居跡であるが、ここで取り上げる。

2. 掘立柱建物跡

1号建物跡（図版50・51-1、第80図）

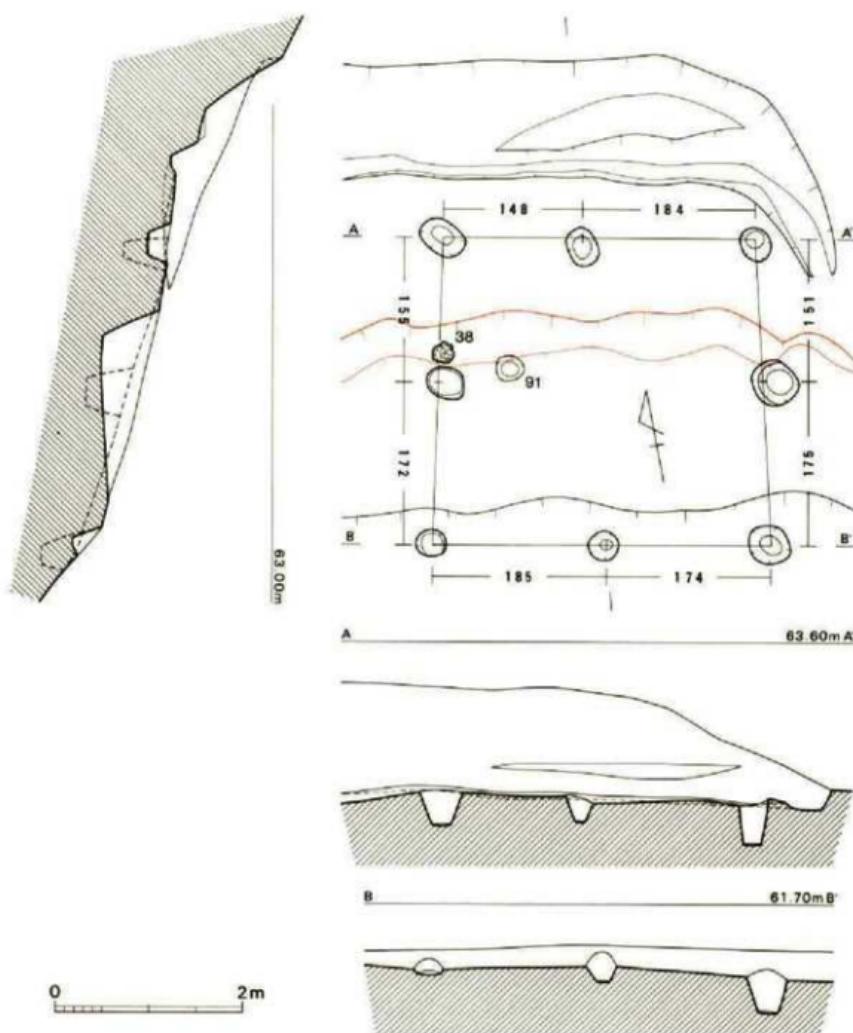
38・91号火葬墓の下層で検出した建物跡である。斜面北側（山側）を長さ17m×幅5m程カットして平坦面を造成し、その平坦面の東側に1号建物跡が、西側に2号建物跡が位置する。建物の南部下層には、長さ6.7m、幅2.3m、深さ0.6mの段があり、それを埋めた後に東側梁行2間（3.26m）×南側桁行2間（3.59m）の建物跡を築造している。

また、平坦面の北側には幅20cm、深さ10cmの浅い溝を掘り、排水施設としている。柱の掘方は円形・長円形を呈し、径は32～47cmで、30～56cm程岩盤に掘り込んでいる。建物跡の埋土は暗褐色土で、埋土中から土師器甕・坏片が出土しているが、柱穴からの出土遺物はなかった。梁行方位は、N11°30'Eを示す。

2号建物跡（図版51、第81図）

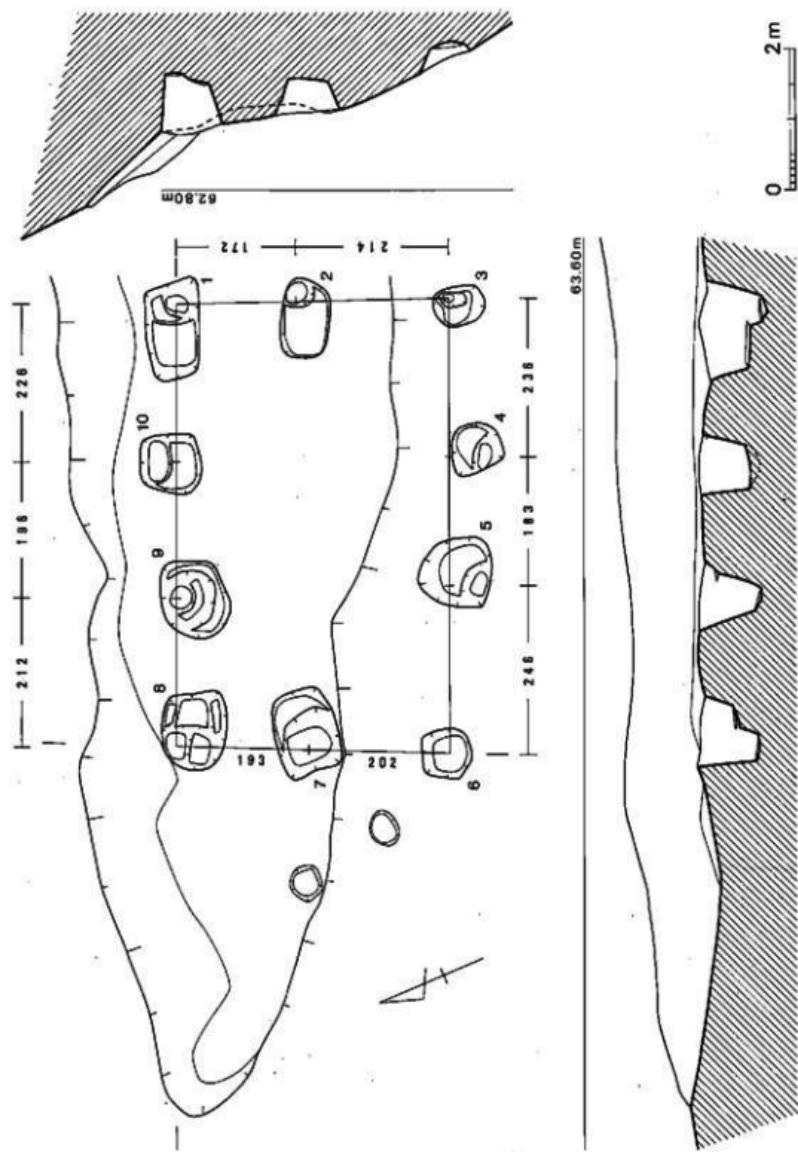
1号建物跡の0.7m西側で、D群平坦面の最西端に位置する。建物跡は、梁行2間（3.93m）×桁行3間（6.5m）の規模で、梁行の柱間平均は2.12m、桁行の柱間平均は2.1mを測る。柱穴の掘方は隅丸方（長方）形を呈し、一辺0.52～1.3m、深さ0.72～0.96mで、岩盤に掘り込む。掘方の埋土は赤褐色土と岩盤の混合土で、土層観察による柱痕の太さは16cm程であった。

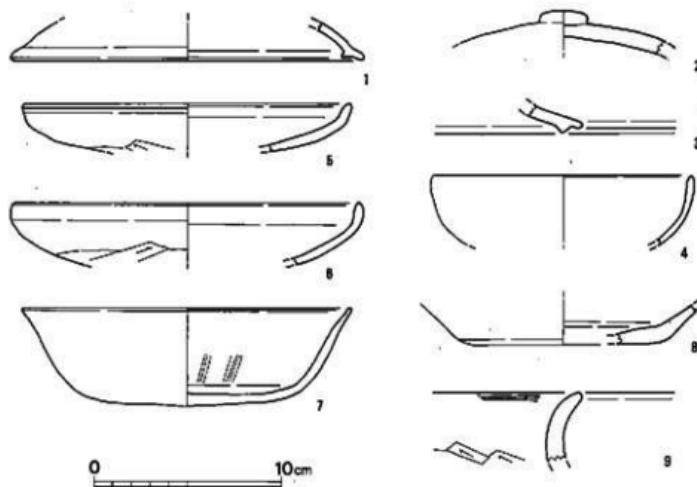
梁行方位はN24°30'Eを示し、1号建物跡とは方向を異にするが、同一平坦面上に位置することから同時存在とみなせよう。平坦面の埋土は、1号建物跡同様、暗褐色土で、土師器坏等が出土した。



第 80 図 1号建物跡実測図 (1/60)

第 81 図 2号植物床実測図 (1/80)





第82図 2号建物跡出土土器実測図 (1/3)

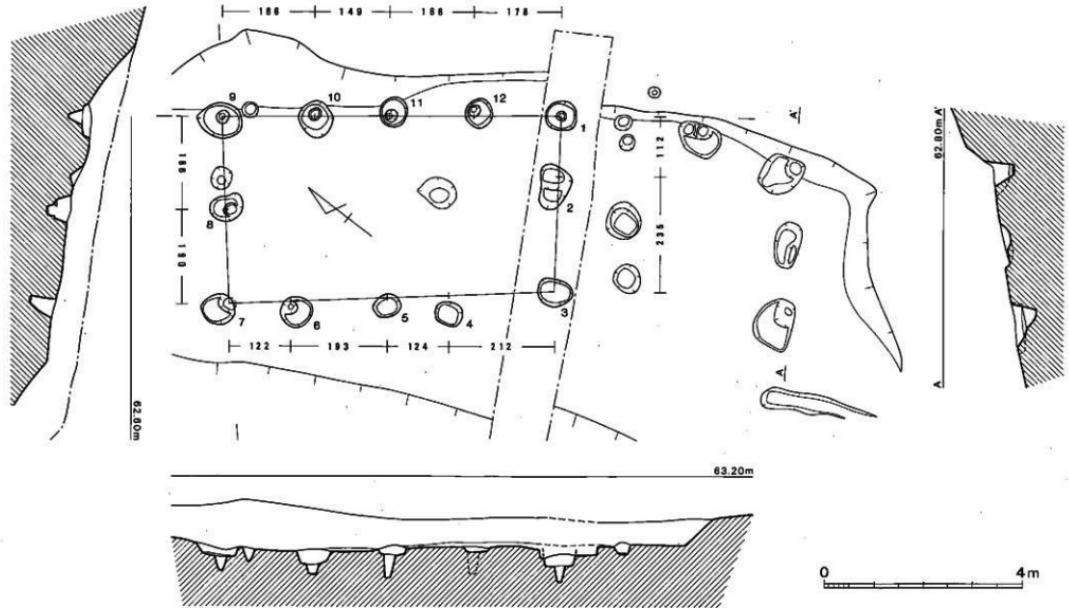
出土遺物 (図版82-2, 第82図)

1~3は土器器坏蓋で、1・3は口縁部、2は天井部破片である。1は口縁部内面にかえりを有し、口径18.8cmに復原した。器面調整はヨコナデで、胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、淡赤橙色を呈する。P-1の出土である。2は天井部にボタン状のつまみを付しておおり、つまみ径2.5cmを測る。1・2号建物跡埋土中の出土である。3は口縁部内面にかえりを有し、かえりの先端は口唇部より突出している。調整はヨコナデで、内外面に黒斑がみられる。P-1上層より出土した。

4~6は坏で、4は深め、5・6は浅めの器形になろう。4は残高3.7cm、復原口径13.6cmで、口唇部は丸く納める。焼成は軟質で、赤橙色を呈する。5の口径は17.4cm、6は18.4cmに復原した。器面調整は、何れも口縁部ナデ、外面へラケズリである。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、5が赤橙色、6は黄橙色を呈する。4・5はP-1、6は埋土中の出土である。

7は器高5.2cm、口径17.6cmで、口唇部内面には小さな段を有する。内面はヘラミガキで、外面は摩滅のため不明であるが、横方向のミガキになろう。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、内外面とも橙褐色を呈する。P-10の出土である。

8は底部破片で、底径11.0cmに復原した。埋土中の出土である。9は蓋の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。埋土中から出土した。



第 83 図 3号建物跡実測図 (1/80)

3号建物跡（図版52-1、第83図）

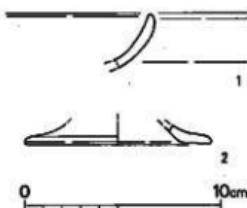
2・3号竪穴の0.6m下層で検出した建物跡で、梁行2間（3.76m）×桁行4間（6.81m）の規模を有する。梁行の柱間平均は1.81m、桁行の柱間平均は1.66mを測る。柱穴の掘方は円形を呈し、径0.53～0.72m、深さ0.5～0.6mで、柱底は12cm程であった。妻側の柱穴は谷側に傾斜している。桁行方位はN36°30'Wを示す。整地層・柱穴埋土中から土師器が出土した。

出土遺物（第84図）

1は土師器壺の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。器面調整はナデにより、外側の一部にヘラケズリがみられる。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は軟質で、黄橙色を呈する。P-8の出土である。

2は高环の脚部片で、脚径は10.0cmに復原した。調整はナデによる。胎土に石英・赤褐色粒を含む。P-7の出土である。

その他に、整地層から須恵器・土師器が出土しているが、後述したい。



第84図 3号建物跡出土土器実測図（1/3）

4号建物跡（図版52-2・53、第85図）

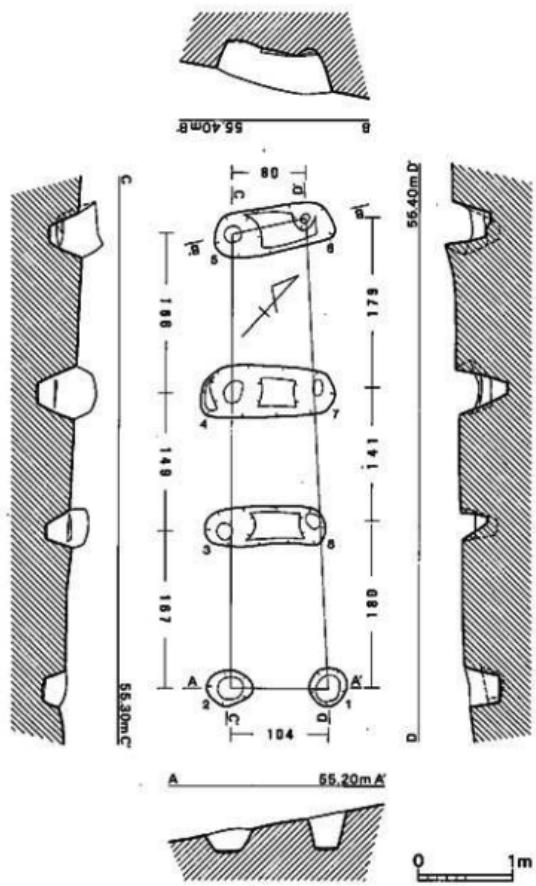
調査区中央の下段平坦面の西側に位置する。梁行1間（1.04m）×桁行3間（5.0m）の建物跡で、西側のP3～8の6本は布掘りになっている。P1・2は布掘りではないが、本来他のピット同様布掘りであった可能性を有する。

南側桁行の柱間寸法は、P2-3間1.67m、P3-4間1.49m、P4-5間1.66mを測り、P3-4間が若干短くなっている。柱穴の深さは、南西側に傾斜しているため0.25～0.42mとばらつきがあるが、柱穴底はほぼ水平である。柱底は16～22cm程であった。北桁行方位はN45°30'Wを示す。P-5・7・8より土師器壺片が出土しているが、小破片であるため図示できない。

5号建物跡（図版54-1、第86図）

4号建物跡の1.4m南東側に位置する。梁行1間（南側で1.93m）×桁行3間（西側で5.27m）の南北棟の建物跡である。梁行の柱間平均は1.82m、桁行の柱間平均は1.7mを測る。柱穴の掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.46～0.75mを測る。深さは削平により0.2～0.5mとばらつきがあるが、平側の柱穴底は谷側に傾斜している。掘方の埋土は茶褐色土を主体とし、土層観察により6本の柱底を確認したが、その大きさは12～16cm程で、掘方に比して貧弱であった。

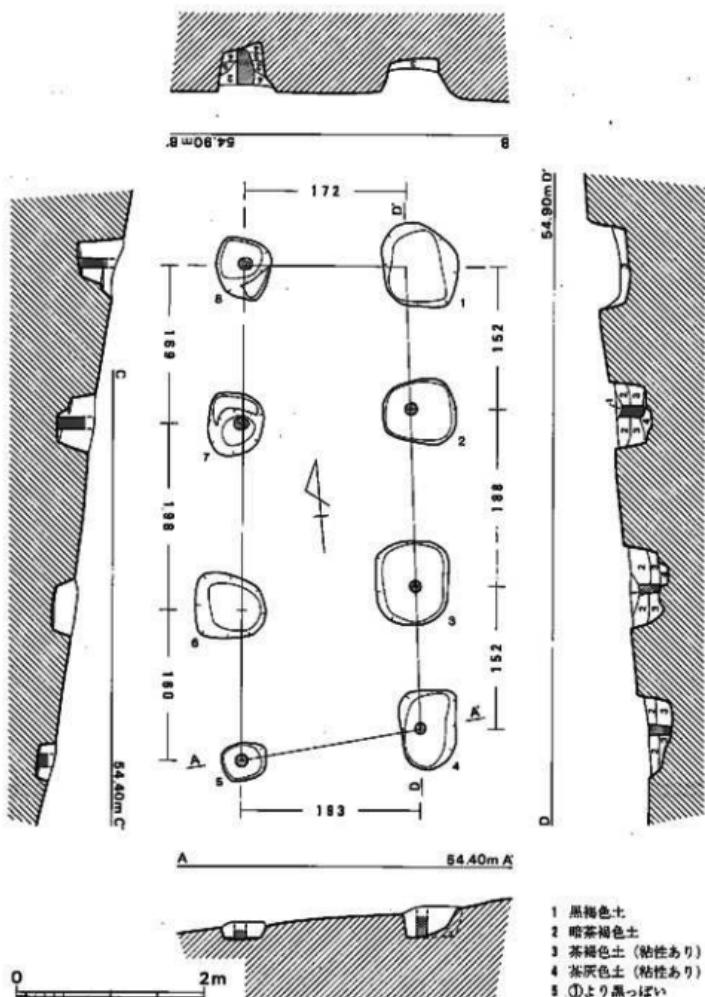
梁行方位はN3°30'Eを示し、北を意識した配置と言えよう。遺物は掘方埋土中より須恵器・土師器壺片が出土した。



第 85 図 4号建物跡実測図 (1/60)

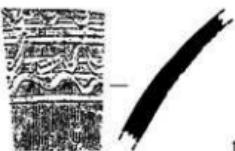
出土遺物 (第87図)

1は須恵器甕の口縁部小片である。外面は縦方向のハケ目の後に稚拙なヘラ書き波状文を二段に施す。内面はナデ調整による。胎土に長石・石英を含む。焼成は堅緻で、色調は紫灰色を呈する。内面には暗緑灰色の灰が厚く被る。P-3の出土である。



第 86 図 5号建物跡実測図 (1/60)

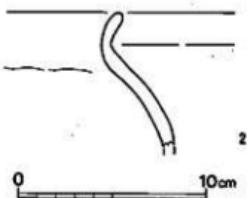
2は土師器壺の破片で、口縁部は短く立上がる。口唇部は丸く納める。頸部に縦りがあるため胴部が張るようである。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は軟質で、色調は黄橙色を呈する。P-1の出土である。



6号建物跡（図版54-2、第88図）

5号建物跡の5.4m南側に位置する。梁行1間(2.05m)×桁行3間(2.92m)の東西棟の建物跡で、梁行の柱間平均は1.9m、桁行の柱間平均は1.4mを測る。柱穴の掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.52~0.96m、深さ0.22~0.54mを測る。

柱痕は5本分確認したが、径は12~18cm程で、他の建物跡同様、掘方に比して貧弱である。梁行方位はN7°Wを示す。P-1・2から土師器壺の破片が出土したが、小片であるため図示できない。



第57図 5号建物跡出土土器
実測図(1/3)

7号建物跡（図版53-1、第89図）

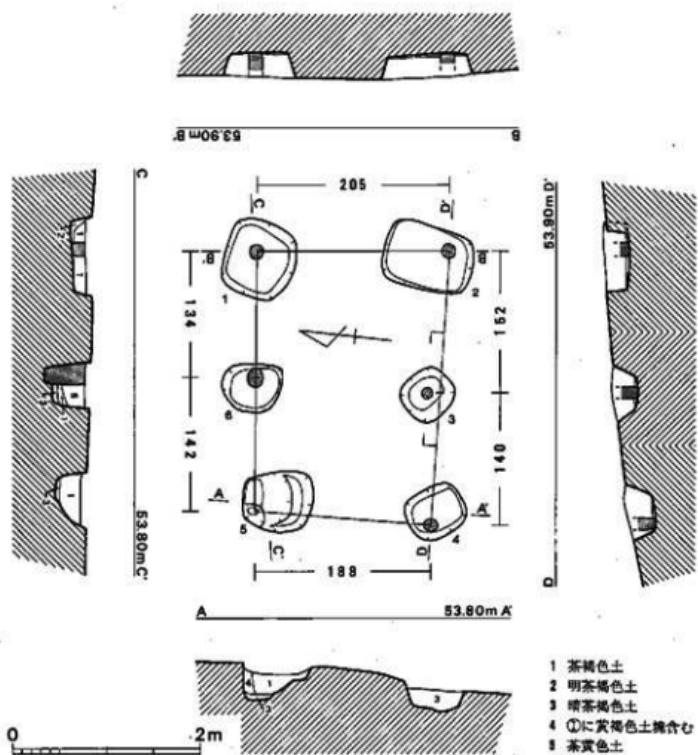
6号建物跡の3.5m南東側で、調査区中央平坦面の最南端に位置する。梁行2間(3.5m)×桁行2間(4.21m)の南北棟の建物跡で、梁行の柱間平均は1.75m、桁行の柱間平均は2.14mを測る。柱穴の掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.54~1.1mを測る。深さは削平により28~62cmとばらつきがあるが、柱穴底は谷側に傾斜している。柱痕は6本分確認したが、径18~24cm程であった。

梁行方位は、N0°3'Eを示し、北を意識した配置であろう。柱穴埋土中より須恵器・土師器片が出土したもの実測に耐えない。また、P-3・4埋土上位より角礫が出土した。

8号建物跡（図版55-1、第90図）

3号住居跡の3m西側で検出した。大迫遺跡の中では最も大規模で、梁行2間(4.03m)×桁行4間(8.88m)の南北棟の建物跡である。梁行の柱間平均は2.02m、桁行の柱間平均は2.19mを測る。柱穴の掘方は長方形を呈し、一辺0.7~1.1m、深さは0.75mとかなり深い。柱痕は9本確認したが、径は16~28cmと掘方に比して貧弱である。3・5号建物跡同様、平側の柱穴底は谷側に傾斜している。これは、杷木町志波に立地する杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡検出の2間×6間の建物跡に共通した特徴である。

桁行方位は、N0°30'Eを示し、7号建物跡と軸を等しくする。遺物は柱穴埋土中より須恵器壺蓋・土師器壺が出土しているが、4m東側の段落ち出土品と接合関係にある。また、火葬墓は



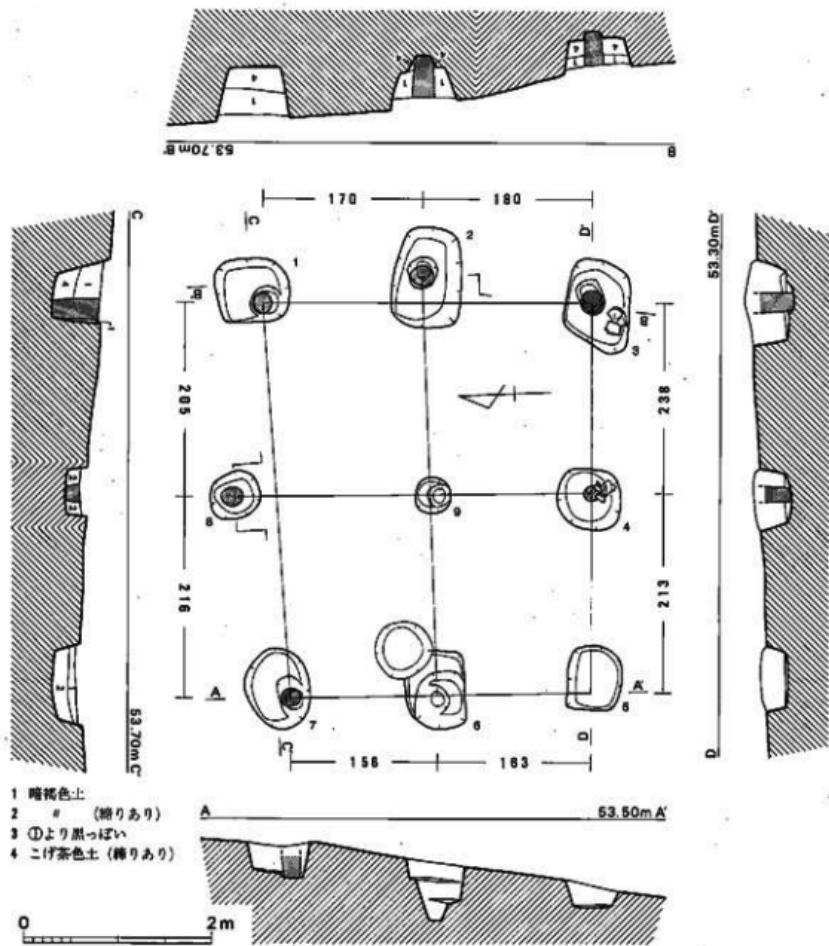
第 88 図 6号建物跡実測図 (1/60)

当建物跡に0.6m程の盛土を行い、埋葬していた。

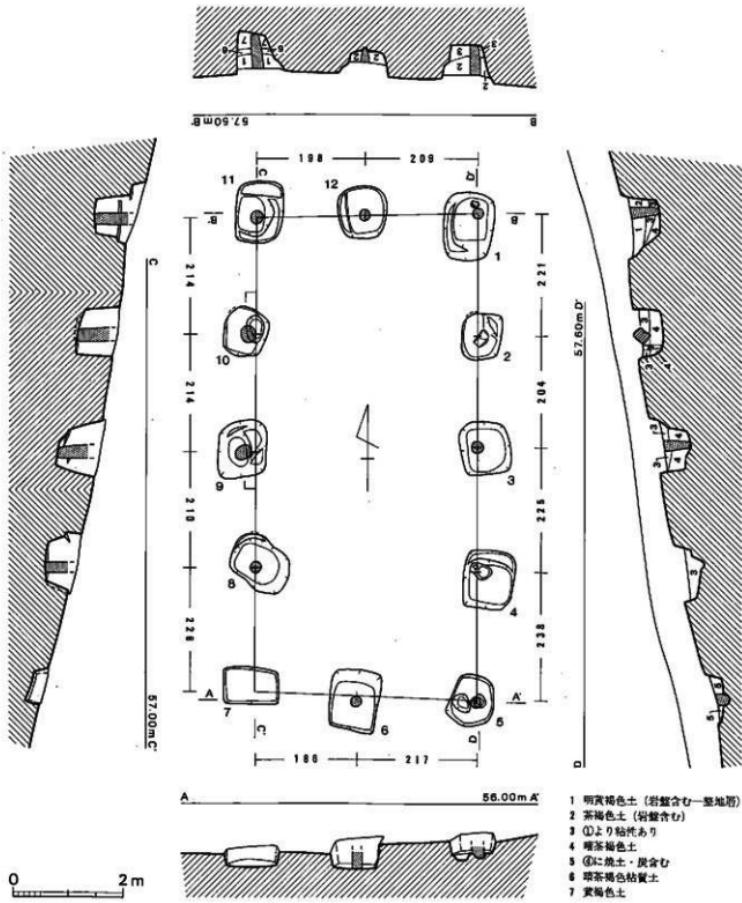
出土遺物 (図版82-3, 第91図)

1・2は須恵器壺蓋で、1がP-1・2及び8号建物跡東側段落ち出土で、2はP-1出土品である。1は残高2.65cmで、つまみ部を欠く。口縁部内面にかえりを有し、口径は14.4cm、かえり径は11.6cmに復原した。器面調整は、口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリによる。胎土に長石・石英を含む。焼成は堅緻で、内面青灰色、外面暗灰色を呈する。また、天井部外面には線刻による格子状のヘラ記号を施す。

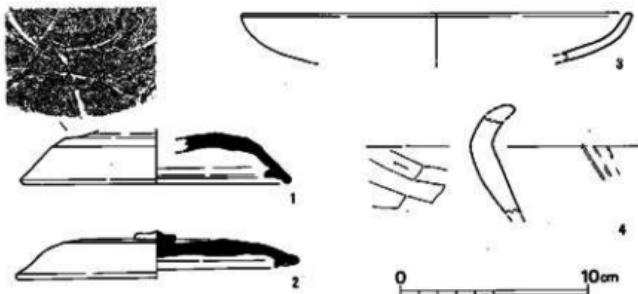
2は完形品で、器高2.4cm、口径15.1cm、かえり径12.6cmを測る。天井部は低めで、その中央



第 89 図 7号建物跡実測図 (1/60)



第 96 図 8号建物跡実測図 (1/80)



第 81 図 8号建物跡出土土器実測図 (1/3)

に偏平な擬宝珠形のつまみを付している。口縁部回転ナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面不整方向ナデ調整による。胎土に砂粒を含む。焼成は堅緻で、色調は内面青灰色、外面青灰色を呈する。

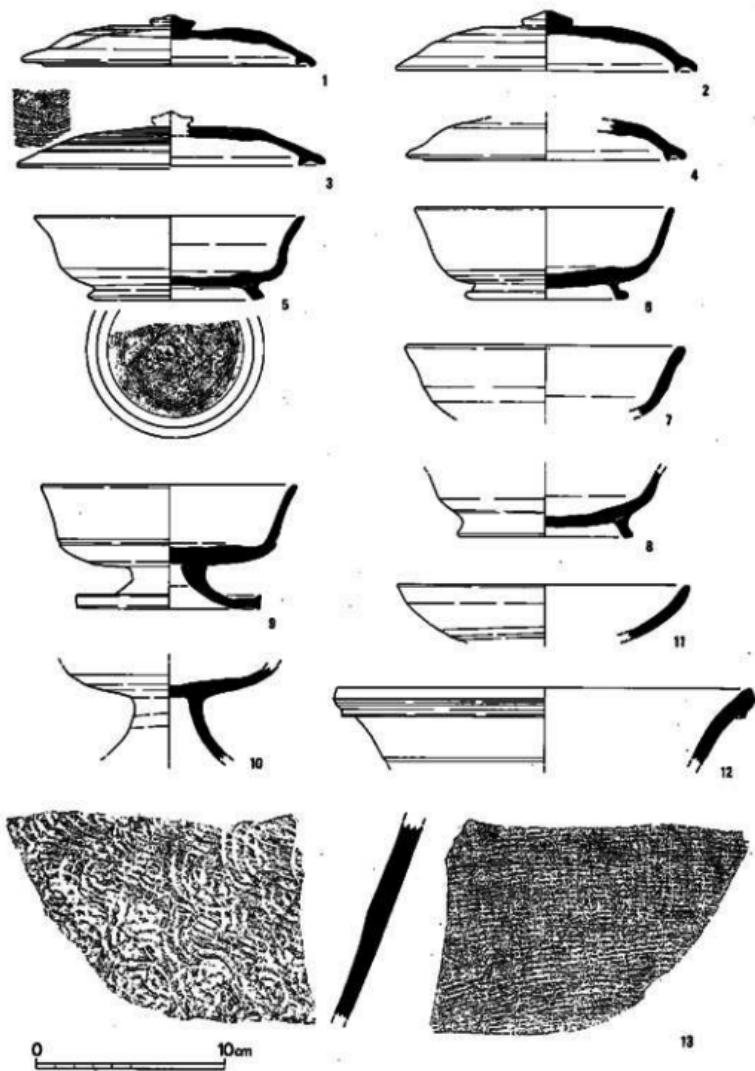
3は土師器環で、口径は20.6cmに復原した。口縁部は外方に立ち、口唇部は丸く納める。調整はナデによる。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、内外面とも暗褐色を呈する。P-4 埋土中の出土。4は土師器壺の頸部破片である。外面はタタキ→ナデ？、内面はヘラケズリによる。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。P-10より出土した。

8号建物跡東側段落ち出土土器（図版82~4、第92・93図）

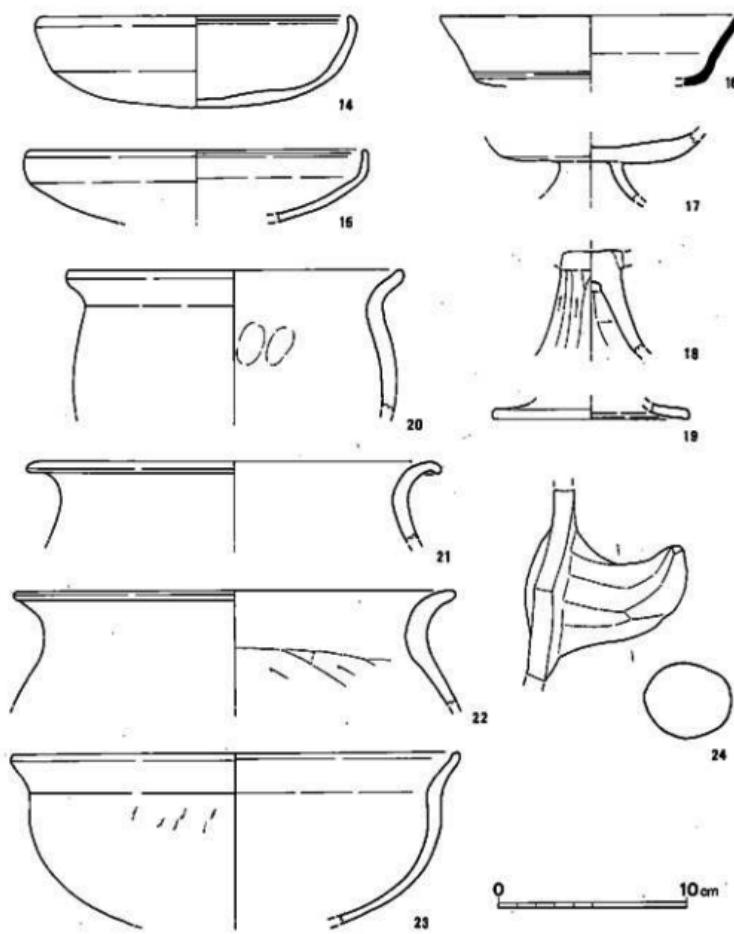
ここで取り上げる土器は、8号建物跡東側で、2号住居跡の位置するテラスの下段にあたる。1~13・16は須恵器で、14・15・17~24は土師器である。1~4はかえりを有する环蓋で、1は器高2.6cm、口径15.7cm、かえり径13.5cmを測る。天井部に偏平な擬宝珠形のつまみを貼付する。外面には線刻状のヘラ記号がある。2は器高3.1cm、復原口径16.0cm、かえり径13.6cmを測る。つまみは擬宝珠形を呈する。4号住居跡床面及び段落ち東コーナー出土品と接合関係にある。3はつまみを欠く。口径16.3cm、かえり径13.8cmを測り、かえりの端部と口唇部が同じ高さである。また、外天井部には、「キ」字状のヘラ記号がある。4もつまみを欠き、口径は14.8cmに復原した。

何れも、調整は口縁部回転ナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面不整方向ナデで、3の外天井部はカキ目 (6条/cm) による。胎土に長石・石英を含む。2はやや軟質の焼成であるが、それ以外は堅緻で、色調は1が青灰色、2は肌色、3は暗青灰色、4は灰青色を呈する。

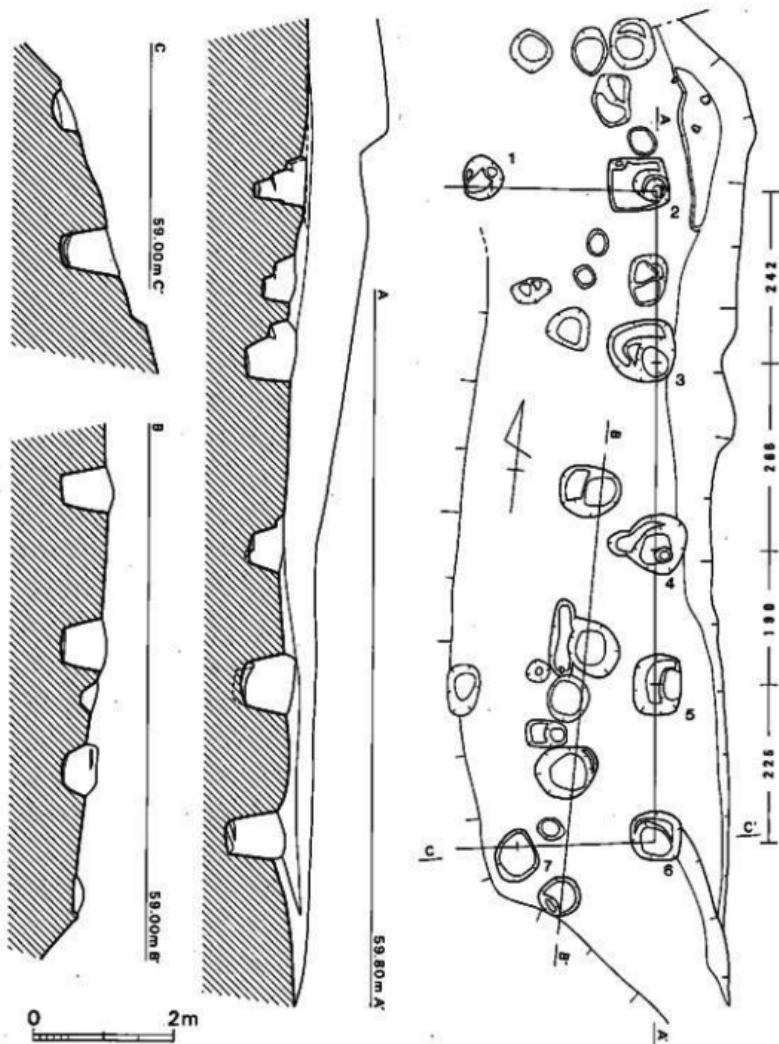
5~6・8は高台を有する环身で、5は器高4.4cm、口径14.4cm、高台径9.4cmを測る。口縁部は外反気味で、口唇部はシャープである。高台は0.9cmと高く、内端部で接地する。また、外底面には線刻状のヘラ記号があり、1の环蓋とセット関係をなす。6は器高4.8cm、口径13.8cm、高台径8



第 92 図 8号建物跡東側段落ち出土土器実測図① (1/3)



第 93 図 8 号建物跡東側陥落出土土器実測図② (1/3)



第 94 図 中段テラス柱穴群実測図 (1/80)

.8cmを測る。口縁部はやや開きながら立上がり、口唇部は丸く納める。高台は高めで、内端部で接地する。7は口縁部の破片であり、復原口径は14.8cmを測る。口唇部が肥厚し、或は高台の坏部になるか。8は口縁部を欠く。高台高1.3cm、復原高台径9.3cmを測る。底部には八字形の高い高台を付す。何れも、胎土に長石・石英を含む。調整は口縁部回転ナデ、内底面不整方向ナデ、外底面ナデにより、高台の貼付付近にはヘラケズリを施している。焼成は堅緻で、5が紫灰色、6は暗灰色、7・8が灰青色を呈する。

9・10は高坏である。9は坏身に低めの脚を付した形態の無蓋高坏で、器高6.5cm、復原口径13.6cmを測る。口縁部は緩やかに開き、底部との境にヘラ沈線を1条巡らす。脚部は2.2cmと脚径(9.8cm)に比して低く、脚端部は上方に跳ね上げている。脚部内面には3と同じ「キ」字形のヘラ記号を刻む。調整は口縁部・脚部とも回転ナデで、脚部付近は回転ヘラケズリによる。10は口縁部と脚端部を欠くものの、やや高めの器高を呈しよう。11は口縁部破片で、口径は15.4cmに復原した。口縁部は緩やかに内湾し、口唇部は肥厚する。高台の坏部になるか。

12は壊の口縁部破片で、復原口径は21.8cmを測る。口縁端部は稜を有し、口唇部のやや下方に削り出し凸帶を巡らす。さらにその下に、ヘラ沈線を1条描く。回転ナデ調整で、胎土に長石・石英を含む。焼成は堅緻で、色調は内外面とも緑灰色を呈する。

13は壊の脚部破片で、外面は平行タタキ、内面には車輪文タタキがみられる。焼成は堅緻で、色調は内外面とも紫灰色を呈する。14・15は坏で、14は器高4.8cm、復原口径16.4cmを測る。深めの器形で、口唇部は内方に小さく屈曲する。15は浅めで、口径は17.8cmに復原した。口唇部は、若干内方に肥厚する。摩滅により調整は不明。両者とも赤褐色粒を多く含む。

16~19は高坏で、16は坏部、17は坏部と脚部の接合部位、18は脚部、19は脚部である。16は復原口径16.0cmを測る。口縁部は大きく開き、底部との境にヘラ沈線を巡らす。焼成は軟質で、色調は赤灰色を呈する。須恵器の生焼けか。20~22は壊である。口径は20から18.0cm、21は22.2cm、23は23.6cmに復原した。21・22の口縁部はS字状に屈曲する。

23は鉢で、残高9.1cm、復原口径24.0cmを測る。口唇部は小さく肥厚し、14・15の口唇部に似たつくりである。胎土に長石・石英を多く含み、内外面とも肌色を呈する。24は瓶の取っ手部破片。断面形は橢円形を呈し、ヘラによる面取りを施す。

中段テラス柱穴群（図版55-2、第94図）

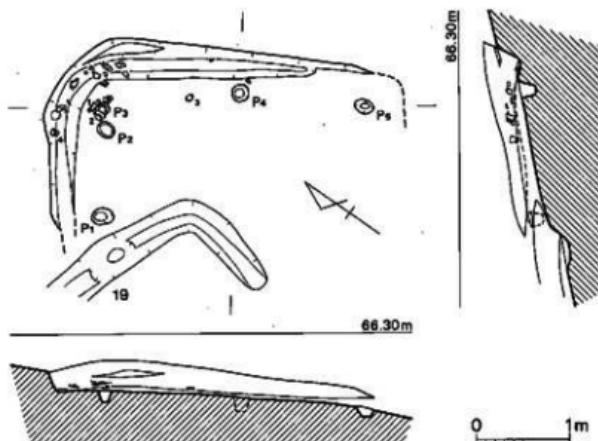
調査区中央部の東側で、3号建物跡の下段にあたる。幅3mの平坦面を有し、建物跡が存在する可能性が考えられたので、59号火葬墓調査後に掘り下げた。P-2~6は、間隔が190~266cmとばらつきがあるものの、一辺70~84cmの隅丸方形を呈し、柱穴底はほぼ同じ深さである。P-1・2間は236cm、P-6・7間は169cmとやや開きがあるものの桁行4間の建物跡としてよいものと思われる。その他にもしっかりした柱穴があるが、建物になるか削平されているため詳細は不明。

3. 壇 穴 式 住 居 跡

住居跡は、調査区中央で検出した6軒と調査区西端部の斜面部で検出した3軒の計9軒がある。時期的には、弥生時代中期前半～7世紀後半までである。以下、個別に説明を加える。

1号住居跡（図版56-1・2、第95図）

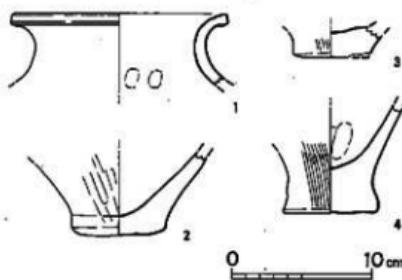
19号火葬墓に南西壁を切られ、北側コーナーと東壁を留める程度である。東側コーナーを失



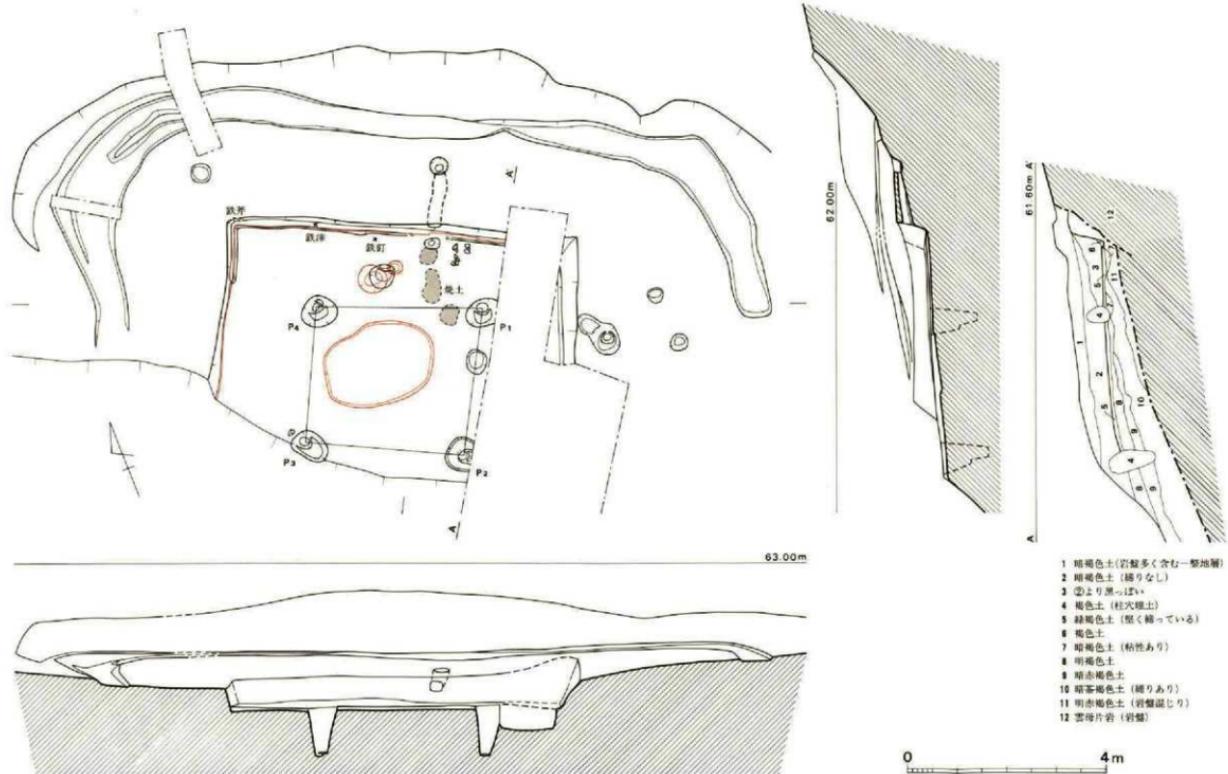
第 95 図 1号住居跡実測図 (1/60)

うため正確な規模は測り得ないが、一辺3.7m程の方形を呈するか。壁高は0.4mを測る。床面に5個のピットを確認したが、径14～24cm、深さ12cm前後と浅い。

また、北～東壁側に浅い周溝がある。が跡は検出できなかった。住居跡の東側斜面を掘り下げ、外周溝の確認を行ったが、検出していない。壁高が浅いため遺存しないのであろう。床面から5cm程浮いた状態で土器・石器が出土した。



第 96 図 1号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 97 図 2号住居跡実測図 (1/80)

出土遺物（図版83-1・97-1、第96・149図）

土 器 (1~4) 1~4は弥生土器である。1は壺の口縁部破片で、口径は15.1cmに復原した。口縁部は大きく外反し、口唇部を若干窪ます。調整はヨコナデによる。2は底部破片で、底径6.7cmを測る。外面にヘラミガキを施していることから壺の底部になろう。3・4は底部破片で、3は底径5.3cm、4は6.7cmを測る。4の底部は3.2cmと厚く、中央部が若干窪む。器面調整はハケ目による。2~4は胎土に黒曜石を多く含む。

石 器 (6) 6はコーナー部の土器群とともに出土した。厚さ1cmの偏平な石で、両面から穿孔した5cm大の孔があり、石包丁の未製品であろう。2次1号住居跡周溝先端部及びP-137埋土中出土品と接合した。

2号住居跡（図版57・58、第97図）

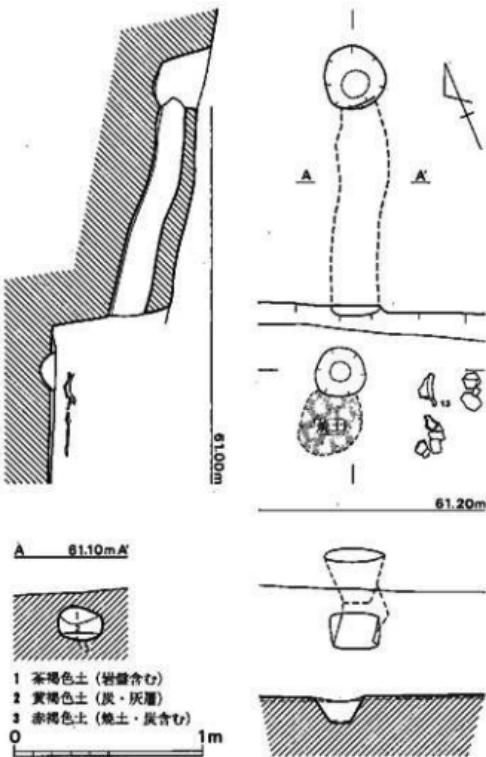
E群の27~32号火葬墓の60cm下で検出した大型の住居跡で、北壁長7.0m、壁高0.62mを測る。南壁は遺存しないが、方形を呈しよう。

主柱穴はP1~4で、径0.64~0.72m、深さは0.96~1.02mとかなり深い。何れも、南側にテラスを有する。柱穴を結んだ線は方形を呈し、P1~2間2.96m、P1~4間3.28mを測る。北壁側には、壁小溝を有する。また、貼床下部には長軸220cm、短軸164cmの椭円形の浅い穴がある。

遺物はカマド東側、柱穴、埋土中より、土器・土製品・鉄器等が出土した。

カマド（図版58-2、第98図）

北壁のやや東よりに付設した作り付け型のカマドである。遺存状態は悪く、袖部は留めない。



第98図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)

煙道はトンネル式で、長さ110cm、幅25cmを測る。先端には径34cm、深さ27cmの煙出し穴が空き、煙道先端より深く掘っている。住居壁から35cmの箇所に焼土があり、火床と考えられる。また、焼土のすぐ北側に、径26cm、深さ13cmのピットがあり、支脚の抜き跡になるか。

外周溝（図版58-3、第97図）

北壁の1.7m北側で、住居壁に沿って弓状に巡らせる。東西長12.3m、中央部での幅0.48m、東側先端部での幅0.6m、深さは10~20cmと削平されて浅い。堆土中からは土師器片が出土したにすぎない。溝を掘っただけでなく、土手を有していた可能性がある。

出土遺物（図版83-2・95-4、第99・121図）

土 器（1~17） 1~8は須恵器で、9~17は土師器である。1~3は口縁部内面にかえりを有する坏蓋で、1はつまみを欠き、残高2.5cm、口径15.4cmを測る。かえりはシャープで、口唇部より若干出る。2は口縁部破片で、口径は15.3cmに復原した。全体的にシャープな感じがする。貼床下層出土品と接合した。3は口縁部小片で、外面に灰が厚くかかる。

4は口縁部破片であるが、坏身になろう。口唇部は丸く納め、器面はナデ調整による。5~7は高台を有する坏身である。5は器高3.6cm、口径13.8cmを測る。口唇部は丸く、坏部は口径に比して浅い。底部の中央に断面ハ字形の高台を貼付する。外底面には、ヘラ先によるV字状の記号を施す。6は口縁部を欠く。高台高0.7cm、高台径8.5cmを測る。外底面には「キ」字形のヘラ記号がみられる。7も口縁部を欠く。高台径は8.8cmで、断面「ハ」字形の高めの高台を貼付する。

8は長頸壺の口縁部破片で、残高4.9cm、復原口径11.0cmを測る。口唇部は丸く、外方に小さく突出さす。器面調整は、外面カキ目→回転ナデ、内面ナデによる。

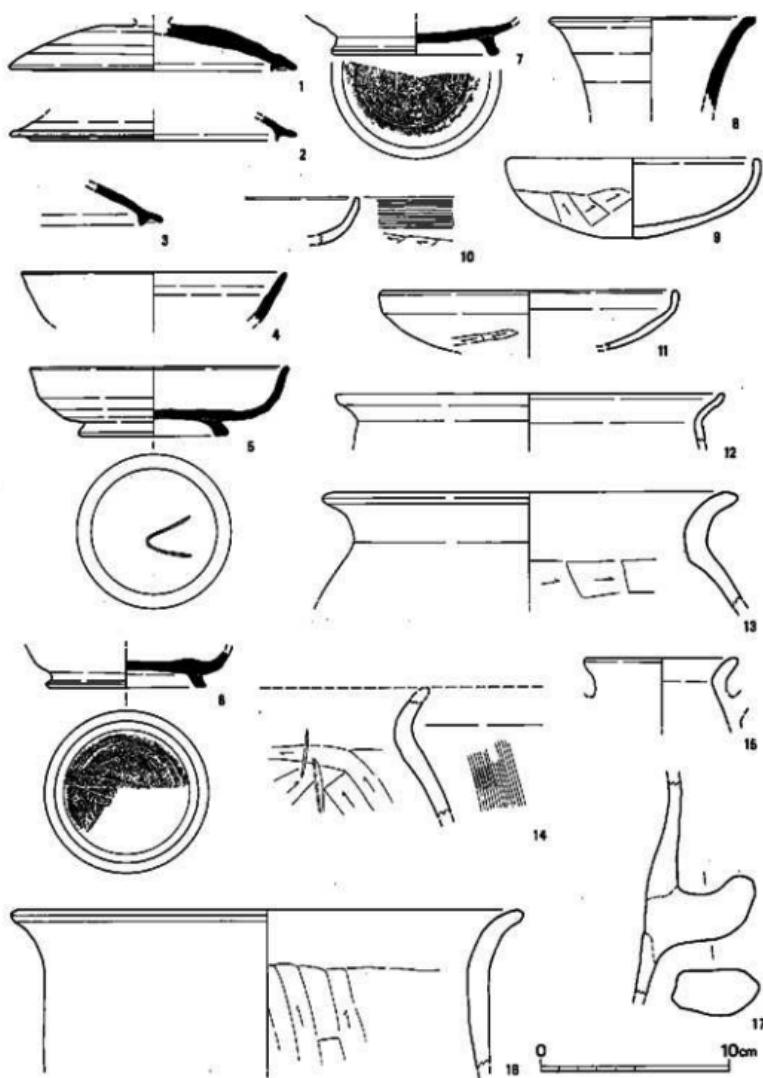
9~11は坏で、9は器高4.2cm、復原口径13.3cmを測る。深めで、口唇部は丸く納める。焼成は良好で、黄褐色を呈する。10は口縁部小片で、口縁部外面にカキ目を施す。11は復原口径15.6cmを測る。口縁部は体部から垂直気味に立上がり、口唇部は丸く納める。調整は口縁部ヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデによる。胎土に赤褐色粒を含む。P-2より出土した。

12~14は壺で、12は20.5cm、13は21.8cmに復原した。12は器壁が薄く、シャープなつくりである。胎土に赤褐色粒を多く含む。13の口縁部は鉤状に外反し、頸部の締りは良い。カマド東備の出土である。14は口縁部小片で、口唇部を欠く。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目（6~8条/cm）、内面ヘラケズリ調整による。

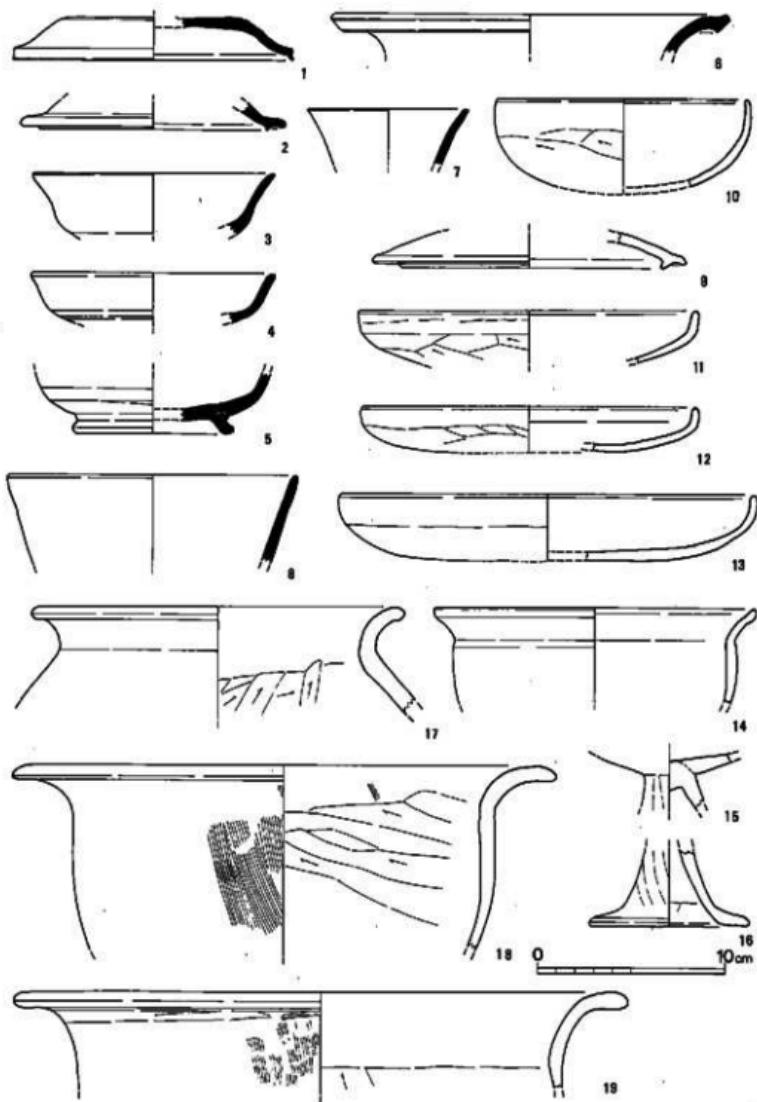
15は瓶のミニチュアで、丁寧なつくり。P-2より出土した。16・17は瓶で、16の口径は27.4cmに復原した。17は取っ手部破片で、断面径は長円形を呈する。

土製品（1） 1は埋土中出土の管状土錐で、長さ6.4cm、幅2.4cm、重さ9.8gを測る。胎土に赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、黄灰色を呈する。

鐵 器（6） 6は床面出土で、残長5.2cm、幅0.4cmを測り、断面形は方形を呈する。先端部には木質部が遺存しており、鉄鎌もしくは釘になるか。鉄滓も出土している。



第 98 図 2 号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第100圖 2号住居跡整地層出土土器実測図 (1/3)

2号住居跡整地層出土土器（図版83-3, 第100図）

ここで取り上げる土器は、火葬墓造築時に2号住居跡を埋めた整地層出土の土器である。

1~8は須恵器で、9~19は土師器である。1・2は壺蓋で、1の口唇部は小さく立つ。天井部は平坦で、つまみを欠く。復原口径15.0cm。2は口縁部内面にかえりを有する壺蓋で、かえりは下方に立つ。1・2とも口縁部ヨコナデ、外天井部ヘラケズリ、内面ナデ調整による。

3・4は壺身の口縁部破片で、復原口径は3・4とも13.0cmを測る。ともに回転ナデ調整による。5は底部破片で、口縁部を欠く。高めのしっかりした高台を貼付する。6は口縁部破片で、復原口径は21.4cm。広口壺もしくは横瓶になるか。7は口縁部破片で、復原口径は8.6cm。長頸壺であろう。8も口縁部破片で、復原口径15.2cmを測る。口縁部は直線的に開き、椀になるか。

9はかえりを有する壺蓋で、須恵器の模倣品。復原口径は16.8cm。10は器高が深く、椀とした。口唇部は内側に肥厚し、外面ヘラケズリ、内面ミガキか。11・12は壺で、口縁部は胴部から垂直気味に立上がる。13は1/4程の残存であるが、口径は22.0cmに復原した。何れも、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキによる。胎土に赤褐色粒を多く含む。14は口縁部破片で、胴部がカーブしていることから椀状の器形を呈するか。

15・16は高壺で、15は壺部から脚部にかけての破片、16は脚部の破片である。17は甕の口縁部破片で、頸部の縊りはよい。18は口縁部が大きく開き、甕とするよりは鍋とした方が妥当であろう。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目(8~9条/cm)、内面ヘラケズリ調整による。19は甕の口縁部片で、口径は32.8cmに復原した。口縁部は大きく開き、平坦面を有する。

3号住居跡（図版59, 第101図）

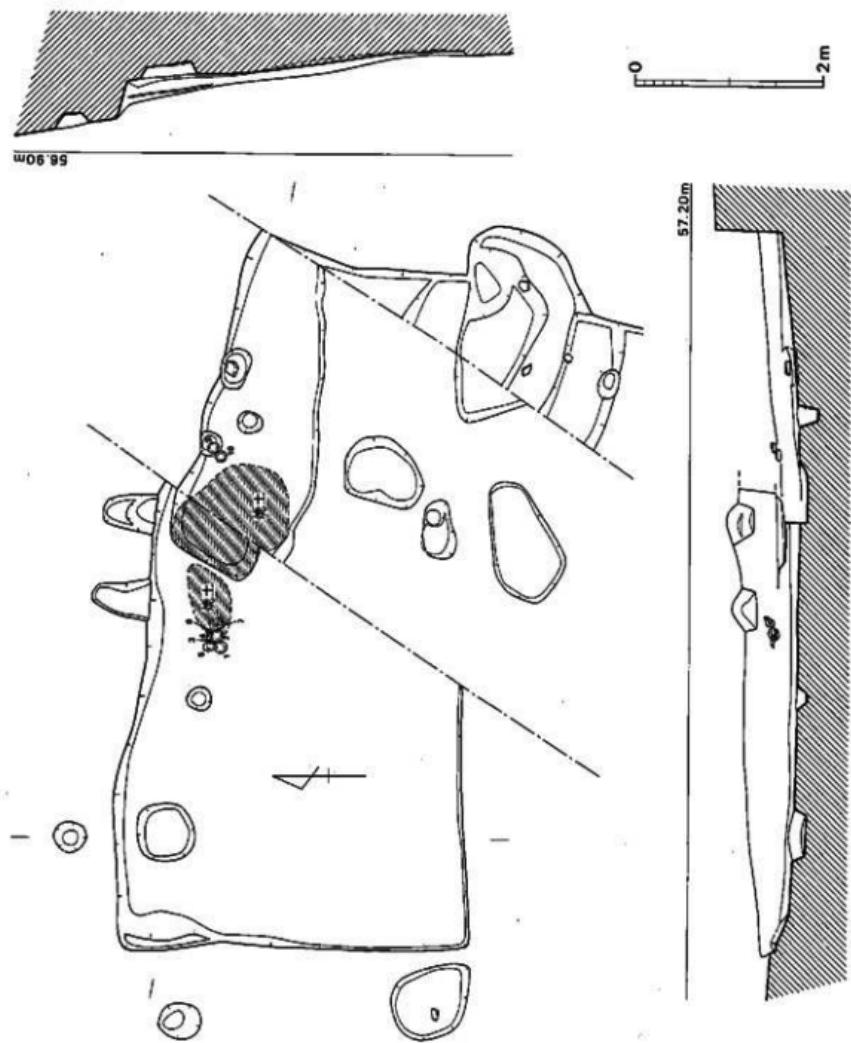
8号建物跡の3m東側で検出した住居跡で、東半部を試掘トレンチに切られる。北辺長7.8m、西辺長3.72m、北壁での深さ0.4mを測る。トレンチの土層断面に焼土が確認されたため住居跡としたが、主柱穴は不明で、カマドも判然としない。住居とするよりは竪穴とした方が妥当であろう。また、焼土の上位から土師器壺がまとまって出土したが、当遺構に伴うものではなく、上層の火葬墓に伴うものと考えられる。

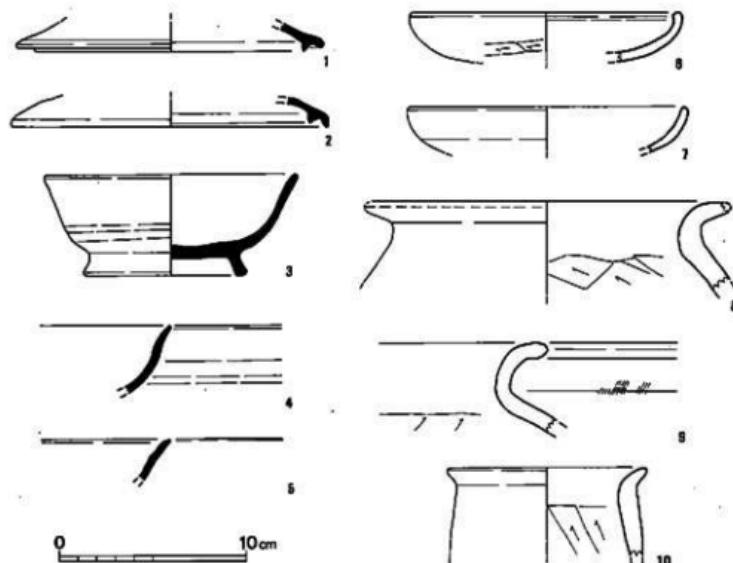
出土遺物（図版84-1, 95-4, 第102・121図）

土 壺 (1~10) 1~5は須恵器で、6~10は土師器である。1・2は口縁部内面にかえりを有する壺蓋の口縁部破片で、口径は1が16.4cm、2は16.9cmに復原した。口縁部はヨコナデによる。3は壺身で、器高5.3cm、口径13.6cm、高台径8.7cmを測る。口縁部は緩やかに開き、口唇部は丸く納める。高台は高めで、断面「ハ」字形を呈する。体部回転ナデ、内面不整ナデによる。胎土に長石・石英を多く含む。焼成は軟質で、緑灰色を呈する。4・5は口縁部小片であるが、壺身になろう。

6・7は壺で、口唇部内面が若干肥厚する。口径はともに14.6cmに復原した。口縁部ヨコナデ、

第101圖 3號住居跡測量圖 (1/60)





第182図 3号住居跡出土土器実測図① (1/3)

外面手持ちヘラケズリによる。胎土に赤褐色粒を多く含む。

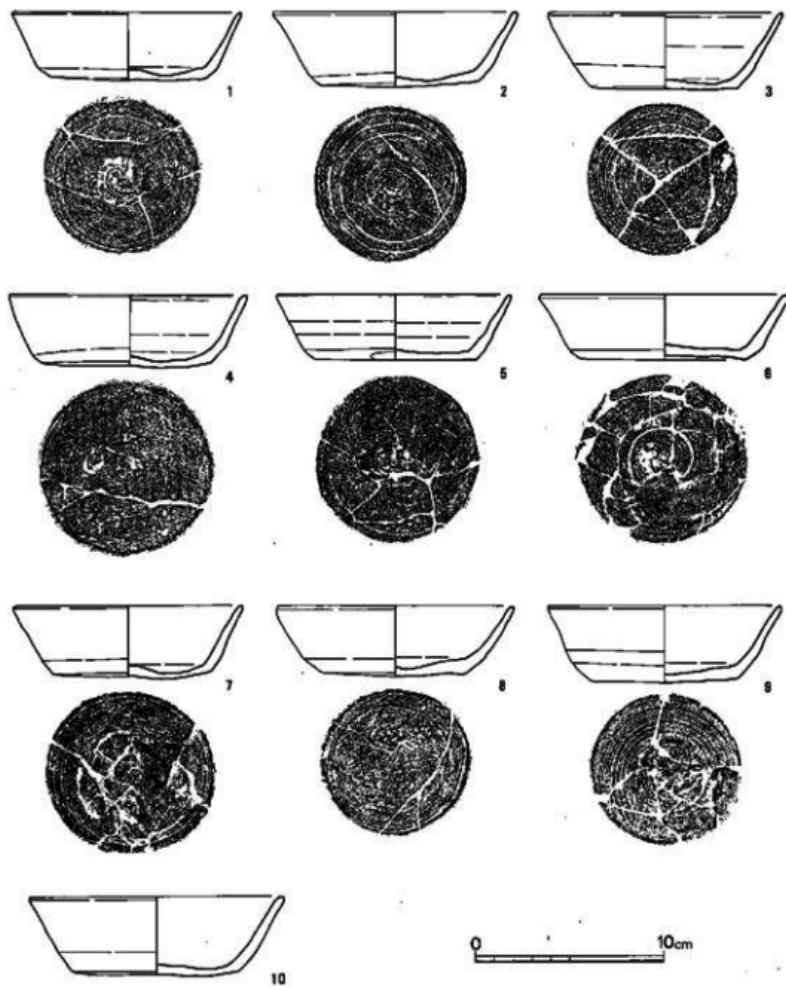
8・9は甕の口縁部破片で、口縁部は鉤状に屈曲するものの頭部の綺りはよい。8の口径は19.4cmに復原した。10は小型の甕で、口径10.6cmに復原した。口縁部は短く屈曲する。口縁部ヨコナナメ、内面ヘラケズリ調整による。

土製品(2) 2は管状土錐の破片で、残長4.1cm、最大径1.6cm、孔径0.5cmを測る。微砂粒を含み、やや軟質の焼成である。

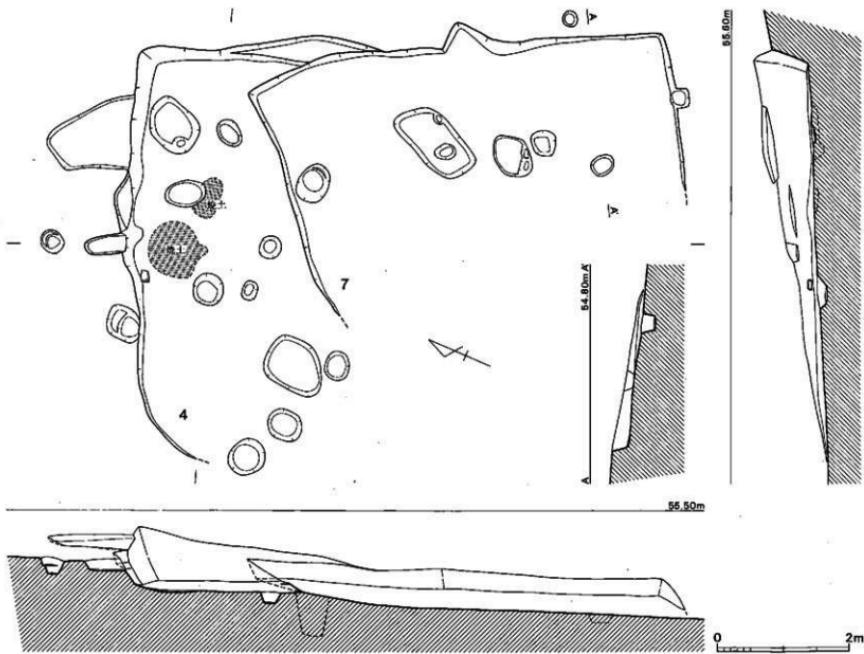
埋土中出土土器群(図版84-2、第103図)

3号住居跡の床面より20cm程浮いて、重ねた状態で出土した。3号住居跡とは時期的に合わず、火葬墓に伴うものであろうが、遺構は確認し得ていない。

1~10は土師器坏で、器高3.4~4.2cm、口径12.3~13.5cm、底径7.6~9.1cmを測るほぼ同規格の土器群である。調整は体部回転ナナメ、内面ナナメで、外底部にはヘラ切り痕を留める。胎土に赤褐色粒を含むものの精良である。焼成は良好で、黄橙色~褐色を呈する。



第103図 3号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第104図 4号住居跡、7号竖穴墓測図 (1/60)

4号住居跡（図版60、第104図）

3号住居跡の7m南側に位置し、7号竪穴に南半部を切られる。北辺長6.1m、東壁側での深さ0.8mを測る。北壁側に80cm大の焼土があり、カマドと考えて住居跡と判断したが、主柱穴は明確ではなく、住居跡とする根拠に乏しい。遺物は埋土中より土器・石製品が出土した。

出土遺物（図版85-1・95-4・96-2、第105・121図）

土 器（1~21） 1~7は須恵器、8~21が土器である。1・2は口縁部内面にかえりを有する環蓋の口縁部破片で、1は口径14.6cm、2は口径15.4cmに復原した。かえりはシャープで、10のそれは口唇部より突出する。1・2とも天井部が高い器形を呈しよう。口縁部は回転ナデによる。3~5は口縁部小破片であるが、环身になるか。何れも、口唇部は丸く納める。調整は回転ナデであり、3・4の外面には灰が掛かる。5は口径の1/8程の破片で、12.4cmに復原したが、口径はもう少し大きくなるか。

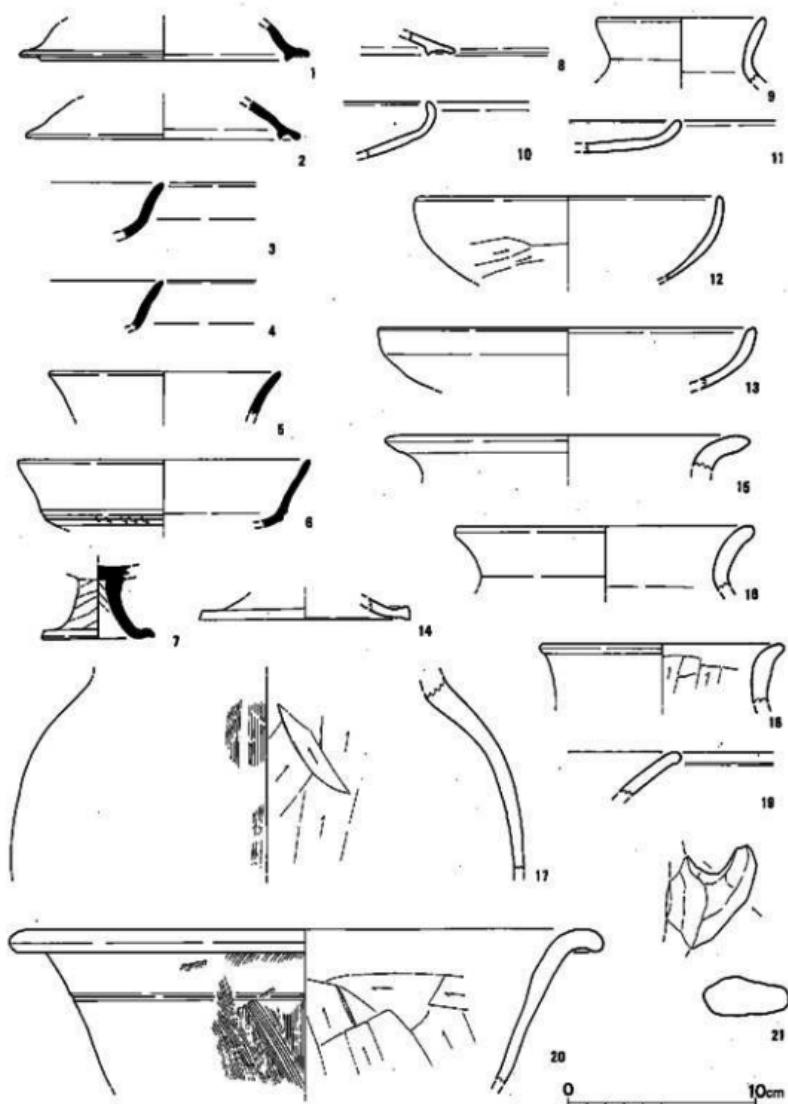
6は口縁部破片であるが、底部との境にヘラ沈線を1条巡らし、さらにヘラ先による刺突文を施することから高环の环部になろう。復原口径は15.6cmを測る。口縁部は回転ナデによる。焼成は堅致で、色調は紫灰色を呈する。7は高环の脚部で、脚高3.1cmを測る。脚端部は小さく屈曲する。調整は回転ナデであるが、脚部にはシボリ痕を留める。焼成は良好で、内外面とも紫灰色を呈する。

8は口縁部破片で、内面にかえりを有する。胎土に赤褐色粒を含み、須恵器を模倣した器形である。焼成は軟質で、色調は内外面とも灰黄色を呈する。9は胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を含むものの精良で、小型の壺になろう。口径は9.0cmに復原した。10~13は壺で、12は口縁部の肩曲が弱く、13に比してやや深めの器形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ調整による。口径は12が16.0cm、13は20.0cmに復原した。何れも、胎土に赤褐色粒を含む。

14は高环の脚部破片で、脚径は11.2cmを測る。胎土は精良である。15~17は甌で、15は19.4cm、16は16.0cmに復原した。17は胴部破片で、外面ハケ目、内面はダイナミックなヘラケズリを施す。18は小型甌の口縁部破片で、復原口径は13.0cmを測る。口唇部は小さく屈曲する。19は口縁部破片で、口唇部は丸く納める。20・21は瓶で、20は頸部の沈線をもとに傾きを出したが、もう少し起きるか。口唇部で肥厚する。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。21は取っ手部破片で、断面形は楕円形を呈する。

土製品（3） 3は埋土中出土の管状土錘で、両端部を欠く。残長5.2cm、最大幅2.5cm、孔径0.8cmを測る。焼成は良好で、こげ茶色を呈する。外面上部には黒斑が見られる。残存重量は35.5gである。

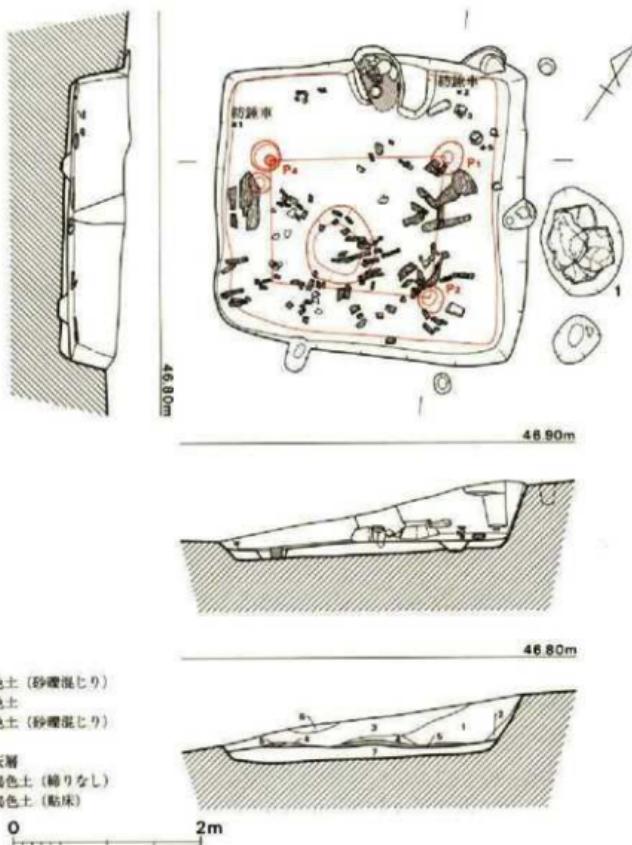
石 器（8） 8は砾石の破片で、4面を砾面としている。砂岩系の石材で、残存重量は80gを量る。



第165図 4号住居跡出土土器実測図(1/3)

5号住居跡（図版61・62-1・2、第106図）

調査区の西端部斜面で検出した住居跡で、5~7号住居跡で一グループを形成する。平面形は方形を呈し、北辺長3.16m、東辺長3.05mを測る。壁高は東壁側で0.7mを測る。当住居跡は焼失家屋で、床面には炭化材・焼土・灰が見られた。炭化材は北一南方向に倒れており、カマド周辺では炭化材の量が少なかった。



第106図 5号住居跡実測図 (1/60)

主柱穴は炭化材を取り上げてから検出した。P1~4の4本になるとと思われるが、P-3は検出できなかった。柱穴は何れも12~13cmと浅く、貼床後に掘っている。

柱間はP1~2間1.52m、P1~4間1.86mを測り、柱穴を結んだ線は横位長方形を呈する。壁小溝は検出していない。

また、東壁側に3本トレンチを入れ、外周溝の検出を行ったが、確認できなかった。遺物はカマド内及び埋土中から出土した。

カマド（図版62-1、第107図）

突出型で、北壁の中央に付設する。右袖は残長57cm、基部幅40cm、高さ16cmを測る。

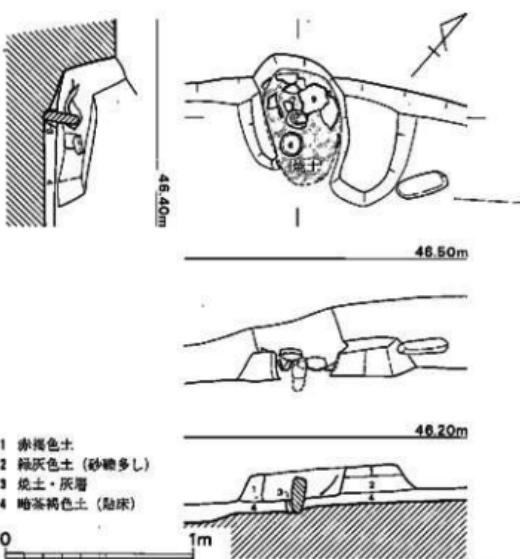
左袖は残りが悪く、残長42cm、幅14cm、高さ15cmを留める程度。煙道は遺存しない。

支脚は奥壁から24cmの位置にあり、長さ18cmの川原石を立てていた。支脚の手前が焼けており、火床と考えられる。カマド内から土器が出土した。カマド主軸は、N41°Wを示す。

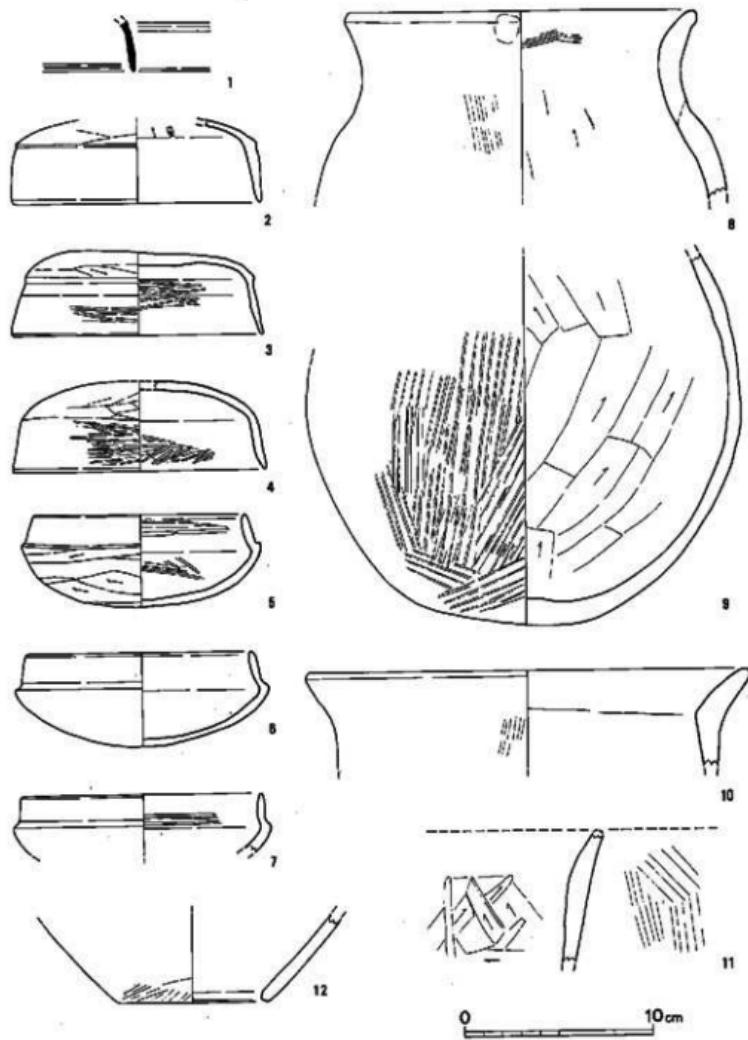
出土遺物（図版85-2・95-4、第108・121図）

土器（1~12） 1は須恵器壺蓋の口縁部小片で、口唇部内面に小さい段を有する。カマド内から出土した。2~4は土器器壺蓋で、3は器高4.5cm、口径13.2cmを測る。2・3の口縁部と天井部との境の段は明瞭であるが、4は丸くなっている。内面及び口縁部は細かいヘラミガキで、天井部はヘラケズリを施す。2・4は内外面に、3は外面のみに漆状の黒色物を塗布している。2はカマド右袖内、3・4は床面の出土である。

5~7は土器器身で、5は器高4.9cm、口径11.2cmを測る。調整は壺蓋と同じ。5が床面、6はカマド内、7は右袖付近床面の出土である。5は胎土に微砂粒を含むものの精良である。7には赤褐色粒も見られる。8~10は甕で、8は口径18.7cmに復原した。口縁部は緩やかに立上がる。9は胸部破片で、底部は丸い。外面は粗いハケ目（3条/cm）、内面はダイナミックなヘラケズリによる。外面には煤が付着している。カマド内の出土である。10の内面のヘラケズリの棱は鋭い。



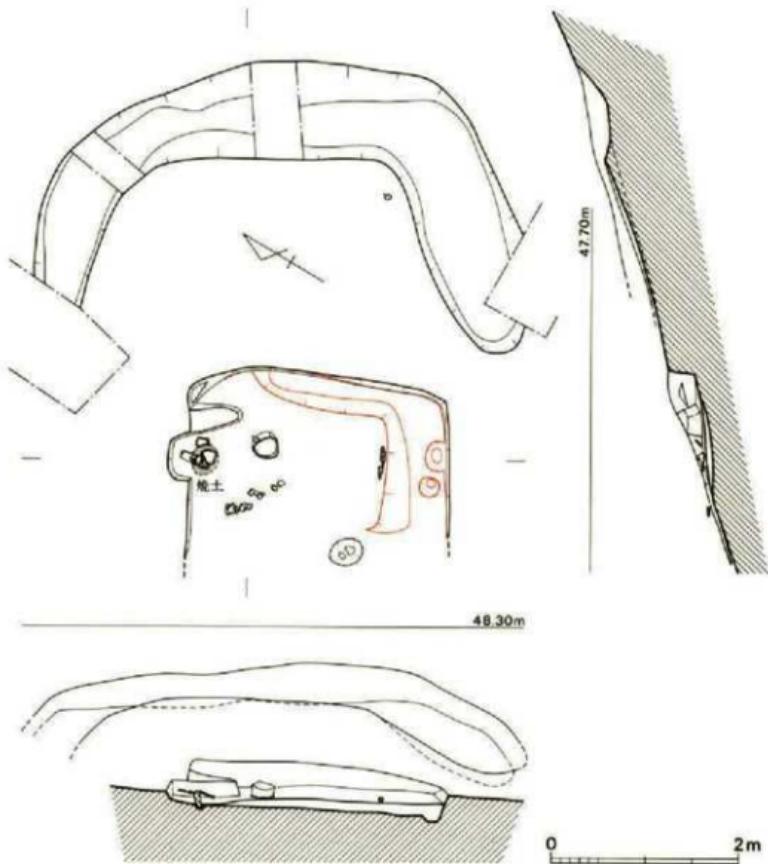
第107図 5号住居跡カマド実測図 (1/30)



第186図 5号住居跡出土土器実測図 (1/3)

11・12は板の破片で、11が口縁部、12は底部破片である。

石製品(4・5) 4・5は滑石製の纺錘車で、4は径4.2cm、厚さ1.5cm、重さ46.7gで、孔径は0.7cmを測る。焼けており、孔の中には炭化した心棒が遺存していた。5は径4.2cm、厚さ1.3cm、重さ36gで、孔径0.7cmを測る。5は焼けていない。



第109図 6号住居跡実測図(1/60)

6号住居跡（図版62-3・63、第109図）

5号住居跡の4.8m北西側に位置する。丘陵斜面に築かれた住居跡で、西壁を喪失する。東壁長2.74mと小振りの住居跡である。壁高は0.3mを測る。床面で主柱穴を検出できなかったため床を掘り下げたが、それらしいピットは見あたらない。また、山側には外周溝を巡らしている。遺物は床面及びカマド内から土器が出土した。

カマド（図版63-2、第110図）

突出型で、北壁の右寄りに付設する。壁体幅52cm、奥行き22cm、高さ18cmを測る。袖部は残りが悪く、右袖を留めるのみ。右袖は長さ55cm、基部幅33cm、高さ22cmを測り、褐色土を盛っている。奥壁から25cmの位置に川原石の支脚があり、支脚の前面は焼けていた。カマド内より土師器鉢が出土した。また、煙道は削平により遺存しない。

外周溝（図版62-3、第109図）

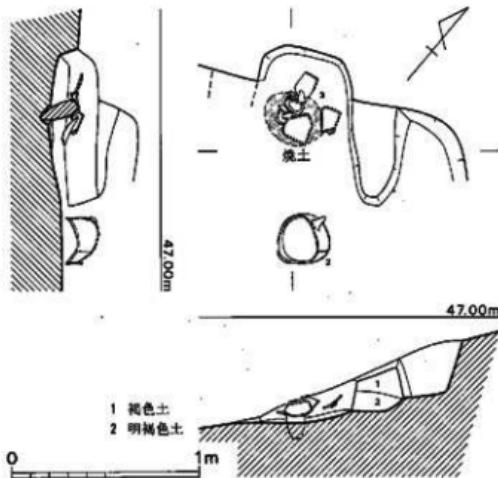
住居の東壁から2.2mの間隔を空けてコ字形に設けている。東辺長3m、中央での幅1.04m、深さ0.22mを測る。埋土は暗赤褐色土で、出土遺物はなかった。

出土遺物（図版86-1、第112・114図）

土器（1～3） 1は須恵器坏身で、口径11.2cm、受部径13.2cmに復原した。口唇部は上方に立つ。口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ調整による。焼成は良好で、内外面とも青灰色を呈する。

2はカマド前面より出土した瓶で、胴下半部を欠く。残高14.3cm、口径26.0cmを測る。口縁部は小さく屈曲する。口縁部ヨコナデ、外面粗いハケ目（4条/cm）、内面ヘラケズリ調整による。

3は胴部破片で、頸部の接合部で剥離している。径の割には器高が浅く、カマド内より出土したことから鉢とするよりは鍋とした方が妥当か。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。



第110図 6号住居跡カマド実測図 (1/30)

7号住居跡（図版64・65、第113図）

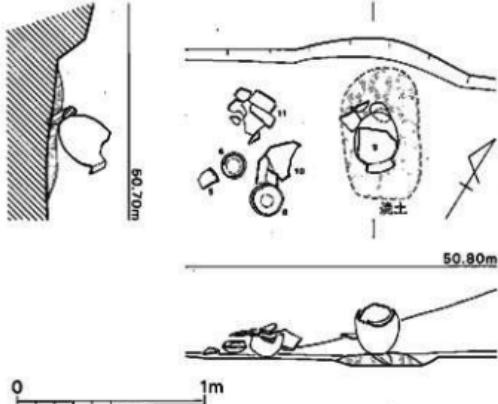
6号住居跡の8m北東側の斜面に位置する。表土剥ぎ時に土器が確認され、土壌等の遺構が存在すると考えられたが、急斜面であり、住居跡が存在するとは予想外であった。プランも判然とせず、全体を十数cm下げるから検出した。東壁長2.98m、壁高0.28mを測り、西壁は喪失するが、方形を呈しよう。

床面で柱穴は検出できず、床を掘り下げたが柱穴はなかった。カマド及びカマドの西側から土器が出土した。

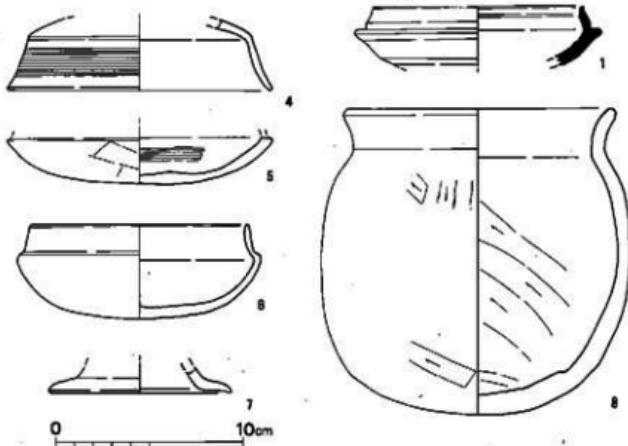
カマド（図版65-1、第111図）

北壁のやや右寄りに付設する。埋土と袖の盛土との判断がつかず、甃の下から支脚が出てきてカマドと気付いた。

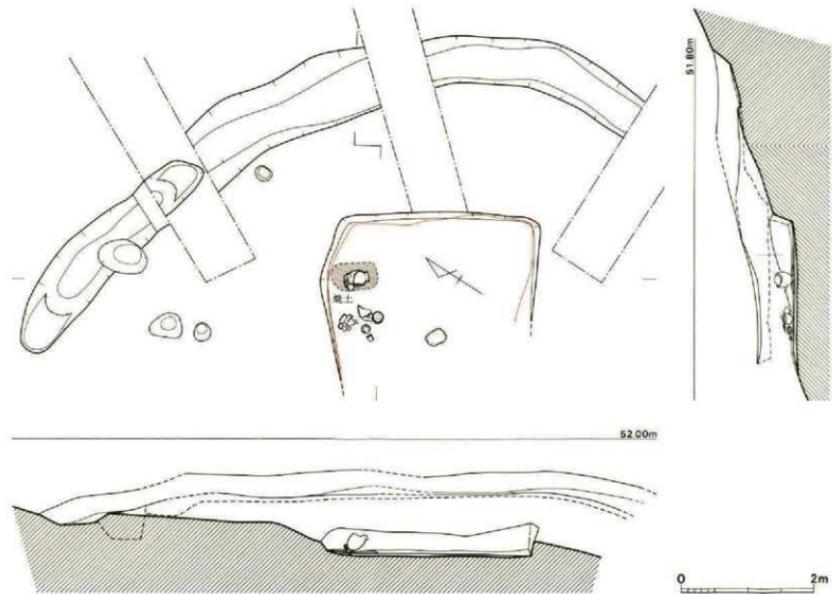
支脚は奥壁から24cmの位置にあり、川原石を立てていた。甃が支脚からはずり落ちた状態で出土した。



第111図 7号住居跡カマド実測図 (1/30)

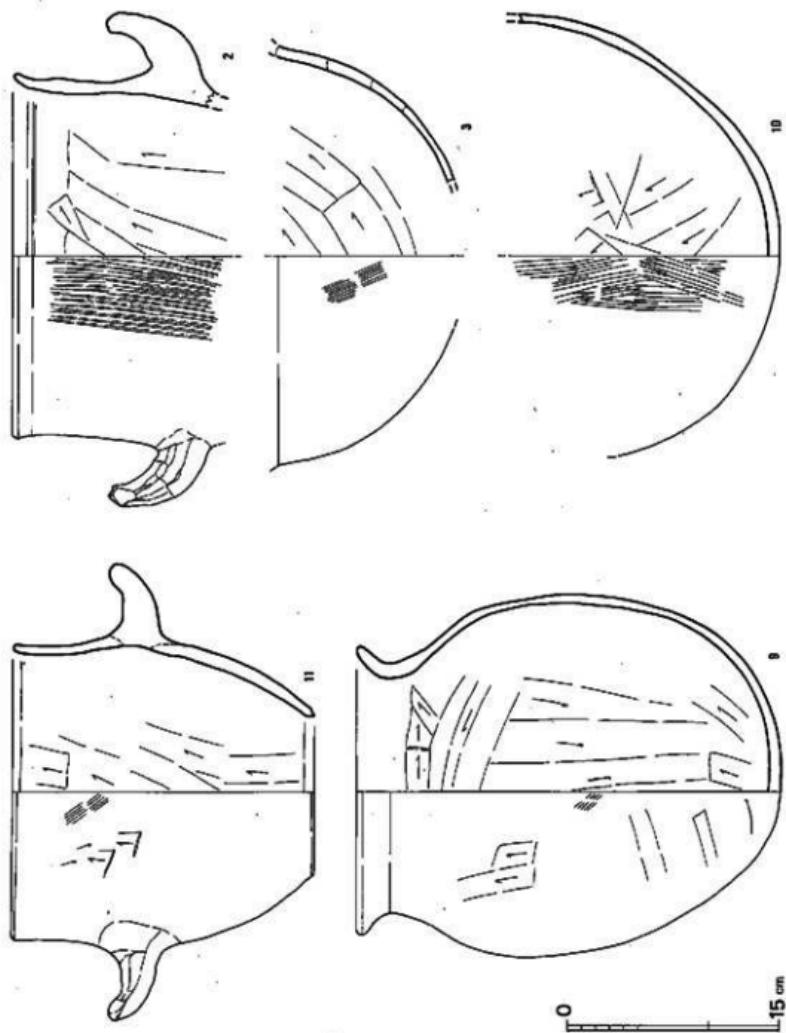


第112図 6・7号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第113図 7号住居跡実測図 (1/60)

第114圖 6·7號住處出土土器實測圖② (1/4)



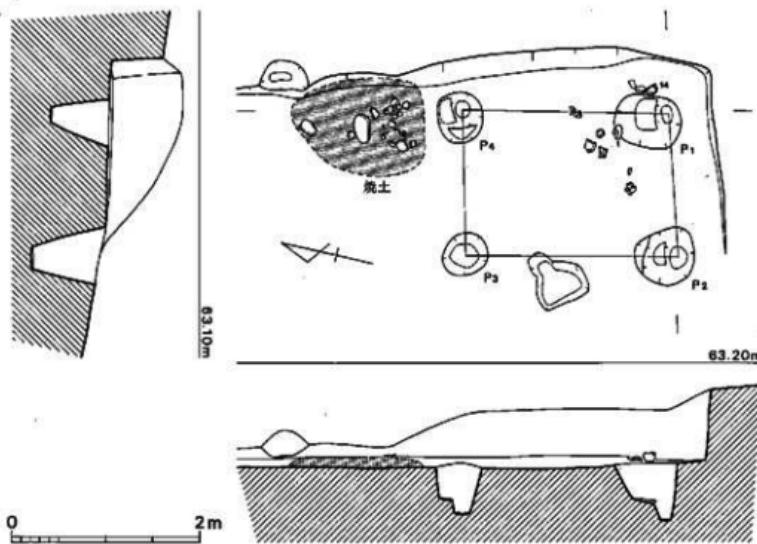
外周溝（図版65-2、第113図）

住居の北側にトレンチを入れ、土層を確認してから検出した。東壁から1.9mの間隔を有し、三日月状に巡らしている。中央部での幅1.07m、深さ27cmを測る。埋土は赤褐色土で、地山の土より黒味がかり、ざら付いた感じであった。埋土中からの遺物の出土はない。

出土遺物（図版86-2、第112・114図）

土器 (4-11) 4は土師器壊蓋で、復原口径14.2cm。口縁部外面はカキ目で、天井部及び内面はヘラミガキ調整による。外面には漆状の黒色物を塗布している。カマド南側の出土である。5は壺身で、口唇部を欠く。6は完形の壺で、器高5.0cm、口径11.6cmを測る。胎土に赤褐色粒を含む。摩滅により調整不明。7は高环の脚部破片で、脚径は9.8cmを測る。

8は甕で、器高16.0cm、口径14.4cmを測る。口縁部はS字状に外反し、丸底の底部に移行する。胎土に赤褐色粒を多く含み、色調は褐色を呈する。9は長胴の甕で、頸部の繰りは良い。器高30.6cm、口径20.2cmを測る。外面には煤が付着する。10は底部破片で、外面ハケ目(4条/cm)、内面へラケズリ調整による。11は瓶で、口縁部は直立する。器高21.2cm、口径21.4cm、底径11.4cmを測る。胎土に長石・石英・角閃石を含む。



第115図 8号住跡実測図(1/60)

8号住居跡（第115図）

3号建物跡の5m南東側で検出した住居跡で、西壁を削平により喪失する。主柱穴はP1～4の4本で、P1～2間1.54m、P1～4間2.2m、深さは54～72cmを測る。主柱穴を結んだ線は長方形を呈する。P4の北側に焼土があるが、位置からしてカマドではなく、底面も焼けていない。遺物は、P1周辺と焼土付近から土器が出土した。

出土遺物（図版87-1・95-4、第116・121図）

土 器（1～16） 1～5は須恵器で、6～16は土師器である。1・2は壺蓋で、1は口縁部内面にかえりを有し、器高は3.7cmと高い。口径14.9cmを測り、口唇部は丸い。天井部には径2.1cmの擬宝珠形つまみを付している。器面調整は口縁部回転ナデ、外天井部ヘラケズリ、内面不整方向ナデによる。胎土に赤褐色粒が見られる。焼成は軟質で、色調は灰褐色を呈する。2は口唇部が小さく立つタイプの壺蓋で、復原口径は14.0cmを測る。天井は低く、つまみを欠く。42号火葬墓周溝、D・E群下層土器、3号建物跡東側地層出土土器と接合した。

3は口唇部破片で、椀状の器形を呈するか。口唇部は丸く納める。調整は回転ナデによる。4は高环で、器高7.6cm、口径16.0cmを測る。口径に比して壺部は浅い。口縁部回転ナデ、内面不整ナデ、脚部回転ナデ調整による。外面は灰披りである。5は口縁部小片で、口唇部は上方に立つ。口縁部外面にはペラ記号の一部を留める。焼成は堅緻で、内外面とも暗赤灰色を呈する。胎土には長石・石英を含む。

6は土師器壺で、内面にかえりを有するが、須恵器のそれよりも太い。胎土に赤褐色粒を含む。7・8は壺で、7の口唇部はそのまま立上がるが、8は肥厚する。口径は7が16.8cm、8が14.6cmに復原した。何れも赤褐色粒を含む。7は楕円形で、口径は11.0cmを測る。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリによる。

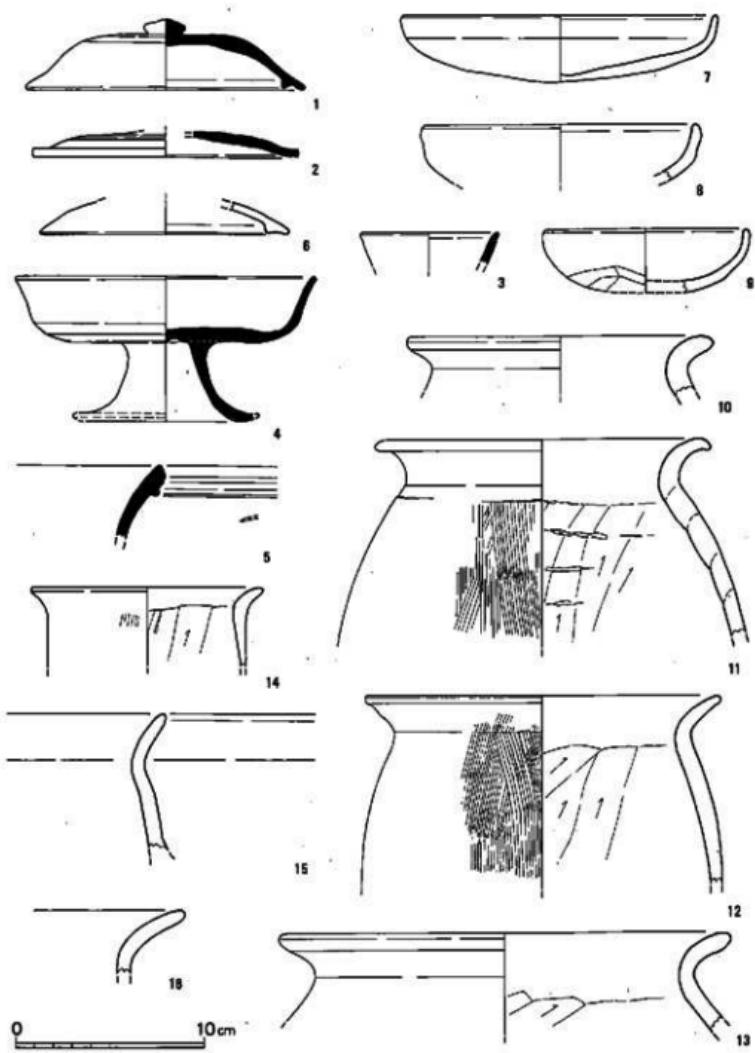
10～13は甕の口縁から胴部にかけての破片。口縁部は何れも大きく外反する。11は内面に粘土接合痕がみられる。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。口径は10が16.2cm、11が17.6cm、12が18.6cm、13が23.8cmを測る。14は小型の甕で、口径は12.4cmに復原した。口縁部は小さく屈曲する。

15は口縁部小片であるが、取っ手が剥離した状況を呈し、取っ手付きの甕になるか。16は口縁部小片である。口縁部は大きく開き、器壁が薄いことから瓶になるか。

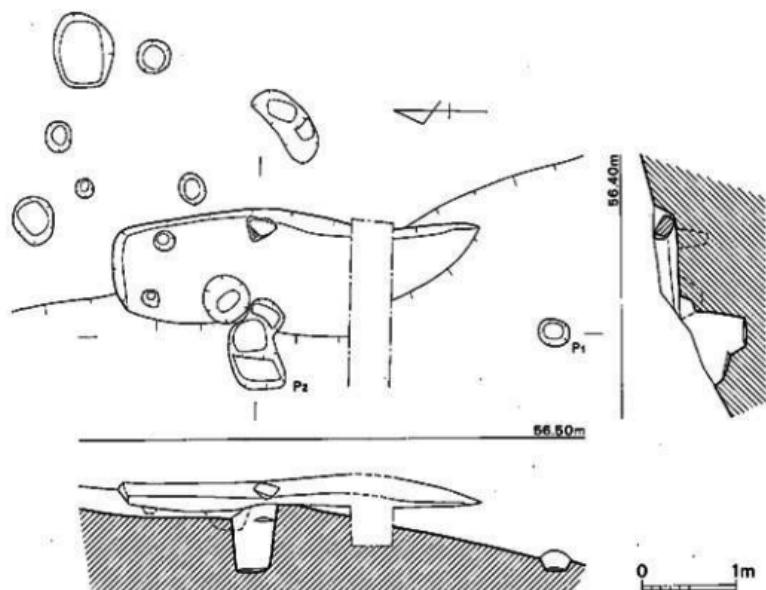
鉄 器（7） 7は8号住居跡埋土中出土の鉄鎌で、頭部は撥形を呈する。残長4.6cm、刃部幅2.4cmを測る。

9号住居跡（第117図）

5号竪穴と6号竪穴の中間で検出した。東壁の一部を留める程度であるが、柱穴の深さが等しいことから住居跡とした。東壁は残長3.9m、残高0.2mを測る。柱穴はP1・2の2本しか留めな



第116図 8号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第117図 9号住居跡実測図 (1/60)

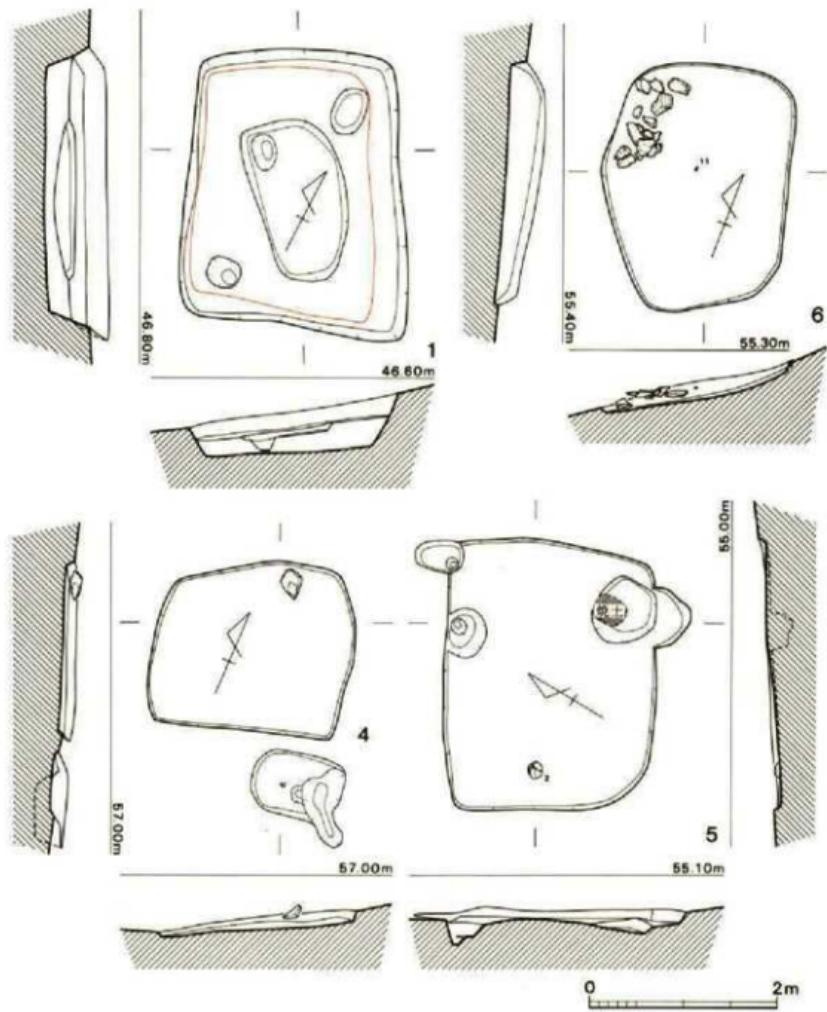
いが、P2は径0.48m、深さ0.72mを測る。P1は柱穴の底部が残存する程度であるが、P2の底面とはほぼ水平であり、両者の間隔は3.26mで、2号住居跡に等しい。カマドは不明。遺物の出土はなかった。

4. 竪 穴

調査区中央部及び西側斜面で8基検出した。平面形は隅丸方形、長円形を呈する。

1号竪穴(図版66-1、第118図)

調査区の西端部で、5号住居跡の2m南東側に位置する。平面形は長方形を呈し、長軸3.02m、北壁長2.06m、南壁長2.34m、深さ0.25mを測る。北東側と南西側に浅いピットが、中央に長軸1.76m、短軸0.97mの長円形の浅い土壙がある。埋土は暗褐色土で、土師器・弥生土器が出土した。如何なる性格の竪穴か不明。



第118図 1・4～6号竪穴実測図 (1/60)

出土遺物（第120図）

1は弥生土器の底部で、復原底径は9.5cm。壺になろう。胎土に1~3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。2は土師器高坏の脚部片である。外面はヘラケズリによる。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。

2号竪穴（第119図）

E群火葬墓とF群火葬墓との間に位置し、26号火葬墓周溝に切られ、3号竪穴を切っている。長軸3.58m、短軸2.87mを測り、深さ16cm程の浅い竪穴である。埋土は黒褐色土であり、須恵器・土師器・鉄釘が出土した。

出土遺物（図版87-2・95-5、第121・142図）

土器（1~5） 1~3・5が須恵器、4は土師器である。1は口縁部内面にかえりを有する壺蓋の口縁部小片である。2は口径15.4cmを測る口縁部破片で、壺もしくは高坏か。3は壺で、器高2.9cm、口径10.2cm、底径7.0cmを測る。口唇部は小さく外反する。外面は回転ヘラケズリ、内面ナデ調整による。5は高坏の脚部破片で、脚端部は小さく立つ。4は壺で、口唇部はシャープである。器高3.5cm、口径11.5cm、底径7.1cmを測り、口縁部は回転ナデによる。

鉄器（10・11） 10・11は2号竪穴掘り下げ以前に出土した鉄釘で、10は先端部を、11は頭部を欠く。10は残存長4.4cm、頭部幅8mmで、11は残存長4.3cm。

3号竪穴（第119図）

2号竪穴及び40号火葬墓周溝に切られる。平面形は西側が張り出す不整形を呈し、南北長3.96m、東西長4.02m、深さ0.14mを測る。埋土は2と同じ黒褐色土で、土器が出土した。

出土遺物（図版87-3、第120図）

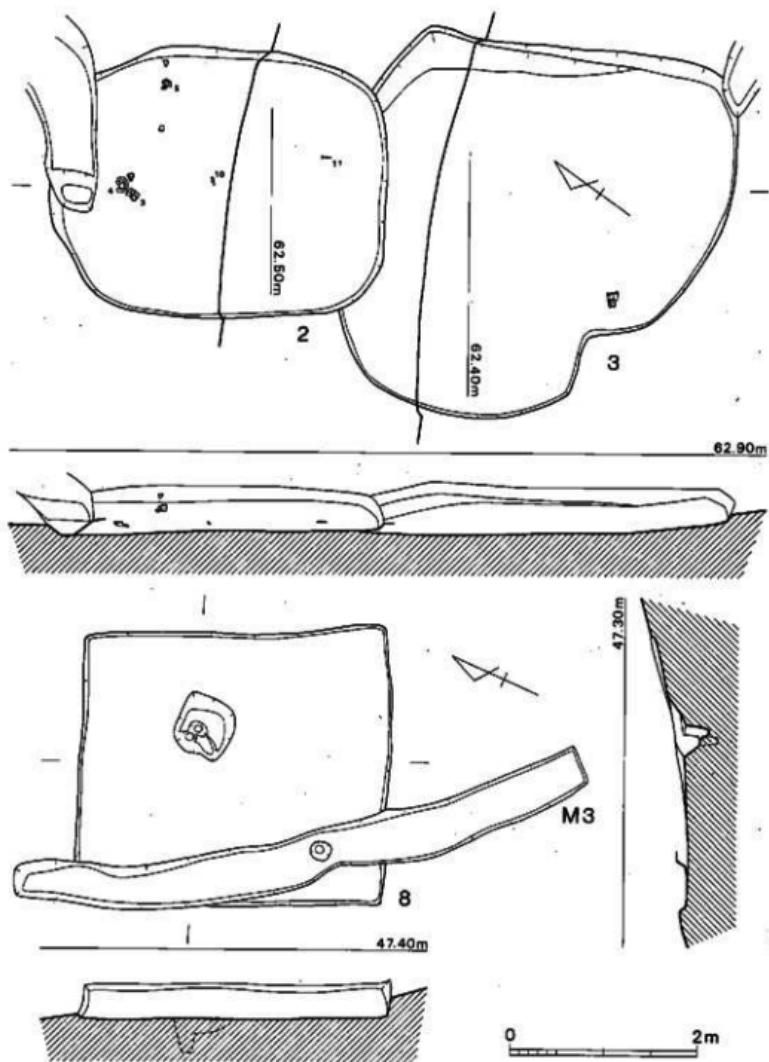
1は内面にかえりを有する壺蓋で、つまみを欠く。天井部は低く平坦で、復原口径は15.6cmを測る。2は壺で、器高3.3cm、口径11.4cm、底径7.3cmを測る。口唇部は若干肥厚し、外底面は回転ヘラ切りによる。焼成は堅緻で、青灰色を呈する。3は高坏の脚部破片である。

4号竪穴（第118図）

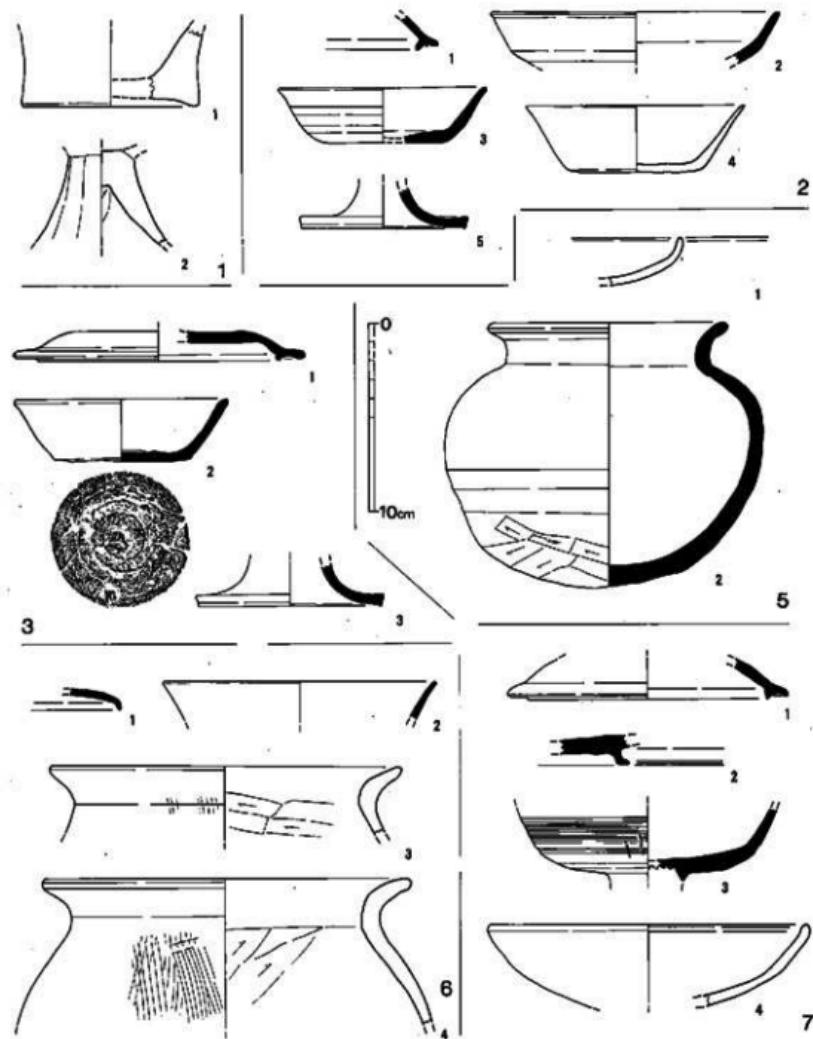
89号火葬墓の3.4m北側に位置する。平面形は不整形形を呈し、東西長2.14m、南北長1.85m、深さ0.12mを測る。埋土は暗褐色土で、土師器壺・壺の小破片が出土しているが図示不可能。鉄津も出土した。また、付近からは、滑石製有孔円盤（第121図10）が出土している。

5号竪穴（第118図）

7号建物跡の9m東側に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸2.87m、短軸2.26m、深さ0.18mを



第119図 2・3・8号竖穴、3号清査測図 (1/60)



第120図 1~3・5~7号竖穴山土器実測図 (1/3)

測る。東側に焼土の入った浅いピットがある。埋土は暗褐色土で、須恵器壺が出土した。

出土遺物（図版87-4、第120図）

土 器（1・2） 1は土師器壺の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。2は須恵器壺で、器高13.9cm、口径12.8cmを測る。口縁部は頸部から外反し、撫肩の肩部から底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、肩部回転ナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面回転ナデ調整による。

6号竪穴（第118図）

5号竪穴の3m南側に位置する。長方形を呈し、長軸2.6m、短軸1.98m、深さ0.22mを測る。床面は西側に傾斜している。西側には角礫が入っていた。埋土は黒褐色土で、鉄斧・フイゴの羽口・土製勾玉が出土した。

出土遺物（図版96-1・3、第120・121図）

土 器（1～4） 1は須恵器壺蓋の口縁部小片で、口唇部は小さく立つ。2は口縁部小片であるが、壺の口唇部にしてはシャープである。3・4は土師器壺の口縁～肩部にかけての破片。口径は3が18.8cm、4が19.8cmに復原した。ともに口縁部は大きく外反する。

鉄 器（12） 鉄斧で、長さ8.8cm。刃部は欠損するが5.5cm程になろう。袋部の断面は長円形を呈し、奥行き4cmを測る。重さは130gである。

土製品（11・13） 11は勾玉で、長さ3.6cm、中央部での幅1.6cm、重さ7.4gを測る。頭部には2mmの孔を空ける。13はフイゴの羽口で、先端部の小破片である。先端は青灰色に変色し、スラッグが付着する。径8cm程になろう。

7号竪穴（図版66-2、第104図）

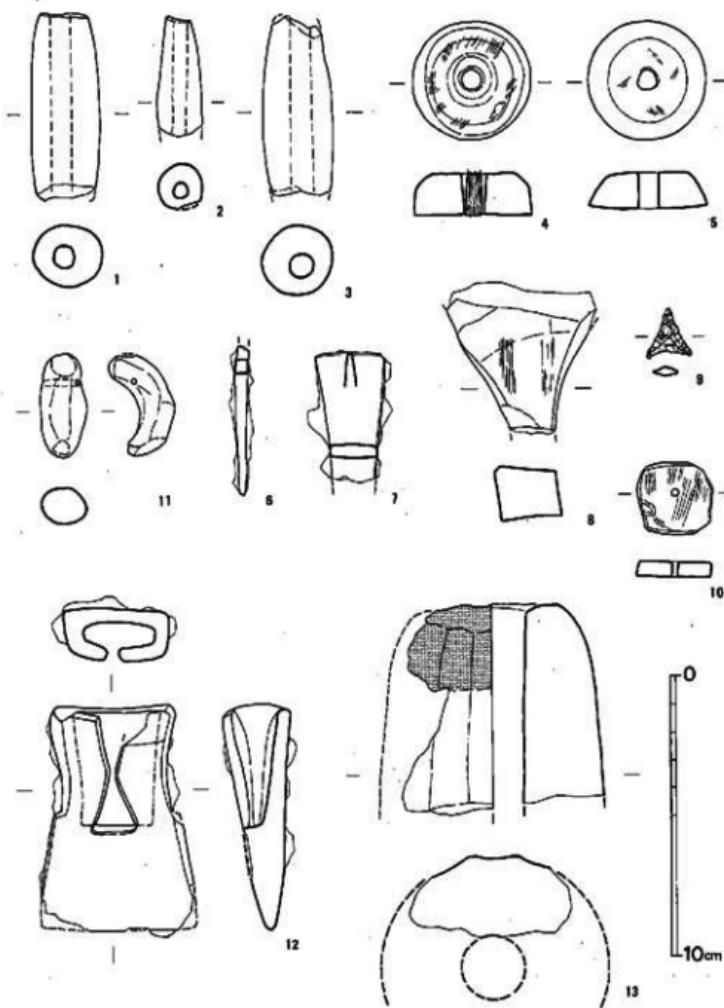
4号住居跡を切って位置する。南壁は削平により喪失するが、東壁は長さ6.26m、深さ0.28mを測る。規模的には住居跡として差し障りないが、カマド・柱穴が不明瞭であるので竪穴とした。埋土は暗褐色土で、土器が出土した。

出土遺物（第120図）

1は須恵器壺蓋で、口縁部内面にかえりを有する。かえりは下方に立つ。口径は15.0cmに復原した。2は高台を有する壺身で、器厚に比して貧弱な感がある。3は高壺の壺部破片で、外面はカキ目調整による。脚部との接合部位は鋸歯状になっている。7は土師器壺で、残高4.3cm、復原口径16.8cmを測る。口唇部には小さな段を有する。

8号竪穴（第119図）

1号竪穴の0.5m南東側に位置し、3号溝に切られる。方形を呈し、東壁長3.22m、南壁長3.0m、深さは南壁側で0.22mを測る。床面中央にピットがあるが、竪穴に伴うものか不明。



第 121 図 住居跡・豎穴・土壤出土遺物実測図 (1/2)

5. 土 墓

調査区の東側及び中央部平坦面で20基検出した。大半が弥生時代のものである。

1号土 墓 (第123図)

調査区の北東端部の平坦面に位置する。隅丸方形を呈し、長軸116cm、短軸106cm、深さ15cmを測る。埋土に炭を含んでおり、当初火葬墓とを考えたが、火葬骨の出土はなく、単なる土壙とした。須恵器・土師器・弥生土器が出土したが、図示できない。

2号土 墓 (図版67-1, 第123図)

2号火葬墓の1.5m南西側に位置する。長円形を呈し、長軸160cm、短軸92cm、深さ62cmを測る。東側に二段のテラス、西側にピットを有する。埋土中から弥生土器小片が出土した。

3号土 墓 (図版67-2, 第123図)

4号火葬墓の5m北側に位置する。椿円形を呈し、長軸184cm、短軸112cm、深さ22cmを測る。底面は西側に傾斜している。遺物の出土はなかった。

4号土 墓 (図版67-3, 第123図)

3号土壙の3m西側に位置する。不整円形を呈し、長軸134cm、短軸105cm、深さ12cmを測る。西側に35cm程のピットがある。底面は南西側に傾斜する。遺物は出土していない。

5号土 墓 (図版68-1, 第124図)

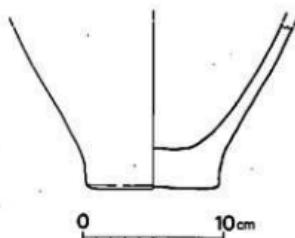
15号火葬墓の0.3m北西側に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸276cm、短軸172cmで、深さは17cm残存する。底面は南側に傾斜している。

埋土は暗褐色土で、弥生土器・石鐵が出土した。

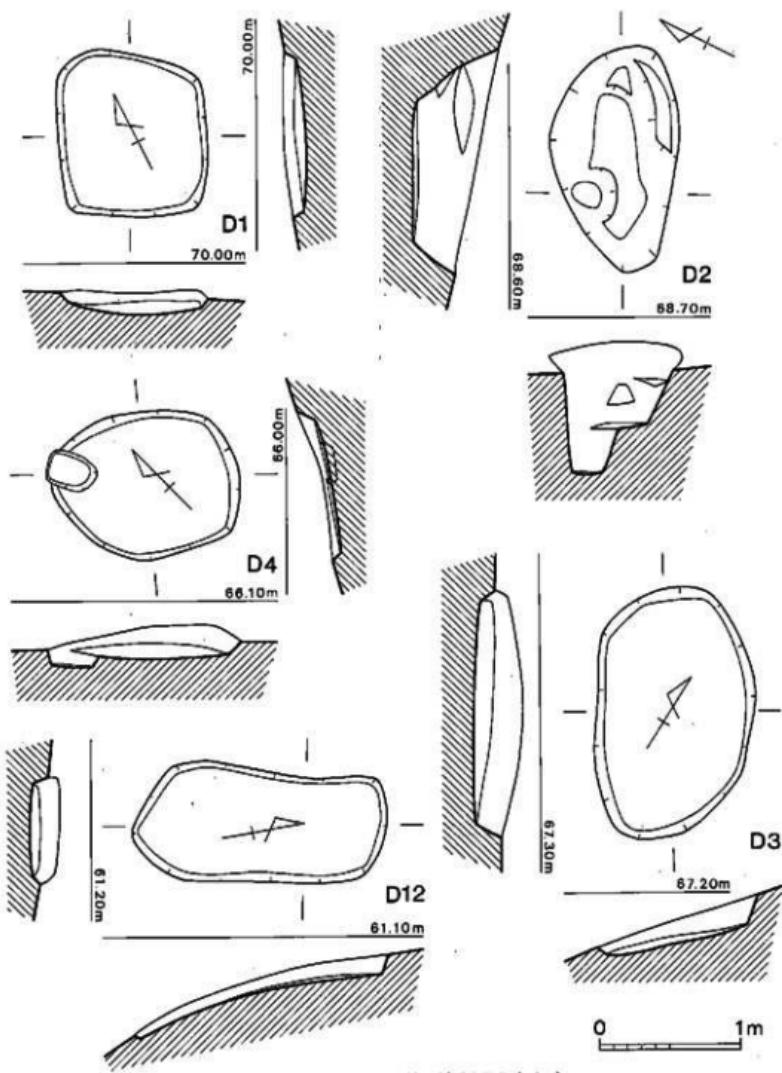
出土遺物 (図版88-1・96-1, 第121・122図)

土 器 弥生土器底部で、残高11.7cm、底径9.6cmを測る。底部は平底で、2.7cmと厚い。胎土に長石・角閃石を含む。調整は摩滅により不明。

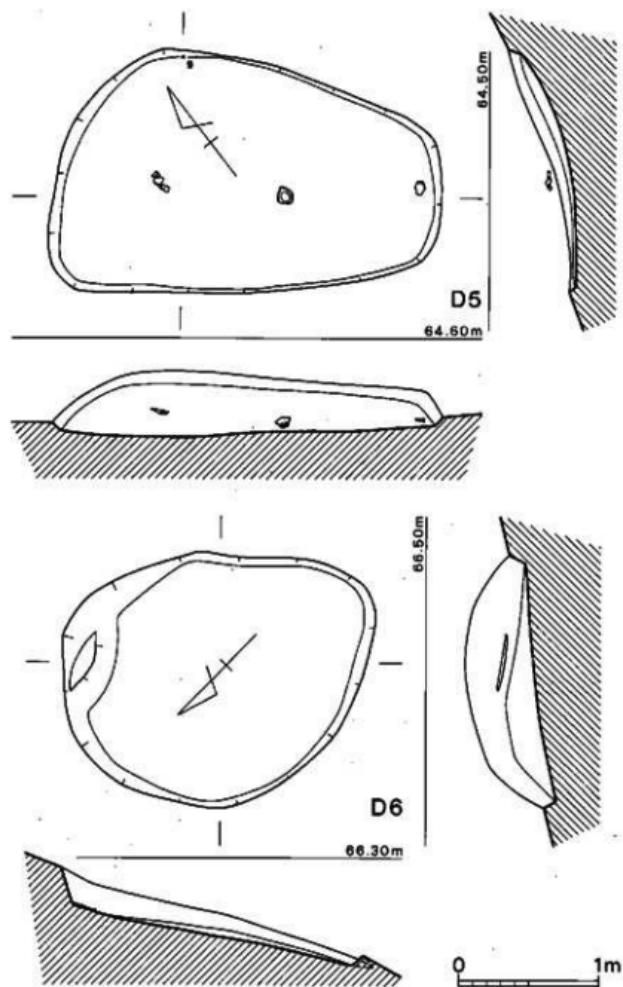
石 器 (9) 黒曜石製の石鐵で、長さ1.7cm、幅1.55cm、重さ0.4gを測る。



第122図 5号土壙出土土器実測図 (1/4)



第123図 1~4・12号土壙実測図 (1/40)



第124図 5・6号土壤実測図 (1/40)

6号土壙（図版68-2、第124図）

4号火葬墓の1.2m南側に位置する。南北長224cm、東西長178cm、深さ24cmを測る不整円形の土壙で、北東側に幅12cmのテラスを有する。底面は西側に傾斜しており、埋土中から弥生土器片が出土しているが、図示に耐えない。

7号土壙（図版69、第125図）

8号火葬墓の1.8m南側に位置し、1号溝に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、南北長242cm、東西長238cm、深さ48cmを測る。床面は南西側に緩傾斜している。北西コーナー付近から弥生土器がまとまって出土した。また、黒曜石・サヌカイトの剣片も出土している。

出土遺物（図版88-2、第126図）

1~10は弥生土器で、何れも甕である。1は器高26.2cm、口径27.2cm、底径7.6cmを測り、口縁部外面に断面三角形の粘土帯を貼付し肥厚さす。頸部は張りをみせずに底部に移行する。頸部のやや下位にヘラ沈線を1条巡らす。底部は内窪みで、2.4cmと厚い。器面調整は外面ハケ目(7~8条/cm)、内面工具ナデによる。外面と内底面に煤が付着しており、煮炊きに使用している。胎土に2mm大の長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。

2は口唇部に粘土帯を貼付して肥厚さす。頸部のやや下位にヘラ沈線を1条巡らしている。外面には黒斑がみられる。復原口径は32.8cm。3は口縁部を肥厚させた甕で、口縁部平坦面は内傾する。残高17.2cm、口径22.3cmを測る。器面調整は外面ハケ目、内面ナデにより、口縁部内面にはユビオサエ痕がみられる。5・6は如意形口縁の甕で、何れも頸部のやや下位にヘラ沈線を1条巡らす。7の口縁部は水平近く外反する。口径は5が29.8cm、6は36.8cm、7は32.9cmである。ともに、口縁部外面には煤が付着している。

8は口縁部が剥離している。頸部のやや下位にシャープな断面三角凸帯を貼付する。外面には黒斑がみられる。9・10は底部破片で、9は上げ底、10は内窪みで、10は4.8cmと厚い。

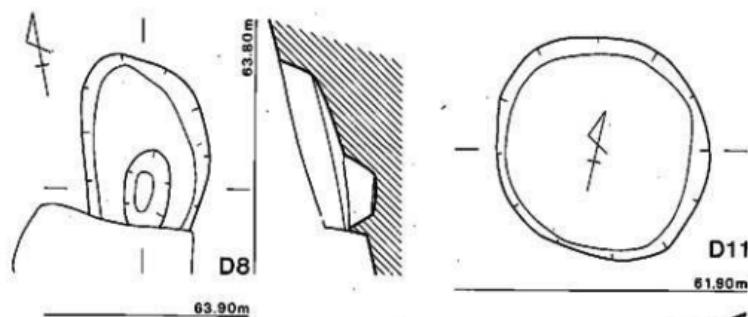
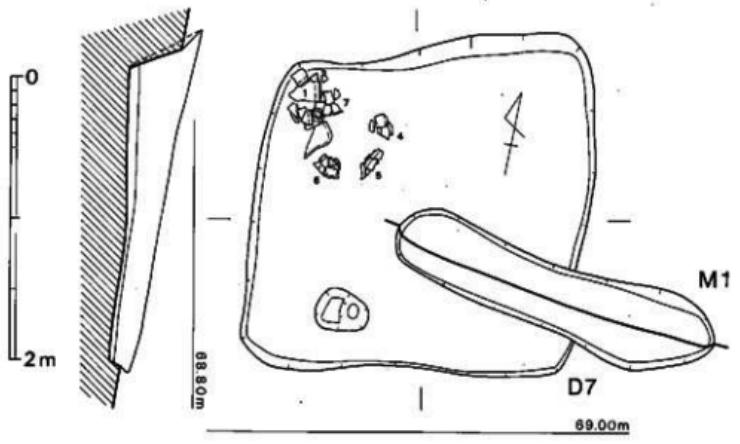
8号土壙（第125図）

16号火葬墓の0.7m東側に位置し、17号火葬墓に切られる。残存長121cm、東西幅88cm、深さ30cmを測り、底面中央に長径56cmのピットがある。埋土中より土師器坏片が出土しているが、図示不可能。

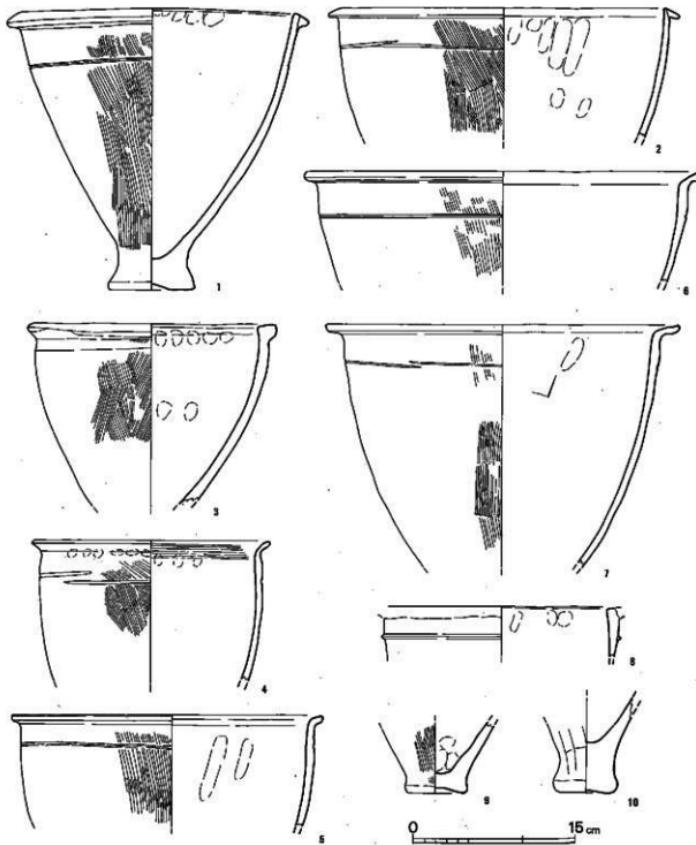
9号土壙（図版70-1、第128図）

21号火葬墓の6.7m西側の斜面に位置する。長径88cm、短径80cmを測り、中央にはピットがある。底面から15cm程浮いた状態で須恵器變片が出土した。

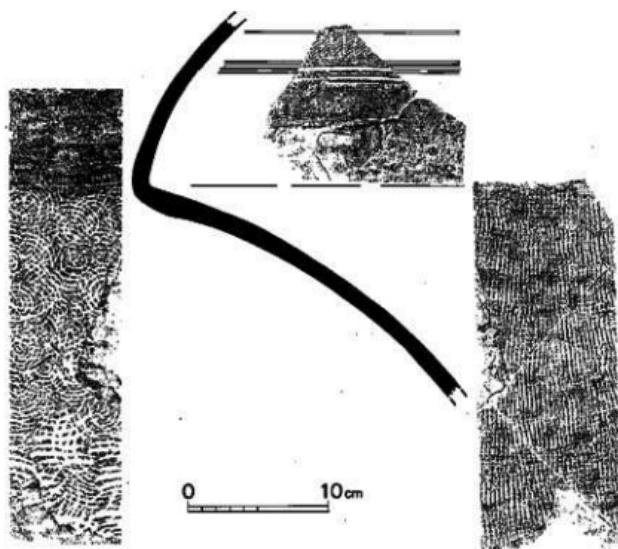
出土遺物（第127図）



第125図 7・8・11号土壤、1号溝実測図(1/40)



第 126 図 7 号土器出土土器実測図 (1/4)



第127図 9号土壙出土土器実測図 (1/4)

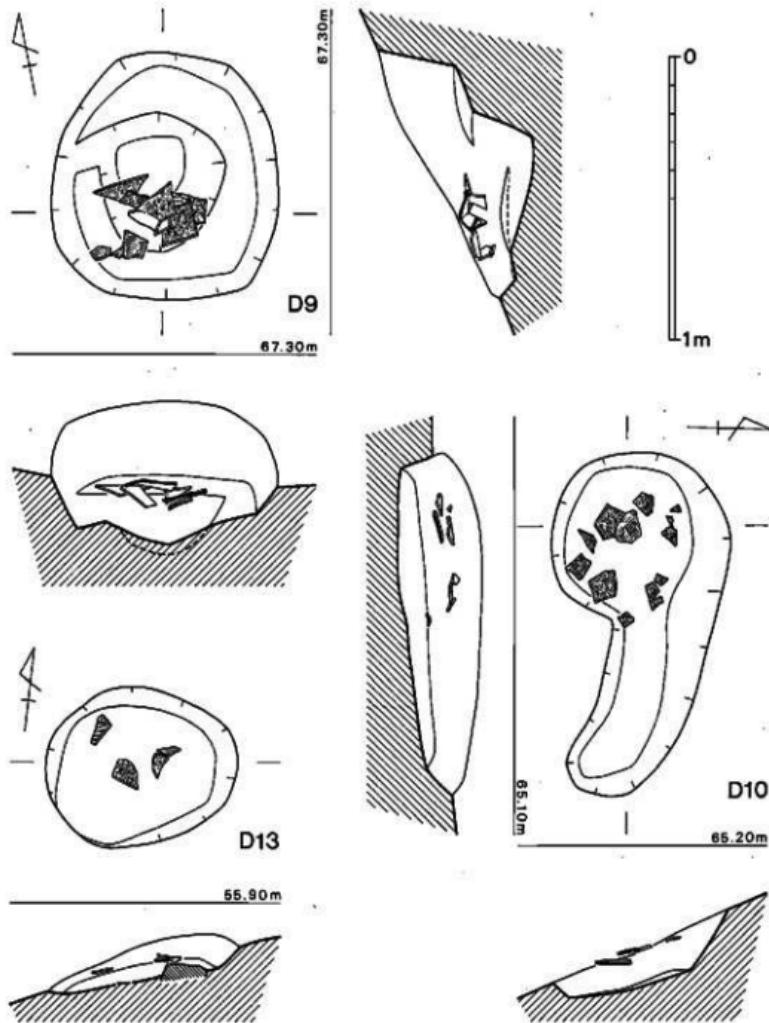
須恵器壺の頭部～胴上位にかけての破片である。口縁部外面はカキ目(6条/cm)で、上位には波状文を施す。内面はナデで、胴部外面は格子タタキ目→カキ目で、内面は同心円タタキによる。焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈する。G・H群火葬墓西側斜面出土土器と接合関係にある。また、1・2号建物跡埋土上層出土品と接合関係にあるが、当土壙からの流れ込みと考えられる。

10号土 壙 (図版70-2, 第128図)

9号土壙の2m南側に位置する。鍵穴状を呈し、長軸124cm、短軸63cm、深さ20cmを測る。底面より10cm程浮いた状態で須恵器壺片が出土した。また、9号土壙同様、1・2号建物跡埋土上層出土品と接合関係にある。

11号土 壙 (第125図)

44号火葬墓のすぐ西側に位置する。平面形は円形を呈し、径156cm、深さ44cmを測る。底面は西側に傾斜している。埋土中から須恵器壺、土師器壺が出土した。

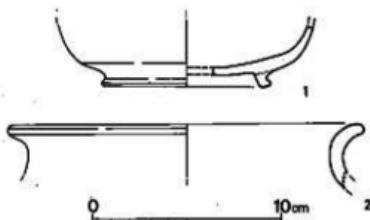


第128図 9・10・13号土壠実測図 (1/20)

出土遺物（図版88-3、第129図）

1は須恵器を模した土師器壺で、高台を貼付する。高台径は9.1cm。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、内面はこげ茶色、外面は茶褐色を呈する。

2は土師器壺で、口径は18.8cmに復原した。胎土に長石・石英を多く含む。焼成は良好で、暗褐色を呈する。



第129図 11号土壙出土土器実測図(1/3)

12号土 壙（第123図）

35号火葬墓の1.5m西側に位置する。長方形を呈し、長軸181cm、短軸80cm、深さ14cmを測る。底面は南側に傾斜する。埋土中から須恵器・土師器壺片が出土した。図示不可能。

13号土 壙（図版70-3、第128図）

15号土壙の1.4m西側に位置する。平面形は不整円形を呈し、長軸68cm、短軸58cm、深さ12cmを測る。須恵器横瓶片が出土した。

14号土 壙（第130図）

63号火葬墓のすぐ北側に位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸174cm、短軸108cm、深さ42cmを測る。底面は南側に傾斜している。遺物の出土はなかった。

15号土 壙（第130図）

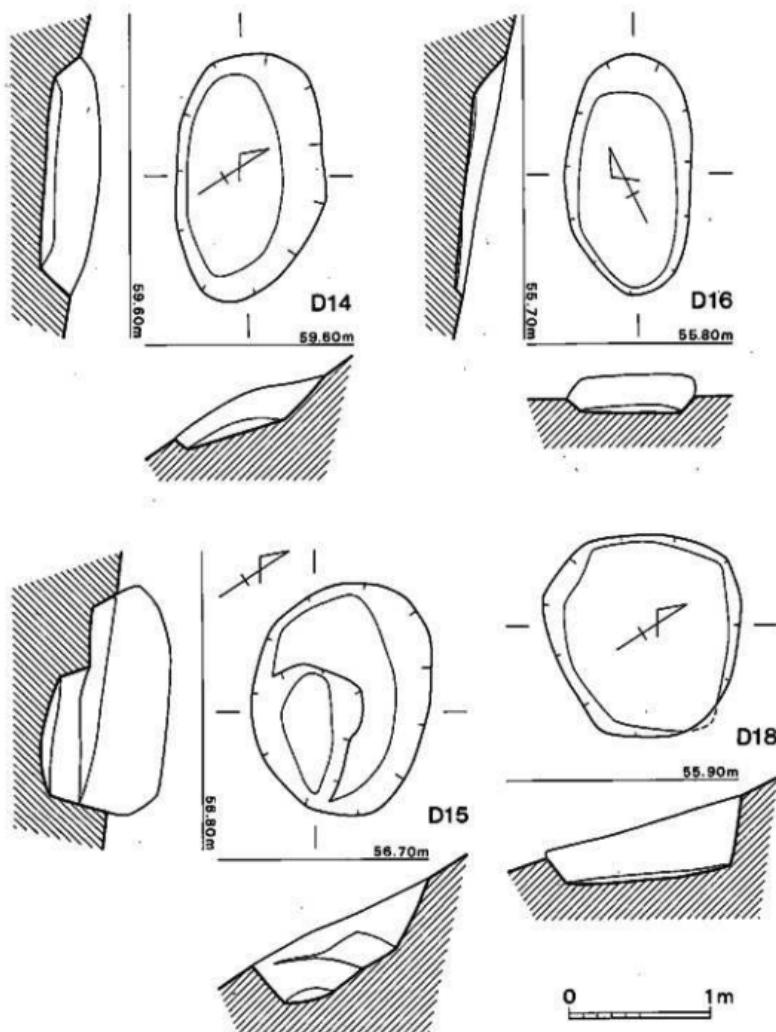
13号土壙の1.4m東側に位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸165cm、短軸126cm、深さ87cmを測る。底面から20cmの高さにテラスがある。遺物の出土はなかった。

16号土 壙（第130図）

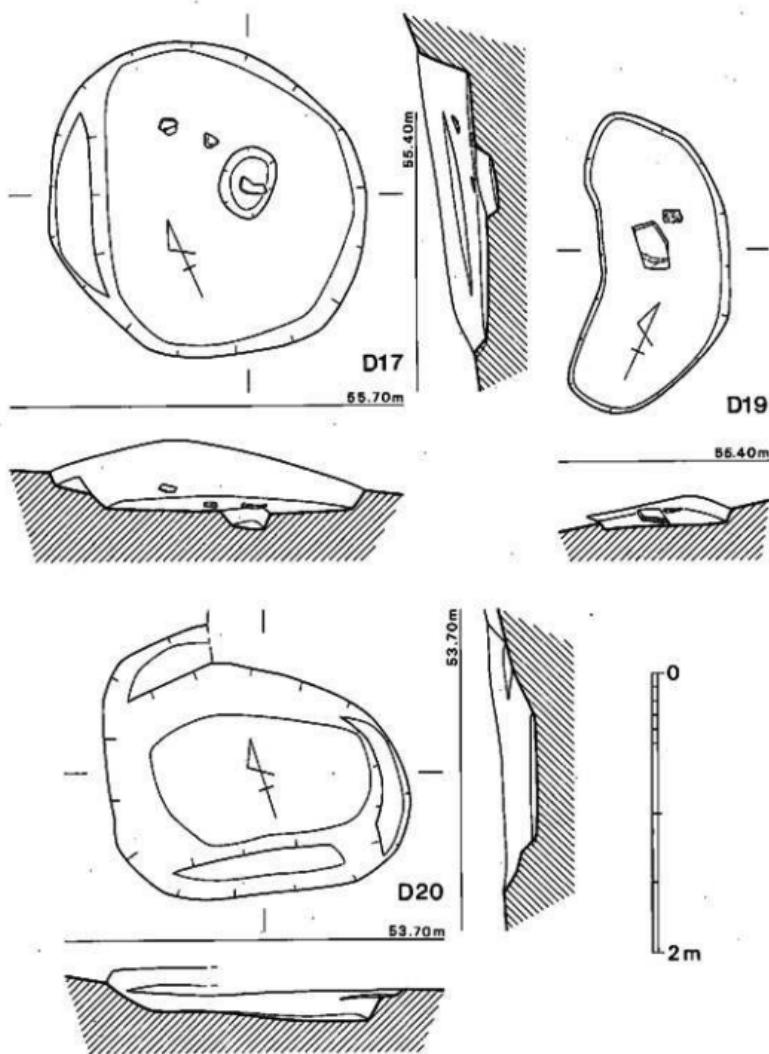
4号建物跡の1.5m北東側に位置する。長円形を呈し、長軸170cm、短軸89cm、深さ22cmを測る。底面は南側に緩傾斜する。遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明。

17号土 壙（第131図）

60号火葬墓の5m南東側に位置する。不整円形を呈し、径224cm、深さ36cmを測る。底面のほぼ中央に50×37cmのピットがある。また、西壁には幅24cmのテラスを設ける。遺物は埋土中から土師器が出土した。



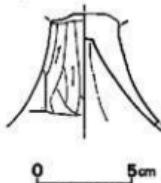
第130図 14~16・18号土壠尖測図 (1/40)



第131図 17・19・20号土壤実測図 (1/40)

出土遺物（第132図）

高環の脚部破片で、残高6.0cmを測る。外面ヘラケズリ調整による。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、内外面とも肌色を呈する。



18号土壙（第130図）

17号火葬墓の2.6m東側に位置する。隅丸方形を呈し、長軸144cm、短軸140cm、深さ50cmを測る。埋土中から須恵器壺・土師器壺が出土したもの的小破片であり、図示不可能。

第132図 17号土壙出土
土器実測図（1/3）

19号土壙（第131図）

17号土壙の1.5m南東側に位置する。不整長円形を呈し、長軸213cm、短軸91cmで、壁高は10cm程度留めるに過ぎない。埋土中より須恵器胸部片と石が出土した。

20号土壙（第131図）

中央の試掘トレンチの南端部で検出した。隅丸方形を呈し、長軸210cm、短軸196cmを測る。3方向にテラスを有する。埋土は暗褐色土で、土師器壺の胸部片が出土したもの的小破片であり、図示できない。

6. 焼 土 壇

火葬墓の整地層下部から2基検出した。壁面が焼けており、焼土・灰がみられたので、当初、火葬土壙としていたが、時期的には建物跡・住居跡に伴うもので、焼土壙に変更した。

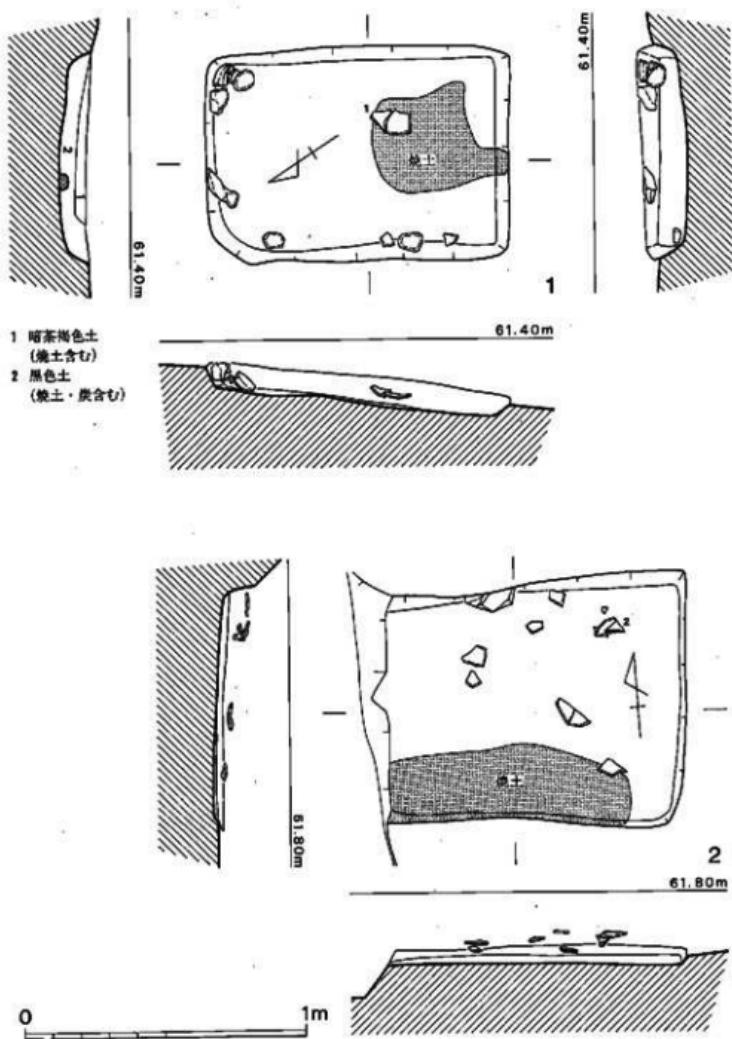
1号焼土壙（図版71-1、第133図）

2号住居跡の外周溝に接して位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸107cm、幅76cm、深さ9cmを測り、岩盤に掘り込んでいる。壁面は四周とも良く焼けており、二次加熱を受けた土器・川原石が出土した。また、焼土塊はカマド出土のものに類似する。

出土遺物（第134図）

1は残高9.3cm、復原口径17.4cmを測る土師器鉢で、口唇部は内側に若干肥厚する。器面調整は、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデによる。胎土に赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は内外面とも褐色を呈する。2号住居跡整地層出土品と接合した。

2は土師器壺で、口径は15.4cmに復原した。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調



第133図 1・2号焼土発掘測量図 (1/20)

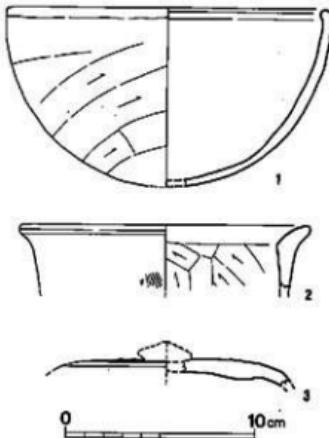
整による。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、内外面とも暗褐色を呈する。

2号火葬土壙（第133図）

1号建物跡の整地層下部より検出した。残存長106cm、東辺長90cmを測り、岩盤に掘り込む。壁面は良く焼けており、埋土中から土器・小円礫・炭（20g）が出土した。2号住居跡出土品と接合関係にある。

出土遺物（第134図）

3は土師器壺蓋で、須恵器の技法を模したものである。天井部破片で、外面は回転ヘラケズリ、内面はナデによる。胎土に長石・石英・赤褐色粒が多く含む。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。



第134図 1・2号焼土壙出土土器実測図（1/3）

7. 石蓋土壙墓

1号石蓋土壙墓（図版72、第135図）

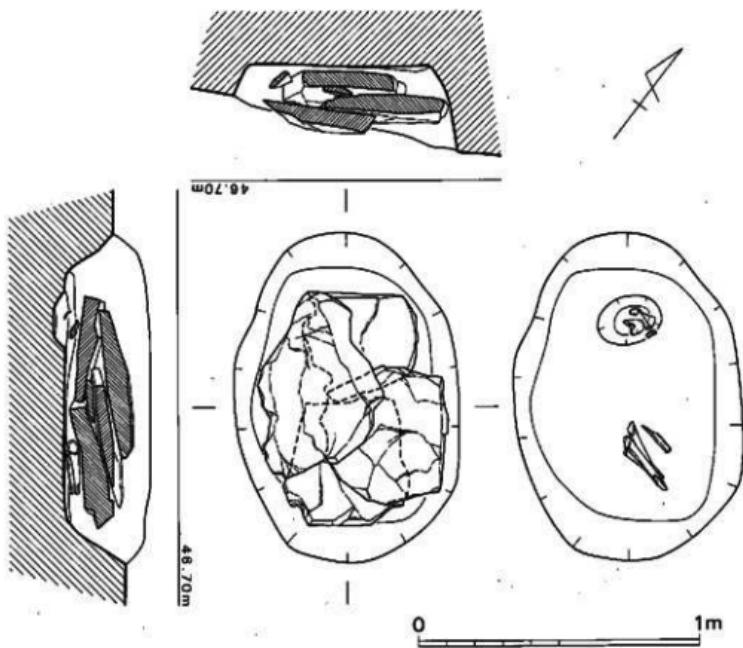
5号住居跡のすぐ東側で検出した。墓壙は長軸116cm、短軸80cm、深さ30cmを測る。蓋石は長さ40~50cm、厚さ7cm程の玄母片岩を交互に4枚重ねており、その下から人骨を検出した。床面北側には小ピットがあり、頭骨の一部が出土した。執拗に石を重ねており、石で蓋としたというよりは、石子詰の印象を強く受ける。土器の出土はなく、時期不詳。また、住居跡との前後関係も不明。

8. 溝状遺構

調査区の全域において6条検出した。

1号溝（図版69-1、第125図）

7号土壙の東壁を切って位置する。長さ238cm、幅60cmの小規模な溝で、深さは15cmと浅い。壙土は黒褐色土で、土師器壺片が出土したが、図示不可能。



第135図 1号石室土壤基突測図 (1/20)

2号溝

6号建物跡の2.2m北西側に位置する。長さ6.72m、幅1.14m、深さ0.13mを測り、南西側に傾斜している。埋土中より弥生土器片が出土したが、当遺構の時期を示すものか不明。

3号溝（第119図）

8号竪穴を切って位置する。長さ6.2m、幅0.54m、深さ0.1mを測る。埋土は黒色土で、土師器壺小片が出土した。

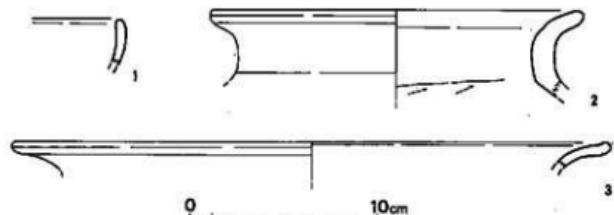
4号溝

79号火葬墓の0.3m南側に位置し、北西—南東方向に直線的に配される溝で、長さ17.8m、幅

0.74m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘砂土で、土師器が出土した。

出土遺物（第136図）

1~3は土師器である。1は壺の口縁部破片で、口唇部は肥厚しない。胎土に赤褐色粒を多く含む。2は甕の口縁部破片で、口縁部は大きく開く。口径は20.0cmに復原した。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は軟質で、色調は黄橙色を呈する。3は口径の1/10程の破片で、口径32cmに復原した。口縁部は水平近く開き、口唇部は上方に立つ。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で、黄灰色を呈する。



第136図 4号溝出土土器実測図 (1/3)

5号溝

4号建物跡の4m北西側に位置する。軸は北東ー南西方向にあり、長さ5.02m、幅0.89m、深さ0.13mを測る。埋土は黒色土であるが、遺物の出土はなかった。

6号溝

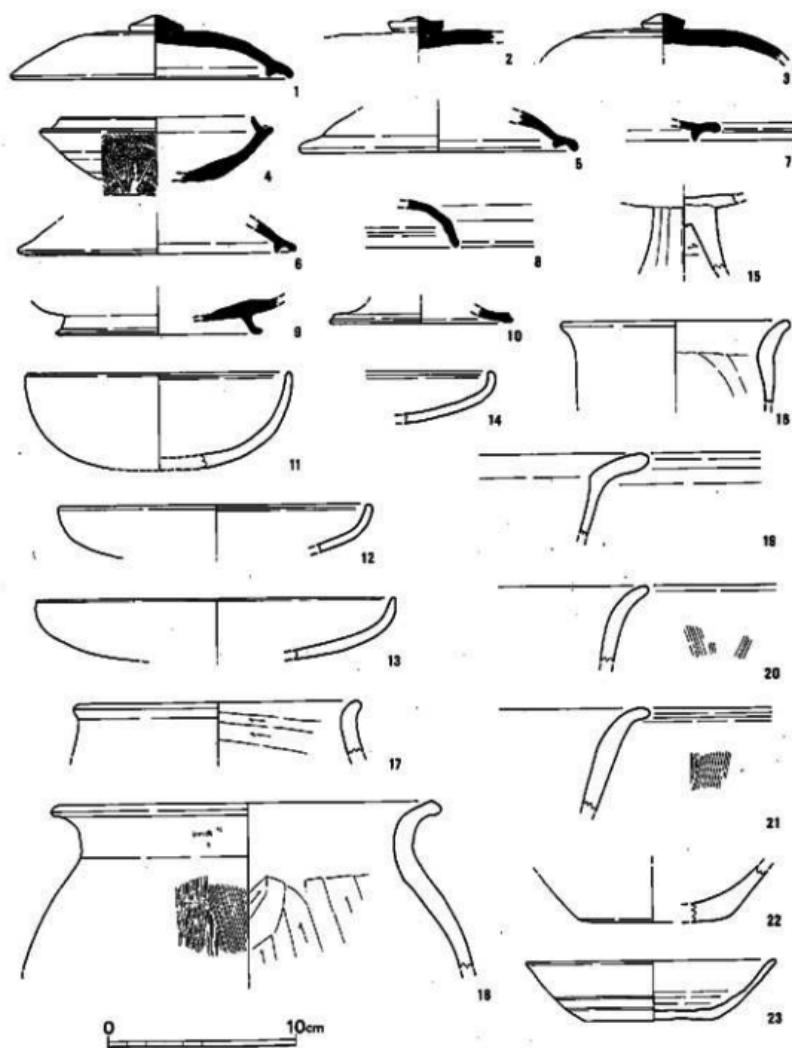
8号竪穴の0.4m北東側に位置し、3号溝とは2.6mの間隔で、平行して配される。長さ4.02m、中央での幅0.49m、深さ0.16mを測る。遺物の出土はなく、時期・性格とも不詳。

9. その他の遺構と遺物

ここでは、ピット出土品、火葬墓整地層及びA群トレンチ出土遺物を取り上げる。

1) ピット出土遺物（図版88-4、第137図）

大追遺跡では、調査区の全域において260個程のピットを確認したが、そのうち遺物が出土したのは150個程であった。出土遺物には、弥生土器・須恵器・土師器、石器等があり、掲載可能なものを図示する。



第137図 ピット出土土器実測図 (1/3)

- P 17 (22) 弐生土器の底部で、底径は8.8cm。壺の底部になろう。
- P 18 (8) 須恵器壺蓋の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。
- P 21 (1) 須恵器壺蓋で、口縁部内面にかえりを有する。器高3.3cm、口径15.0cm。
- P 22 (4) たちあがりがしつかりしているので、壺身とした。体部はナテ調整による。
- P 26 (9) 須恵器壺身で、細身の高い高台を貼付する。高台径は11.0cm。
- P 33 (20) 壺の口縁部小片で、口縁部は緩やかに外反する。外面には黒斑がみられる。
- P 40 (6・10・16) 6はかえりを有する壺蓋で、口径14.8cmに復原した。口唇部は肥厚する。10は須恵器高壺の脚据部破片。16は土師器小型壺で、復原口径12.2cm。
- P 44 (19) 土師器の口縁部小片で、鉢になろう。口縁部は水平近く開く。
- P 46 (7・15) 7は須恵器口縁部小片で、口縁部内面にかえりを有する。15は土師器高壺の脚柱部破片で、外面はヘラによる面取り。
- P 49 (12) 壺の口縁部破片で、口径は16.8cm。口唇部は内側に若干肥厚さす。
- P 65 (23) 土師器壺で、器高3.2cm、口径13.1cm、底径6.8cmを測る。体部にヘラ沈線を2条施す。焼成は良好で、内外面とも赤橙色を呈する。
- P 73 (2) 須恵器壺蓋の天井部破片。偏平な擬宝珠形つまみを付している。
- P 79 (21) 土師器口縁部小片で、口縁部は小さく屈曲する。壺になろう。
- P 84 (17) 土師器壺の口縁部破片で、口縁部は小さく屈曲する。
- P 88 (3) 須恵器壺蓋の天井部破片で、口縁部を欠く。天井部には擬宝珠形つまみを付す。
- P 100 (5) かえりを有する壺蓋で、口径15.0cmに復原した。口唇部は肥厚する。
- P 105 (14) 土師器壺の口縁部小片で、口唇部は内側に曲がる。
- P 112 (13) 土師器壺で、口縁部は上方に立上がる。復原口径19.0cm。
- P 116 (18) 土師器壺で、復原口径20.8cm。口縁部は大きく外反し、口唇部は丸く納める。
- P 125 (11) 土師器壺で、残高は5.0cm、復原口径は14.2cm。口唇部は丸く納める。

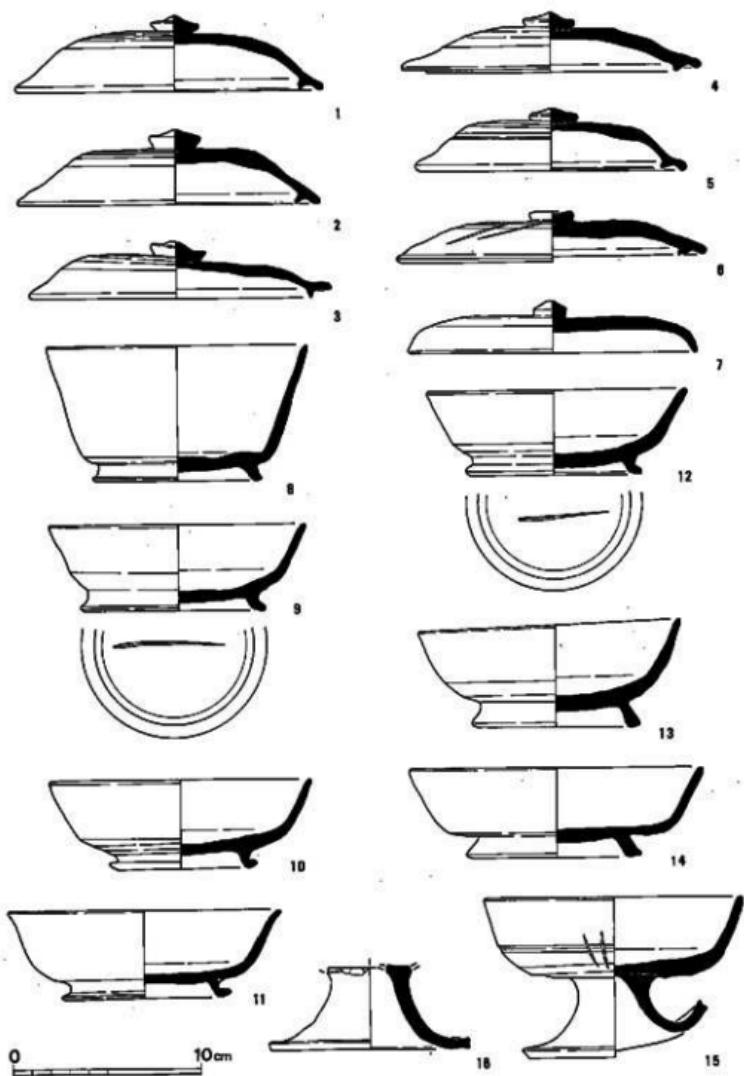
2) 火葬墓整地層出土遺物

前述したことなく、調査区中央のE～J群火葬墓の下層には、建物跡・住居跡・竪穴・土壙が存在し、それらを一旦盛土・整地して火葬墓を造営していた。火葬墓整地層出土品には、土器・石器・鐵器等がある。

E群、E・F群火葬墓整地層出土遺物（図版89・90・91-1・95-5・96-1-2-4、第138～142・146図）

須恵器（1～16・38）

壺蓋（1～7） 1～6は口縁部内面にかえりを有する壺蓋で、1～3がE群整地層、4～6がE・F群整地層の出土である。口径は1が16.4cm、4は15.9cm、5は14.4cmを測り、天井部には偏平な



第138図 E・F群火葬墓整地層出土土器実測図① (1/3)

擬宝珠形つまみを付す。6のつまみは内窓みである。内面には墨の付着がみられ、研磨しており、硯として使用したもの。7は口唇部を丸く納めた环蓋で、つまみは尖頭状を呈する。調整は何れも、口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面ナデによる。

坏身 (8~14) 底部外面に高台を有する坏身で、9~11がE群整地層、12~14がE・F両群の出土である。8は体部が深めの器形で、器高7.1cm、口径14.0cmを測る。9~12は高台の断面が靴形を呈し、9~12は外端部で接地する。10~11は内端部で接地する。13~14は高くて太めの「ハ」字形高台を貼付するもの。調整は口縁部ヨコナデ、内面不整方向ナデにより、高台の貼付箇所にはヘラケズリを留める。また、9~12の内底面には一本線のヘラ記号があり、同一工人の制作によるものであろう。

高坏 (15~16) 15は無蓋高坏で、器高8.4cm、口径13.7cm、脚高4.2cmを測る。脚部は焼け歪む。口唇部は丸く、环部外面にヘラ沈線を1条巡らす。16は脚部の破片で、接合部で剥離している。脚高4.4cm、口径は10.6cmを測る。E群整地層の出土。

甕 (38) 頸部~胴部中位にかけての破片で、復原頸部径は25.0cm。外面は細い平行タタキ目で、内面は同心円タタキ目による。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。50号火葬墓周溝出土品・E群整地層出土品・中央トレンチ下段東側出土品と接合関係にある。

土師器 (17~37)

坏蓋 (17~18) 須恵器を模した坏蓋で、天井部にはボタン状の偏平なつまみを付す。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は軟質で、内外面とも黄褐色を呈する。

坏 (20~22) 20・21は口唇部を肥厚させた坏で、口径は20が17.8cm、21は17.2cmを測る。22は口唇部が外方に伸びる器形で、口径は17.3cm。何れも、胎土に赤褐色粒を含む。

椀 (19) 完形品で、器高4.7cm、口径13.0cmを測る。口唇部は丸く納め、調整はナデによる。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は軟質で、色調は黄橙色を呈する。

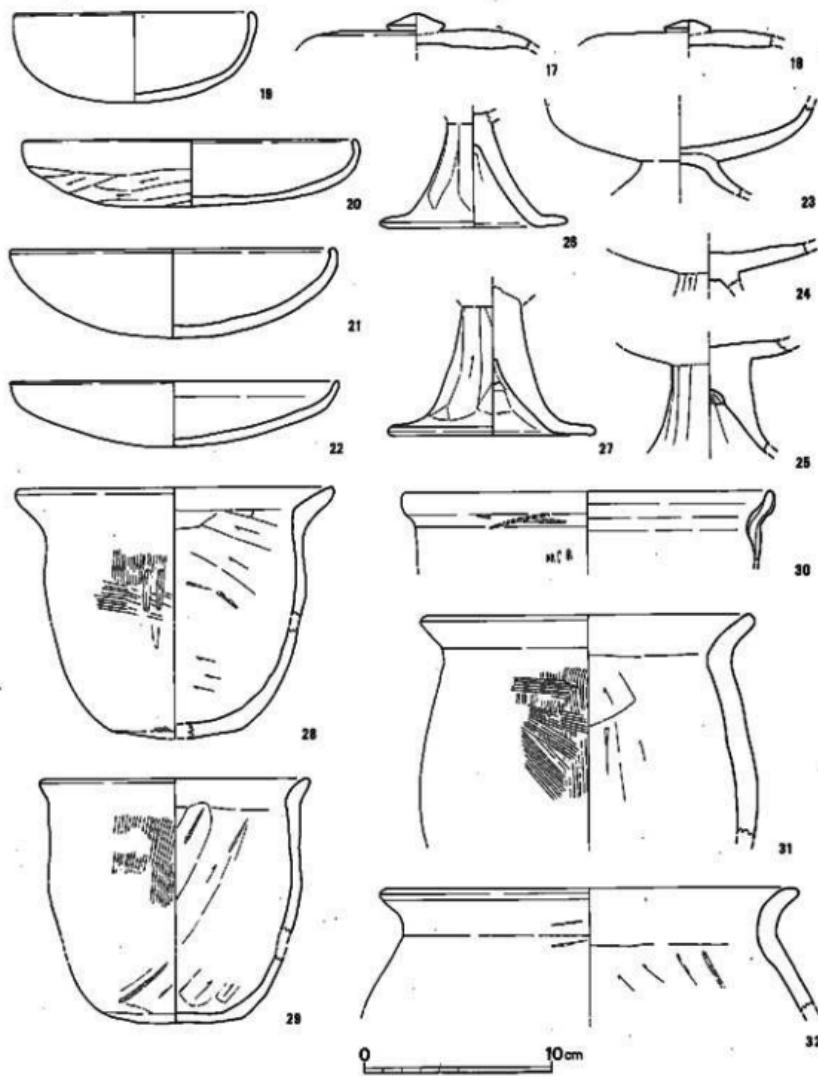
高坏 (23~27) 23は高坏であるが、24~27とは別の器形。脚部は大きく開くようだ。24は坏部との接合部位、25は坏部~脚部にかけての破片。26・27は脚部の破片である。脚径は26が10.0cm、27は11.0cm。脚部外面はヘラケズリによる。

甕 (28~37) 28・29は小型の甕で、口径は28が17.0cm、29は14.4cm。28の口縁部は大きく突出する。30・31は口径が17cm程の中型品。30の口縁部は頸部で一旦屈曲し、上方に立ち上がる器形。調整はナデによる。精製品で、色調は肌色を呈する。

32~37は口径が21~29cmの大型品である。32・33・35・36の口縁部は大きく外方に湾曲し、頸部の締りは良い。34・37の口縁部は、「く」字状に外反する。調整は何れも、口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。37の口縁部は肥厚し、34と同様な手法による。

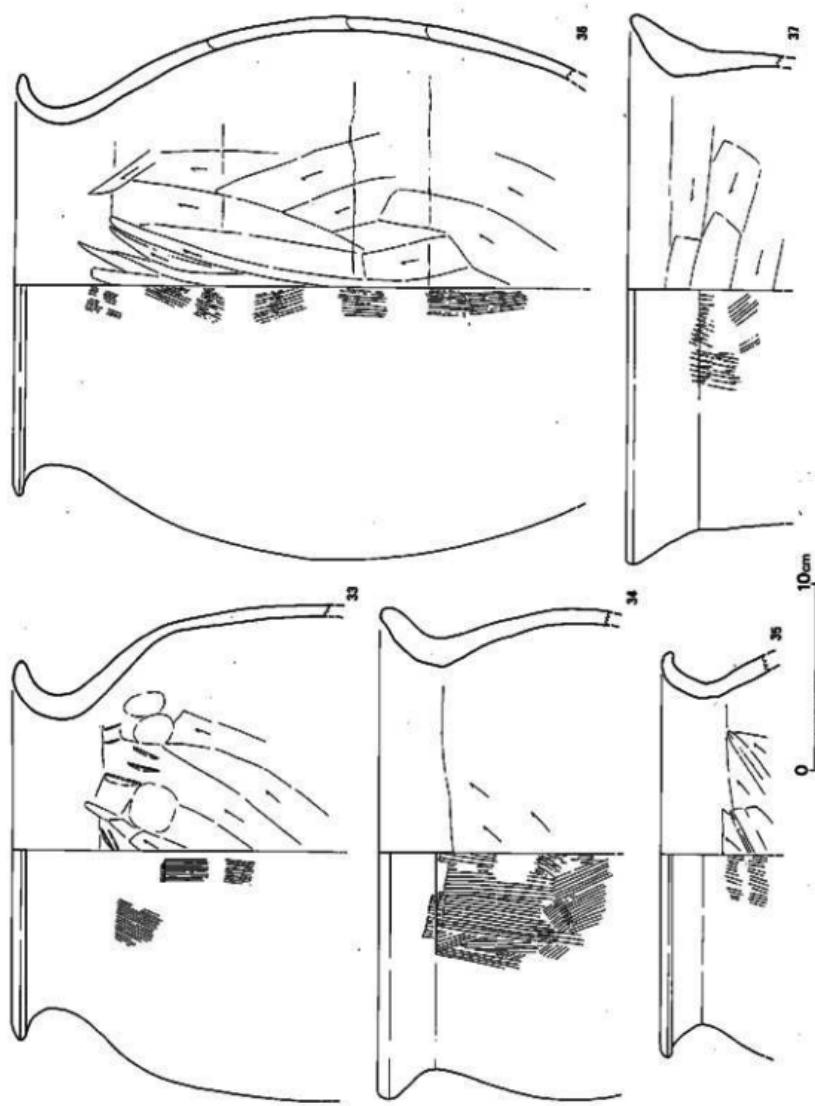
弥生土器

甕 (39・40) 39・40は3号建物の5m東側で検出した土器で、下層遺構に伴うもの。



第139図 E・F群火葬墓整地層出土土器実測図② (1/3)

第140圖 E·F群灰黑整地層出土土器矣剖圖③ (1/3)



39・40は如意形口縁を有し、39の口唇部は若干肥厚する。40の口唇部と頸部下の凸帯には、ハケ状工具によるキザミ目(3~4個/cm)を施す。調整は、口縁部ヨコナデ、外面ハケ目(7~8条/cm)、内面工具ナデによる。39は器高22.1cm、口径22.6cm、底径6.8cmを測る。

土製品

カマド(41) 移動式カマドの底付近の破片で、器高33.1cm、底幅4.9cmを測る。天井部内面と、底の上部内面は黒く焼けている。E・F群整地層の出土。

土錐(第142図1) 管状土錐で、残存長7.8cm、最大幅2.5cm、孔径0.9cm、重さ35.9gを測る。焼成は良好で、外面には黒斑がみられる。E群整地層の出土。

石器

石鎌(第142図6) サスカイト製の石鎌で、重さは0.7g。E群整地層の出土。

砥石(第146図2、第149図7) 2は側縁を面取りしており、粘板岩の切り石を砥石としたもので、厚さ3cm、残存幅25.3cmを測る。上面は平滑で、線状の砥痕がつく。36号火葬墓の東側から出土した。7は欠損品で、明瞭な砥痕はみられないが、上面が平滑であり、砥石として使用したものと思われる。F群整地層の出土である。

鉄器

鉄釘(第142図8・9) 8は3号建物跡東側整地層出土の鉄釘で、頭部幅7mmを測る。9はF群整地層の出土で、断面形は方形を呈する。鉄釘もしくは鉄鎌になるか。

鉄斧(第142図12) 32号火葬墓の下層から出土した。長さ11.8cm、重さ380gで、先端部は欠失するが、刃部幅は5.8cmを測る。袋部断面は隅丸方形を呈し、長軸3.4cm、短軸2.3cm、奥行き6.2cmを測る。

2号竪穴整地層出土遺物(図版91-2・97-2・3、第143図)

2号竪穴及びその西側の整地層出土土器で、F群・E・F群整地層出土品と接合関係にある。

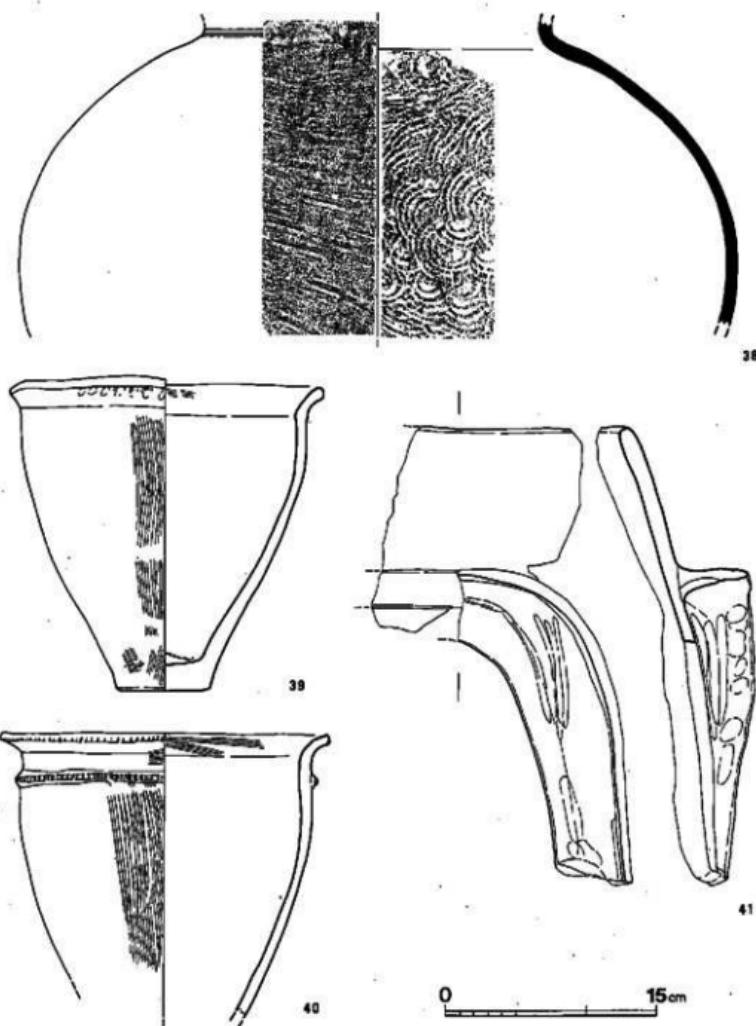
須恵器(1~8)

坏蓋(1~3) 1-2は口縁部内面にかえりを有する坏蓋で、共につまみを欠く。口径は1が15.8cm、2が16.4cmを測る。2のかえりはシャープである。2はF群整地層及びE・F群整地層出土品と接合した。3は口唇部が小さく立つ器形で、一応蓋とした。

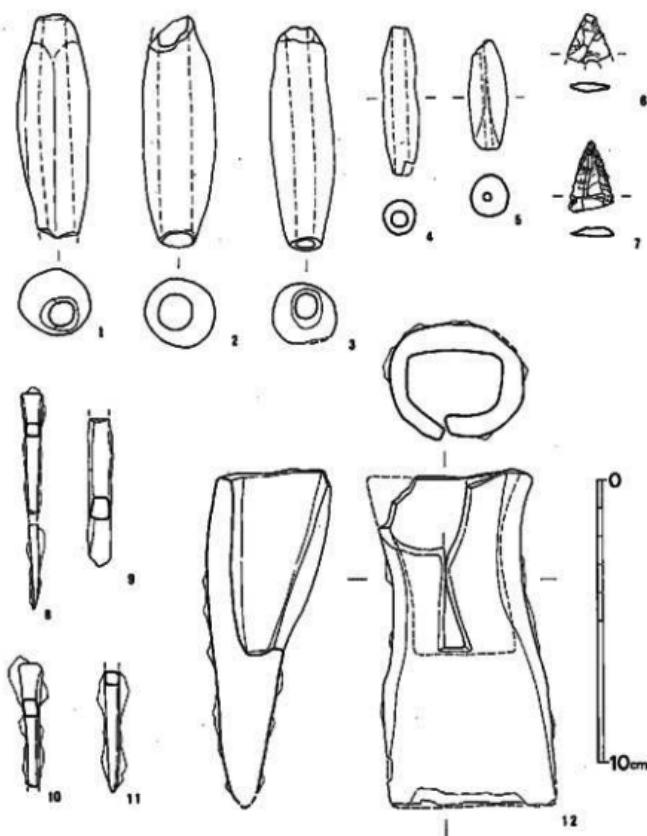
坏身(4) 坏身の底部破片で、断面靴形の高台を貼付する。外底面には一本線のヘラ記号がみられる。焼成は良好で、青灰色を呈する。8号建物跡東側段落ち出土品と接合した。

壺(5) 器高3.5cm、口径12.4cm、底径8.2cmを測る。口縁部は外反気味に開き、口唇部は丸く納める。焼成は堅鐵で、色調は暗青灰色を呈する。

壺(6・7) 6は口径12.8cmを測る口縁部片であり、器壁は薄く壺とした。口唇部には稜を有する。7は残高18.4cm、口径14.4cmを測る。口縁部は大きく外反し、良く締まった頸部から球



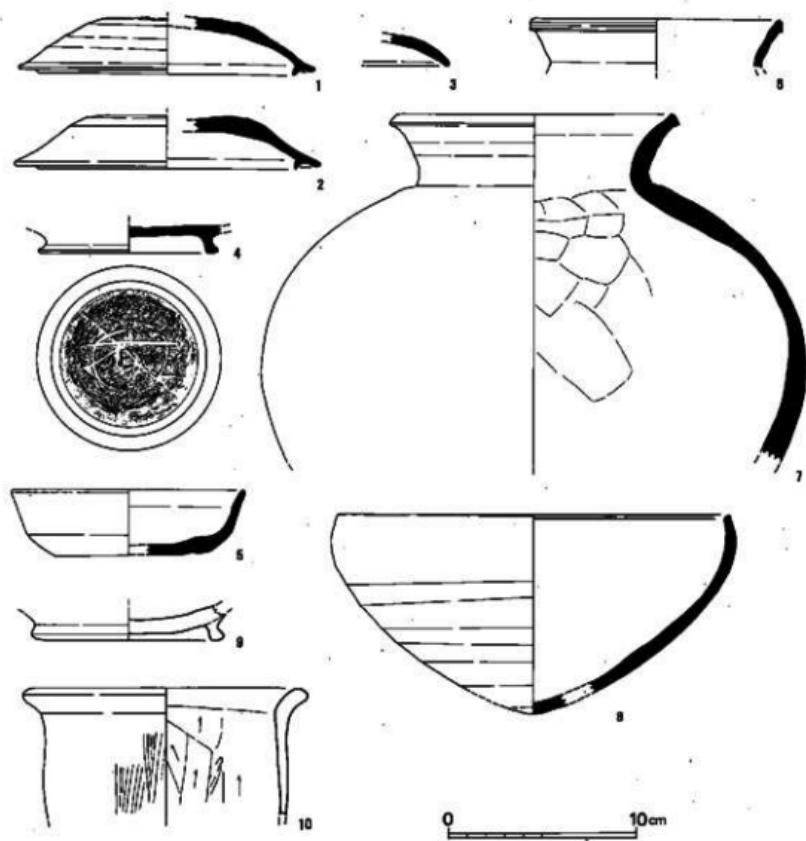
第141図 E・F群火葬墓整地層出土土器・土製品実測図④ (1/4)



第142図 整地層出土遺物実測図 (1/2)

状の胸部に移行する。口唇部は面を有し、外方に突出する。口縁部工具ナデ、外面格子タタキ目→ナデ消し、内面当具痕がみられる。29号火葬墓北側斜面出土品と接合関係にある。

鉢 (8) 8は所謂鉄鉢形土器で、底部と接合しないが同一個体として実測した。口縁部は内傾し、尖底の底部に移行する。復原口径は20.8cm、器高は10.5cm程になろう。口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。2号住居跡



第143図 2号竖穴整地層出土土器実測図 (1/3)

整地層及び28号火葬墓周溝埋土品と接合した。

土師器 (9・10)

坏 身 (9) 底部破片で、高台を貼付する。高台径は10.0cmを測る。胎土に長石・石英を含み、色調は明黄褐色を呈する。須恵器を模したものであろう。

甕 (10) 小型の甕で、口径は15.0cmに復原した。口縁部は肥厚して外反する。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。2号竪穴西側の出土である。

G・H群火葬墓整地層出土遺物 (図版92・96-2・97-2、第142・144~146図)

須恵器 (1~13・18~20)

坏 瓢 (1~5) 1~5は口縁部内面にかえりを有する坏瓢で、1・3は天井部外面に偏平な擬宝珠形つまみを貼付する。口径は1が15.4cm、3は17.0cm。2は器高が低く、かえりは下方に立つ。つまみは縁線が突出する器形で、4・5はつまみを欠く。4は口径が12.6cmと小さく、1・3とは異なるタイプ。1・2はG・H群西側斜面、3は57号火葬墓周辺整地層、4はG群サブレンチ、5はG群東端テラスの出土である。

壺 (6) 器高3.8cm、口径8.8cmを測り、天井部はドーム状を呈する。天井部との境にヘラ沈線を1条巡らす。短頸壺の蓋にならう。G群サブレンチ西側出土品と接合した。

坏 身 (7~9) 7~9は高台を有する坏身で、7・9の口縁部は外反する。8の口縁部は内湾気味であり、断面「ハ」字形の高い高台を付す。口径は7が13.2cm、8は14.8cm、9は10.6cmを測る。7・9はH群、8はG・H群整地層の出土。

高 坏 (12) 高坏の脚部破片で、脚高は5.2cmを測る。G・H群西側斜面の出土である。

甕 (11) 口縁部破片で、復原口径は9.2cmを測る。口唇部は丸く納め、口唇部のやや下方に2条のヘラ沈線を巡らす。G群サブレンチの出土。

横 瓶 (20) 20はG群東端テラス出土の横瓶の胴部破片。外面平行タタキ目→カキ目、内面円弧タタキ目による。J群東端テラス出土品と接合した。

鉢 (10) 10は口径の1/5程の大きさで、口径は14.8cmに復原した。口縁部は若干内傾し、鉢になるか。胴部下位にヘラ沈線を施す。G群東端テラスから出土した。

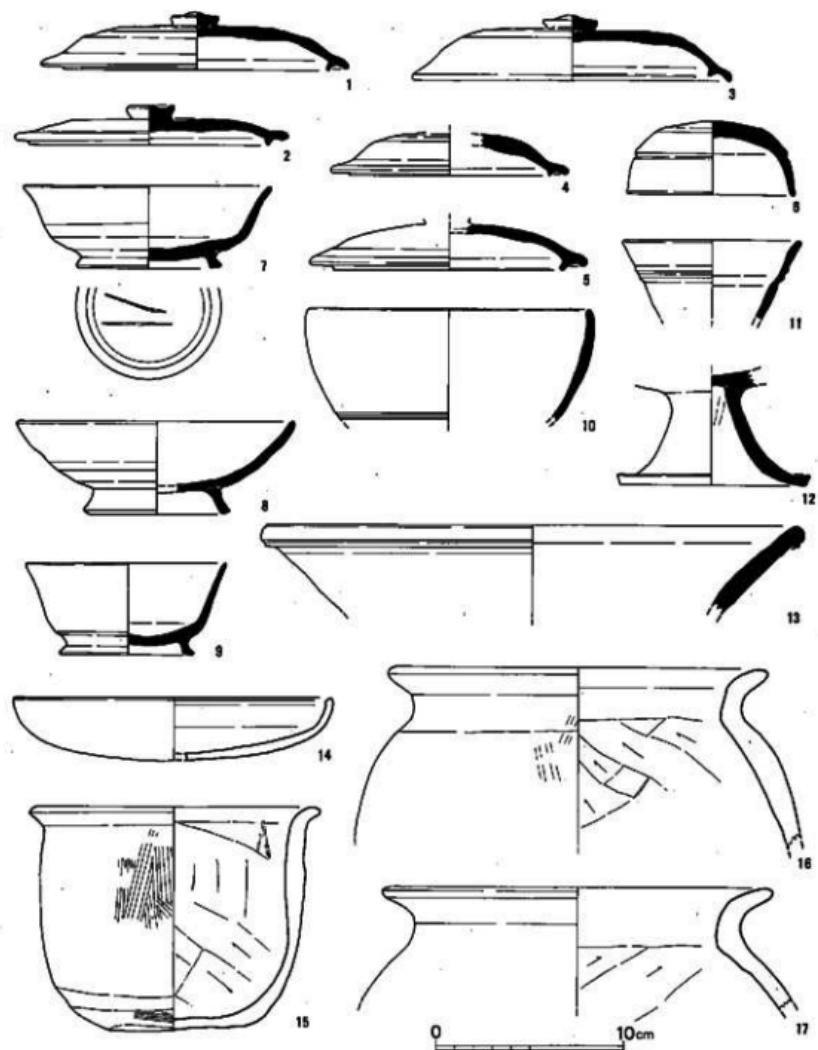
甕 (13・18・19) 13は甕の口縁部破片で、口径の1/4程残存する。調整はナデで、内面に灰がかかる。中央トレンチ下段東側出土品と接合した。18は胴下半部を欠く。口唇部は肥厚し、良く締まった頸部から胴部へ移行する。口縁部回転ナデ、外面タタキ目→カキ目、内面車輪文・タタキ目による。F群、E・F群出土品と接合関係にある。19は底部破片で、外底部には土器片が溶着する。外面カキ目、内面円弧・平行タタキ目による。E群出土品と接合した。

土器器 (14~17)

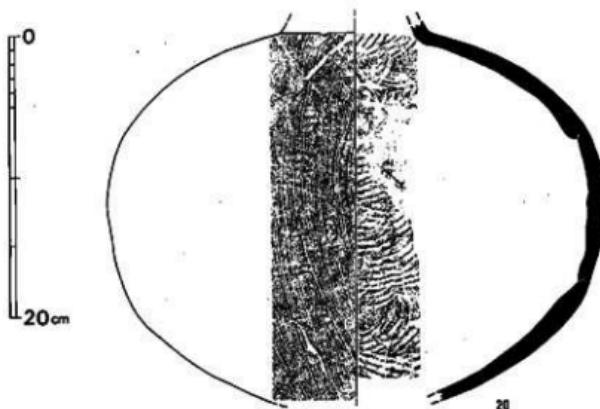
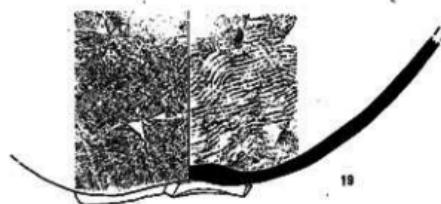
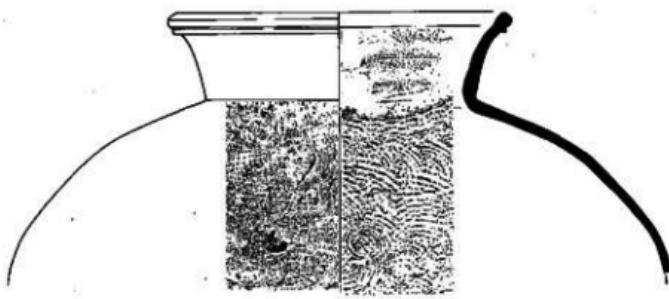
坏 (14) G群東端テラス出土の坏で、口唇部は内側に肥厚する。復原口径は、16.6cm。

甕 (15~17) 15は小型の甕で、器高11.9cm、口径15.5cmで、底部は平底である。口縁部は水平近く屈曲する。16・17は口径20cm前後で、口縁部は鈎状に外反する。15が57号火葬墓周辺、16はG・H群西側斜面、17はG群東端テラスの出土である。

土製品 (第142図2) 管状土錐で、残存長8.1cm、幅2.5cm、孔径1.2cmを測る。外面に黒斑あり。



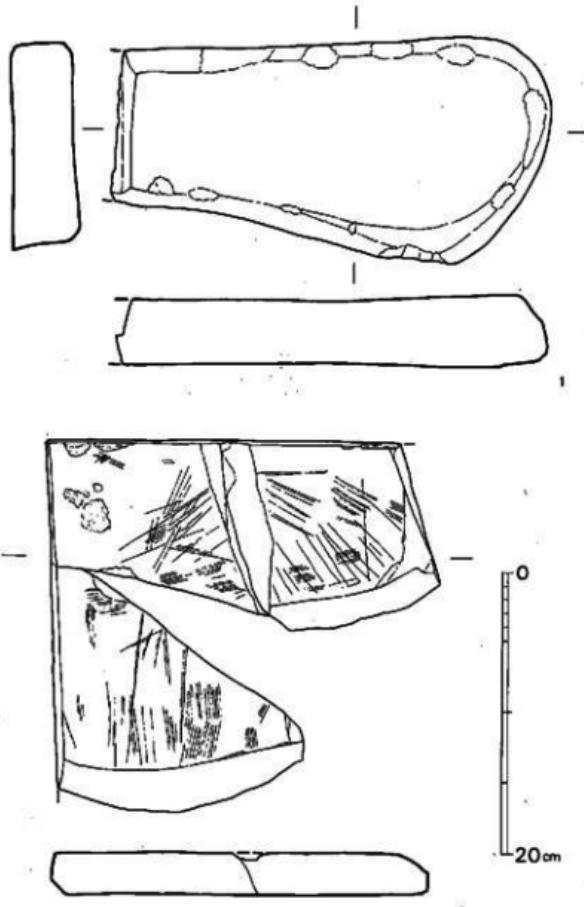
第144図 G・H群火葬墓整地層出土土器実測図① (1/3)



第145圖 G·H群火葬墓整地層出土土器實測圖② (1/4)

石 器

砥 石 (第146図1) G群東端テラス出土の砥石で、砂岩製である。残存長31.6cm、最大幅15.6cm、厚さ5.0cmを測る。上面及び側面は研磨され、砥面として使用している。

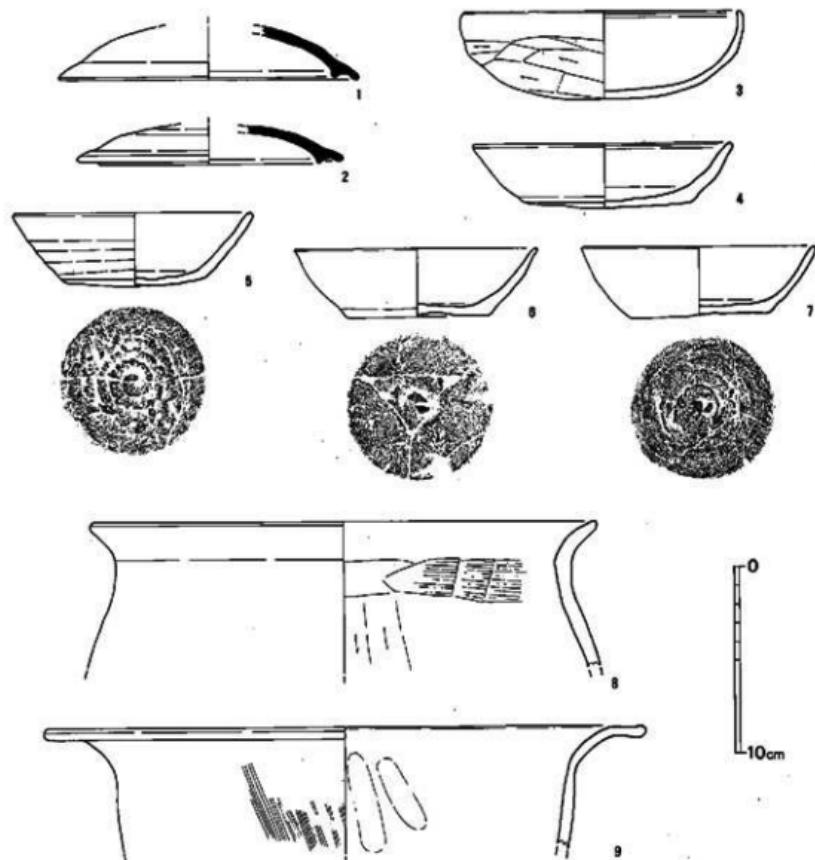


第146図 整地層出土石器実測図 (1/4)

I群火葬墓整地層出土遺物 (図版93-1・96-2・5, 第142・147・149図)

須恵器 (1・2)

坏 蓋 (1・2) 1・2は口縁部内面にかえりを有する坏蓋で、天井部は丸味を有する。口径は1が15.8cm, 2は14.2cmに復原した。



第147図 I群火葬墓整地層出土土器実測図 (1/3)

土器 (3~9)

坏 (3~7) 3は口唇部内面が若干肥厚する坏で、器高4.6cm、復原口径14.4cmを測る。口縁部はヨコナデ、外面手持ちヘラケズリ、内面ナデ調整による。胎土に赤褐色粒を多く含む。

4~7は平底の坏で、器高3.4~3.7cm、口径12.3~13.8cm、底径7.3~8.9cmを測る。口縁部回転ナデ、内面不整方向ナデで、外底面にはヘラ切り痕がみられる。4~7は一括して出土した。

壺 (8) 口縁部~胴部上位の破片で、口縁部は大きく外反する。復原口径は22.0cm。

瓶 (9) 9は口縁部が水平に開くことから瓶になろう。3~9は中央トレンチ東側の出土。

土製品 (第142図4) 胴状土錐で、長さ5.2cm、径1.2cm、孔径0.5cm、重さ3.85gを量る。

石 器 (第149図2) 短冊形の磨製石斧で、長さ12.8cm、刃部幅6.0cm、厚さ1.6cm、重さ150gを量る。白っぽい感じの脆い石材で、凝灰岩であろうか。I群東端テラスより出土した。

J群火葬墓墓地層出土遺物 (図版93-2、第148図)

須恵器 (1・2・4・5)

坏 盖 (1・2) 1・2は東端テラス出土の坏蓋で、口唇部は外方に小さく立つ。器高は低く、1は低い擬宝珠形つまみを付す。1は器高3.4cm、口径17.5cmを測る。

壺 (4) 口縁部を欠くが、長頸壺になろう。外面はカキ目調整による。

壺 (5) 口縁部破片で、口唇部は上方に小さく立つ。回転ナデ調整による。

土器 (6・7)

高 坏 (6) 脚径6.9cm、脚高11.3cmで、外面はヘラケズリによる。

壺 (7) 7は口縁部が鉤状に外反する壺で、口径は21.6cmに復原した。

7号竪穴東側整地層出土遺物 (第148図)

須恵器 (12~14)

坏 盖 (12・13) 12は口縁部内面にかえりを有する坏蓋で、13の口縁部は小さく立つ。

坏 身 (14) 底部の破片で、高台径は9.2cm。断面形は靴形を呈し、内端部で接続する。

土器

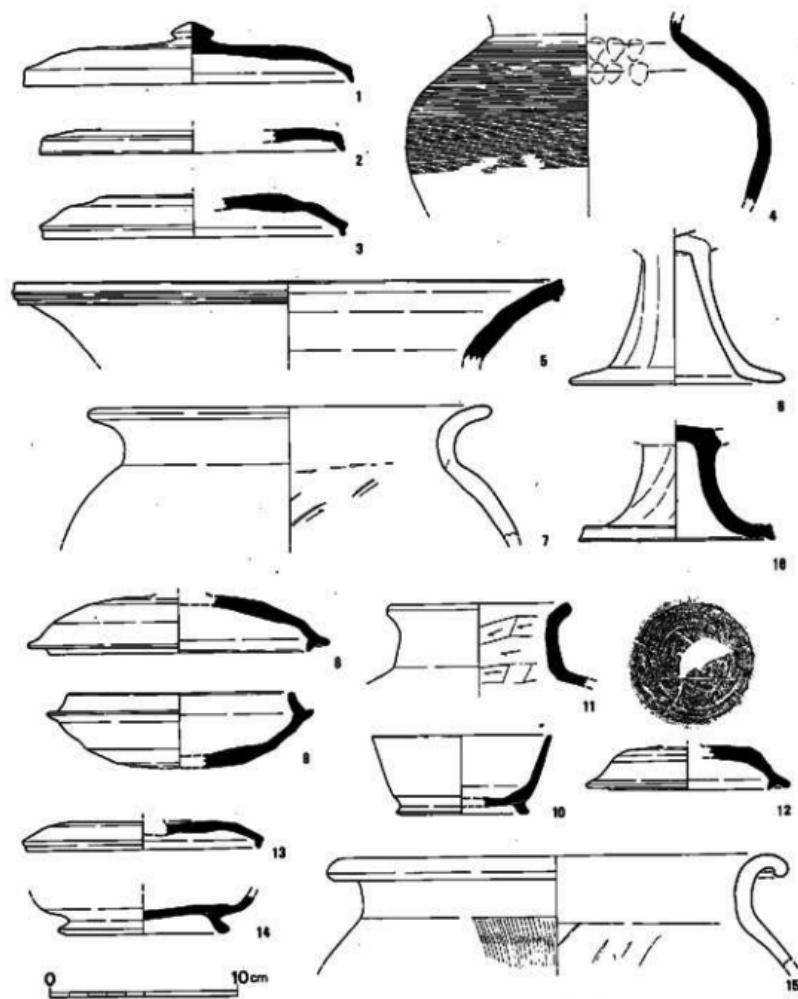
壺 (15) 口縁部は腹手状に外反する。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。

7号建物跡南側整地層出土遺物 (第148図)

須恵器 (8~11)

坏 盖 (8) 口縁部内面にかえりを有する坏蓋で、器高は低い。口径は15.9cmを測る。

坏 身 (9・10) 9は口縁部が内傾する坏身で、口径は12.0cmに復原した。10は高台を有する坏身で、器高4.2cm、口径9.6cmを測る。口唇部はシャープで、ヨコナデ調整による。



第148図 J群火葬墓整地層他出土土器実測図 (1/3)

臺(11) 口縁部破片で、口径は9.4cm。頸部から一旦屈曲して開く。外面ヨコナデ、内面ヘラケズリによる。焼成はやや軟質で、色調は灰青色を呈する。



第149図 整地層他出土石器実測図 (1/3)

その他の出土遺物 (図版96-1・2・5, 第142・148・149図)

土 器 (16) 須恵器高环の脚部破片で、81号火葬墓南側の出土。脚径は10.4cm。

石 器 (1・7) 第142図7は黒曜石製の石鎌で、23号火葬墓周辺の出土。第149図1は蛇文岩製の磨製石斧で、O群火葬墓南斜面の出土。長さ15.4cm, 刃部幅6.0cm, 重さ450gを測る。3は蛇文岩製磨製石斧の欠損品で、採集による。5は1号建物跡整地層出土の石庖丁で、3箇所に穿孔がみられる。

土製品 (5) 第142図5は管状土錐で、C群の出土。残長3.9cm, 幅1.4cm, 重さ6.65g。

A群トレンチ (図版73、第150図)

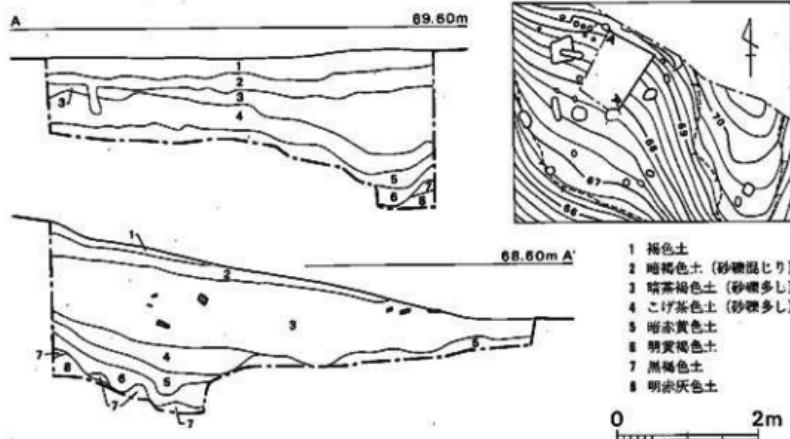
1号土壙が位置する平坦面は、地山の片岩が露出しているが、1号火葬墓～4号火葬墓～9号火葬墓にかけての斜面部は茶褐色土が堆積し、1号火葬墓南西側の遺構検出時に、弥生土器・黒曜石の剝片等を検出した。このため、土層の堆積状況を確認する目的で、2号～7号土壙間の遺構が存在しない箇所に東西5.5m×南北7mのトレンチを設定し、掘り下げた。

土層は上層から褐色土、暗褐色土、暗茶褐色土、こげ茶色土、暗赤黄色土、黒褐色土、明赤灰色土の順で、1層の褐色土から4層のこげ茶色土には3～20mm大の砂礫を多く含んでいた。3層の暗茶褐色土層は、弥生土器、黒曜石・サヌカイトの剝片を包含しているが、遺構に伴うものではなく、北側からの流れ込み堆積によるもので、北側の調査区外にも弥生期の遺構が存在するものと考えられる。

トレンチ調査の結果、1号火葬墓～4号火葬墓～9号火葬墓にかけての斜面部には、北西～南東方向にかけて浅い谷（窪み）が入っていることが判明した。また、8層とした明赤灰色土は、中央トレンチの11層（明赤褐色土—第151図）に対応する。

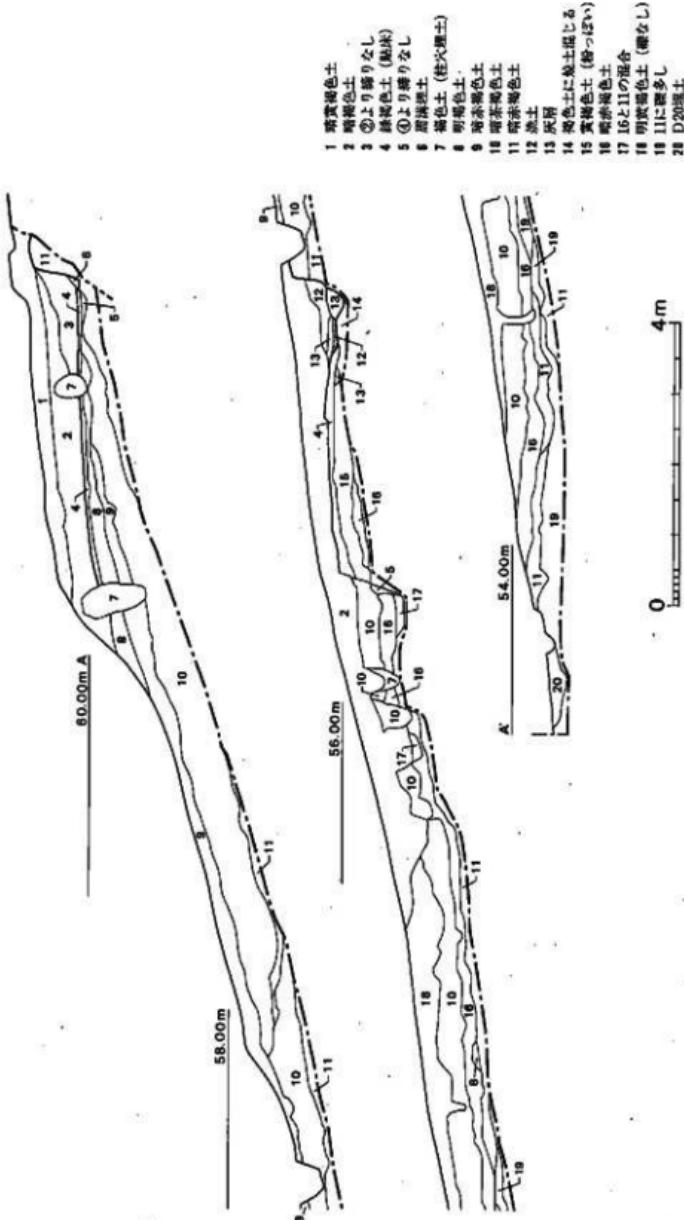
出土遺物 (図版96-5、第149図)

石 器 (4) 磨製石斧の刃部破片で、褐色土から出土した。その他に、黒曜石・サヌカイトの剝片及び弥生土器小片が出土している。



第150図 A群トレンチ土層断面実測図 (1/80)

第151図 中央トレンチ土層断面実測図 (1/80)



V 大迫遺跡二次調査

1. 遺構の概要

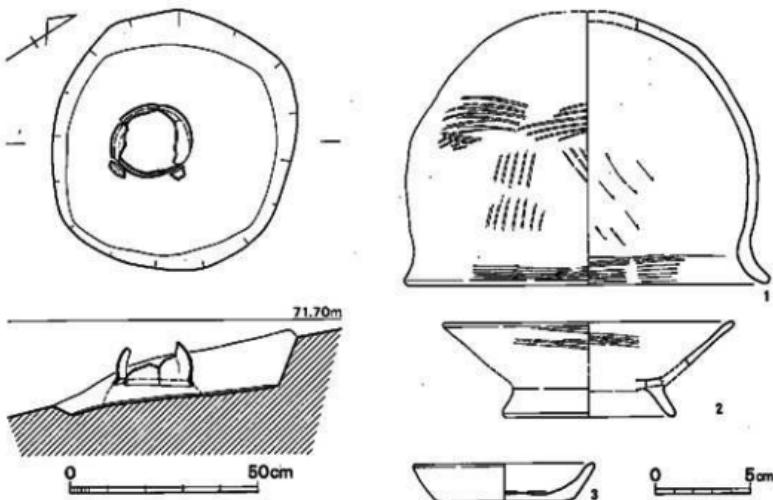
二次調査では、火葬墓の北縁を確認する意味で、C群火葬墓の北側（Iトレンチ）とA群火葬墓の北側（IIトレンチ）及びその中間に（IIIトレンチ）3本のトレンチを設定し、人力による掘削を行った。

調査の結果、Iトレンチでは弥生時代の竪穴式住居跡を1軒、IIトレンチでは火葬墓1基・火葬土壙2基を検出した。IIIトレンチでは、ピットを検出したにすぎない。

2. 火葬墓・火葬土壙

1号火葬墓（図版76、第152図）

IIトレンチの西壁に1号火葬土壙がかかったため、西側を拡張したところ火葬墓が存在すること



第152図 1号火葬墓実測図 (1/15)

第153図 1号火葬墓出土土器・骨蔵器実測図 (1/3)

とが判明した。5~7号火葬墓とは10mの距離がある。墓壇は骨蔵器を有するb類で、長径69cm、短径63cm、深さ15cmを測り、円形を呈する。骨蔵器は墓壇のやや西よりにあり、土師器甕を倒立させて埋葬していた。骨蔵器内から10gの火葬骨と炭が出土した。墓壇内からは、土師器甕と椀が出土した。

周溝は、墓壇の壁高が15cmと浅いため存在していたかは不明。

出土遺物（図版93-3、第153図）

骨蔵器（1），1は土師器甕で、器高14.2cm、口径19.5cmを測る。口縁部はそれほど肥厚せずに外反し、口縁部内面の縁は鋸さに欠ける。調整は口縁部内外面ハケ目、外面粗いハケ目、内面ヘラケズリによる。胎土に2~4mm大の長石・石英・雲母が多く含む。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

2は接合しないものの同一個体で、埋土中から出土した。口径は15.4cm、底径は9.2cmに復原した。体部は横方向のヘラミガキによる。口径からして骨蔵器本体としてよいが、小破片であり、詳細不明。3は皿で、埋土上層の出土。器高2.0cm、口径9.6cm、底径7.0cmを測る。

1号火葬土壙（図版77-1、第154図）

トレンチの西壁に土壙がかかったため西側を2m拡張した。0.3m西側に1号火葬墓が位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸93cm、短軸79cm、深さ42cmを測る。壁面が加熱を受けて、赤変していることから火葬土壙とした。埋土は上層から、暗茶褐色土、淡茶褐色土、黄褐色土、炭・灰層で、北側からの土砂流入により埋まっていた。土器の出土はなく、埋土下位から炭が出土したのみ。

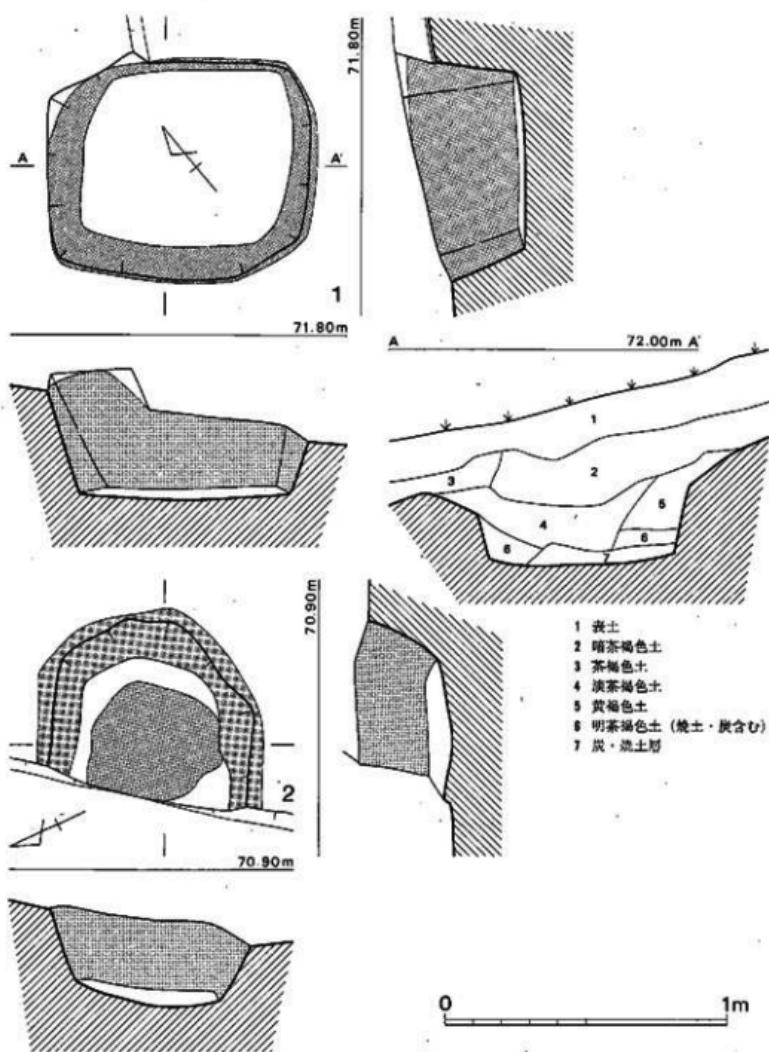
2号火葬土壙（図版77-2、第154図）

1号火葬土壙の3.4m東側に位置する。当土壙もトレンチの東壁にかかったため東側を2m拡張した。西壁はトレンチにより失う。南北幅72cm、東西は62cm残存し、深さは30cmを測る。壁面と底面は加熱を強く受け、赤変する。遺物は検出していない。

3. 竪穴式住居跡

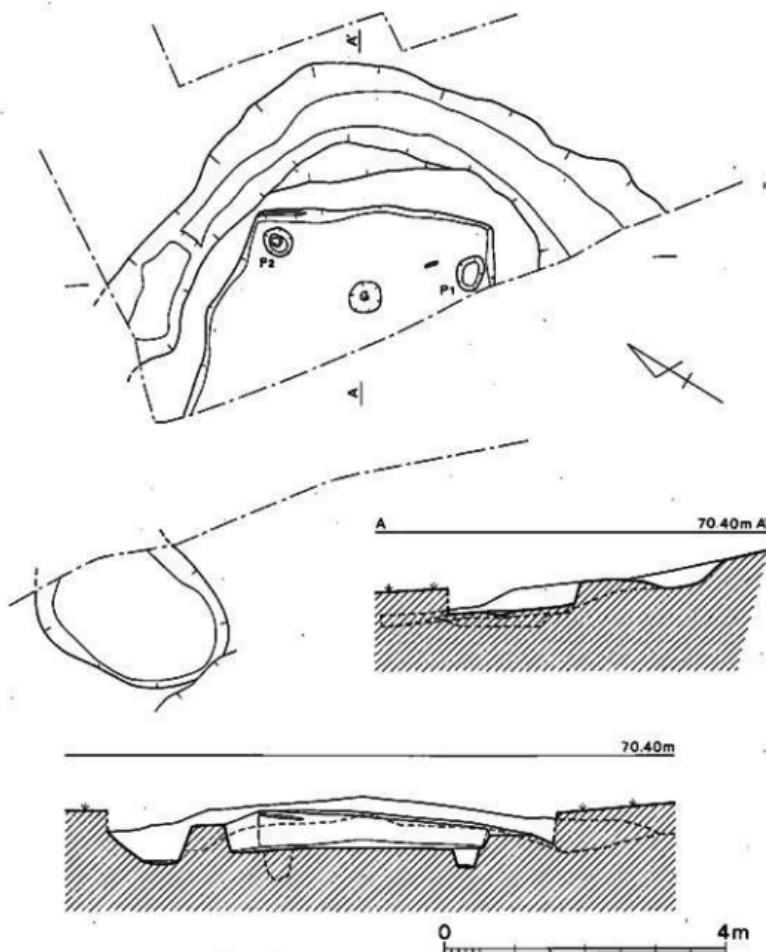
1号住居跡（図版74-2、第155図）

トレンチの南端で、溝と段落ちを検出したため東側に拡張した。当初確認した溝は、住居を取り巻き、外周溝であることが判明した。これは後になって判ったことであるが、24号火葬墓北側の長円形の落込みからは、弥生土器が出土している。位置的に外周溝の先端部に当たり、両者が連続するとなれば、周溝の東西幅は7m程の規模を有する。住居跡は北東壁3.35m、深さ



第154図 1・2号火葬場土壤実測図 (1/20)

0.3mを測る。北側と南側コーナー部に柱穴があり、深さはP1が27cm、P2は31cmを測る。炉跡は東壁寄りにあり、径45cm、深さ5cmで、焼土・炭化物が入っていた。



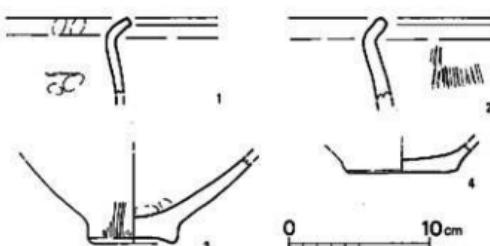
第155図 1号住居跡実測図 (1/80)

外周溝は住居壁から40~60cmの間隔をおいてコ字形に巡り、東壁側で幅1.7m、深さ0.28mを測る。遺物は埋土・炉跡・周溝から弥生土器が出土した。

出土遺物（図版93-4、第156図）

1・2は壺の口縁部小片で、断面形は「く」字形を呈する。1・2とも口縁部外面には煤が付着する。

3は上げ底の底部破片で、底径6.3cmを測る。外面ハケ目、内面ナデ調整による。4は平底の底部破片で、底径は8.2cm。1は埋土、3は炉跡、2・4は外周溝の出土である。



第156図 1号住居跡出土土器実測図(1/4)

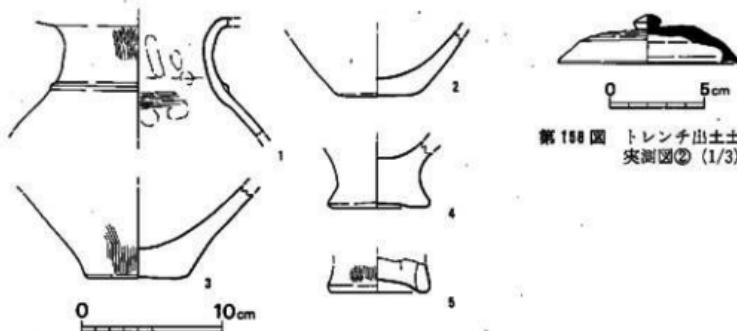
その他に、トレンチからは弥生土器・須恵器が出土した。

弥生土器（図版93-4、第157図1~5）

1は壺の頸部付近の破片で、頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付する。外面ヘラミガキ、内面にはユビオサエ痕がみられる。2は底部破片で、底径は5.8cmを測る。器形からして壺になろう。3~5は底部破片で、3は器壁が薄く、4・5は厚い。1・3はIIトレンチ、2・4はIトレンチ、5はIIIトレンチの出土である。

須恵器（図版93-4、第158図）

器高2.6cm、口径9.6cmを測る壺蓋で、Iトレンチ表土より出土した。



第158図 トレンチ出土土器実測図②(1/3)

第157図 トレンチ出土土器実測図①(1/4)

VI 自然科学的分析

1. 福岡県朝倉郡大迫遺跡出土の古代火葬骨

九州大学医学部解剖学第2講座 中橋 孝博

1) はじめに

九州を横断する高速自動車道の建設に伴って、数多くの遺跡が発掘調査されてきたが、その結果、県北部に較べて比較的未調査区の多かった福岡県中南部についても、その人類学的・考古学的知見が着実に増え続けている。

今回、新たに検出されたのは、福岡県中南部に位置する朝倉郡朝倉町の丘陵地に見い出された遺跡で、全国的にも類例の稀な、奈良時代から平安時代にかけてのかなり大規模な火葬墓群である。並み・細片化の著しい火葬骨のことではあり、残念ながら形態的な分析は殆ど望めず、得られた情報も限られたものではあるが、当時はまだ一般的ではなかったこの葬制の初期の実態を窺う上で貴重な資料となろう。以下に、その観察結果を報告する。

2) 遺 跡・資 料

遺跡・出土状況：大迫遺跡は、福岡県中南部、朝倉郡朝倉町（大字山田字大迫）の標高40～70mの丘陵上に見い出された遺跡である。当遺跡の南方低地には筑後川が東から西へと流れ、眼下に筑後平野を見渡すかなりの高所に位置する。1988年冬から夏にかけて福岡県教育委員会による発掘調査が実施され、弥生時代から古代・中世にかけての遺構・遺物が出土した。

火葬墓は丘陵の南斜面を3～4段の階段状に造成してつくられ、そこから計74基の火葬墓及び21基の火葬場が検出された。各墓地の多くは、山側に一辺2～3mのコ字形の溝が掘られて、数基ごとに小グループを形成し、また、焼場と数基の墓地とが組合わさった状況が認められた。火葬墓の多くは墓穴を掘ただけのものだが、一部は骨壺や木棺等を使用し、石組の中に埋葬している例も見い出せる。

所属時代：伴出遺物や層序関係等の考古学的考察から、奈良時代末から平安時代前期にかけての遺骨と考えられている。

3) 結 果

殆どが灰白色を呈し、擦れ・歪み・ひび割れ・縮小等の火葬骨特有の外觀を見せている。大

きな原型をとどめた破片は殆ど無く、細片化が著しい。同定し得た部位や性・年齢等、観察結果を表5に一覧した。以下、各火葬墓ごとに簡単に観察所見をまとめておく。

5号火葬墓

少量の頭蓋骨片の他、大脛骨や脊椎の一部を確認できるが、細片化が著しく、多くは部位の同定が困難である。従って性別・年齢の特定は不可能だが、ただ、頭蓋や四肢骨片の厚さからみて子供ではなく、成人に達した個体と見なされる。

6号火葬墓

他の火葬墓に較べてやや量的に多く、ほぼ全身の比較的大きな2~3cm大の破片を含む。しかし、歯や第2頸椎歯突起等は存在しない。一部の手骨等、原型をとどめている四肢骨のサイズがかなり小さいことから女性の可能性も考えられるが、火葬による縮小率を考慮に入れるとなれば、確定は困難である。また、骨端線が無いことと、観察し得る下顎歯列の火白歯等の歯槽部が統て開放したままで、生前の脱落が無かった模様なので、成人でもまだそれ程高齢には達していない個体であった可能性が考えられる。

7号火葬墓

細片化が著しく、頭蓋の他、四肢骨の一部を同定できるのみである。性別は不明。年齢は骨厚等から、やはり成人のものと見なしてよからう。

18号火葬墓

頭蓋小片の他、少量を残すだけで性別は不明。骨の厚みから成人骨と考えるのが妥当であろう。

20号火葬墓

細小片のみ遺存しており、頭蓋骨片も確認できない。性別は不明。やはり骨の厚みから成人骨と見なされる。

21号火葬墓

量的にはかなり多く、確認できる部位もほぼ全身にわたる。大脛骨頭が大きく、粗縁の発達も非常に良好なことから男性と見なされる。また、矢状縫合の一部が癒合し、上顎歯の生前の脱落等も確認できるので、恐らく熟年以上に達した個体と思われる。なお、当火葬墓では、第2頸椎歯突起の存在も確認された。

23号火葬墓（火葬場）

頭蓋片はごく少なく、多くは体部骨の小片で占められている。骨端線が無いので成人と見なされるが、性別は不明。

これは火葬場で見い出された焼骨だが、量的に特に頭蓋部等が少なく、欠落部位も多そうしたことからみて、当地で焼いた骨を他所に埋葬し直した残骨の可能性が強い。

24号火葬墓

ほぼ全身の骨が認められ、量的にも今回の火葬墓の中では最も多い。一部原型をとどめている頭蓋の眉弓部や乳様突起の形状から男性と見なされ、また観察し得る冠状縫合や矢状縫合が總て開いていることから、成年期のものと考えて大過無い。なお、第2頸椎歯突起は見あたらず、また、歯は歯根のみだが2本だけ混在していた。左眼窩上孔が存在する。

27号火葬墓

細片が少量遺存するのみである。性別・年齢共に不明。

38号火葬墓

頭蓋の他、四肢・脊椎片などが確認できるが、性別判定は困難で、年齢も骨端線が無いことから成人骨であることだけは確認できる。

39号火葬墓

頭蓋・四肢骨片などの他、第2頸椎歯突起が見いだされた。性別は不明。また、骨端線が無いこと及び骨厚からみて成人に達した個体とみなされる。

43号火葬墓

遺存量が少なく、頭蓋小片の他は同定不能である。性別は不明。年齢も骨厚から成人の可能性が窺われるが確言はし難い。

45号火葬墓

かなりの量が遺存し、一応全身にわたる部位が同定された。歯も歯根が2本見い出されたが、ただ、第2頸椎歯突起は無い。また、他の火葬墓に較べ、頭蓋片の相対的な量がかなり少ない点が目につく。性別は大坐骨切痕や乳様突起の形状及び原型をとどめている四肢のサイズが、縮小率を考慮してもなお小さいことから女性と見なされる。しかし、年齢については、骨端線が無いことから成人であることは確認できるが、詳しい年齢区分は困難である。

51号火葬墓

45号と同様、量がかなり多く、ほぼ全身の部位を確認できるが、やはり頭蓋骨片が相対的にかなり少い。第2頸椎歯突起は無いが、歯根が1本見い出された。四肢骨端のサイズから見て男性の可能性が強い。年齢は縫合の一部が開放しているので、一応は比較的若い可能性が考えられるが、縫合の部位の同定が困難なので性別はし難い。

52号火葬墓

頭蓋の他、四肢の一部が識別できるのみで、細片化が著しく量も少ない。骨厚から成人と見なされるものの、詳しい年齢区分や性別は不明。

54号火葬墓

微量の四肢小片のみで性別は不明。ただ、骨厚からやはり成人の可能性が考えられる。

57号火葬墓

細片化が著しく、頭小片の他、四肢の一部を確認できるが、原型をとどめた部は少ない。また、全体量に較べて頭片がやや少ない。性別は不明。骨厚から成人と見なされる。

58号火葬墓

少量の細片のみで、頭蓋の他は殆ど識別困難である。性別は不明。年齢は一応、骨厚から成人の可能性が考えられる。

61号火葬墓

少量で、頭蓋の他は、手・足・脊椎の一部のみ識別された。性別は不明。骨端線が無いことから成人と見なされる。

71号火葬墓

細小片が多いが、頭蓋の他、脊椎や上腕骨・大脛骨等四肢の一部の存在が確認された。性別は眉弓部の発達度からみて女性の可能性が強い。また、年齢は骨厚から成人骨と推察される。

91号火葬墓

量的には71号とほぼ同量で、頭蓋の他に、手・足も含めてかなりの部位が同定できる。しかし、性を決める上での有力な部位は無く、性別は不明である。骨端線が無いので成人と見なされるが、詳しい区分は困難である。

二次1号火葬墓

微量の細小片のみで、同定部位も一部に限られ、性別・年齢も判定困難である。

1号石蓋土壙墓

大脛骨と思われる四肢小片を僅かに残すのみである。その骨厚から恐らく成人骨と思われるが性別は不明。

4) 総 括・考 察

九州横断自動車道の建設に伴って、1988年春、福岡県南部に位置する朝倉郡朝倉町の丘陵南斜面で大規模な火葬墓群が発掘調査された。その結果、火葬墓74基・火葬場21基が検出され、種々の考古遺物と共に相当量の焼骨が出土した。精査した結果を以下にまとめておく。

- ・焼骨は、一部土壤の影響もあって黄褐色のものもあるが、多くは灰褐色を呈し、焼け方は比較的均等である。
- ・何れも量的にかなり少なく、3~4cmを越えるような大きな破片は稀で、原型を留める破片は殆ど存在しない。
- ・上記の状況のため、形態的な特徴は何れについても観察不能で、僅かに24号で眼窓上孔の存在が確認できたにすぎない。
- ・ここに見た全ての火葬墓は、何れも単体埋葬と見なされ、複数個体の存在を示す所見は得られなかった。
- ・確認し得た個体年齢は、何れも成人期を示し、子供の骨の存在は確認できない。
- ・歯根は數本確認されたが、歯冠部は一片も見いだせなかった。
- ・第2類椎歯突起の存在は、2基の火葬墓で確認されたが、比較的全身骨が揃っている個体でも欠落している例も幾つかあり、特に意識してこの部分を拾骨している痕跡は無い。
- ・遺存率において、一部に頸蓋の少ない例や軀幹部が少ない等、個体により遺存部位には多少の差異があるものの全体的にはほぼ全身各部を含んでおり、拾骨に際して特定の部分に偏る傾向は認められない。

遺体を火葬することは、地域によって先史時代の昔から行われていたようだが、周知のように「統日本紀」の文武天皇四(700)年の条に、僧道昭の遺言によって大和の栗原で初めて火葬されたとの記事があり、一応はこれが我が国における仏教的葬法としての火葬の始まりとされている(土井・佐藤1979)。現在でこそ火葬は、一般的に広く普及した葬法になっているが、今回発掘された大迫遺跡火葬墓の時代(奈良末~平安前期)には、まだこの葬法はさほど普及しておらず、主に僧侶・貴族階級等の埋葬風習であったと推測されており、この大迫遺跡でも丘

陵斜面を削ってかなり大規模な造成工事を施していることから考えて、そうしたかなり社会的地位の高い被葬者層を想定しても不自然ではない。

彼ら上層階級の人々がどういう特徴を持っていたのかは、人類学的に興味ある問題点だが、残念ながら火葬骨であるためそうした点については、殆ど情報を得ることができなかった。しかし、上記の観察から当時のこの葬法の実態については幾つか得る所もあり、例えば、火葬後の拾骨にあたって第2頸椎を特に意識していない点がまず挙げられる。現在も真宗門徒では、火葬の後、選択的に第2頸椎を取り上げて埋葬することが一般的に行われているが（国分 1985）、比較的近隣の例として山口県吉母浜の中世墓（14～16世紀）でも、この部分を例外なく選択的に取り上げていたことが明らかになっている（中嶋・永井 1985）。

しかし、当遺跡では、他部はほぼ描っているのに第2頸椎は見あたらない例があるかと思えば、比較的少量の中にこの部分が混ざっていたりで、特に第2頸椎を意識して拾骨している形跡は認められない。先に、隣在の小都市津古土取遺跡の中世墓でもやはり同様の状況であったことを報告しており（中嶋 1990）、宗派の問題があるので一概には言えないものの、今回の結果によって、当地域一帯ではそうした風習の欠落が古代の昔に遡る可能性が浮かび上がってきたと言えよう。

また、火葬の実施状況についてもう少しふれておくと、今回出土の火葬骨は殆どが灰白色を呈し、捻れや輪状の亀裂、深いひび割れ、或は強い縮小やその硬い質感など、所謂完全焼骨の外観を見せており、恐らくは700～800度以上の高温で、しかも白骨化したものではなく、肉を付けた状態で焼かれた事が窺われる（池田 1981）。高温で焼かれた場合には破碎される歯のエナメル質が、出土骨から完全に欠落していることもそうした状況を裏付けていよう。また、通常は高温で焼かれた場合も関節部等は比較的原型を留め易いのだが、今回の出土骨はそうした破片を含んでおらず、拾骨にあたってそうした部分を除いたか、或いはかなり細かく碎いて取上げた状況が想起される。また、骨の焼け方には部位間で目立った差異が無いので、全身に火が回る様な配慮のもとで焼かれたのであろうが、全身をそのまま焼いたのか、或は幾つかに解体して焼いたのかについては、細片化が著しいため判断が困難である。

最後に、今回調査された火葬墓では、何れも単体埋葬であったこと、しかも成人骨ばかりで、子供の骨が見あたらないことを注記しておきたい。今回は、全墓地から骨が回収された訳ではなく、また、全体的に量が少なくて細片化も著しいので、特に脆弱な小児骨は單に確認できなかつたにすぎないのかも知れないが、仮に小児骨が混在していたとしても、ごく一部を占めるに留まるものと考えられ。当時の未成人期の高い死亡率を考えると不自然な感は拭えない。或は、こうした状況は、最初に記したような、当時のかなり高貴な身分層の風習とみなされるこの葬法の社会的性格から由来する可能性等も考えられ、興味を引かれる点ではあるが、当例だけでの推考には無理があるので、今後の類例の蓄積に待ちたい。

謝 辞

当資料を研究する機会を与えていただき、種々有益な御教示をいただいた福岡県教育委員会の諸先生方に深謝いたします。

表5 大迫遺跡出土火葬骨（奈良末～平安前期）

番号	性別	年齢	遺存状況	頭蓋	下頸	齒根	脊椎	第1腰椎	肋骨	肩甲骨	上腕骨	桡骨	手骨	骨盤	大腿骨	脛骨	腓骨	足骨
5	?	成人	○	○	?	X	○	?	?	?	?	?	?	?	○	?	○	?
6	?	成人	○	○	?	X	○	?	○	○	○	○	?	○	○	○	○	?
7	?	成人	○	○	?	X	○	?	?	?	?	?	?	○	○	○	○	?
10	?	成人	○	○	?	X	○	?	?	?	?	?	?	○	○	?	○	?
20	?	成人	○	(X)	?	X	?	X	?	?	?	?	?	○	○	○	○	?
21	(♂)	熟~	○	○	?	X	○	○	○	?	?	○	○	○	○	○	○	○
23	?	成人	○	○	?	X	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24	♂	成年	○	○	?	X	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27	?	?	○	(O)	○	X	○	X	X	?	○	○	?	?	○	○	?	?
36	?	成人	○	○	○	?	X	X	X	?	○	○	?	?	○	○	○	?
39	?	成人	○	○	○	?	X	X	X	○	○	○	?	○	○	○	○	○
43	?	(成人)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
45	♀	成人	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
51	♂	(成年)	○	○	○	?	X	X	X	○	○	○	?	○	○	○	○	?
52	?	成人	○	○	○	?	X	X	X	○	○	○	?	?	?	○	○	?
54	?	(成年)	○	○	○	?	X	X	X	○	○	○	?	○	○	○	○	?
57	?	成人	○	○	○	?	X	X	X	○	○	○	?	○	○	○	○	?
58	?	(成年)	○	○	○	?	X	X	X	○	○	○	?	○	○	○	○	?
61	?	成人	○	○	?	X	○	X	X	○	○	○	?	○	○	○	○	○
71	(♀)	成人	○	○	?	X	○	X	X	○	○	○	?	○	○	○	○	○
91	?	成人	○	○	?	X	○	X	X	?	○	○	?	○	○	○	○	?
1(2次)	?	?	○	(O)	○	X	X	X	X	?	?	?	?	?	?	?	?	X
石塚1	?	成人	○	X	X	X	X	X	X	?	?	?	?	?	?	?	?	?

※ ○：存在、×：無し、?：確認不能、()：不明確

文 献

- 池田次郎 (1981) :「出土火葬骨について」 太安萬呂嘉 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 国分直一 (1985) :「吉母浜の中世墓園一特にその葬俗をめぐって」 吉母浜遺跡 下関市教育委員会
- 土井卓治・佐藤未治 (1979) :「総論」 葬送墓制研究集成第一巻 名著出版
- 永井昌文 (1986) :「福岡市北区D-1区出土人骨群」 博多 福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集 福岡市教育委員会
- 中橋孝博 (1988) :「1区中世墓出土の火葬人骨」 津古土取遺跡 小郡市文化財調査報告書第59集 小郡市教育委員会
- 中橋孝博・永井昌文 (1985) :「山口県吉母浜遺跡出土人骨」 吉母浜遺跡 下関市教育委員会

2. 大迫遺跡から出土した炭化材

琉球大学農学部 林 弘也

大迫遺跡は、福岡県教育委員会が発掘調査した遺跡であり、火葬墓・住居跡から多数の炭化材が出土した。炭化材の中には、出土材数が非常に少なかったり、多量であっても余りにも小片化していて同定が困難な資料もあるので、材の試料が採取できる22点について同定を行った。炭化材は何れも小片化しており、元の形態を残しているものはなかったので、材の形態・用途等は推定できなかった。

同定の方法は、炭化材から木材の3断面を切り出し、金属顕微鏡で材の組織構造を観察して同定すると同時に、現生種のプレパラートと対照して決定した。顕微鏡の写真は、反射電子顕微鏡で撮影した。同定した試料は、電子顕微鏡用の黄銅試料台にセロテープで接着し、グラファイトペイントで固定した。固定した試料は、日本電子製のイオンコーティング装置で金を蒸着し、撮影した。

同定結果を次表に示し、顕微鏡写真と試料名はfig.1~fig.12に示した。

出土材は火葬墓から出土したモミ (fig. 1) を除いてすべて広葉樹の高木の樹種であった。住居跡からは、カシ (fig. 6・9)・クリ (fig. 2・3・5・7) が14サンプル中7サンプル、火葬墓の墓壇からは12サンプル中8サンプルであった。これらの材は耐水性があり、かつ強い材であるが、加工は比較的困難である。炭化材の形態・用途が判らないので、材の用途上の必要性があつて使用されたのかどうかは判断できないが、加工しにくい材が多用されたのは、何等かの必要性があつて選択的に使用されたのであろう。この遺跡では、クリ・カシが多量に出土しており、日常的にかなり多量に使用された材であると考えられるので、両樹種は当時この付近では、比較的入手容易であった樹種であろうと考えられる。

出土した樹種は、何れも九州地方を含む温帯に生育する樹種であった。なお、“カシ”にはアカガシ・シラカシ・アラカシ等数樹種あるが、試料の状態から識別が困難であったのですべて“カシ”として表示した。

〈顕微鏡写真について〉

1. 写真的配列は、左から横断面・接線断面・放射断面である。
2. 写真的倍率は、横断面写真は45倍、接線・放射断面写真は100倍である。

表 6 大迫遺跡出土炭化材

資料名		樹種名	図番号	
大迫4号火葬墓	墓壇内	モミ属	Abies sp.	Fig. 1
大迫19号火葬墓	墓壇内	クリ	Castanea crenata	Fig. 2
大迫23号火葬墓	墓壇内	クリ	Castanea crenata	Fig. 3
大迫36号火葬墓	墓壇内	ユクノキ	Cladraspis shikokiana	Fig. 4
大迫59号火葬墓	墓壇内	クリ	Castanea crenata	Fig. 5
大迫62号火葬墓	墓壇内	カシ	Quercus sp.	Fig. 6
大迫67号火葬墓	墓壇内	クリ	Castanea crenata	Fig. 7
大迫79号火葬墓	墓壇内	クリ	Castanea crenata	
大迫84号火葬墓	墓壇内	クリ	Castanea crenata	
大迫88号火葬墓	墓壇内	カシ	Quercus sp.	Fig. 8
大迫5号住居跡	炭1	カゴノキ	Actiondaphne lancifolia	Fig. 10
大迫5号住居跡	炭2	クリ	Castanea crenata	
大迫5号住居跡	炭3	シイノキ	Castanopsis cuspidata	
大迫5号住居跡	炭6	クスノキ	Cinnamomum camphora	Fig. 11
大迫5号住居跡	炭7*	クリ	Castanea crenata	
大迫5号住居跡	炭7*	カシ	Quercus sp.	
大迫5号住居跡	炭7*	ヤブツバキ	Camellia japonica	
大迫5号住居跡	炭8	カシ	Quercus sp.	
大迫5号住居跡	炭9	カシ	Quercus sp.	
大迫5号住居跡	炭10	シイノキ	Castanopsis cuspidata	
大迫5号住居跡	炭12	カツラ	Cercidiphyllum japonicum	Fig. 12
大迫5号住居跡	炭14	ミズキ	Cornus controversa	
大迫5号住居跡	炭15	シイノキ	Castanopsis cuspidata	
大迫5号住居跡	炭*	カシ	Quercus sp.	
大迫5号住居跡	炭*	クリ	Castanea crenata	Fig. 9
大迫5号住居跡	炭*	ハンノキ属	Ailnus sp.	

※同一資料中に複数の樹種が含まれていた。

3. 炭化材の年代測定

大迫遺跡の火葬墓群からは、炭化材が多量に出土しているが、土器を伴う火葬墓は少なく、炭化材の¹⁴C年代測定は、遺物が出土していない火葬墓の年代を決定するのに有効な手段と考えられる。

火葬墓・住居跡出土の炭化材の年代測定は、社団法人日本アイソトープ協会に依頼した。その測定結果を以下に掲げる。

表 7 炭化材の年代測定結果

コード	遺構名	¹⁴ C 年代
N-6122	6号火葬墓	1260 ± 75 y.B.P. (1230 ± 70 y.B.P.)
N-6123	16号火葬墓	1330 ± 75 y.B.P. (1290 ± 70 y.B.P.)
N-6124	21号火葬墓	1300 ± 75 y.B.P. (1260 ± 70 y.B.P.)
N-6125	24号火葬墓	1360 ± 75 y.B.P. (1320 ± 70 y.B.P.)
N-6126	36号火葬墓	1210 ± 75 y.B.P. (1170 ± 70 y.B.P.)
N-6127	37号火葬墓	1340 ± 75 y.B.P. (1300 ± 70 y.B.P.)
N-6128	45号火葬墓	1240 ± 75 y.B.P. (1200 ± 70 y.B.P.)
N-6129	59号火葬墓	1130 ± 75 y.B.P. (1100 ± 70 y.B.P.)
N-6130	61号火葬墓	1210 ± 75 y.B.P. (1180 ± 70 y.B.P.)
N-6131	78号火葬墓	1350 ± 75 y.B.P. (1320 ± 70 y.B.P.)
N-6132	84号火葬墓	1400 ± 75 y.B.P. (1360 ± 75 y.B.P.)
N-6133	88号火葬墓	1040 ± 75 y.B.P. (1010 ± 70 y.B.P.)
N-6134	5号住居跡	1540 ± 75 y.B.P. (1500 ± 70 y.B.P.)

※年代は、西暦1950年よりさかのる年数（カッコ内はLibbyの値5568年）

VII 各論

1. 火葬墓群について

1) はじめに

大迫遺跡では、二次にわたる調査で、奈良時代後半から平安時代前半にかけての火葬墓74基・火葬土壙（火葬場）21基を検出した。火葬墓の中には、山側に周溝を有し、骨壺器を埋葬している例もみられた。大迫遺跡の火葬墓群は、全国的にみても有数の規模を誇るが、何故当地に一大火葬墓群が造営されたのか、他の火葬墓群との比較・検討を踏まえた上で大迫遺跡の火葬墓群の成立・被葬者等について考えてみたい。

2) 火葬墓の立地と分類

立 地

遺跡地は、麻底良山から南に派生した標高44~72mの丘陵急斜面に立地する。火葬墓群は丘陵の南斜面に造営されており、遺跡の眼下には筑後川が西流し、筑後平野を一望可能な高所に存在する。所謂、風水思想にかなった立地で、火葬墓の造営には格好の場所である。

甘本市池の上墳墓群では、奈良時代半ばから平安時代前半にかけての火葬墓37基が調査された（註1）。火葬墓群は、標高77mの丘陵南斜面に造営されており、眼下には筑後平野が広がる。また、近年調査を行った甘本市大仏山遺跡では、時代は後出するものの鎌倉期の火葬墓約120基が調査されている（註2）。大仏山遺跡の場合は、標高61~79mの丘陵南斜面に造営されており、眼下には筑後川の支流である佐田川が流れ、大迫遺跡と共通した立地をみせる。

他の火葬墓をあたってみても、平野部を一望可能な眺望の利く丘陵の南斜面に造営している点は、何れも火葬墓立地の共通点として指摘できる。

火葬墓の分類

表 8 火葬墓分類表 (比率：%)

大迫遺跡の火葬墓は、形態によりI~IIIの3類に大別した。さらに、I・II類の火葬墓は、埋葬施設によりa~eの5タイプに細別した（13頁）。

類別	I 類					II 類					III類	
	a	b	c	d	e	不明	a	b	c	d	e	
数	19	3	1	1	1	6	33	5	1	/	/	3
比率	25.7	4.1	1.4	1.4	1.4	8.1	44.6	6.8	1.4	/	/	4.1

しかし、II類の火葬墓の中には、土砂流失等により溝を喪失したI類の火葬墓が含まれていることも十分考えられる。また、二次調査では、調査範囲が狭小なこともあり、1基の火葬墓しか検出していないが、火葬墓群の範囲はさらに北側に進展する可能性を有する。

火葬墓の比率からみてゆくと、Ia類は検出した火葬墓全体の26%、IIa類は45%を占めるところから、大追遺跡の火葬墓群はIa・IIa類が主体をなすといえる。また、骨蔵器を有するIb・IIb類の割合は11%で、火葬墓全体の一割程であった。

3) 火葬墓・火葬土壙の構造と群構成

火葬墓・火葬土壙の構造

I類に属する28・30・33・49・50号火葬墓は、周溝のみで墓壙を喪失していた。調査は盛土の存在の確認まで至ってはいないが、30~50cm程の深さを有する墓壙が完全に無くなってしまい、墓壙自体は墳丘盛土中に存したものと考えられる。つまり、I類の火葬墓は、周溝を掘った土砂を盛り上げた一辺2~3m程の低方位墳状を呈していたものと推測される。

II類の火葬墓には、盛土が存在していたか明かではないが、墓壙を掘って排出した土砂を盛り上げた程度の土縁頭を有していたものであろうか。

また、I類火葬墓の規模は、周溝を反転して求めた墳丘面積により、大型墓・中型墓・小型墓の3種類に分類できる。

大型墓……8~10m²を越える面積のもの。

(24・26・29・51・59・61号墓)

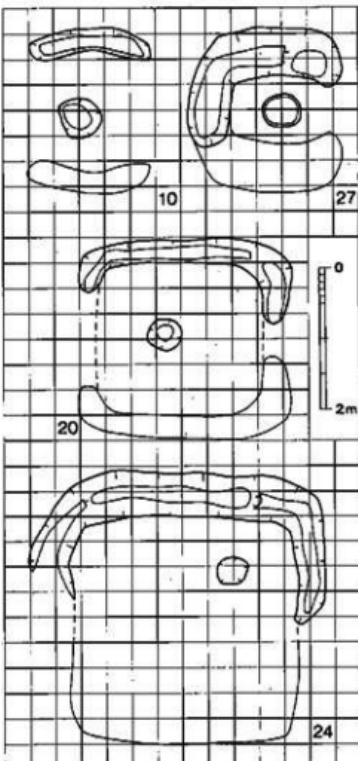
中型墓……5m²前後の面積のもの。

(19~21・32・40・44・57号墓)

小型墓……3m²未満のもの。

(10・12・22・27・33~35・

41~43・49・50・58号墓)



第158図 火葬墓規格尺 (1マスは36cm, 1/80)

61号火葬墓墓壙からは、木質部が接着した鉄釘が約20本出土しており、その出土状況からみて45×55cm程の大きさの木櫃に火葬骨を入れて埋葬したものと考えられる。また、37号火葬墓からは木質部が接着した鉄釘が6本出土しており、61号火葬墓同様火葬骨を木櫃に入れて埋葬していたのであろう。

大迫遺跡の火葬墓は、素掘りの墓壙のみのもの、骨蔵器を有するもの、木櫃を有するもの、石組を有するもの、石組の中に骨蔵器を有するものとバラエティに富んでいるが、占地において埋葬形態による優先関係は認められない。

墳丘を有し、溝で他と区画した奈良時代の火葬墓には、大阪府柏原市田辺墳群7号墓(註3)同市平尾山古墳群1号墓(註4)等がある。田辺墳群7号墓は、一辺3.2~3.3mを測るコ字形の周溝を有し、その中央に木櫃と考えられている主体部を埋葬する。副葬品として銅製鉗具が出土した。平尾山古墳群1号墓は、一辺4.5mを測るコ字形の周溝を有し、その中央に石組で囲んだ骨蔵器を埋葬していた。副葬品として和銅開珍銀鏡1枚・須恵器平瓶がある。

火葬土壙(火葬場)は、山側に一辺3~4mのテラスを設けるものと、テラスを有しないものとがある。テラスを有する火葬土壙は、テラス内に長軸90~120cm、短軸70~100cm、深さ30~40cmを測る長方形の竪穴を掘り込み、焼場としている。テラスは薪置場的空間として確保したものか。テラスを有しない火葬土壙は、長軸60~130cm、短軸50~120cm、深さ30~60cmを測る長方形を呈する。何れも、壁面の上位は加熱を強く受け、赤変していた。

火葬墓の構成

大迫遺跡の火葬墓群は、調査区中央の丘陵谷あいに群集する一群(B~J群)と調査区東側の南急斜面の全域に散在する一群(K~R群)の二群に大別される。B~H群は下層の建物群築造時の階段状平坦面を活用し、その上に廃土・整地を行い造墓していた。I類の火葬墓が大半を占める。

K~R群は火葬墓及び火葬土壙で構成されるが、周溝を有する火葬墓は49号のみで、IIa類の火葬墓が殆どである。前述したことなく、急斜面であるためIIa類の中には、周溝を喪失した火葬墓が含まれている可能性を残す。

大迫遺跡の火葬墓群は、3基ないし6基程で18のグループをなしていることから、数次にわたる埋葬がなされたものと推察される。

とりわけ、10号火葬墓と41号火葬墓、22号火葬墓と34号火葬墓、19号火葬墓と20号火葬墓の3組は、規模・形態的に共通しており、両者は時間的に大差ないものと考えられる。また、E・F群にあっては、平坦面の奥側に大型墓・中型墓が位置し、手前に小型墓が埋葬されており、小型の42号火葬墓は、中型の40号火葬墓を切って埋葬されていることから大略大型墓→中型墓→小型墓へと変遷するものであろう。

4) 火葬墓の年代と被葬者

大追遺跡の火葬墓群からは、骨蔵器・土師器・鉄器・銅鏡等が出土しているが、出土土器により年代を類推してみよう。

大追遺跡24号火葬墓出土の骨蔵器は(第160図2), 8世紀初頭頃に比定されている大宰府史跡中門跡出土の須恵器短頸壺(第160図4)及び同南門跡出土の須恵器短頸壺(第160図5, 注5)に比して、肩部が丸みを帯びる。高台は低く、底部もへたばっていることから、それよりも後出するものと考えられる。

大野城市牛頭窯跡群B-1地区22号窯跡出土の須恵器短頸壺(第160図9, 注6)は、器高18.6cm, 口径11.8cm, 高台径13.5cmを測る。24号火葬墓骨蔵器よりは一回り大きいが、肩部が丸みを帯び、底部がへたばり気味であり、両者は形態的には類似する。22号窯跡は、8世紀後半に比定されており、24号火葬墓骨蔵器も同時期におけるよう。

大追遺跡45号火葬墓出土の骨蔵器は(第160図1), 須恵器短頸壺に三足を付したものである。24号火葬墓骨蔵器よりは肩部が張り、作りも丁寧であるが、大宰府史跡中門・南門跡出土短頸壺に比して、肩部がやや丸みを帯びることから、時期的には大宰府史跡中門・南門跡出土短頸壺(8世紀初頭頃)→大追遺跡45号骨蔵器(8世紀中頃~後半)→牛頭22号窯跡出土短頸壺・大追遺跡24号火葬墓骨蔵器(8世紀後半)の順になろう。

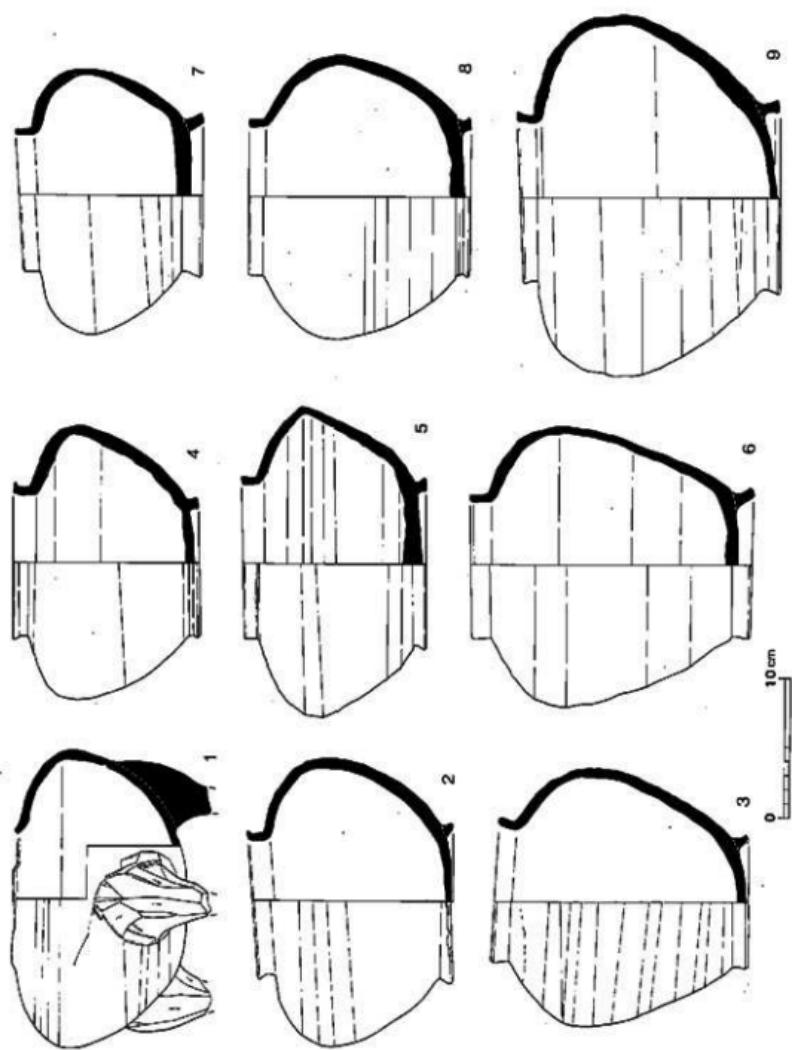
大追遺跡51号火葬墓出土の骨蔵器(第160図3)は、上野精志氏が2-e類短頸長胴壺としたもので(注7), 脇部の張りに比し、器高が高い。若宮町・宮田町に所在する沙井掛遺跡1号墳墓出土の短頸長胴壺(第160図6)は、器高20.2cm, 口径10.0cm, 高台径10.5cmを測る。51号火葬墓骨蔵器は、それに比し高台は低めで、底部がへたばっていることから、沙井掛遺跡1号墳墓骨蔵器より後出するもので、8世紀後半から末頃であろう。

以上、須恵器短頸壺を主体にみてきたが、次は土師器环をみていく。

23号火葬土塚からは、土師器环が一括して出土した。第72図1~10は、器高3.4~4.0cm, 口径11.7~13.8cm, 底径6.6~7.4cmを測る一括土器である。底部からそのまま開き、器面調整はナデにより、底部はヘラ切り離し未調整である。9世紀初頭に比定されている大宰府史跡SE400(注8)下層出土の土師器环に形態・法量が類似しており、同時期とみなされよう。

37号火葬墓からも土師器环の一括土器が出土している。第53図1~9は、器高3.7~4.1cm, 口径12.8~13.6cm, 底径7.1~8.0cmを測る。体部は内湾気味で、器面調整はナデ、底部はヘラ切り離し未調整である。23号火葬土塚出土の土師器环群に比して、やや深めであり、器肉も厚いことからそれよりは古くおけよう。また、45号火葬墓骨蔵器中蓋の土師器环(第56図2)は、器高3.7cm, 口径13.2cm, 底径8.1cmを測り、やや肉厚である。法量・形態的には、37号火葬墓出土土器群の範疇に納まる。

第160圖 骨盤器・妊娠者矢刺圖 (1/4)



社団法人日本アイソトープ協会による炭素年代の測定結果は、5号火葬墓が 1160 ± 75 yB.P., 23号火葬墓は 1260 ± 75 yB.P., 36号火葬墓は 1210 ± 75 yB.P., 37号火葬墓は 1340 ± 75 yB.P., 45号火葬墓は 1240 ± 75 yB.P., 59号火葬墓は 1130 ± 75 yB.P., 61号火葬墓は 1210 ± 75 yB.P.(1950年より遡る年数)の測定値を得ている。また、71号火葬墓からは、富貴神賀(818年初鉄)が一点ではあるが出土しており、以上の事を勘案すると大迫遺跡の火葬墓群は、8世紀中頃から9世紀前半にかけて造墓されたものと考えられる。

被葬者について

火葬墓群からは、墓誌・墨書き土器・ヘラ書き土器といった文字を記した遺物は出土しておらず、副葬品も僅かであるため被葬者を特定するのは困難である。しかし、火葬墓造営以前の建物群の段造成を利用した省力的な造墓とはいえ、建物群を一旦埋め戻し、大規模な整地を行つてから埋葬している。特に、E~H群テラスにおいては、予め次の埋葬を予定した造墓がなされており、現代の靈園的な感がある。

奈良~平安時代の大規模な火葬墓群には、奈良県桜井市横枕火葬墓群があり(註9), 遺跡地は標高約500~510mの南面傾斜地に立地する。火葬墓は傾斜地を3~4段程カットして平坦面を造成し、各平坦面に5~7基の火葬墓を埋葬していた。火葬墓は埋葬方法により7種類程のタイプがあり、副葬品として和銅開珎・神功開寶等の銅錢、碧玉製石帯、火葬骨の下に敷いていた鐵板等がある。墓誌の出土はなかったが、石帶の出土から官人クラスの氏族墓と考えられている。また、斜面を段造成する等、火葬墓のあり方としては大迫遺跡に類似する。

大阪府柏原市玉手山に所在する玉手山遺跡は、標高60~62mの丘陵西斜面に立地し、土壙墓を含む火葬墓群58基が調査された(註10)。火葬墓はその大半が骨蔵器を有し、奈良~平安時代にかけて埋葬されたものである。副葬品として、銅鏡二面が出土した。

同市高井田遺跡は、標高62~68mの丘陵南斜面に立地し、8世紀中葉~10世紀前葉にかけての火葬墓が29基検出された(註11)。骨蔵器は20基調査され、倒立させているものもみられた。また、興味深いことに、骨蔵器から鉄釘が出土しているものがあり、火葬の際の木棺に伴う釘が炭・灰とともに埋葬されたものと推測されている。副葬品は貧弱で、刀子・玉類が出土したのみである。位置関係からみて、被葬者は鳥坂寺に関連するものと考えられている。

前述した田辺墳墓群は標高59~65mの丘陵南斜面に立地し、田辺廃寺を建立した百濟系の渡来氏族とされる田辺史氏の氏族墓とされている(註12)。9基の火葬墓と石敷造構及び墓道が調査され、火葬墓は墓道により上下2段に区分される。火葬墓群からの出土遺物には、和銅開珎・銅製鉄具がある。また、東側の同一尾根上には、7世紀前半~8世紀初頭に築造された終末期古墳があり、8世紀初頭から埋葬される火葬墓に直接連続する。しかし、火葬墓には墓誌・銅鏡等を副葬しておらず、田辺史氏の族長クラスの墓域ではなく、この田辺地域に居住する田辺史氏の

有力家族層の墓域であろうと推定されている。

北部九州地域の例としては、前述した池の上墳墓群が挙げられる(註13)。標高77mの南斜面に立地し、37基の火葬墓が調査された。15・23号火葬墓からは倒立させた骨蔵器が出土しており、高井田遺跡例に共通する。また、薬壺形骨蔵器を除いた骨蔵器の全てが穿孔・打ち欠きされており、中間研志氏によると「単に口縁部の邪魔な部分を欠き捨てる意味のみではなく、仮器とするという観念が存在した行為によるもの」とされている(註14)。副葬品として鉄剣・刀子があり、後期古墳の被葬者の延長線上にあるものと推測されている。

久留米市西谷火葬墓群は、高良山山頂から若干北に下った地点で、標高275~279mの東側斜面に立地する(註15)。眼下には筑後川が流れ、平野部を一望できる高所に奈良末~平安時代の13基の火葬墓が埋葬されていた。

以上、奈良~平安時代の大規模な火葬墓群をみてきたが、大迫遺跡の火葬墓群の場合、

- ① 風水思想に即した立地をしていること
- ② 大規模造成を行っていること
- ③ 三足付短頭壺・素壺形短頭壺・灯明皿を骨蔵器として使用可能な身分にあること
- ④ 銅鏡を副葬可能であること

等の点からみて一般民衆の墳墓とは考え難く、かなりの経済力を持っていた有識者階層が浮かび上がってこよう。以上のことから、大迫遺跡の火葬墓群は、当地の有力者階層の氏族墓として捉えたい。

5) おわりに

火葬墓の起源は、文献上では文武天皇四(700)年の僧道昭の火葬をもって初めとし、以後広まっていったとされるが、天下の一大都會と称された大宰府から約30km奥まった当地において一般民衆まで火葬の風習が浸透していたとするには疑問である。

「養老令」「喪葬令」には、造墓に対しての強い規制が記されている。平城京内においては、京外の山間部や丘陵部に墳墓が造墓され、「喪葬令」の規制が働いていたとする金子裕之氏の指摘(註16)があり、狭川真一氏は喪葬令の規制が畿内にとどまらず大宰府にも及んでいたとする(註17)。しかし、当地において喪葬令の規制が機能していたかは疑わしいが、全国的にみても最大級の火葬墓群が当地に造墓された意義は深い。

また、大迫遺跡から北西に3km程行った箇所に、朝倉宮址に推定された長安寺廃寺があり、発掘調査の結果、宮址そのものの可能性は否定された。長安寺廃寺は奈良後期の創建とされ、平安後期まで存続する。大迫遺跡の火葬墓群と時期的には重複し、若干距離差があるものの僧侶の墓域としての可能性も一考する必要があろう。

2. 建物跡群の立地とその意義

1) はじめに

大迫遺跡では、調査区中央の丘陵谷あいに群集するD~J群火葬墓の下層に竪穴式住居跡4軒・掘立柱建物跡8棟等が存在し、上層の火葬墓群は建物跡廃絶後に土盛りを施す等大規模な地形を行っていたことは前述した通りである。火葬墓の立地としては申し分ないが、丘陵の南側急斜面（標高53~65m）を階段状にカットして建物跡群が立地する様は特異である。

また、丘陵を一つ隔てた杷木町志波地区では、規則的に配された2間×6間の大規模な建物群を検出しており、これら建物跡群成立の意義について考えてみたい。

2) 大迫遺跡検出の下層建物跡群

火葬墓群下層検出の建物跡群は、何れも礎石・根石を有しない掘立柱建物で、瓦の出土はみられない。建物跡の柱間は、1間×1間（1号建物跡）・1間×2間（6号建物跡）・1間×3間（4・5号建物跡）・2間×2間（7号建物跡）・2間×3間（2号建物跡）・2間×4間（3・8号建物跡）とバラエティに富み、掘方の一辺が1mを優に越す建物跡（2・8号建物跡）が存在する。

建物跡は丘陵南斜面を2段にカットし、その平坦面の上段に1~3号建物跡が、下段に4~8号建物跡が位置する。下段の5~8号建物跡は桁行を南北方向にとり、真北を意識した築造であるが、上段の建物跡は北を意識した配置ではない。これは、地形に制約された結果と考えられる。

2号建物跡は、建物跡群の北側斜面を17×5m程カットして平坦面を造成し、西側に2号建物跡が、東側に1号建物跡が位置する。柱穴の掘方は一辺0.52~1.3mを測る隅丸方形を呈し、岩盤に掘り込む。梁行2間（3.93m）×桁行3間（6.5m）の規模で、梁行の柱間平均は2.12m、桁行の柱間平均は2.1mを測る。柱間寸法は一尺を35.5cmとする高麗尺に換算すると5.9尺であり、ほぼ6尺に相当する。柱痕は掘方に比して貧弱で、土層観察の結果では20cm程であった。

8号建物跡は、1・2号建物跡の南側緩傾斜面に位置し、桁行方位は北から西に3分振った程度であり、北を意識した配置といえる。梁行2間（4.03m）×桁行4間（8.88m）の規模で、梁行の柱間平均は2.02m（5.7高麗尺）、桁行の柱間平均は2.19m（6.2高麗尺）である。桁行柱間寸法は、丁度2号建物跡の桁行を1間分長くした値に相当する。柱穴底は南側に低くなっている、柱穴の掘方は一辺0.7~1.1mを測るが、柱痕は16~28cmと掘方に比して貧弱である。掘方内からは、口縁部内面にかえりを有する須恵器壺蓋が2点出土しており、8号建物跡東側の整地層出土品と接合関係にあり、7世紀中~後半代の築造と考えられる。

7号建物跡は、調査区中央平坦面の南端に位置する。梁行2間（3.5m）×桁行2間（4.21m）の純柱建物跡で、梁行の柱間平均は1.75m（4.9高麗尺）、桁行の柱間平均は2.14m（6.0高麗尺）を測る。柱穴の掘方は一辺0.54～1.1mを測る隅丸方形を呈し、柱穴底は谷側へ傾斜している。7号建物跡の柱間平均は、2・8号建物跡の桁行柱間平均に近似し、三者間には共通の規格が存在したものと考えられる。また、梁行方位は北から東に1度振っており、方向性の点でも8号建物跡との共通性を指摘でき、8号建物跡と同時期の築造と推測される。

建物跡の整地層が7世紀中～後半の土器を包含することから、大迫遺跡の建物跡群は7世紀中期の築造と考えられ、標高53～65mの丘陵南側急斜面を階段状にカットして建物跡群が立地する様は異常であるが、平野部の眺望が効くことから見張り場的役割も担っていたのであろうか。

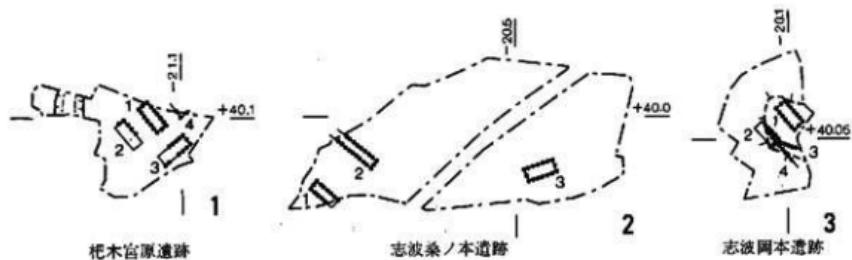
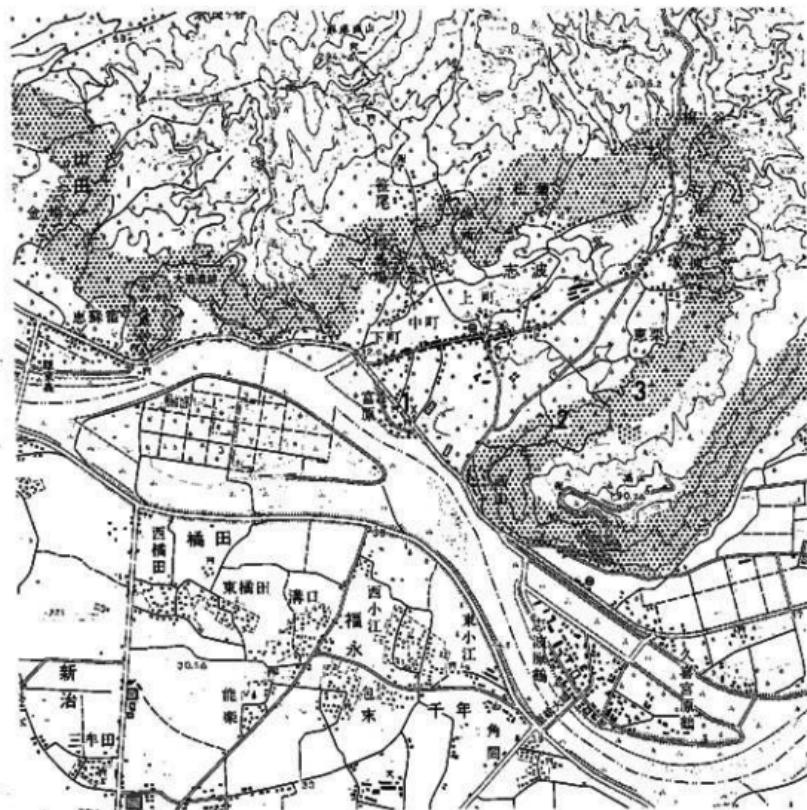
3) 志波地区の建物群について

志波台地は麻底良山（標高294.9m）と高山（標高190.3m）に挟まれた幅約1km、奥行きは南北側が筑後川に限られるため約1.3km足らずの狭隘な沖積平野であり、杷木宮原遺跡（註18）・志波桑ノ本遺跡（註19）・志波岡本遺跡（註20）の3遺跡が立地する（第161図）。杷木宮原遺跡から最奥部の志波岡本遺跡までは約1kmの距離を有するが、3遺跡は相互に眺望が可能である。この3遺跡から、桁行方位を北から西に約40度振った2間×6間の規則的に配された大規模な建物跡群を検出した。建物跡は何れも礎石・根石を有しない掘立柱建物であり、瓦の出土はない。以下、これら建物跡群の時期及び性格について検討を加えてみよう。

杷木宮原遺跡では、4棟の建物跡を検出した。1号建物跡は、梁行2間（4.57m）×桁行6間（13m）で、梁行の柱間平均は2.3m、桁行の柱間平均は2.18mを測る。掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.64～1.14mで、柱底は16～22cmと掘方に比して貧弱である。また、柱底は北西～南東方向に深くなっている。これは旧地形が同方向に傾斜していたことを示す。桁行方位は北から西に40度振っている。当建物跡に直接伴う遺物の出土はないが、6世紀後半の8号住居跡を切っており、それ以降の築造である。

2号建物跡は、1号建物跡の南西8.7m（梁行の約2倍の距離）に位置する。建物跡の南側は削平により遺存せず、現状で梁行1間×桁行3間の規模であるが、北西の梁側掘方が1号建物跡の梁と面を揃え、同建物跡に平行して配置されていることから1号と同規模の2間×6間の建物跡に復原できる。掘方は1号建物跡より大きめであるが、柱底は18～24cmで、1号建物跡と大差ない。また、柱底は北西～南東方向に深くなっている。桁行方位は北から西に39度振っている。掘方内からは、弥生土器片・土師器片が出土しているが、当建物跡に伴うものではない。

3号建物跡は、1号建物跡の南東に位置する。1・2号建物跡とは直角方向に配され、その距離は1・2号間と等距離の8.7mである。北東側梁行2間（4.87m）、桁行は南側が削平されている



第161図 志波古地植物跡群位置図(1/25,000、建物跡配置図1/2,500)

が、1・2号建物跡同様6間になろう。梁行の柱間は2.37~2.5m、桁行の柱間は2.0~2.6mと変則的である。掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.8~1.1mと大きいが、柱痕はそれに比して14~22cmと小さい。また、柱痕は1・2号建物跡同様、北西~南東方向に深くなっている。梁行方位は、北から西に38度振っている。掘方内からは、弥生土器片が出土したのみである。

4号建物跡は、1号建物跡の7.7m北東に位置し、大半が調査区外に進展するため詳細は不明。1・2号建物跡とは平行して配置されているようである。

杷木宮原遺跡の建物跡からは、時期を特定できる遺物は出土していないが、1~3号建物跡は規模・方位ともに計画性がみられ、三者は等間隔で配されていることから同時期の築造とみなすことが可能である。1号建物跡は6世紀後半の8号住居跡を切っており、大規模で計画的な建物跡群であることから中世まで下るものではない。また、遺構検出時及び谷状遺構・ピットからは、6世紀後半~8世紀代の遺物を検出しており、極めて消極的ではあるが、当遺跡の建物跡群を7~8世紀代と推定しておこう。

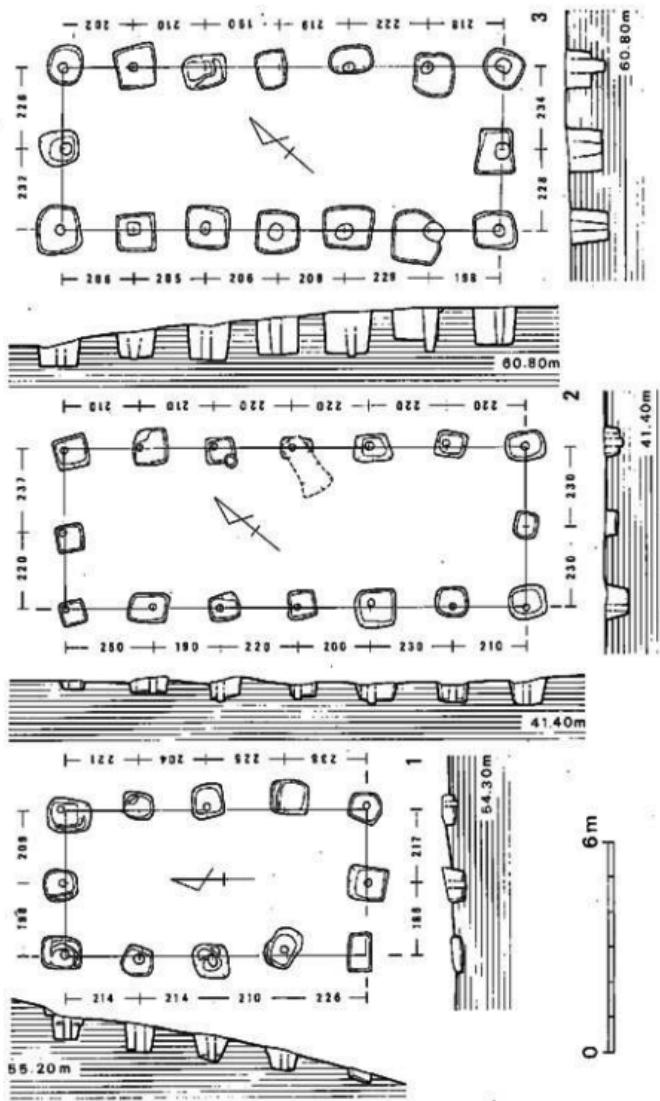
志波桑ノ本遺跡は、杷木宮原遺跡の700m東側に位置し、台地上で3棟の建物跡を検出した。1号建物跡は、梁行2間(3.6m)、桁行は南側が削平されているため現状で6間であるが、2号建物跡の南西側梁行と面を合わせたと仮定すると7間になる。梁行の柱間平均は1.8m、桁行の柱間平均は2.04mを測る。掘方は一辺0.6~0.95mを測る隅丸方形で、他の建物跡に比してやや小振りで、柱痕は14~26cmであった。桁行方位は北から西に51度振っている。

2号建物跡は、1号建物跡の20m東に位置し、桁行方位を1号建物跡と等しくする。梁行は2間で、桁行は北側が削平されているため現状で9間以上であるが、南西側桁行にずれがみられるところから2間×5間の建物跡と2間×3間以上の建物跡を2棟直列に配していた可能性を残す。掘方は0.7~1.1mの隅丸方形を呈し、柱痕は16~24cmを測る。5世紀代の古墳の周溝を切っている。

3号建物跡は、梁行2間(4.52m)×桁行6間(12.47m)の規模を有する。梁行方位は北から西に20度振っており、1・2号建物跡とは主軸方位を異にするが、2間×6間の建物跡であることから時期的に両者とは大差ないものと考える。掘方は1.75~1.2mを測り、柱痕は16~20cmと他の建物跡と同様である。これら建物跡に共伴する出土遺物はないが、杷木宮原遺跡の建物跡群と規模・方向性を等しくすることから、両建物跡群は同時期の計画的築造と考えられる。

志波岡本遺跡は志波台地の東端に位置し、高山から派生した標高62mの丘陵突端部において4棟の建物跡を検出した。1号建物跡は、梁行2間(4.62m)×桁行6間(12.54m)の規模を有し、桁行は大迫遺跡2号建物跡の桁行を2倍にした数値に等しく、平面を重ね合わせた結果、柱痕が乗っかり、両者間には同一規格の存在が指摘できる。梁行の柱間平均は2.28m、桁行の柱間平均は2.87mを測り、志波桑ノ本遺跡3号建物跡とはほぼ同規模を呈する。掘方は方形を呈し、0.9~1.2mと志波台地建物跡群のなかでもとりわけ大きい。しかし、柱痕は18~26cmと掘方に比して貧弱である。桁行方位は北から西に41度振っており、これは地形に制約された結果ではなく、一連

第117圖 大連遼縣1)-把木官鄉濱跡2)-志遠園本遺跡(3)植物炭火剖面圖(1/160)



の規則性によるものと解したい。

2号建物跡は、1号建物跡の南東側に平行して位置する。梁行は2間(4.35m)、桁行は西側が掘削されているため現状で4間であるが、1号建物跡との間隔は杷木宮原遺跡1・2号建物跡間と同様の8.7mであることから5間ないしは6間の規模を有していたものと思われる。桁行方位は、北から西に40度振っている。

3・4号建物跡は、南側が掘削されているため全容は明かではないが、両者は重複しており、建て替えられている。3号建物跡は梁行1間以上×桁行5間以上で、梁行方位は北から西に20度振っており、志波桑ノ本遺跡3号建物跡とは直交関係にある。4号建物跡は桁行7間以上の規模を有し、1・2号建物跡とは平行関係を有するものの2号建物跡と重複しており、当遺跡においては少なくとも3回の建て替えがなされている。

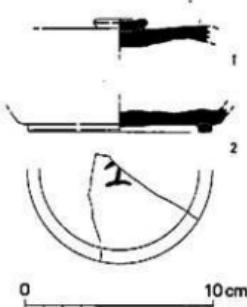
当遺跡においても建物跡に供伴する遺物は出土していないが、建物跡群の西側斜面からは7世紀後半の須恵器壺蓋2点を検出しており、杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡の建物跡群と規模・方位が共通することから、それらと同時期の築造と考えられる。

4) 建物跡群の時期と性格

杷木宮原遺跡から志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡までの約1km間に、大規模で計画性を持った建物跡群が11棟検出された。建物群の時期は、規模が大きいことから中世まで下るものではない。杷木宮原遺跡からは、遺構検出時及び谷状遺構・ピットから6世紀後半～8世紀代の遺物を検出しており、東接する中町裏遺跡の谷部(B地区)のピットからは、硯に転用した須恵器壺蓋(8世紀前半～中頃)・墨書き土器が出土している(第163図)。

これら志波台地の建物跡群は、礎石・根石を有せず、瓦の出土をみない。擲方は隅丸方形を呈し、1mを越えるものもある。柱間寸法は2.0～2.5m程で、柱窓は14～28cmと掘方に比して貧弱である。柱痕は谷側に傾斜していることから大迫遺跡建物跡群との類似点を指摘でき、同時期と考えられよう。しかし、建物跡群に供伴する遺物の出土は皆無に等しく、建て替えがみられることから若干の時期差があるものの短期間に終焉したものと思われる。

立地的には筑後平野の東側狭隘部に位置し、北西側を麻底良山、南東側を高山で囲まれ、南西側には筑後川が流れおり、天然の要害に守られた占地といえる。これは、筑後平野の北側狭隘部に位置し、水域・大野城で防護された大宰府政



第163図 中町裏遺跡出土転用硯
・墨書き土器実測図(1/3)

序と共に通する。

また、桁（梁）行方位が北から西へ40度程度振っているのは、志波台地の地理的要因によるもので、台地の長軸に対して直交させた計画的な築造の結果と考えられる。また、想像をたくましくすると、台地の南西部に道路等の建物配列の基準となるものが存在し、それに直行（平行）させた結果であろうか。

建物跡は掘方・柱間隔等大規模であるが、掘方に比して柱それ自体は小さい。礎石・根石ではなく、掘方を掘って柱を立て、埋土の突き固めをせずに廃土を単に埋めただけの簡略なつくりである。また、建物築造時の平坦面の造成・整地を行わず、旧地形に合わせて掘方を掘り；柱を立てるため省力的な急場しのぎの造作という印象を強く受ける。建物跡の規模が2間×6間であることから居住用の建物群と考えられるが、調査区の割合上であろうか。志波地区では總柱の倉庫は1棟も検出しており、付近の別の場所に存在するものか。

建物跡群の性格としては、1km四方の広範囲にわたって計画的に配置された大規模な建物跡群であり、從来言われている豊後に通じる駅路に面すること、筑後川を介して有明海へと通じること等から国府・郡衙・駅舎等の官衙的性格を付与することが可能である。しかし、防護的性格が強い立地をすること、建物群全体として省力的造作であること、短期間の存続と考えられること等の点から国府・郡衙・駅舎とするには無理があると思われるが、当台地上には官跡を含めて官衙的性格の強い建物群が存在したことを疑う余地はない。

当志波地区は、朝倉宮の推定地の一つと目されており、これらの大規模で計画的な建物跡群と朝倉宮との関連性はないものか、次に考えてみたい。

5) 朝倉宮の所在地

『日本書紀』の齊明天皇七（661）年五月乙未朔癸卯条には、「天皇、朝倉橋廣庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を斬り除いて、此の宮を作る故に、神忿りて殿を壊つ。亦、宮の中に鬼火見れぬ。是に由りて、大倉人及び諸の近侍、病みて死れる者衆し。……（中略）……秋七月の甲午の朔丁巳に、天皇、朝倉宮に崩りました。八月甲子朔、皇太子、天皇の喪を奉從りて、遷りて磐瀬宮に至る。」とあり（註21）、百濟救済のために九州に行幸した齊明天皇は、朝倉宮に崩じた。朝倉宮の推定地は、朝倉社とされる麻底良山の近辺に存在したとみられ、朝倉町大字須川、同町大字山田、杷木町大字志波の3箇所があるが、未だに確定的ではない。

須川説は『朝倉紀聞』を著した古賀高重が提唱したもので、朝倉宮の所在地を上座郡須川村（朝倉郡朝倉町大字須川）とした。貝原益軒は『筑前國統風土記』を著し、古賀説を支持したこともあり、それ以降須川説は有力な候補地となる。

昭和8~9年には、玉泉大梁・鏡山猛氏が朝倉宮の最有力候補地とされる朝倉郡宮野村字須川

(現朝倉町大字須川)の長安寺原・馬乗・寺の前・鐘突地区で発掘調査を行ったが、積極的に宮跡といえる遺構の検出はなく、大寺・寺・知識などの文字を記した墨書き土器や鬼瓦から奈良時代の寺院跡と推定され、宮跡の可能性は否定された(註22)。

その後、九州歴史資料館が昭和48~50年にかけて古代官衙遺跡調査の一環として昭和8~9年同様の宮跡伝承地の有力候補地である朝倉町大字須川字寺の前・馬乗地区で発掘調査を行った。しかし、今回も宮跡に関連する遺構は何ら検出されなかつたが、調査に關係した波辺正氣氏は、旧上座郡の朝倉町内にあるという予感がしてならないとした(註23)。

山田地区は朝倉社とされる麻底良山の西側山麓にあたり、杷木町志波地区はその反対の東側山麓にあたることから朝倉宮の候補地として上った訳であるが、須川・山田・志波地区の地形を比較した場合、宮野から須川にかけての地区は、台地の中央部を桂川によって寸断されるものの、台地は大字大庭・入地まで連続し、山田・志波地区に比して広い面積を有する。しかし、志波地区に匹敵する程の自然の防禦的要素はみられない。また、石成・大庭地区において横断道関係で発掘調査を行った遺跡に西法守遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡等の遺跡があるが、7世紀中~後半代の朝倉宮に関する時期の遺構・遺物は出土していない(註24)。

山田地区は麻底良山から派生した小丘陵が多く存在し、その間には谷が入るため宮野から須川にかけての地区よりも地理的条件は悪い。しかし、当地区には前述した7世紀中~後半代の大追跡の建物跡群・木丸殿跡推定地が存在し、少なくとも朝倉宮に関連する地区ではある。

志波地区は麻底良山と高山が平野部に突出し、さらに筑後川という水運を兼ねた自然の瀬で守られた天然の要害である。しかし、志波地区は宮を造営するには狹すぎるとする意見があるが、それは現在の筑後川の流路での判断であり、志波政所に位置する国指定重要文化財の普門院本堂は、天平十九(747)年聖武天皇の勅願により行基菩薩が筑後河畔の中島に建立したとの伝承があり、筑後川の氾濫により鎌倉末?に現在の地に移転したとされている。高山東麓の若市には、「島」という字の集落があり、高山の麓には大小の淵があったとされる(註25)。以上のことを勘案すると、筑後川は現在よりも南西の吉井町橋田付近を流れていると考えられ、かつては志波地区と橋田地区は隣接であった時期が存したとみられる。

気になるのは筑後川対岸の浮羽郡吉井町の「橋田」という地名であり、朝倉宮の正式名称である「朝倉橋広庭宮」は橋の字を冠し、無関係ではあるまい(註26)。杷木宮原遺跡の位置する古地の南の千代島には、火蛇退治の千代丸長者伝説があり(註27)、興味がひかれる。

位置的に磐瀬行宮は、玄海灘を挟み朝鮮半島に対峙することから朝鮮半島の動向を監視し、全軍の指揮・監督を行うのに容易ではあるが、通軍に侵攻された場合には婦女子を伴った全朝廷の速やかな撤退はどうい望めず、大本營を設置する場所としてふさわしくない。そこで、豊後國へ通じる道に面しており、水路により有明海へ通じる筑後川が流れ、最悪の事態には速やかに畿内に撤退が可能な筑後平野東端部の地に大本營としての宮を築いたものされる(註

28)。また、天皇以下朝廷全体が移動してきているので、朝廷の中枢部を防御可能な地理的条件を具備した選地が考慮されたことは容易に想像される。その点では、麻底良山と高山に挟まれ、南には自然の森と言える筑後川で防護された志波台地ほど条件を満たした地は他にはない。地理的側面からすると他の二者に比し、志波地区が宮跡の所在地としては最も妥当性がある。

6) おわりに

朝倉宮には、齊明天皇・中大兄皇子以下全朝廷が移動して来ており、宮自体はかなりの規模を有していたものと想像されるが、朝鮮半島の状況は逼迫しており、石湯行宮から磐瀬宮滯在期間中の4ヶ月の短期間で造営された急場しのぎの簡易な造りの建物群が集合したものであったと推察される(註29)。また、緊急事態には放棄しても何ら苦痛を伴わない程度の宮であったことは、畿内への逃げ道である豊後道に近接して宮が選定されたこと、齐明天皇崩御後、中大兄皇子はすぐさま長津宮(磐瀬宮)に遷居したことからも窺える。

天智二(663)年、白村江の敗戦直後に造営されたとみられる大宰府政庁Ⅰ期の建物跡は、瓦を有しない掘立柱建物跡であり(註30)、朝堂院様式ではなく、Ⅱ期・Ⅲ期の建物とは構造・性格を異にしている。田村岡源氏はⅠ期建物跡の性格として軍指令部的な機能をもつ軍事的な官衙であったとしている(註31)。また、大野城主城原地区で検出されたSB064は、梁行3間(6.7m)×桁行7間(17.9m)の掘立柱建物跡で、出土した軒丸瓦から大野城創建期の天智四(665)年~天智九(670)年の築造と想定されている(註32)。

また、近年調査された久留米市古宮遺跡では(註33)、2間×5間・2間×7間・2間×8間・3間×7間の掘立柱建物跡群・築地塼・溝が検出されており、7世紀後半頃の軍事的性格の強い官衙と推定され、一触即発の軍事的緊張が如何に高かったか想像される。

志波台地及び大迫遺跡で検出された7世紀中~後半に位置づけられる建物跡群は、2間×6間を主体とする大規模で計画的に配された建物跡群であるが、礎石・根石・瓦を有しない掘立柱建物跡であり、柱痕は16~28cmと掘方に比して貧弱である。それに、建物群を造営する際の大規模な地形を行っておらず、掘方を掘って単に柱を立てただけの省力的で簡略化された建物群と指摘でき、当時の逼迫した状況によく合致している。防護の色彩の強い地理的側面からしてもこうした状況に即したものであり、朝倉宮関連の建物群としての可能性が推測される。

宮跡本体は如何なる構造を有していたかは、今後の調査研究に俟たれるが、志波台地の中心部、現在の志波郵便局から小学校にかけての範囲に想定しておこう。

また、全国的にみても有数の大火葬墓群が調査された大迫遺跡の成立には、歴史的にはほんの一時ではあったが、当地に重大な足跡を残した朝倉宮の存在抜きには語れない。被葬者に関しては憶測の域をでないが、或は朝倉宮造営・朝鮮出兵に深く関与した氏族の奥津城であった

可能性も残されていよう。

ともあれ、恵蘇宿から志波にかけての当地には、志波台地建物跡群に先行する外之隈遺跡・大迫遺跡・志波桑ノ本遺跡等の大規模遺跡、本陣古墳・恵蘇八幡古墳・宝満宮古墳等重要な古墳が密集する特異な地区である。それには、筑後平野という豊富な生産性をバックボーンとしたものと解することが可能である。

以上、長々と大胆な推論を重ねてきたが、今後とも朝倉宮本体の調査研究が進展することを期待してやまない。

註1 橋口達也編『池の上墳墓群』(甘木市文化財調査報告第5集)1978 甘木市教育委員会

註2 甘木市教育委員会が、1992年度に発掘調査を実施した。調査担当者の川端正夫氏の御教示による。

註3 花田勝広編『田辺古墳群・墳墓群発掘調査概報』(柏原市文化財概報 1986-IV)1987 柏原市教育委員会

註4 竹下 貢編『平尾山古墳群』(柏原市文化財概報 1988-VI)1989 柏原市教育委員会

註5 石松好雄・横田賢次郎他編『6 第1次調査補足』『大宰府史跡昭和50年度発掘調査概報』1976 九州歴史資料館

石松好雄「大宰府政序の序説について」『九州歴史資料館研究論集3』1977 九州歴史資料館
藤井功・亀井明節『西都大宰府』1977 日本放送出版協会

註6 池辺元明編『牛頭窪跡群II』(福岡県文化財調査報告書第89集)1989 福岡県教育委員会

註7 上野精志編『九州經貿自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XX-1』

註8 横田賢次郎『大宰府出土の土師器に関する覚え書き(3)』『九州歴史資料館研究論集5』1979 九州歴史資料館

註9 小島俊二『奈良県の考古学』1965 吉川弘文館

註10 北野 重編『第7章 玉手山遺跡』『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1989年度』(柏原市文化財概報 1989-1)1990 柏原市教育委員会

註11 安村俊史編『高井田横穴群II』(柏原市文化財概報 1986-VI)1987 柏原市教育委員会

註12 註3に同じ。

註13 註12に同じ。

註14 中間研志『大宰府の奥津城』『大宰府古文化論叢』1983 吉川弘文館

註15 宮小路賀宏編『西谷大葬墓群』(久留米市文化財調査報告書第3集)1971 久留米市教育委員会

註16 金子裕之『平城京と葬地』『文化財学報第三集』1984 奈良大学文学部文化財学科

註17 狹川真一『古代都市・大宰府の検討一墳墓からのアプローチ』『古文化論叢第23集』1990 九州古文化研究会

註18 小田和利『祀木宮原遺跡』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書21-1』1991 福岡県教育委員会

註19 昭和61年度に福岡県教育委員会が、発掘調査を実施した。調査担当の小池史哲氏の御教示による。なお、未報告資料であり、数値などの誤りは正報告書をもって訂正したい。

註20 註19に同じ。

註21 板本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀』(日本古典文学系68)1982 岩波書店

註22 玉泉大業・鏡山猛『朝倉櫻廣庭宮遺址(第一回報告)』『史跡名勝天然記念物調査報告書第九輯 史蹟の部』1973年復刻 福岡県文化財資料叢刊行会

玉泉大業・鏡山猛『朝倉櫻廣庭宮遺址』『史跡名勝天然記念物調査報告書第十二輯 史蹟の部』1976年復

五 福岡県文化財資料集刊行会

- 註23 銚山敏雄編『朝倉福広宮跡伝承地第一次発掘調査報告』1974 九州歴史資料館
鹿島郡弘編『朝倉福広宮跡伝承地第二次発掘調査報告』1975 九州歴史資料館
鹿島郡弘編『朝倉福広宮跡伝承地第三次発掘調査報告』1976 九州歴史資料館
註24 熊岡県教育委員会が、昭和60年度に発掘調査を実施した。
註25 梶木町井出酒直氏の御教示による。
註26 田中正日子「筑後古代史の掘開（中）」「田主丸郷上史研究」第5号 1987 田主丸郷上史会
註27 梶木町史編さん委員会「第六編民俗 第五章民間伝説『梶木町史』」1983 梶木町史刊行委員会
註28 古賀慈城『朝倉福広宮考』1960 朝倉村文化財保存委員会
長・洋一『朝倉福広宮をめぐる諸問題』『神戸女学院大学論集』第26巻第3号 1980
註29 強著「福岡県肥前切大迫遺跡と朝倉福広宮について」「北部九州の古代史」1992 有明文化を考える会
註30 梶岡原教育委員会編『大字町と新暦・百姓の文化』1988 学生社
田村紀彦『大字町探求』1990 吉川文庫
註31 註30に同じ。
註32 桜田義章編『特別史跡大野城』1979 福岡県教育委員会
註33 桥村一良「要」第77次調査・85次調査『筑後国府・国分寺 昭和63年発掘調査概要』《久留米市文化財調査報告書第59集》1989 久留米市教育委員会



火葬墓調査状況

VIII 総 括

大迫遺跡は、8世紀中頃～9世紀前半にかけての火葬墓群とその下層から7世紀中～後半代の建物跡群を主体とする遺跡である。以下、判明した事実を箇条書きにしてまとめとしたい。

1. 検出した遺構には、8世紀中頃～9世紀前半の火葬墓・火葬土壙、7世紀中～後半代の建物跡・住居跡、弥生時代中期前半の住居跡・竪穴・土壙、時期不明の溝等がある。
 2. 出土遺物には、弥生土器・須恵器・土師器の他に、石斧・石鎌・砥石・石甕・紡錘車等の石器、鉄斧・鉄鎌・鉄鎌等の鐵器、銅鏡、土鍤・フイゴ羽口等の土製品がある。
 3. 火葬墓は、山側にコ字形の周溝を巡らしたもので、中央に火葬骨を埋葬した墓壙を有する。
 4. 墓壙には、素掘りのもの、容器（骨蔵器・木櫃）を有するもの、石組の中に容器を有するものがある。
 5. 火葬土壙は、山側にテラスを有し、その中央に墓壙を掘って焼場としている。
 6. 火葬墓の副葬品には、土器・鐵器・銅鏡がある。
 7. 建物跡は、礎石・根石を有しない掘立柱建物跡で、掘方が1mを越えるものがある。
 8. 住居跡は、山側に外周溝を巡らしている。
- 以上をまとめると、弥生集落 → 古墳集落 → 7世紀中～後半建物跡群 → 8世紀中頃～9世紀前半火葬墓群となる。

図 版



大泊遺跡周辺航空写真 (国土地理院 KU-76-2X)

図版 2



1 木丸殿址より筑後川を望む



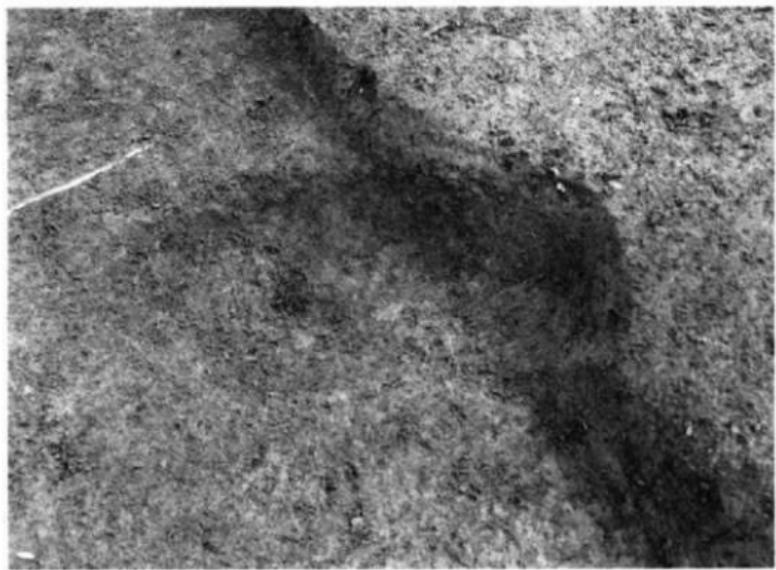
2 大迫遺跡・外之隈遺跡及び志波台地遠景



大迫遺跡全景（木丸殿址より望む）



1 1号火葬墓（南から）



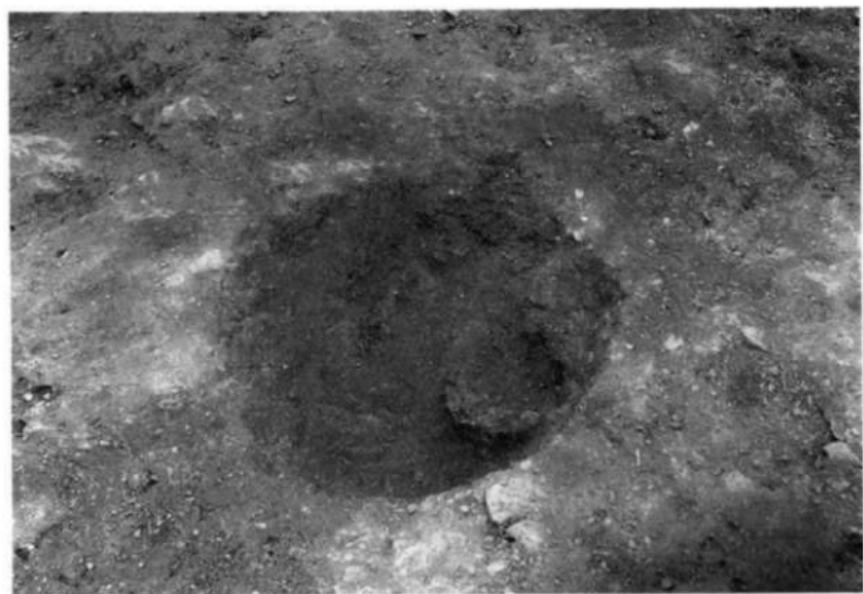
2 2号火葬墓（南西から）



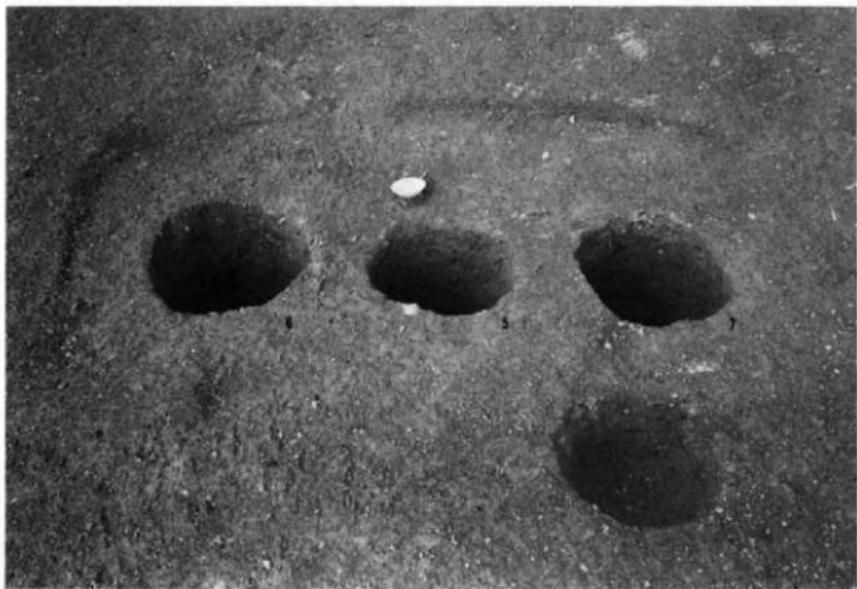
1 3号火葬墓（南から）



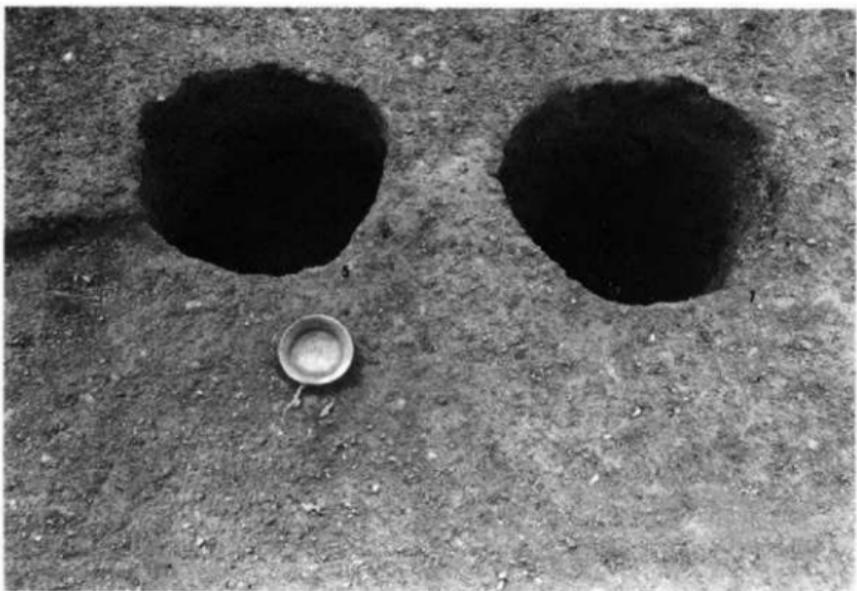
2 3号火葬墓土層（西から）



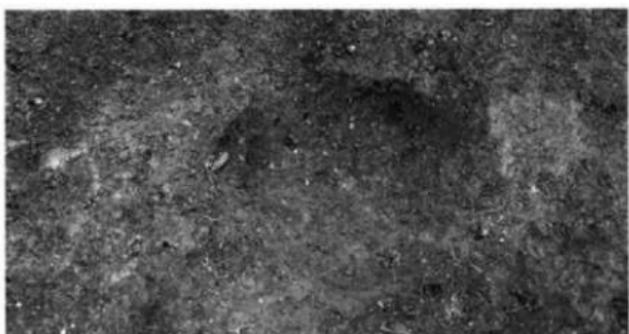
3 4号火葬墓（南から）



1 5～7号火葬墓（南から）



2 环・鉄釘出土状況（北から）



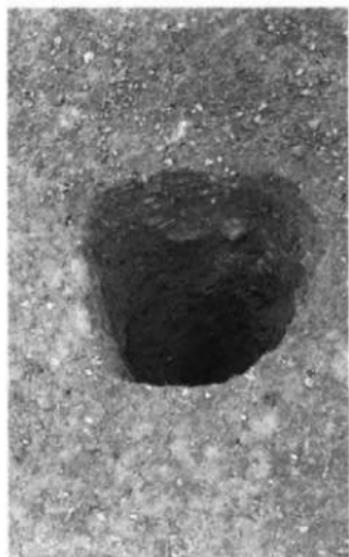
1 8号火葬墓
(南から)



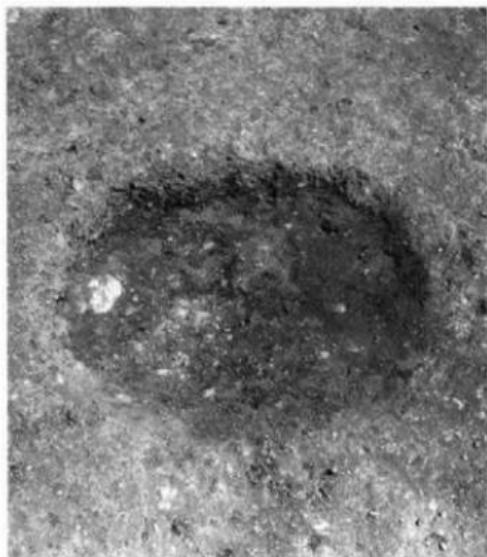
2 9号火葬墓
(東から)



3 10号火葬墓 (西から)



1 11号火葬墓（南から）



2 13号火葬墓（南から）



3 12号火葬墓（西から）



1 14号火葬墓
(東から)



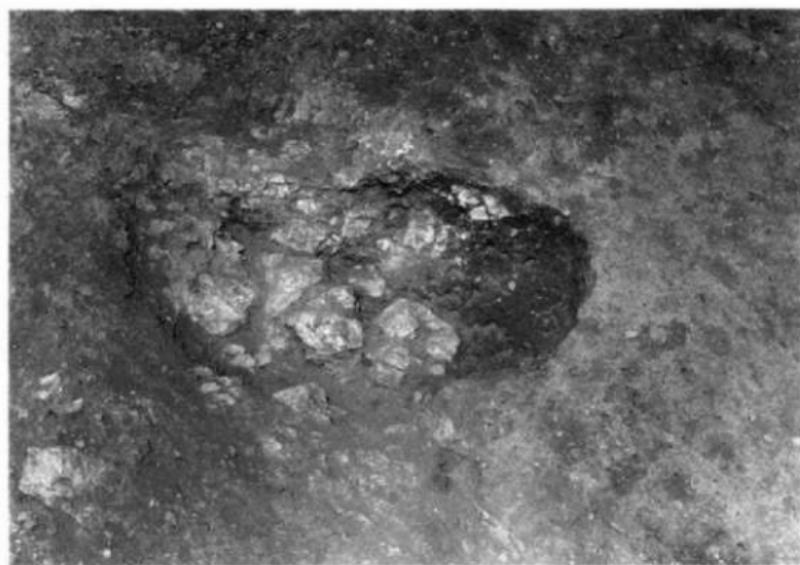
2 15号火葬墓
(南から)



3 16号火葬墓
(北西から)



1 17号火葬墓（東から）



2 18号火葬墓（南から）



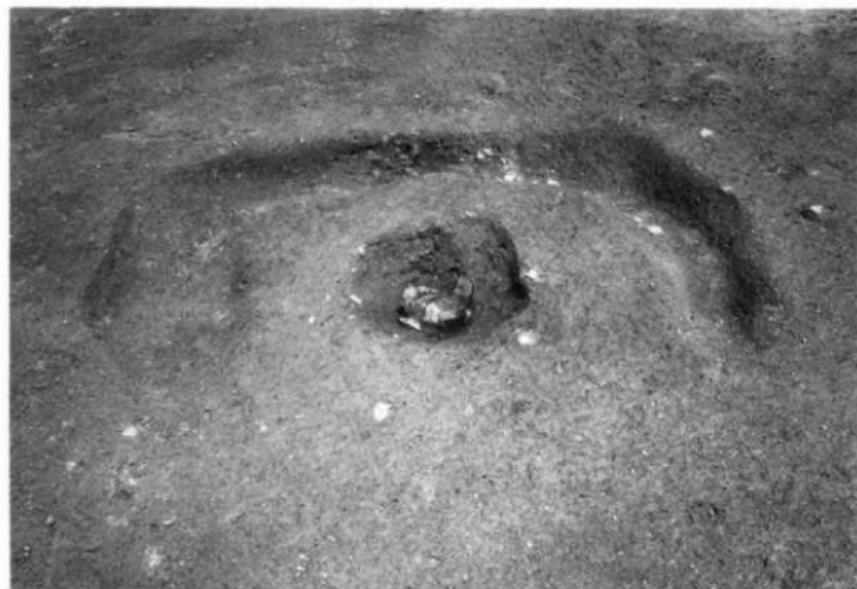
1 火葬墓群全景（東上空から）



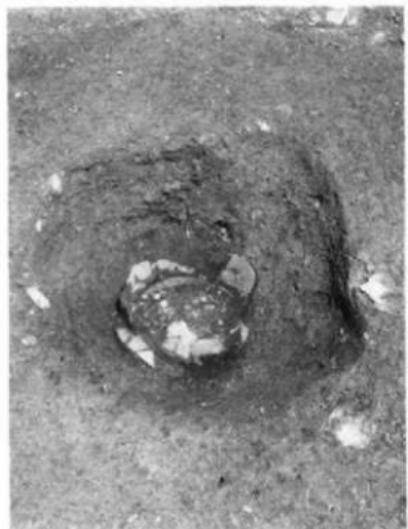
2 C群火葬墓（南から）



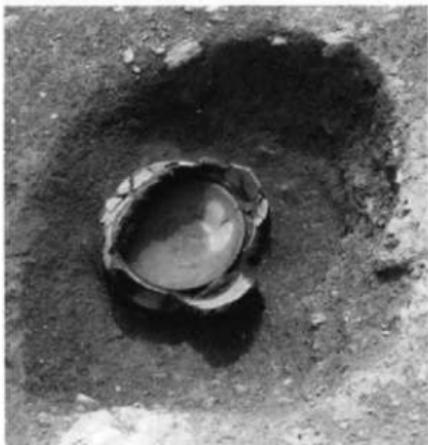
1 19号火葬墓、1号住居跡（南西から）



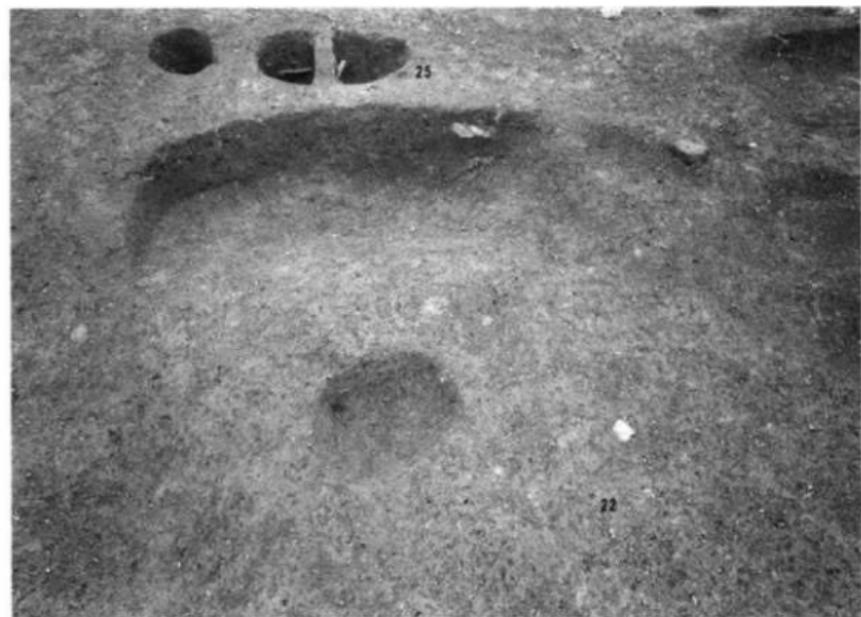
2 21号火葬墓（南から）



1 21号火葬墓火葬骨出土状況



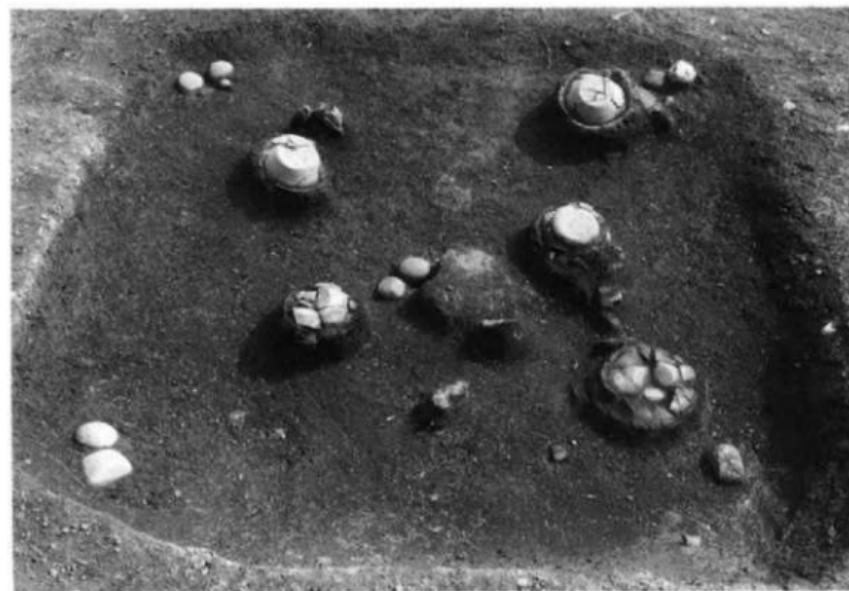
2 骨蔵器出土状況（東から）



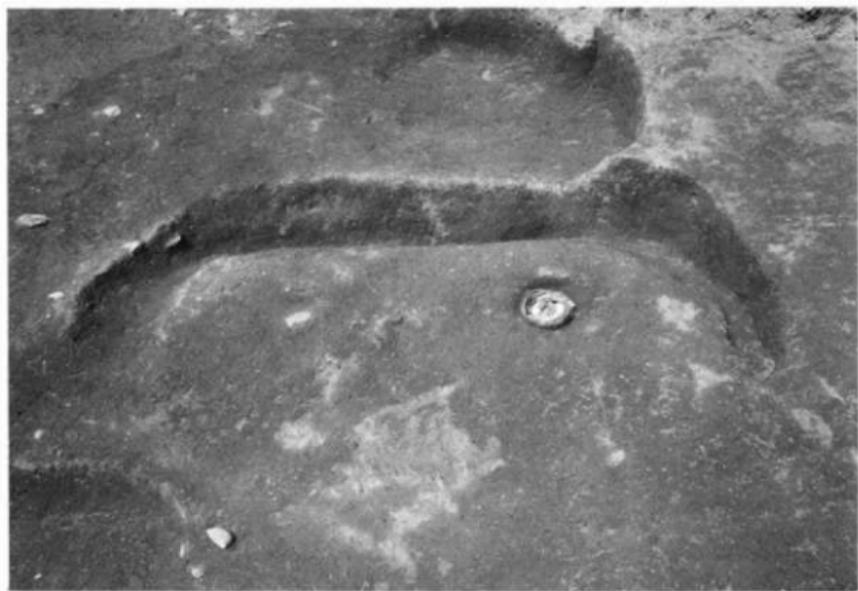
3 22・25号火葬墓（南から）



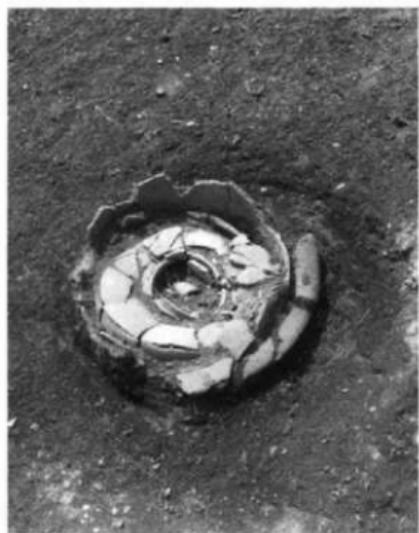
1 23号火葬墓（南から）



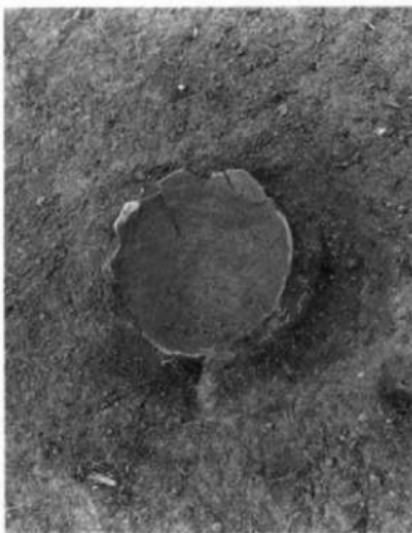
2 遺物出土状況（北から）



1 24号火葬墓（南から）



2 骨蔵器出土状況（西から）



3 骨蔵器外容器



1 E-H群火葬墓（上空から）



2 中央部テラス火葬墓建造状況（東から）



1 26号火葬墓（南西から）



2 周溝内遺物出土状況（南から）



1 27・28号火葬墓
(南西から)



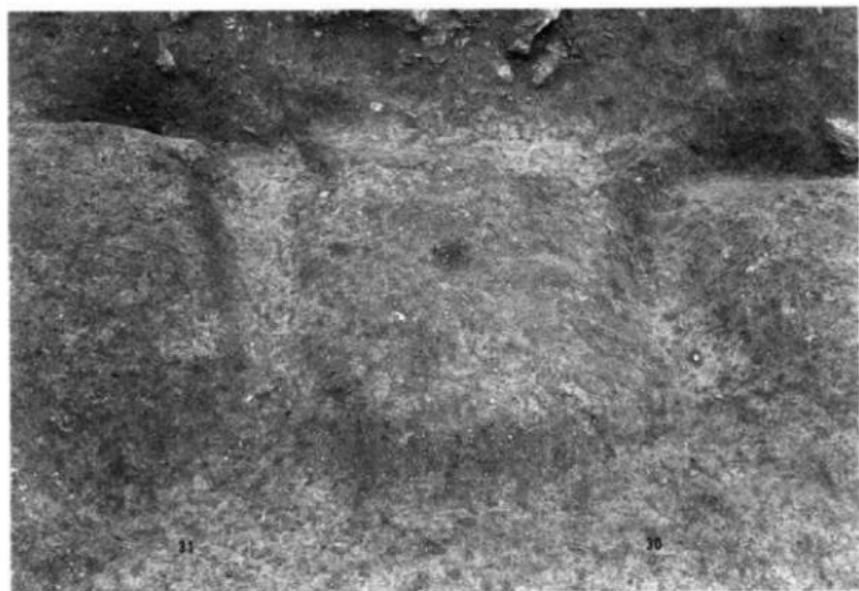
2 27号火葬墓
(南西から)



3 27号火葬墓周溝土層
(南東から)



1 29号火葬墓（南西から）



2 30号火葬墓（南西から）



1 31号火葬墓（南西から）



2 33号火葬墓（南から）



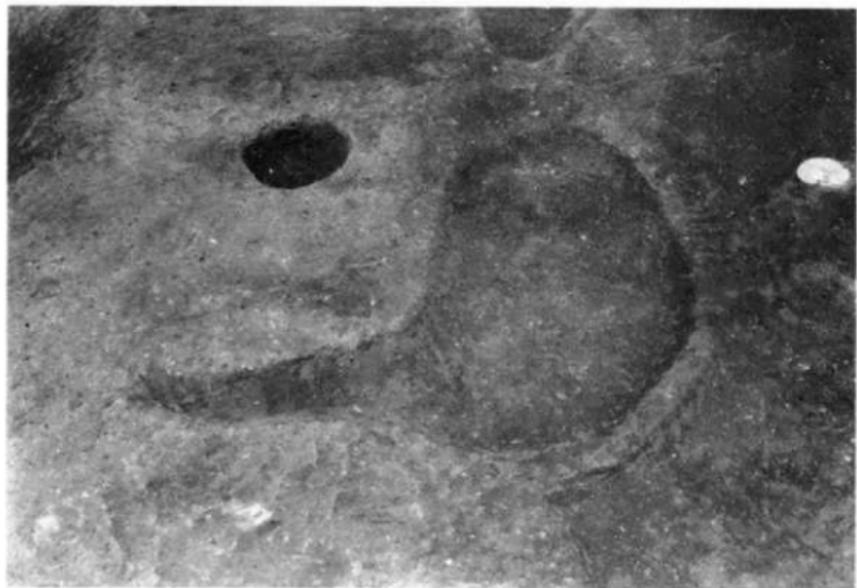
1 34号火葬墓（南から）



2 火葬骨出土状況（南から）



3 周溝内遺物出土状況（東から）



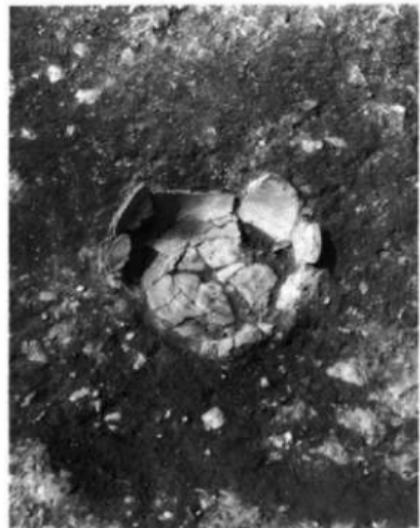
1 35号火葬墓（東から）



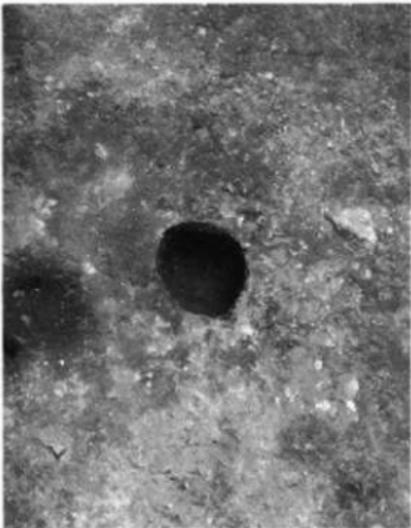
2 36号火葬墓（東から）



1 37号火葬墓（北西から）

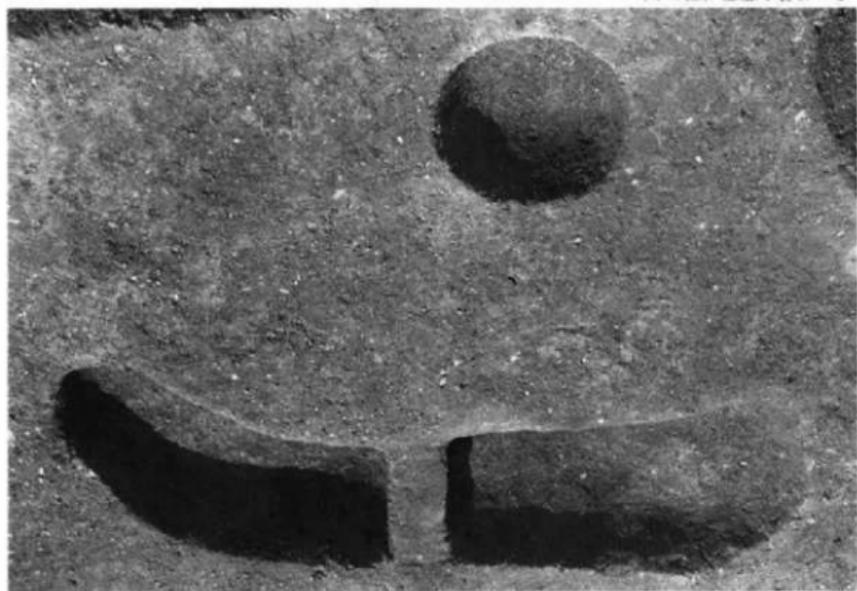


2 38号火葬墓骨蔵器（南から）

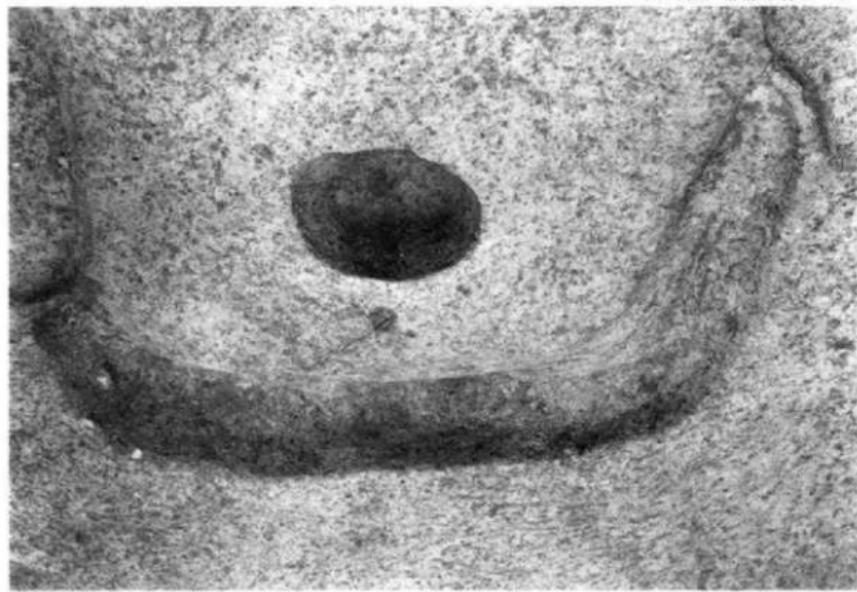


3 39号火葬墓（西から）

2 11号火葬窯（西南方）



1 10号火葬窯（西南方）



図版24



1 42号火葬墓（西から）



2 43号火葬墓（西から）



1 44号火葬墓（北から）



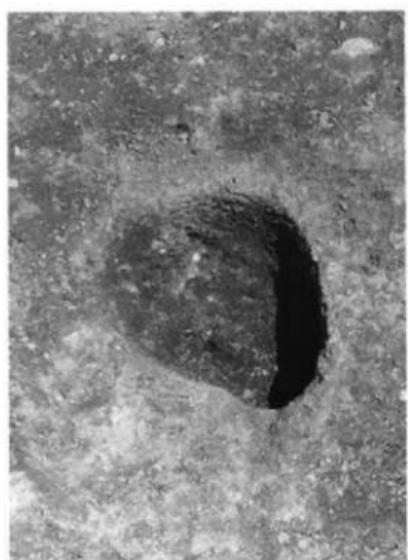
2 周溝内土壙墓（北東から）



3 45号火葬墓骨蔵器（南東から）



4 上蓋除去後（南東から）



1 46号火葬墓（南から）



2 47号火葬墓（南西から）



3 48号火葬墓（東から）



1 49号火葬墓（南西から）



2 50号火葬墓（東から）



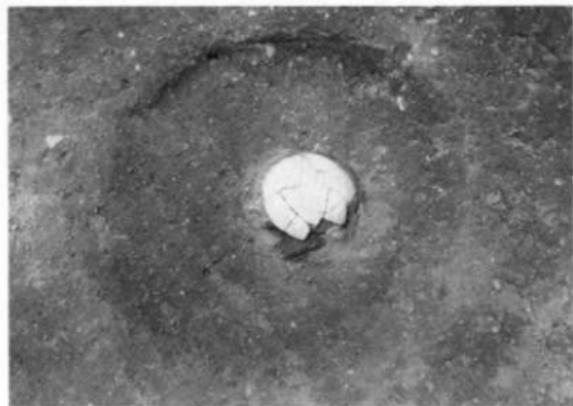
1 51号火葬墓（南西から）



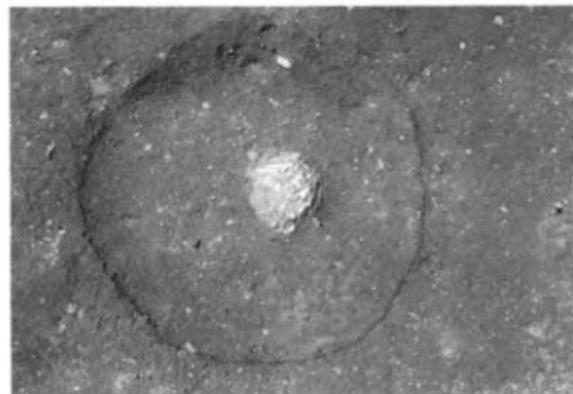
2 骨蔵器出土状況（東から）



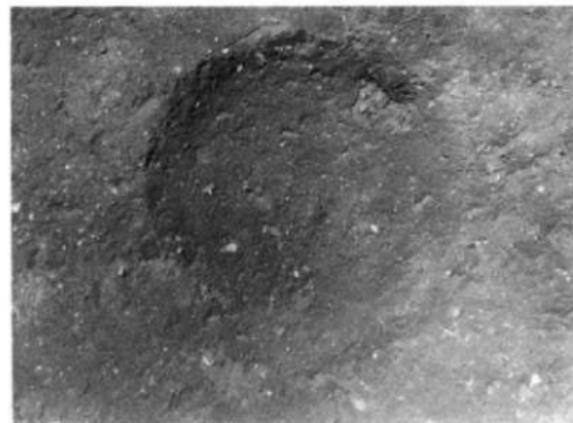
3 遺物出土状況（南西から）



1 52号火葬墓
(南西から)



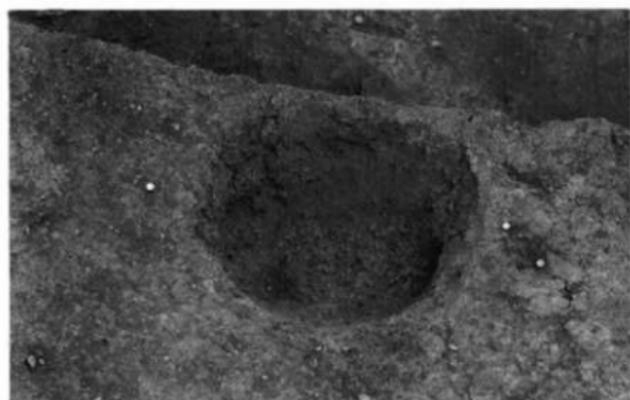
2 火葬骨出土状況
(南西から)



3 53号火葬墓
(南から)



1 54号火葬墓
(南西から)



2 55号火葬墓
(西から)



3 56号火葬墓
(南から)



1 57号火葬墓（南西から）



2 主体部石組状況（南西から）



1 58号火葬墓（西から）



2 骨藏器出土状況（西から）



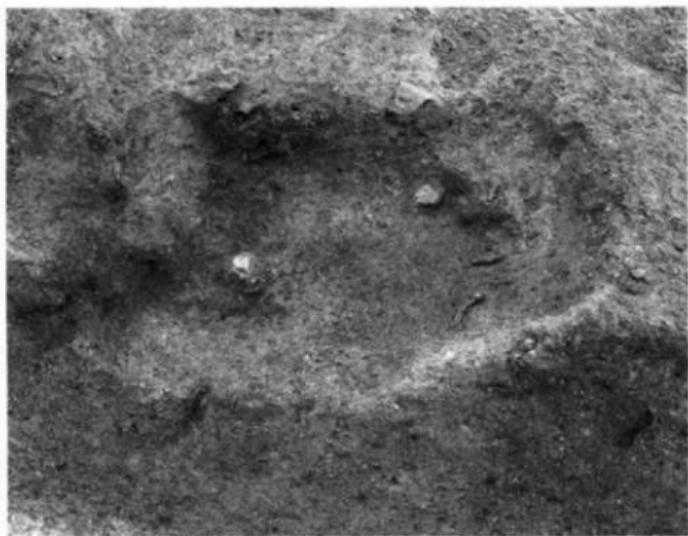
1 59号火葬墓（西から）



2 60号火葬墓（南西から）



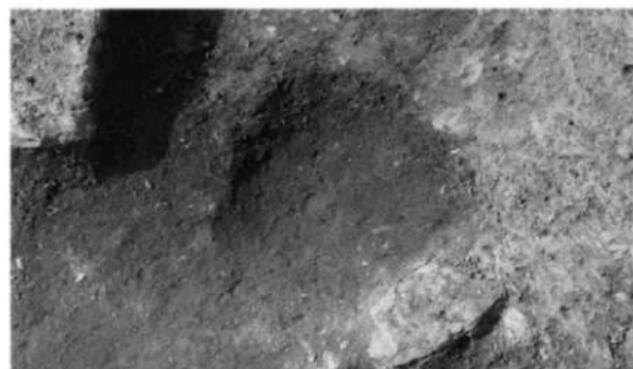
1 61号火葬墓（南西から）



2 主体部鉄釘出土状況（西から）



1 62号火葬墓
(東から)



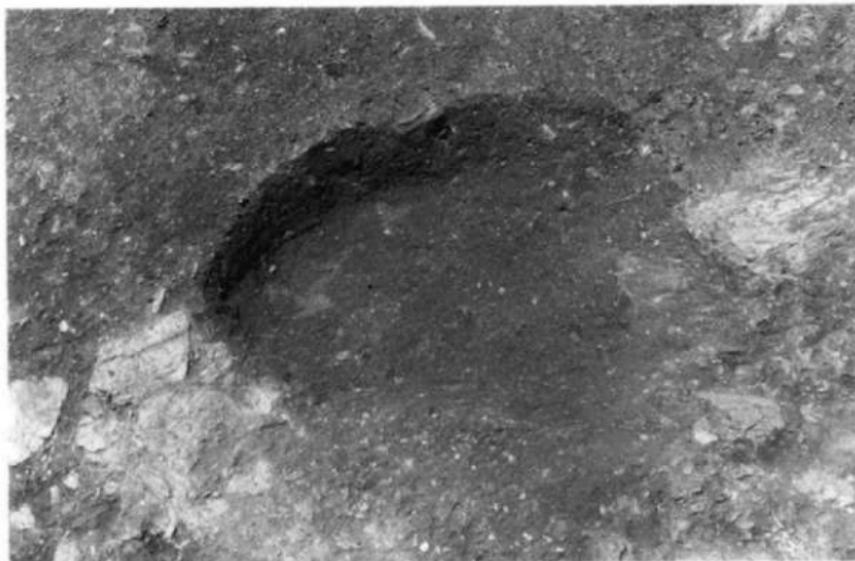
2 63号火葬墓
(南西から)



3 65号火葬墓
(南から)



1 66号火葬墓（南から）



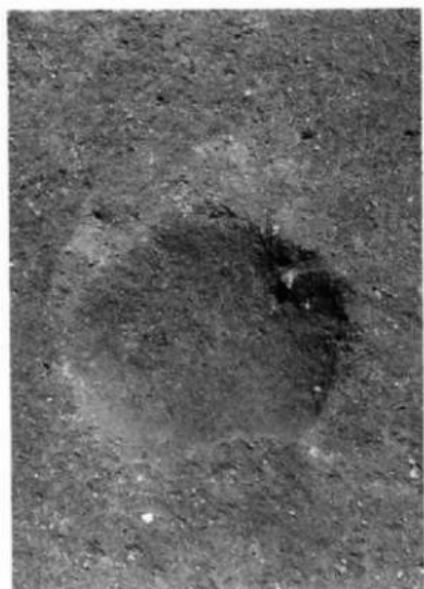
2 67号火葬墓（南から）



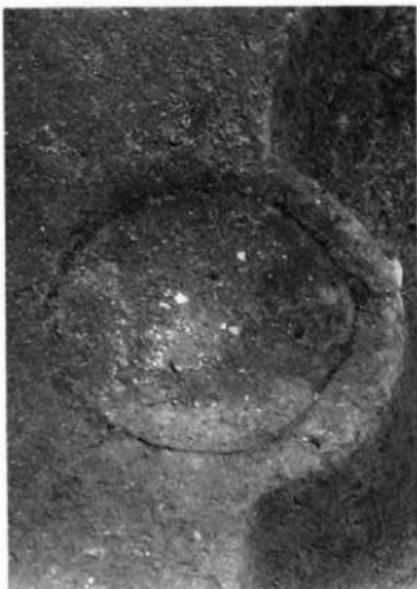
1 68号火葬墓（南西から）



2 69号火葬墓（南から）



1 70号火葬墓（南西から）



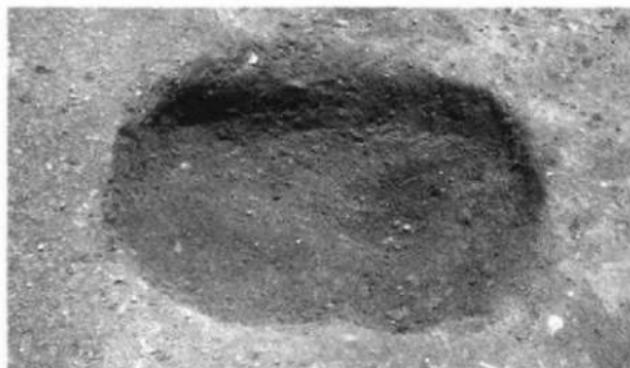
2 71号火葬墓検出状況（南西から）



3 掘り下げ状況（南西から）



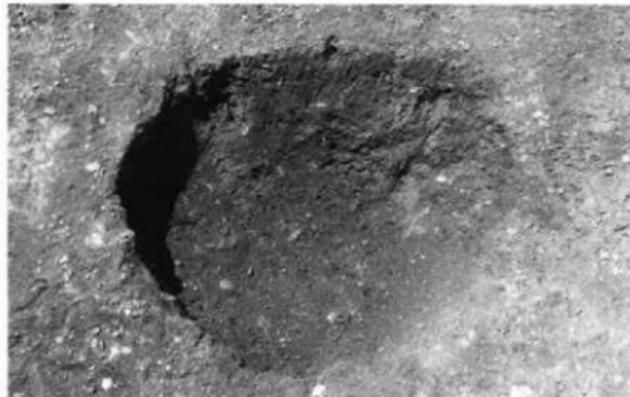
4 遺物出土状況（南西から）



1 72号火葬墓
(南西から)



2 73号火葬墓
(西から)



3 74号火葬墓
(南西から)



1 75号火葬墓（南西から）



2 76号火葬墓（南西から）



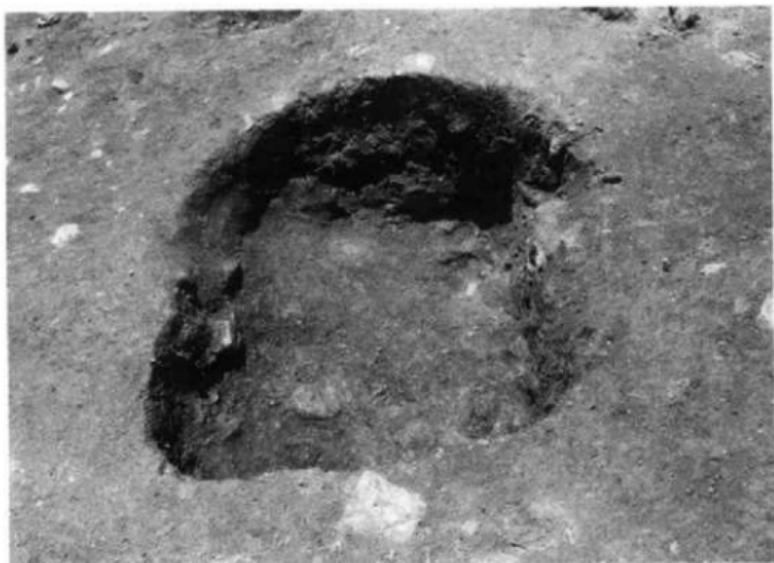
1 77号火葬墓（南東から）



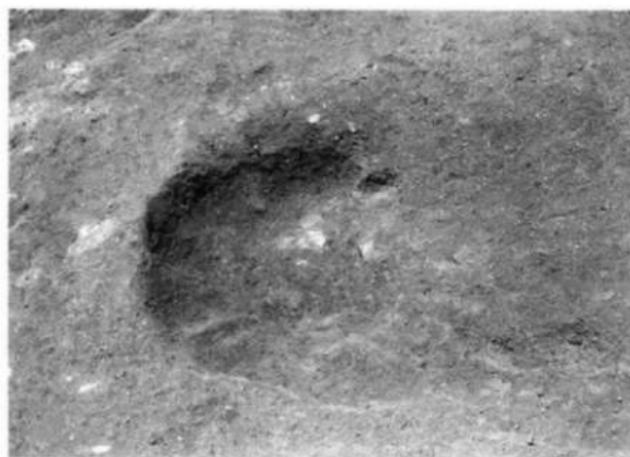
2 78号火葬墓（西から）



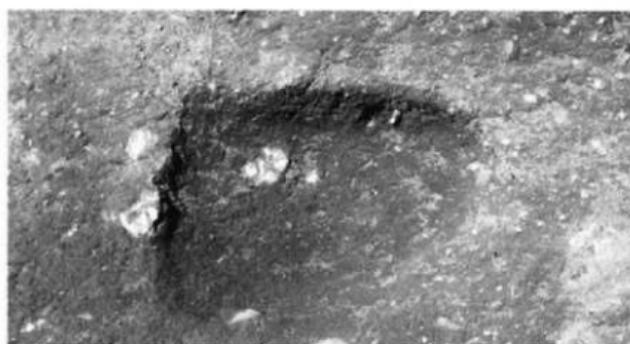
1 79号火葬墓（南西から）



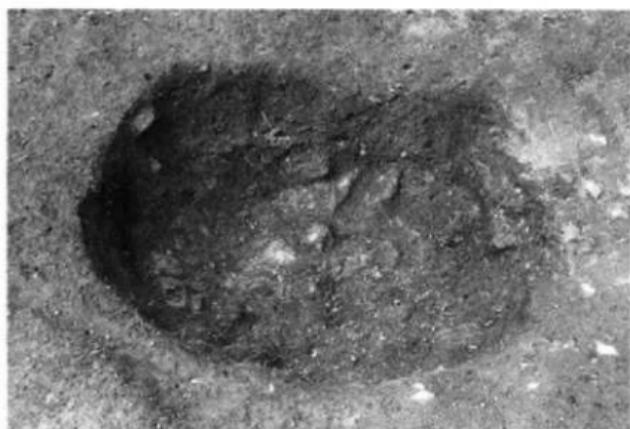
2 80号火葬墓（南東から）



1 81号火葬墓
(南東から)



2 82号火葬墓
(南西から)



3 83号火葬墓
(南西から)



1 84号火葬墓（南から）



2 85号火葬墓（南から）



3 86号火葬墓（南から）



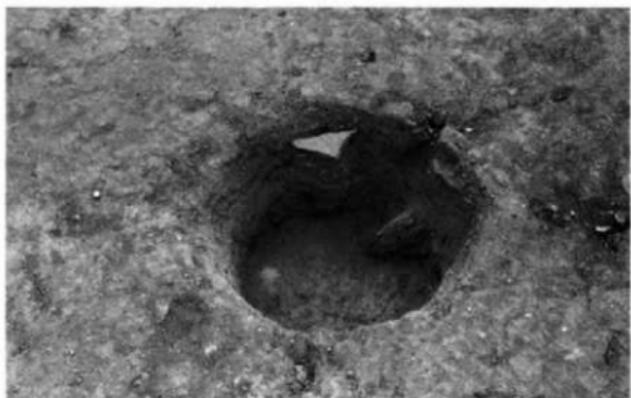
1 87号火葬墓（西から）



2 88号火葬墓（北西から）



1 89号火葬墓
(北から)



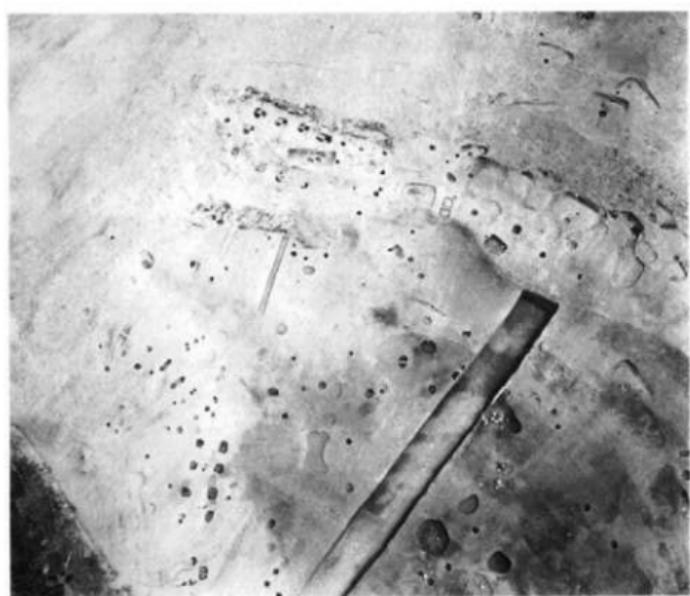
2 90号火葬墓
(東から)



3 91号火葬墓
(南西から)



1 調査区中央部空中写真（南上空から）



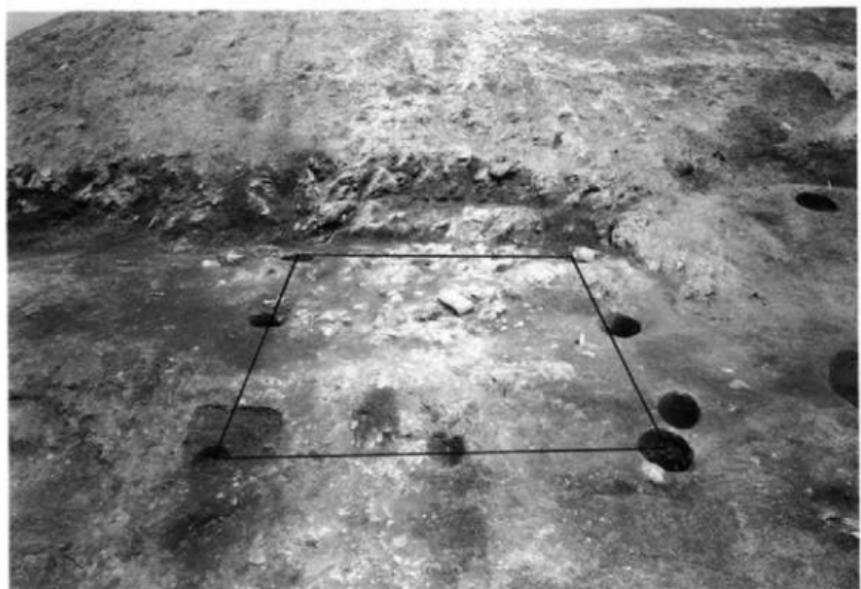
2 西側建物群（南上空から）



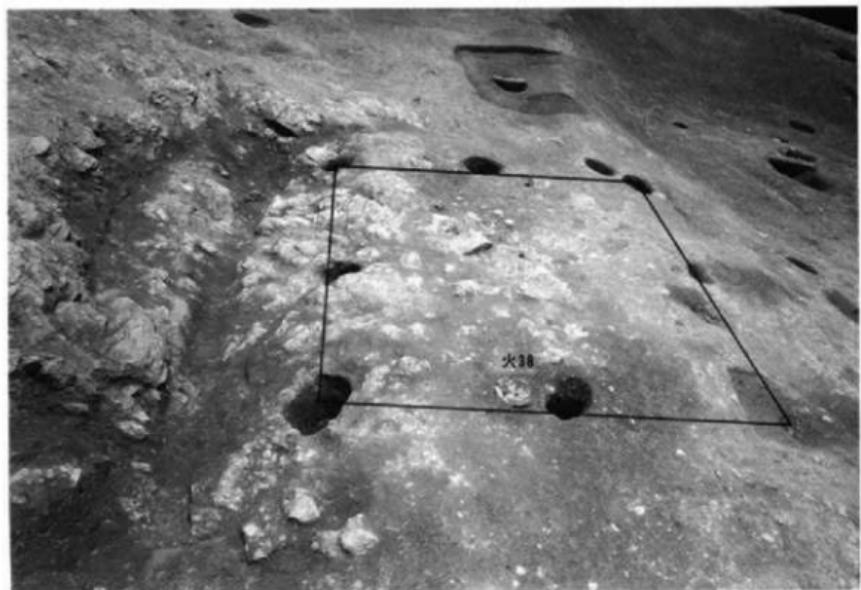
1 火葬墓群下層遺構（北から）



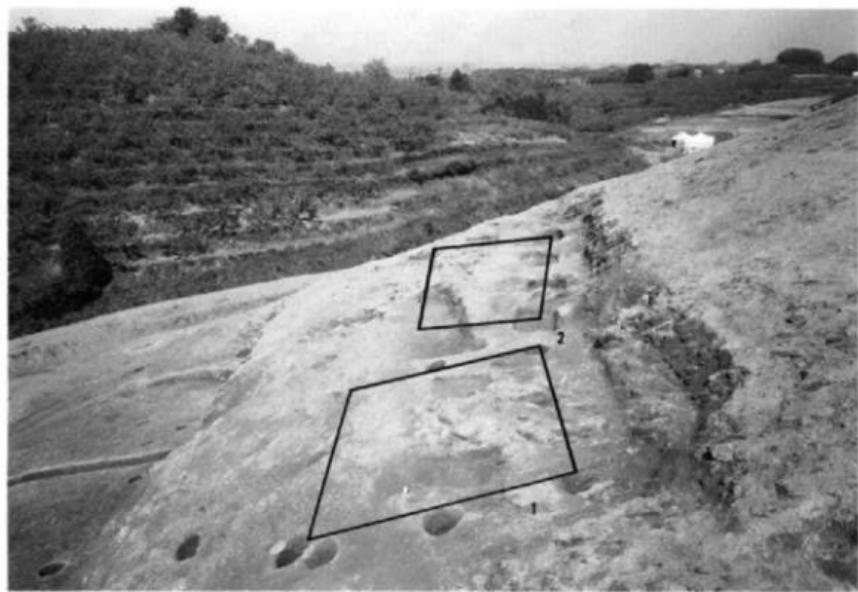
2 火葬墓群下層遺構（東から）



1 1号建物跡（南から）



2 1号建物跡（西から）



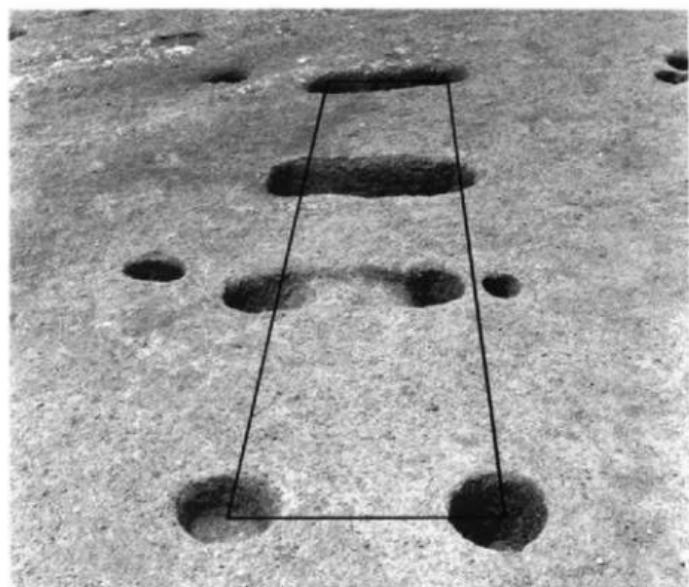
1 1・2号建物跡（東から）



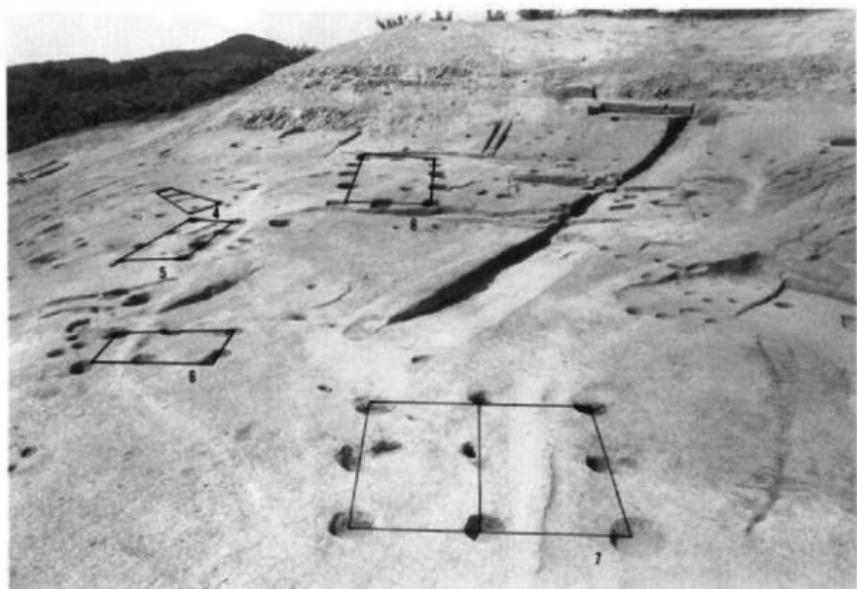
2 2号建物跡（東から）



1 3号建物跡（南東から）



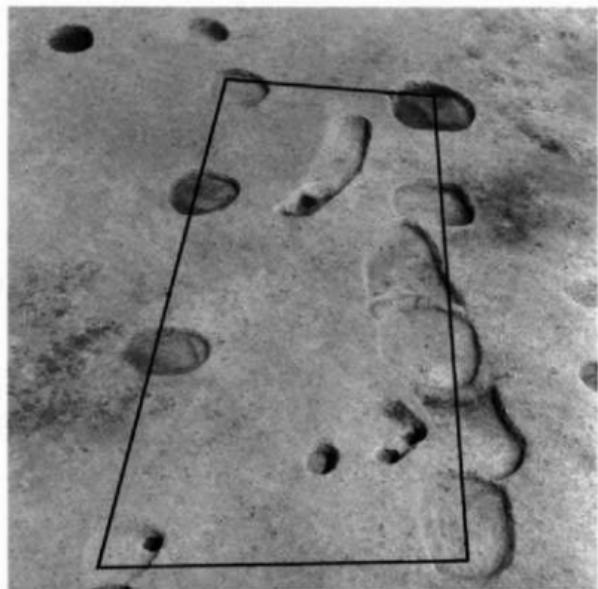
2 4号建物跡（北西から）



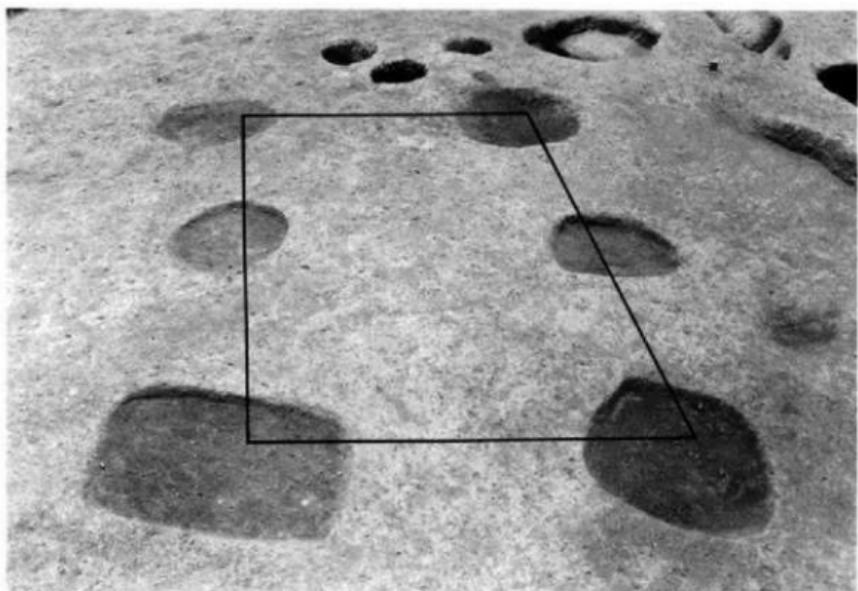
1 4～8号建物跡（南から）



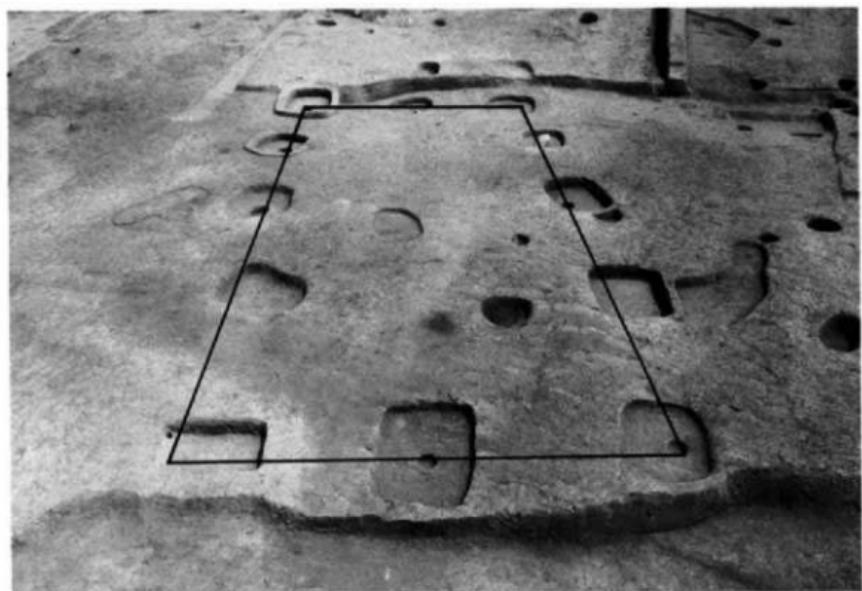
2 4～8号建物跡（北から）



1 5号建物跡検出状況（南から）



2 6号建物跡検出状況（南から）



1 8号建物跡（南から）



2 中段テラス柱穴群（北から）



1 1号住居跡（南西から）



2 遺物出土状況（南から）



1 2号住居跡全景（南西から）



2 2号住居跡全景（南東から）



1 2号住居跡（南西から）



2 2号住居跡カマド（南西から）



3 外周溝土層（東から）



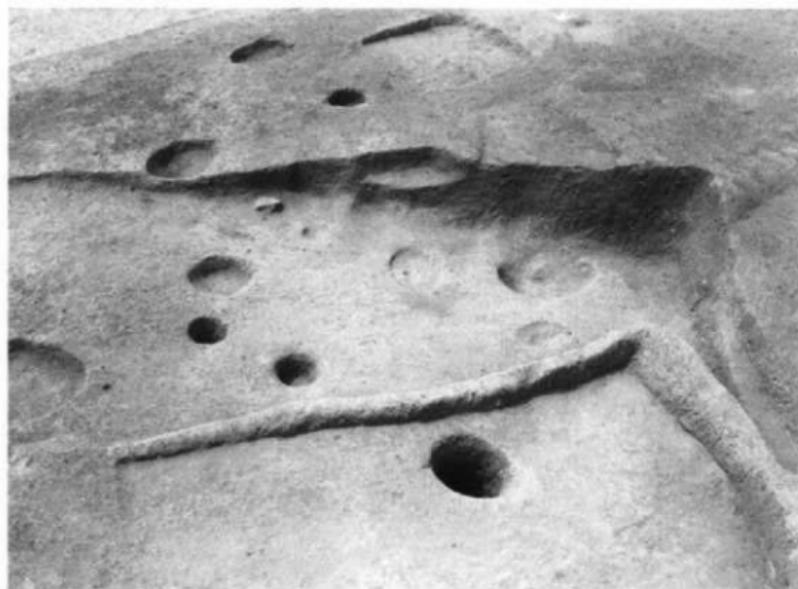
1 3号住居跡（南西から）



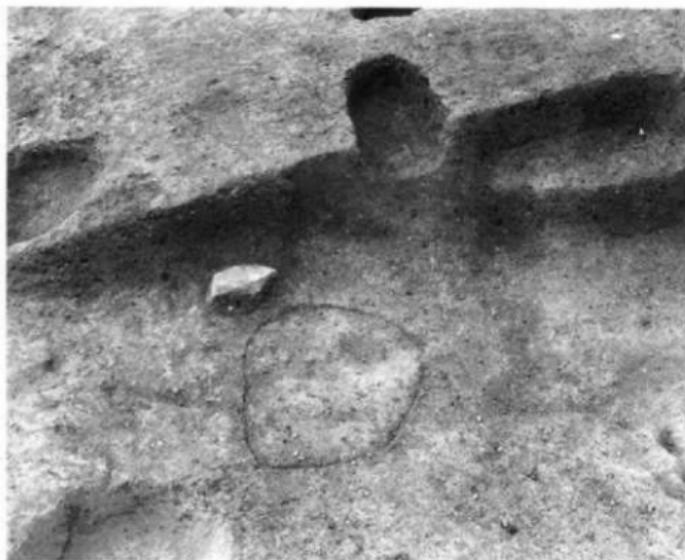
2 遺物出土状況（南から）



3 焼土塙土層断面（南東から）



1 4号住居跡（南東から）



2 4号住居跨カマド（南東から）



1 調査区西端住居跡群（西から）



2 5号住居跡（南東から）



1 5号住居跡カマド（南東から）



2 車輪出土状況
(北から)



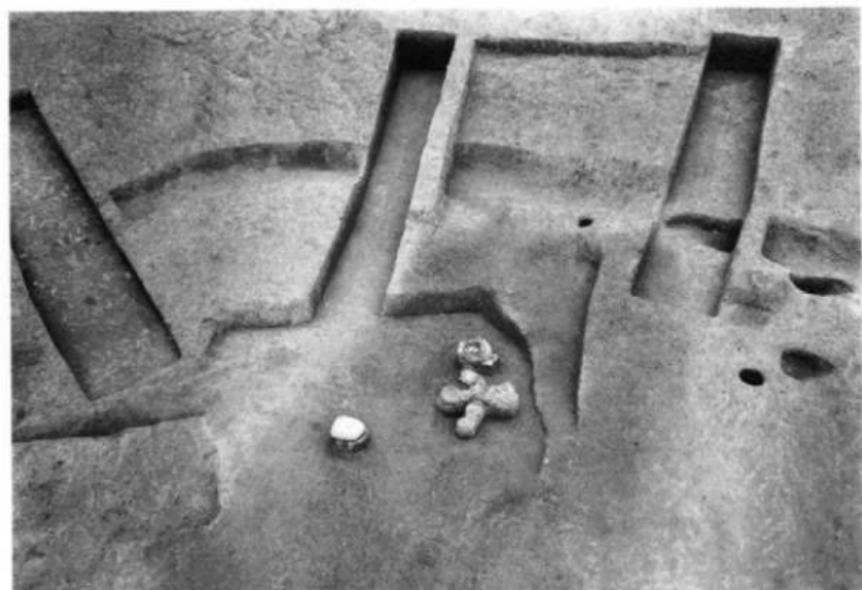
3 6号住居跡全景（南西から）



1 6号住居跡（南東から）



2 6号住居跡カマド（南東から）



1 7号住居跡全景（南西から）



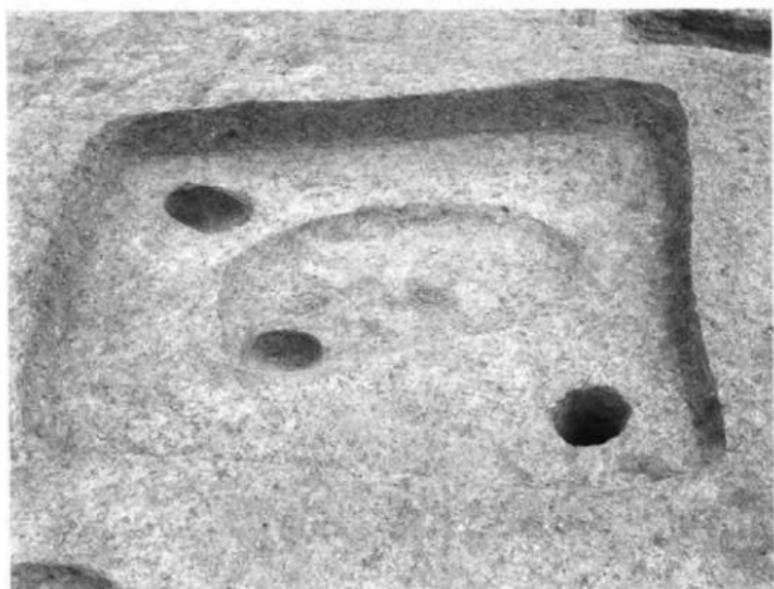
2 7号住居跡（南東から）



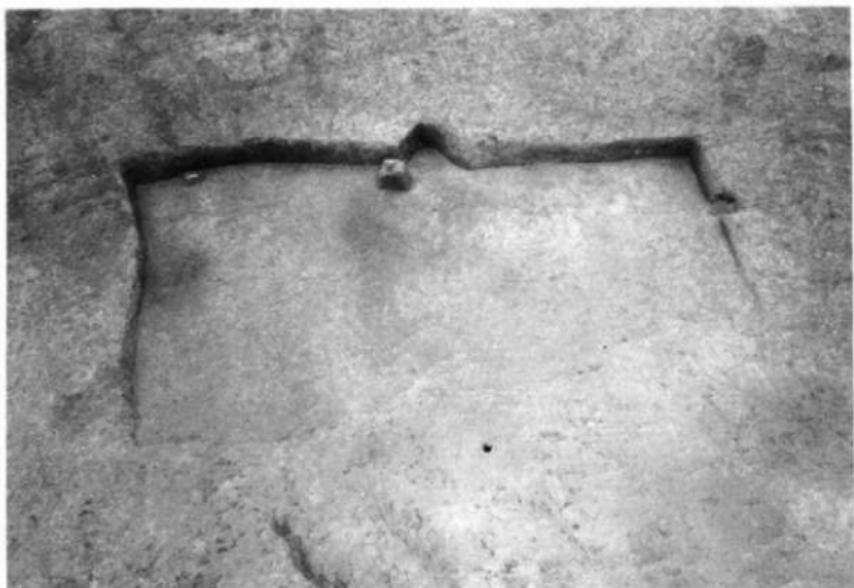
1 7号住居跡カマド（南東から）



2 外周溝土層（南東から）



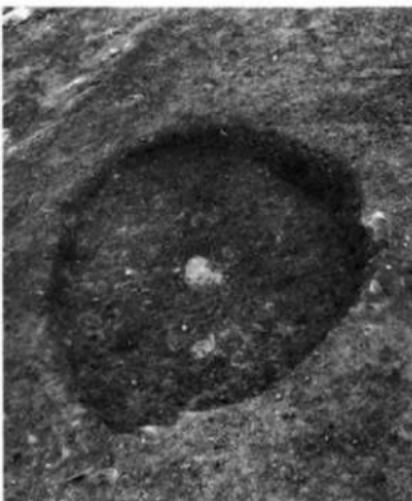
1 1号竪穴（南東から）



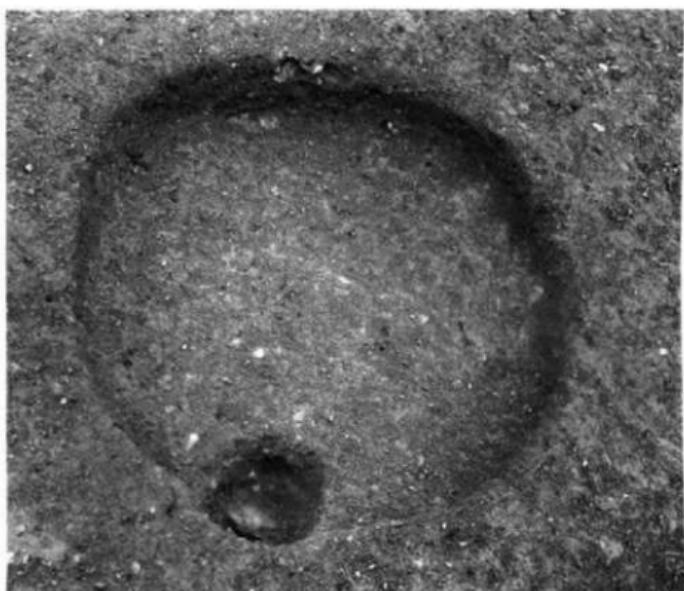
2 7号竪穴（南西から）



1 2号土壤（東から）



2 3号土壤（南から）



3 4号土壤（北から）



1 5号土壙（北西から）



2 6号土壙（北から）



1 7号土壤、1号溝（東から）



2 7号土壤遺物出土状況（北から）



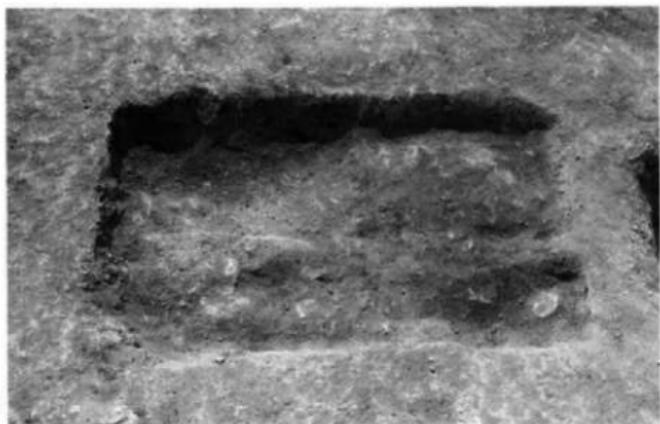
1 9号土壤
(南から)



2 10号土壤
(南から)



3 13号土壤
(南東から)



1 1号焼土塗
(東から)



2 土製カマド出土状況
(南東から)



3 中段東側テラス
弥生土器出土状況
(西から)



1 1号石蓋土壙墓（北東から）



2 蓋石除去後（南東から）



1 A群トレンチ北壁土層断面（南から）



2 A群トレンチ東壁土層断面（西から）



1 2次Iトレンチ1号住居跡（南東から）



2 1号住居跡（北西から）



1 2次IIトレンチ（南東から）



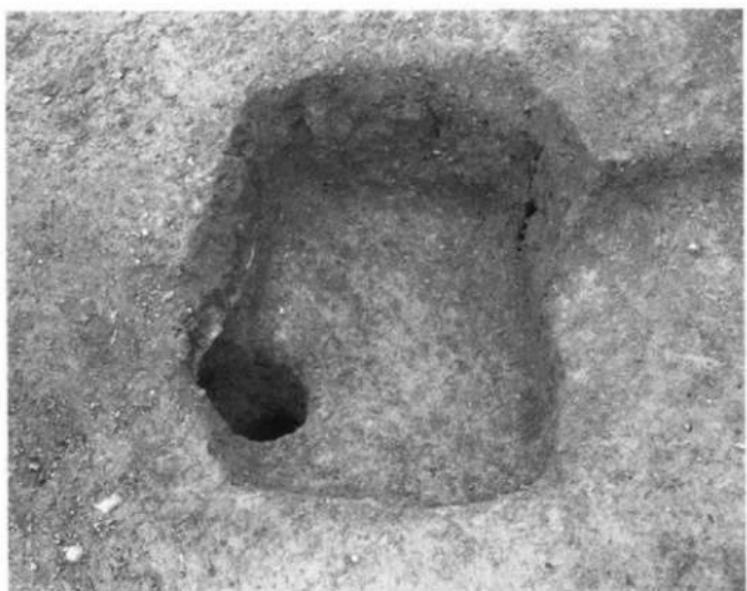
2 2次IIIトレンチ（東から）



1 1号火葬墓・1号火葬土壙（南東から）



2 1号火葬墓（南東から）



1 1号火葬土壌（南東から）



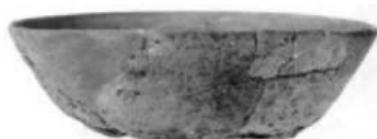
2 2号火葬土壌（北東から）



1 5号火葬墓テラス出土土器



2 21号火葬墓骨藏器

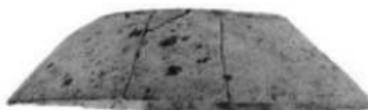


4 33号火葬墓出土土器

3 24号火葬墓骨藏器



5 34号火葬墓出土土器



6 52号火葬墓骨藏器



1



6



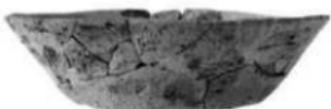
2



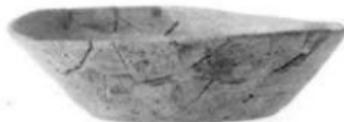
7



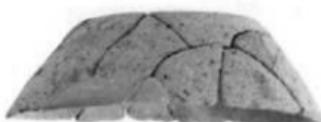
3



8



4



9



5



10

1 23号火葬墓出土土器

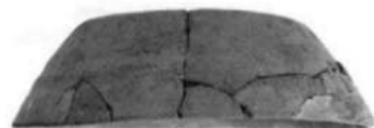


1



2

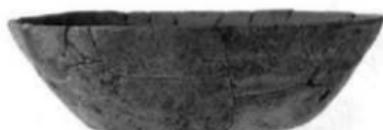
2 26号火葬墓出土土器



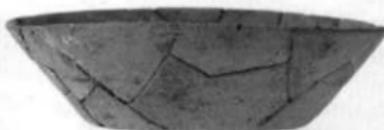
1



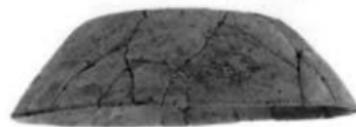
1



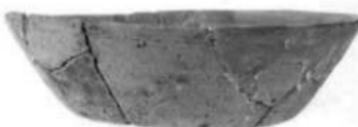
2



2

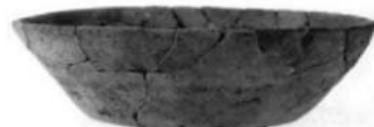


3

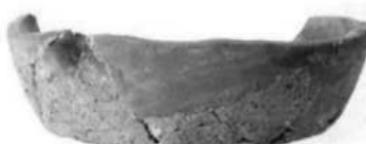


3

1 37号大墓出土土器



4



4

2 38号大墓出土土器



5



5

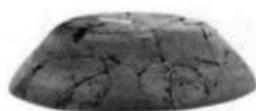


6



6

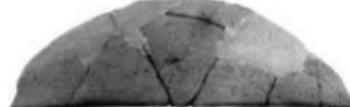
3 40号大墓出土土器



1 45号火葬墓骨藏器



4 58号火葬墓骨藏器



3 56号火葬墓骨藏器

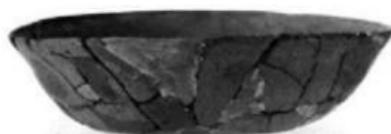


12

1 28号火葬墓周溝出土土器



1



7

2 2号建物跡出土土器



2

3 8号建物跡出土土器



1



6



2



5



3



5



14

4 8号建物跡東側段落ち出土土器



1 1号住居跡出土土器



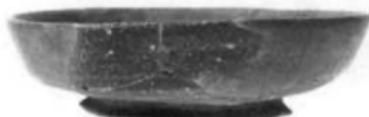
2



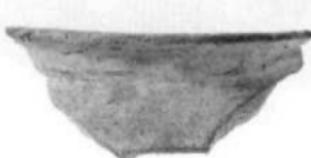
1



4



5



13

2 2号住居跡出土土器



5



13



10



18

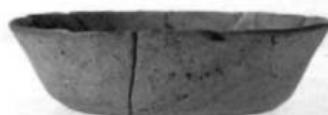
3 2号住居跡整地層出土土器



1 3号住居跡出土土器①



5



6



7



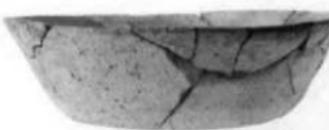
8



9

2 3号住居跡出土土器②

4



10



1 4号住居跡出土土器



20



2



5



3



6



4



9

2 5号住居跡出土土器



1 6号住居跡出土土器



6



10



11

2 7号住居跡出土土器





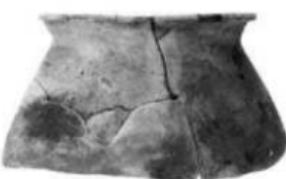
1



7



2



11



4



12

1 8号住居跡出土土器



4

2 2号竪穴出土土器



2

4 5号竪穴出土土器



3

3 3号竪穴出土土器



1 5号土壤出土土器

1



3 11号土壤出土土器

3



1

3

4

2 7号土壤出土土器



4



4

4 ピット出土土器

23



1



8



3



10



4



5



11



6



12



7



13

E·F群火葬墓整地层出土土器①



14



21



15



22



26



16



27



19

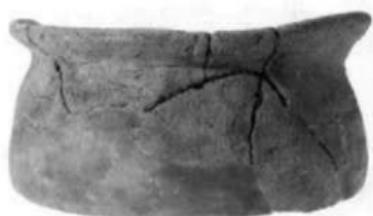


31

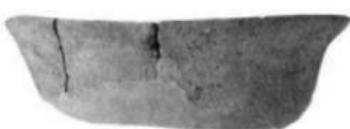


20

E·F群火葬墓整地层出土土器②



34



37



39



40

1 E·F群火葬墓整地层出土土器③

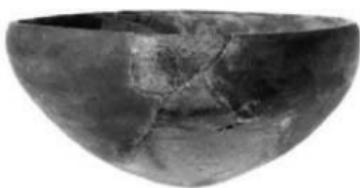


2

2号竖穴西侧整地层出土土器



5



8



1



9



2



12



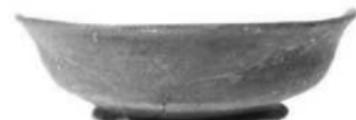
3



15



6



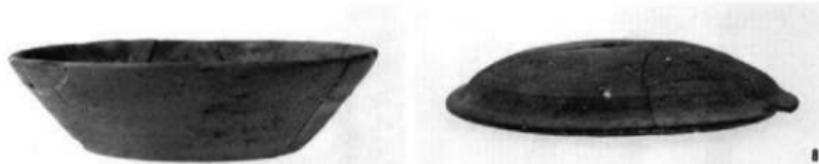
7



8



18



5

6



7

10

1 I群火葬墓整地屑出土土器



1

6



12

15

2 J群火葬墓整地屑出土土器



1

3

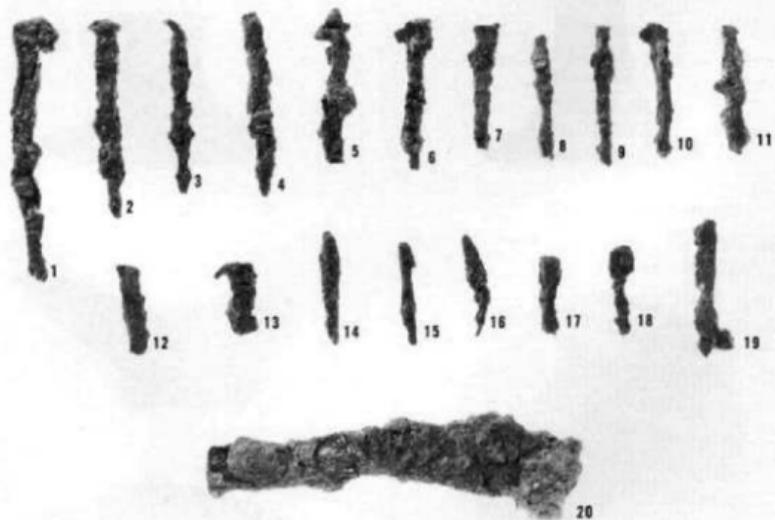
3 2次1号火葬墓骨藏器



4 2次1号住居跡出土土器，采集土器



1 5・7・37・43号火葬墓出土鉄釘



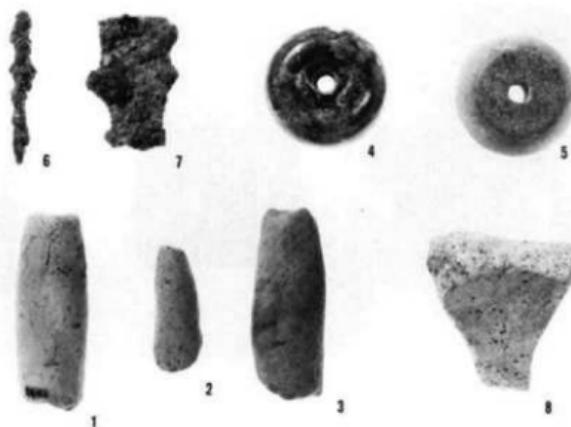
2 61号火葬墓出土鉄釘・鉄鎌



1 火葬墓出土鐵釘

2 71號火葬墓出土遺物

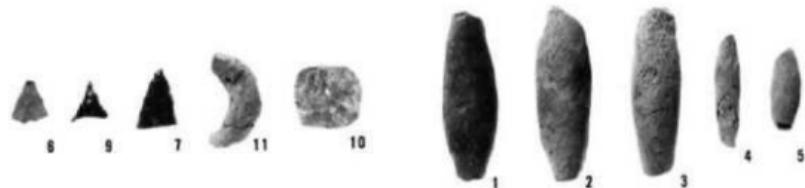
3 整地層出土鐵滓



4 住居跡出土鐵器·石製品·土製品

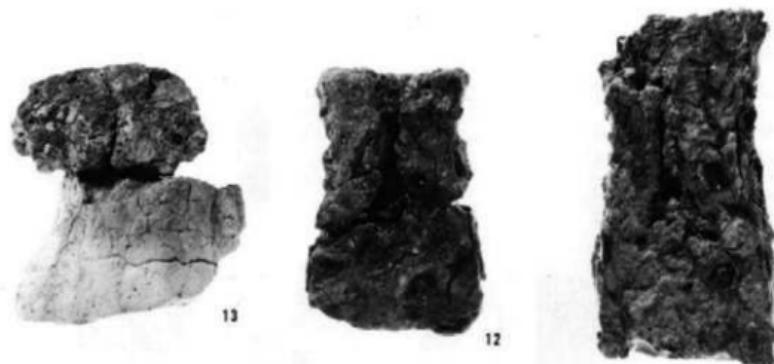


5 整地層出土鐵釘



1 竖穴·土壤出土石器·土製品

2 整地層出土土製品



3 6号竖穴出土铁器·土製品

4 整地層出土铁斧



5 整地層出土石斧



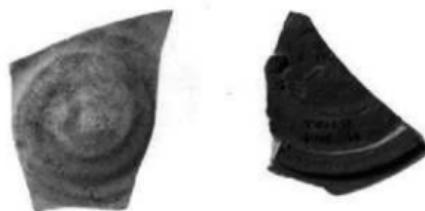
1 整地层出土石器



3 整地层出土砾石②



2 整地层出土砾石①



4 中町裏遺跡出土墨書土器・転用碗

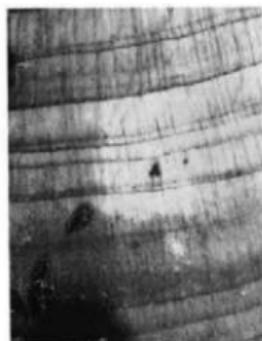


fig.1 オミ属 *Abies* sp. (4号火葬墓)

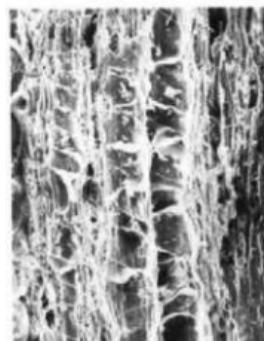
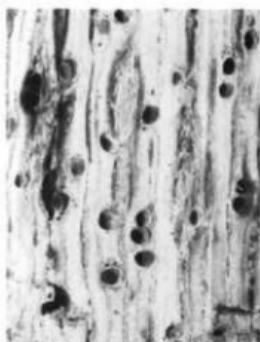
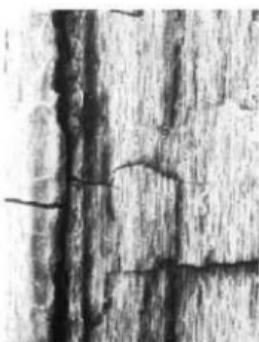
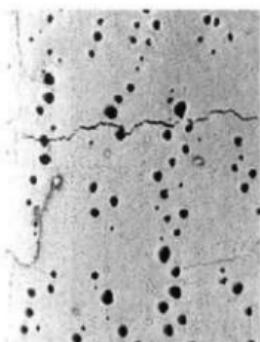


fig.2 クリ *Castanea crenata* (19号火葬墓)



fig.3 クリ *Castanea crenata* (23号火葬墓)

炭化材顕微鏡写真①

fig. 4 エクノキ *Cladrastis shikokiana* (36号火葬墓)fig. 5 クリ *Castanea crenata* (59号火葬墓)fig. 6 カシ *Quercus* sp. (62号火葬墓)

炭化材顕微鏡写真②

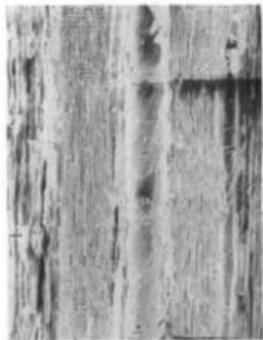
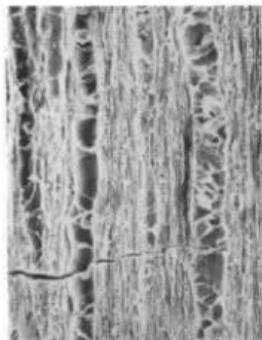
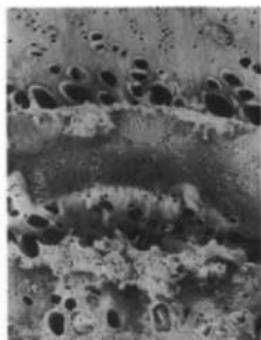


fig. 7 クリ *Castanea crenata* (67号火葬墓)



fig. 8 カシ *Quercus* sp. (88号火葬墓)

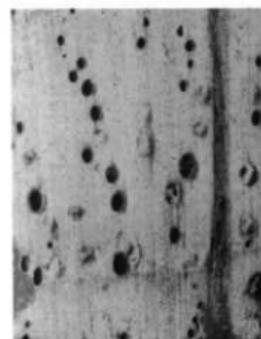


fig. 9 カシ *Quercus* sp. (5号火葬墓)

炭化材顕微鏡写真③

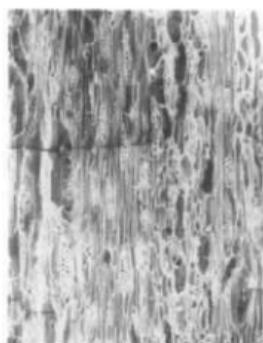


fig.10 カゴノキ *Actiondaphne lancifolia* (5号住居跡 炭①)

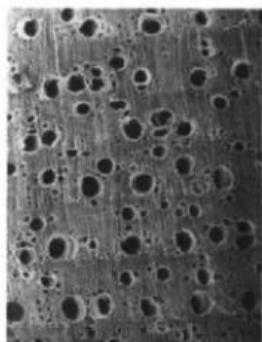


fig.11 クスノキ *Cinnamomum camphora* (5号住居跡 炭⑥)

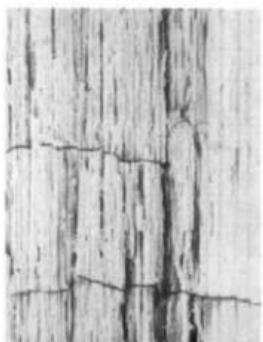


fig.12 カツラ *Cercidiphyllum japonicum* (5号住居跡 炭⑫)

炭化材顕微鏡写真④



1 荒掘り状況



2 型枠組立て状況



3 発泡ウレタン注入状況

57号火葬墓切取り状況

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 H 3	登録番号 6

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—24—

平成4年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 大日本印刷株式会社 九州事業部

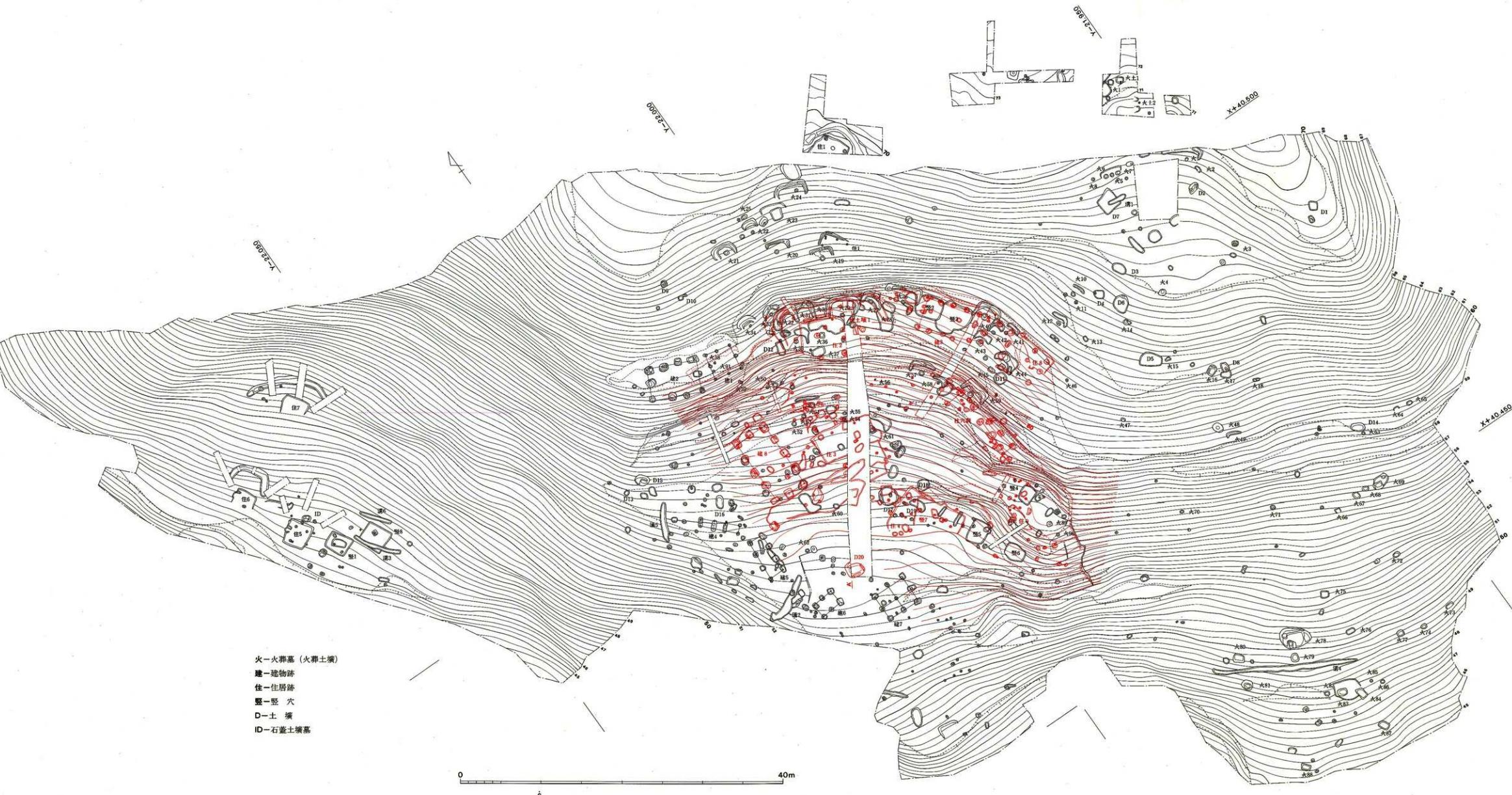
福岡市南区清水2-15-1

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 24 —

朝倉町大迫遺跡

付 図



付 図 大迫遺跡遺構配置図 (1/300)